

**Oracle® Identity Manager**

デザイン・コンソール・ガイド

リリース 9.1.0.1

部品番号 : B53898-01

2009 年 4 月

Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド, リリース 9.1.0.1

部品番号: B53898-01

Oracle Identity Manager Design Console Guide, Release 9.1.0.1

原本部品番号: E14061-01

原著者: Lyju Vadassery

原協力者: Debapriya Datta

Copyright © 2009, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

#### 制限付権利の説明

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントが、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供される場合は、次の Notice が適用されます。

#### U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、このソフトウェアを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

このソフトウェアおよびドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても、一切の責任を負いかねます。

---

---

# 目次

<b>はじめに</b> .....	xi
対象読者 .....	xii
ドキュメントのアクセシビリティについて .....	xii
関連ドキュメント .....	xii
ドキュメントの更新 .....	xii
表記規則 .....	xiii
オンライン・ヘルプ .....	xiii
サポートおよびサービス .....	xiii
<b>1 Oracle Identity Manager のアーキテクチャ</b>	
1.1 Oracle Identity Manager のアーキテクチャの概要 .....	1-2
1.2 Oracle Identity Manager の利点と主な機能 .....	1-2
1.3 Oracle Identity Manager の3層のアーキテクチャ .....	1-3
1.3.1 第1層: クライアント .....	1-3
1.3.2 第2層: アプリケーション・サーバー .....	1-3
1.3.3 第3層: データベース .....	1-4
<b>2 Design Console のメイン画面</b>	
2.1 Design Console の起動 .....	2-2
2.2 Design Console の概要 .....	2-2
2.3 Design Console のメニュー・バー .....	2-3
2.3.1 「File」メニュー .....	2-3
2.3.2 「Edit」メニュー .....	2-3
2.3.3 「Toolbar」メニュー .....	2-4
2.3.4 「Help」メニュー .....	2-4
2.4 Design Console のツールバー .....	2-5
2.5 Design Console のショートカット .....	2-6
2.6 Design Console エクスプローラ .....	2-7
2.7 Design Console ワークスペース .....	2-8
<b>3 Design Console の基本機能</b>	
3.1 特殊フィールドとフォーム・タイプ .....	3-2
3.1.1 データ・フィールド .....	3-2
3.1.2 「Lookup」フィールド .....	3-2
3.1.3 「Date」および「Time」フィールド .....	3-3
3.1.4 リスト .....	3-3

3.1.5	Notes ウィンドウ .....	3-3
3.1.6	フォーム・タブ .....	3-4
3.2	Assignment ウィンドウ .....	3-5
3.3	検索の実行 .....	3-5
3.4	検索フィルタの作成 .....	3-6
3.5	検索の結果 .....	3-7
3.6	問合せ結果セット .....	3-7
3.7	問合せのパフォーマンス最適化 .....	3-8
3.8	結果セットでの制限超過 .....	3-8

## 4 ユーザー管理

4.1	ユーザー管理の概要 .....	4-2
4.2	「Organizational Defaults」 フォーム .....	4-2
4.3	「Policy History」 フォーム .....	4-3
4.3.1	「Policy History」 タブ .....	4-4
4.4	グループ権限の割当て .....	4-5
4.4.1	用意されているグループ .....	4-6
4.4.1.1	「System Administrators」 ユーザー・グループ .....	4-6
4.4.1.2	「Operators」 ユーザー・グループ .....	4-6
4.4.1.3	「All Users」 ユーザー・グループ .....	4-7
4.4.1.4	「Self Operators」 グループ .....	4-7
4.5	「Administrative Queues」 フォーム .....	4-7
4.6	「Reconciliation Manager」 フォーム .....	4-8
4.6.1	リコンシリエーション・イベントの表示と管理 .....	4-11
4.6.2	「Reconciliation Manager」 フォームのタブ .....	4-12
4.6.2.1	「Reconciliation Data」 タブ .....	4-12
4.6.2.1.1	Processed Data .....	4-12
4.6.2.1.2	Unprocessed Data .....	4-13
4.6.2.1.3	未処理フィールドのマッピングまたは修正 .....	4-14
4.6.2.2	プロセス一致ツリー (ターゲット・リソースのみ) .....	4-15
4.6.2.2.1	プロビジョニング・プロセス・インスタンスのリコンシリエーション・ イベントへのリンク .....	4-16
4.6.2.3	「Matched Users」 タブ .....	4-16
4.6.2.3.1	ユーザー・レコードのリコンシリエーション・イベントへのリンク .....	4-16
4.6.2.4	Matched Organizations .....	4-17
4.6.2.4.1	組織レコードのリコンシリエーション・イベントへのリンク .....	4-17
4.6.2.5	Reconciliation Event History .....	4-18

## 5 リソース管理

5.1	リソース管理の概要 .....	5-2
5.2	「IT Resources Type Definition」 フォーム .....	5-2
5.2.1	IT リソースのテンプレート (リソース・タイプ) の定義 .....	5-3
5.2.2	「IT Resource Type Definition」 フォームのタブ .....	5-3
5.2.2.1	「IT Resource Type Parameter」 タブ .....	5-3
5.2.2.2	「IT Resources」 タブ .....	5-4
5.2.3	「IT Resource Type Definition」 表 .....	5-4
5.3	「IT Resources」 フォーム .....	5-5
5.3.1	IT リソースの定義 .....	5-5
5.3.2	IT リソース・インスタンス・パラメータへのアクセス権限の設定 .....	5-6

5.4	「Rule Designer」 フォーム .....	5-6
5.4.1	ルールの作成 .....	5-9
5.4.2	「Rule Designer」 フォームのタブ .....	5-10
5.4.2.1	「Rule Elements」 タブ .....	5-10
5.4.2.2	「Usage」 タブ .....	5-12
5.4.3	「Rule Designer」 表 .....	5-13
5.5	「Resource Objects」 フォーム .....	5-14
5.5.1	リソース・オブジェクトの作成 .....	5-17
5.5.2	「Resource Objects」 フォームのタブ .....	5-19
5.5.2.1	「Depends On」 タブ .....	5-19
5.5.2.2	「Object Authorizers」 タブ .....	5-20
5.5.2.3	「Process Determination Rules」 タブ .....	5-21
5.5.2.4	「Event Handlers/Adapters」 タブ .....	5-22
5.5.2.5	「Resource Audit Objectives」 タブ .....	5-22
5.5.2.6	「Status Definition」 タブ .....	5-23
5.5.2.7	「Administrators」 タブ .....	5-24
5.5.2.8	「Password Policies Rule」 タブ .....	5-25
5.5.2.9	「User-Defined Fields」 タブ .....	5-27
5.5.2.10	「Process」 タブ .....	5-27
5.5.2.11	「Object Reconciliation」 タブ .....	5-27
5.5.3	複数の信頼できるソースのリコンシリエーション .....	5-31
5.5.3.1	MTS 互換コネクタを使用した複数の信頼できるソースのリコンシリエーション ...	5-32
5.5.3.2	MTS 互換ではないコネクタを使用した複数の信頼できるソースの リコンシリエーション .....	5-34
5.6	サービス・アカウントの管理 .....	5-39

## 6 プロセス管理

6.1	プロセス管理の概要 .....	6-2
6.2	「Email Definition」 フォーム .....	6-2
6.2.1	電子メール・サーバーの指定 .....	6-3
6.2.2	「Email Definition」 フォーム .....	6-3
6.2.3	電子メール定義の作成 .....	6-4
6.3	「Process Definition」 フォーム .....	6-7
6.3.1	プロセス定義の作成 .....	6-9
6.3.2	「Process Definition」 フォームのタブ .....	6-10
6.3.2.1	「Tasks」 タブ .....	6-10
6.3.2.1.1	プロセス・タスクの追加 .....	6-11
6.3.2.1.2	プロセス・タスクの編集 .....	6-11
6.3.2.1.3	プロセス・タスクの削除 .....	6-11
6.3.2.2	「Data Flow」 タブ .....	6-12
6.3.2.2.1	プロセス・フォーム・フィールドへの親リソース・フォーム・フィールドの マッピング .....	6-13
6.3.2.2.2	子プロセス・フォーム・フィールドへの子リソース・フォーム・フィールドの マッピング .....	6-13
6.3.2.2.3	リソース・オブジェクトのデータ・フィールドとプロセスの間のマッピングの 解除 .....	6-13
6.3.2.3	「Reconciliation Field Mappings」 タブ .....	6-14
6.3.2.3.1	ユーザー・アカウント・ステータスのリコンシリエーション .....	6-15
6.3.2.3.2	ターゲット・リソース・フィールドの Oracle Identity Manager への マッピング .....	6-15

6.3.2.3.3	マッピングの削除 .....	6-17
6.3.2.4	「Administrators」タブ .....	6-17
6.3.2.4.1	プロセス定義へのユーザー・グループの割当て .....	6-17
6.3.2.4.2	プロセス定義からのユーザー・グループの削除 .....	6-18
6.3.3	プロセス・タスクの変更 .....	6-18
6.3.3.1	「General」タブ .....	6-19
6.3.3.1.1	プロセス・タスクの一般情報の変更 .....	6-21
6.3.3.2	「Integration」タブ .....	6-23
6.3.3.2.1	プロセス・タスクへのアダプタまたはイベント・ハンドラの割当て .....	6-23
6.3.3.2.2	アダプタ変数のマッピング .....	6-24
6.3.3.2.3	プロセス・タスクのアダプタまたはイベント・ハンドラの削除 .....	6-25
6.3.3.3	「Task Dependency」タブ .....	6-25
6.3.3.3.1	先行タスクのプロセス・タスクへの割当て .....	6-25
6.3.3.3.2	プロセス・タスクからの先行タスクの削除 .....	6-25
6.3.3.3.3	プロセス・タスクへの依存タスクの割当て .....	6-26
6.3.3.3.4	プロセス・タスクからの依存タスクの削除 .....	6-26
6.3.3.4	「Responses」タブ .....	6-26
6.3.3.4.1	プロセス・タスクへのレスポンスの追加 .....	6-26
6.3.3.4.2	プロセス・タスクからのレスポンスの削除 .....	6-27
6.3.3.4.3	生成タスクのプロセス・タスクへの割当て .....	6-27
6.3.3.4.4	プロセス・タスクからの生成タスクの削除 .....	6-27
6.3.3.5	「Undo/Recovery」タブ .....	6-28
6.3.3.5.1	取消しタスクのプロセス・タスクへの割当て .....	6-28
6.3.3.5.2	プロセス・タスクからの取消しタスクの削除 .....	6-28
6.3.3.5.3	リカバリ・タスクのプロセス・タスクへの割当て .....	6-28
6.3.3.5.4	プロセス・タスクからのリカバリ・タスクの削除 .....	6-29
6.3.3.6	「Notification」タブ .....	6-29
6.3.3.6.1	プロセス・タスクへの電子メール通知の割当て .....	6-29
6.3.3.6.2	プロセス・タスクからの電子メール通知の削除 .....	6-30
6.3.3.7	「Task to Object Status Mapping」タブ .....	6-30
6.3.3.7.1	プロビジョニング・ステータスへのプロセス・タスク・ステータスの マッピング .....	6-31
6.3.3.7.2	プロビジョニング・ステータスからのプロセス・タスク・ステータスの マッピング解除 .....	6-31
6.3.3.8	Editing Task ウィンドウの「Assignment」タブ .....	6-32
6.3.3.8.1	プロセス・タスクへのルールの追加 .....	6-34
6.3.3.8.2	プロセス・タスクからのルールの削除 .....	6-34

## 7 Design Console での Oracle Identity Manager の管理

7.1	Design Console 管理の概要 .....	7-2
7.2	「Form Information」フォーム .....	7-3
7.2.1	Oracle Identity Manager のフォームまたはフォルダの追加 .....	7-4
7.2.2	Design Console エクスプローラの変更 .....	7-5
7.3	「Lookup Definition」フォーム .....	7-5
7.3.1	参照定義の作成 .....	7-7
7.3.2	「Lookup Code Information」タブ .....	7-7
7.3.2.1	参照値の作成と変更 .....	7-7
7.3.2.2	参照値の削除 .....	7-8
7.4	「User Defined Field Definition」フォーム .....	7-9
7.4.1	ユーザー定義フィールドのターゲット・フォームの選択 .....	7-10

7.4.2	「User Defined Field Definition」 フォームのタブ .....	7-10
7.4.2.1	「User Defined Columns」 タブ .....	7-10
7.4.2.2	「Properties」 タブ .....	7-14
7.4.2.3	「Administrators」 タブ .....	7-15
7.5	「System Configuration」 フォーム .....	7-16
7.5.1	プロパティ定義のインスタンスの作成と編集 .....	7-17
7.5.2	プロパティ定義のインスタンスへのユーザーまたはグループの割当て .....	7-18
7.5.3	プロパティ定義のインスタンスからのユーザーまたはグループの削除 .....	7-18
7.6	「Remote Manager」 フォーム .....	7-19
7.7	「Password Policies」 フォーム .....	7-20
7.7.1	パスワード・ポリシーの作成 .....	7-21
7.7.2	「Password Policies」 フォームのタブ .....	7-21
7.7.2.1	「Policy Rules」 タブ .....	7-21
7.7.2.2	「Usage」 タブ .....	7-27
7.8	「Task Scheduler」 フォーム .....	7-28
7.8.1	事前定義済のスケジュール済タスク .....	7-31
7.8.2	スケジュール済タスクの作成 .....	7-33
7.8.2.1	タスク属性の追加 .....	7-34
7.8.2.2	タスク属性の削除 .....	7-34
7.8.3	カスタム・スケジュール済タスクの削除 .....	7-34

## 8 開発ツール

8.1	開発ツールの概要 .....	8-2
8.2	「Adapter Factory」 フォーム .....	8-2
8.3	「Adapter Manager」 フォーム .....	8-3
8.4	「Form Designer」 フォーム .....	8-3
8.4.1	フォームの作成 .....	8-5
8.4.2	「Form Designer」 フォームのタブ .....	8-6
8.4.2.1	「Additional Columns」 タブ .....	8-6
8.4.2.1.1	データ・フィールドへのフォームの追加 .....	8-9
8.4.2.1.2	フォームからのデータ・フィールドの削除 .....	8-10
8.4.2.2	「Child Table(s)」 タブ .....	8-11
8.4.2.2.1	フォームへの子表の割当て .....	8-12
8.4.2.2.2	フォームからの子表の削除 .....	8-12
8.4.2.3	「Object Permissions」 タブ .....	8-12
8.4.2.3.1	ユーザーが作成したフォームへのユーザー・グループの割当て .....	8-13
8.4.2.3.2	ユーザーが作成したフォームからのユーザー・グループの削除 .....	8-14
8.4.2.4	「Properties」 タブ .....	8-14
8.4.2.4.1	データ・フィールドへのプロパティおよびプロパティ値の追加 .....	8-15
8.4.2.4.2	カスタマイズされた参照問合せのプロパティおよびプロパティ値の追加 .....	8-16
8.4.2.4.3	データ・フィールドからのプロパティおよびプロパティ値の削除 .....	8-18
8.4.2.5	「Administrators」 タブ .....	8-18
8.4.2.5.1	ユーザー作成フォームのレコードに関する管理権限のユーザー・グループへの割当て .....	8-19
8.4.2.5.2	ユーザー作成フォームのレコードに関するユーザー・グループ権限の削除 .....	8-19
8.4.2.6	「Usage」 タブ .....	8-20
8.4.2.7	「Pre-Populate」 タブ .....	8-20
8.4.2.8	「Default Columns」 タブ .....	8-21
8.4.2.9	「User Defined Fields」 タブ .....	8-21

8.4.3	フォームの追加バージョンの作成 .....	8-21
8.5	「Error Message Definition」フォーム .....	8-22
8.5.1	エラー・メッセージの作成 .....	8-23

## 9 ビジネス・ルール定義

9.1	ビジネス・ルール定義の概要 .....	9-2
9.2	「Event Handler Manager」フォーム .....	9-2
9.3	「Data Object Manager」フォーム .....	9-5
9.3.1	「Data Object Manager」フォームのタブ .....	9-6
9.3.1.1	「Attach Handlers」タブ .....	9-6
9.3.1.1.1	データ・オブジェクトへのイベント・ハンドラまたはアダプタの割当て .....	9-7
9.3.1.1.2	イベント・ハンドラまたはアダプタの実行スケジュールの構成 .....	9-7
9.3.1.1.3	データ・オブジェクトからのイベント・ハンドラまたはアダプタの削除 .....	9-7
9.3.1.2	「Map Adapters」タブ .....	9-8
9.4	「Reconciliation Rules」フォーム .....	9-8
9.4.1	リコンシリエーション・ルールの定義 .....	9-9
9.4.2	ルール要素の追加 .....	9-9
9.4.3	ルールへのルールのネスト .....	9-11
9.4.4	ルール要素またはルールの削除 .....	9-11

## 10 Oracle Identity Manager のロギング機能

10.1	Oracle Identity Manager のロギング機能の概要 .....	10-2
10.2	ログ・レベルの設定 .....	10-2

## A リファレンス

## B サービス・アカウントの管理

## C フォーム・バージョン制御ユーティリティ

C.1	FVC ユーティリティの有効範囲 .....	C-2
C.2	FVC ユーティリティのコンテンツ .....	C-2
C.3	FVC ユーティリティの説明 .....	C-2
C.4	FVC ユーティリティの機能 .....	C-3

## 索引

## 図一覧

1-1	Oracle Identity Manager の3層アーキテクチャ .....	1-3
2-1	Design Console のメイン画面 .....	2-2
2-2	Design Console のツールバー .....	2-5
2-3	Design Console エクスプローラ .....	2-7
2-4	Design Console ワークスペース .....	2-8
2-5	表ビュー .....	2-9
3-1	「Lookup」ダイアログ・ボックス .....	3-2
3-2	Design Console - フォーム・タブ .....	3-4
3-3	検索問合せの結果表示 .....	3-6
3-4	複数のレコードが返された状態 .....	3-7
3-5	「Query size exceeded」ダイアログ・ボックス .....	3-8
4-1	「Organizational Defaults」フォーム .....	4-2
4-2	「Policy History」フォーム .....	4-3
4-3	「Reconciliation Manager」フォーム .....	4-8
5-1	「IT Resources Type Definition」フォーム .....	5-2
5-2	「Rule Designer」フォーム .....	5-7
5-3	「Rule Designer」フォームの「Rule Elements」タブ .....	5-10
5-4	Edit Rule Element ウィンドウ .....	5-11
5-5	「Rule Designer」フォームの「Usage」タブ .....	5-12
5-6	「Rule Designer」表 .....	5-13
5-7	ユーザー・タイプによる信頼できるソースのリコンシリエーション .....	5-36
5-8	特定の OIM ユーザーの属性に対する信頼できるソースのリコンシリエーション .....	5-38
6-1	「Email Definition」フォーム .....	6-2
6-2	「Process Definition」フォーム .....	6-7
6-3	「Process Definition」フォームの「Tasks」タブ .....	6-11
6-4	「Process Definition」フォームの「Data Flow」タブ .....	6-12
6-5	「Process Definition」フォームの「Reconciliation Field Mappings」タブ .....	6-14
6-6	「Editing Task」ダイアログ・ボックスの「General」タブ .....	6-19
6-7	「Handler Selection」ダイアログ・ボックス .....	6-24
7-1	「Form Information」フォーム .....	7-3
7-2	「Lookup Definition」フォーム .....	7-6
7-3	「User Defined Field Definition」フォーム .....	7-9
7-4	「User Defined Field Definition」フォームの「User Defined Columns」タブ .....	7-11
7-5	「User Defined Fields」ダイアログ・ボックス .....	7-11
7-6	値が入力された「User Defined Fields」ダイアログ・ボックス .....	7-13
7-7	「User Defined Field Definition」フォームの「Properties」タブ .....	7-14
7-8	「User Defined Field Definition」フォームの「Administrators」タブ .....	7-15
7-9	「System Configuration」フォーム .....	7-16
7-10	「Remote Manager」フォーム .....	7-19
7-11	「Password Policies」フォーム .....	7-20
7-12	「Password Policies」フォームの「Usage」タブ .....	7-27
7-13	「Task Scheduler」フォーム .....	7-28
8-1	「Adapter Factory」フォーム .....	8-2
8-2	「Adapter Manager」フォーム .....	8-3
8-3	「Form Designer」フォーム .....	8-4
8-4	「Form Designer」フォームの「Additional Columns」タブ .....	8-6
8-5	「Form Designer」フォームの「Child Table(s)」タブ .....	8-11
8-6	「Form Designer」フォームの「Object Permissions」タブ .....	8-13
8-7	「Form Designer」フォームの「Properties」タブ .....	8-14
8-8	「Add Property」ダイアログ・ボックス .....	8-15
8-9	値が入力された「Add Property」ダイアログ・ボックス .....	8-16
8-10	「Add Property」ダイアログ・ボックス .....	8-16
8-11	「Edit Property」ダイアログ・ボックス .....	8-18
8-12	「Form Designer」フォームの「Administrators」タブ .....	8-19
8-13	「Form Designer」フォームの「Usage」タブ .....	8-20
8-14	「Error Message Definition」フォーム .....	8-22
9-1	「Event Handler Manager」フォーム .....	9-3
9-2	「Data Object Manager」フォーム .....	9-5



## 表一覧

4-1	「Organizational Defaults」 フォームのフィールド .....	4-3
4-2	「Policy History」 フォームのフィールド .....	4-4
4-3	「Reconciliation Manager」 フォームのフィールド .....	4-9
5-1	「IT Resources Type Definition」 フォームのフィールド .....	5-3
5-2	「IT Resources」 フォームのフィールド .....	5-5
5-3	「Rule Designer」 フォームのフィールド .....	5-8
5-4	「Edit Rule Element」 ダイアログ・ボックスのフィールド .....	5-11
5-5	「Rule Designer」 表の情報 .....	5-13
5-6	「Resource Objects」 フォームのフィールド .....	5-14
5-7	ルール条件と可能なルール・アクション .....	5-29
6-1	「Email Definition」 フォームのフィールド .....	6-3
6-2	「Process Definition」 フォームのフィールド .....	6-8
6-3	「Editing Task」 ダイアログ・ボックスの「General」 タブのフィールド .....	6-19
6-4	Editing Task ウィンドウの「Assignment」 タブのフィールド .....	6-33
7-1	「Form Information」 フォームのフィールド .....	7-4
7-2	「Lookup Definition」 フォームのフィールド .....	7-6
7-3	「User Defined Field Definition」 フォームのフィールド .....	7-9
7-4	「User Defined Fields」 ダイアログ・ボックスのフィールド .....	7-11
7-5	「System Configuration」 フォームのフィールド .....	7-16
7-6	「Password Policies」 フォームの「Policy Rules」 タブのフィールド .....	7-22
7-7	カスタム・パスワード・ポリシーを設定するための「Policy Rules」 タブのフィールド .....	7-24
7-8	「Task Scheduler」 フォームのフィールド .....	7-29
7-9	事前定義済のスケジュール済タスク .....	7-31
8-1	「Form Designer」 フォームのフィールド .....	8-4
8-2	「Additional Columns」 タブのフィールド .....	8-7
8-3	「Add Property」 ダイアログ・ボックスのフィールド .....	8-15
8-4	「Add Property」 ダイアログ・ボックスのフィールド .....	8-17
8-5	「Error Message Definition」 フォームのフィールド .....	8-22
9-1	「Event Handler Manager」 フォームのフィールド .....	9-3
9-2	「Data Object Manager」 フォームのフィールド .....	9-5
9-3	変換プロパティ .....	9-10



---

---

# はじめに

このガイドでは、Oracle Identity Manager Design Console で実行できる処理について説明します。

## 対象読者

このガイドは、Oracle Identity Manager Design Console のユーザーを対象としています。このガイドでは、日々の運用および管理業務における Design Console の基本機能について説明します。Oracle Identity Manager の開発ツールの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』および Oracle Identity Manager SDK を参照してください。

## ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

### ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

### 外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

### Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800)446-2398 にお電話ください。

## 関連ドキュメント

詳細は、このリリースの Oracle Identity Manager ドキュメント・セットの他のドキュメントを参照してください。

## ドキュメントの更新

オラクル社は、最新かつ最適な情報の提供に努めています。Oracle Identity Manager ドキュメント・セットの更新情報は、次に示す Oracle Technology Network のサイトを参照してください。

<http://www.oracle.com/technology/documentation/index.html>

## 表記規則

このマニュアルでは次の表記規則を使用します。

規則	意味
太字	太字は、操作に関連する <b>Graphical User Interface</b> 要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
イタリック体	イタリックは、ユーザーが特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、 <b>URL</b> 、サンプル内のコード、画面に表示されるテキスト（または入力するテキスト）、およびファイル、ディレクトリ、属性、パラメータの名前を示します。

## オンライン・ヘルプ

Oracle Identity Manager Design Console のオンライン・ヘルプにアクセスするには、「Help」メニューから「Administrator's Guide」を選択します。

## サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

### Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/support/index.html>

### 製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/documentation/index.html>

### 研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

[http://education.oracle.com/pls/web\\_prod-plq-dad/db\\_pages.getpage?page\\_id=3](http://education.oracle.com/pls/web_prod-plq-dad/db_pages.getpage?page_id=3)

### その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/index.html>

<http://www.oracle.com/technology/jp/index.html>

---

**注意：** ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

---



---

# Oracle Identity Manager のアーキテクチャ

この章では、Oracle Identity Manager のアーキテクチャ、利点および主な機能について説明します。内容は次のとおりです。

- Oracle Identity Manager のアーキテクチャの概要
- Oracle Identity Manager の利点と主な機能
- Oracle Identity Manager の 3 層のアーキテクチャ

## 1.1 Oracle Identity Manager のアーキテクチャの概要

Oracle Identity Manager プラットフォームは、アクセス権の管理、セキュリティ、および IT リソースのプロビジョニングを自動化します。Oracle Identity Manager は、ユーザーをリソースに接続し、機密性の高い企業情報を保護するために不正アクセスを破棄および禁止します。

## 1.2 Oracle Identity Manager の利点と主な機能

Oracle Identity Manager のアーキテクチャは、様々なビジネス環境に素早く統合できるように設計されています。次のような機能があります。

**スケーラブルなアーキテクチャ:** Oracle Identity Manager の J2EE アプリケーション・サーバー・モデルは、スケーラビリティ、フェイルオーバーおよびロード・バランシング機能を備え、固有の Web デプロイメントを実現します。オープンな標準ベースのテクノロジーに基づいて、3層のアーキテクチャ（クライアント・アプリケーション、Oracle Identity Manager がサポートする J2EE 準拠のアプリケーション・サーバー、および ANSI SQL 準拠のデータベース）で構成されています。Oracle Identity Manager では、LDAP 対応および LDAP 非対応のアプリケーションをプロビジョニングできます。

**幅広いユーザー管理:** Oracle Identity Manager では、ユーザー組織の階層およびユーザー・グループを無制限に定義できます。継承、カスタマイズ可能なユーザー ID ポリシー管理、パスワード・ポリシー管理、顧客の変化するビジネス・ニーズを反映するユーザー・アクセス・ポリシーがサポートされます。また、管理者によるアプリケーションのパラメータと権限の管理、リソース割当て履歴の表示、ユーザー管理に関する包括的な権限設定ができる委任管理が可能です。

**Web ベースのユーザー・セルフサービス:** Oracle Identity Manager には、カスタマイズ可能な Web ベースのユーザー・セルフサービス・ポータルがあります。このポータルでは、ユーザー情報の管理、パスワードの変更と同期、忘れたパスワードの再設定、選択可能なアプリケーションのリクエスト、選択可能な権限の確認と編集、およびワークフロー・タスクの開始と対処を行うことができます。

**強力で柔軟性の高いプロセス・エンジン:** Oracle Identity Manager では、Microsoft Project や Microsoft Visio などの使いやすいアプリケーションでビジネスおよびプロビジョニングのプロセス・モデルを作成できます。プロセス・モデルには、承認ワークフローとエスカレーションのサポートが含まれます。イベントの現在のステータスやエラー・コードのサポートなど、各プロビジョニング・イベントの進行をトラッキングすることができます。Oracle Identity Manager では、複合的で分岐を含む自己修復プロセスや、データ交換および依存関係を含むネストされたプロセスがサポートされます。プロセス・フローは完全にカスタマイズ可能で、プログラミングも必要ありません。

**監査証跡アカウンティングの詳細レポート機能:** Oracle Identity Manager は、すべてのプロセスについて詳細な状態情報を含むリアルタイム・レポートおよび最新のステータス・レポートを提供します。Oracle Identity Manager に備わった完全なオンライン分析処理（OLAP）機能は、非常に複雑なレポート、分析および動的問合せをサポートしています。

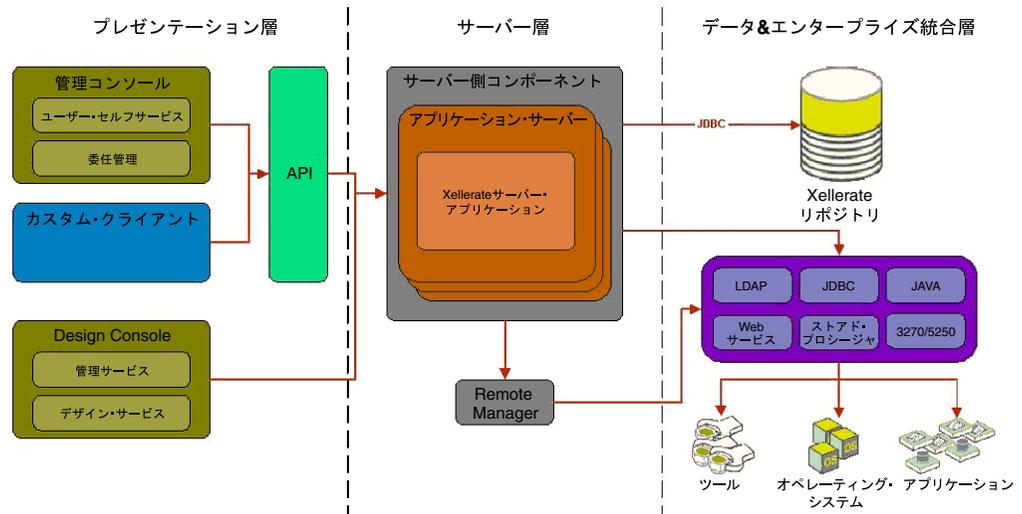
**Adapter Factory を使用した統合:** すべてのシステムを手作業でコーディングしたアダプタでサポートするのは非現実的です。オラクル社ではアダプタの生成を自動化するツールを開発しました。Adapter Factory と呼ばれるこのツールは、広範囲のインタフェースと、事実上すべてのアプリケーションやデバイスをサポートします。アダプタは Oracle Identity Manager サーバー上で実行され、ターゲット・プラットフォーム上でのエージェントのインストールや更新は必要はありません。ターゲット・アプリケーション・リソースがネットワーク対応のインタフェースを持っていない状況では、UDDI/SOAP ベースのサポートを使用して、リモート統合を作成できます。Adapter Factory を使用すると、実装に数か月かかる統合を、数日で完了できます。多数のアダプタを短期間で生成することができます。Adapter Factory を使用すると、既存の統合を最新の状態に維持し、新しい統合ニーズに迅速に対応できます。Oracle Identity Manager には、リモート・マネージャを使用して、外部のサード・パーティ・システムでプログラムを実行する機能があります。

**組込みの変更管理:** Oracle Identity Manager では、新しいプロセスをパッケージし、既存のプロセスをインポートおよびエクスポートし、パッケージをシステム間で移動できます。

## 1.3 Oracle Identity Manager の 3 層のアーキテクチャ

Oracle Identity Manager のアーキテクチャを構成している 3 つの層を図 1-1 に示します。

図 1-1 Oracle Identity Manager の 3 層アーキテクチャ



### 1.3.1 第 1 層 : クライアント

第 1 層は、Design Console（このガイドで説明するインターフェース）と、管理およびユーザー・コンソールの 2 つのインターフェースを提供します。ユーザーは、Oracle Identity Manager サーバーにユーザーのログイン資格証明を提供する管理およびユーザー・コンソールを使用して Oracle Identity Manager にログインします。管理およびユーザー・コンソールを使用して、ユーザーは Oracle Identity Manager データベースの情報の検索、編集および削除を行うことができます。

---

**注意：** このマニュアルでは、Oracle Identity Manager Design Console について説明します。Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソールの詳細は、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・ガイド』を参照してください。

---

### 1.3.2 第 2 層 : アプリケーション・サーバー

第 2 層は、Java Data Objects のビジネス・ロジックを実装します。これらのオブジェクトは、サポートされている J2EE アプリケーション・サーバー（JBoss Application Server、Oracle WebLogic Server、IBM WebSphere Application Server および Oracle Containers for J2EE）によって管理されます。Java Data Objects は Oracle Identity Manager アプリケーションのビジネス・ロジックを実装しますが、他のアプリケーションのどのメソッドにも公開されません。Oracle Identity Manager のビジネス機能にアクセスするには、検索および通信メカニズムを備えた J2EE インフラストラクチャの Application Program Interface（API）レイヤーを使用できます。

Oracle Identity Manager でサポートされている J2EE 準拠のアプリケーション・サーバーは、データベースと通信する唯一のコンポーネントです。次の機能を提供します。

- **Oracle Identity Manager へのログイン：**アプリケーション・サーバーは、Oracle Identity Manager クライアントをデータベースに接続します。
- **クライアント・リクエストの処理：**アプリケーション・サーバーは Oracle Identity Manager クライアントからのリクエストを処理し、リクエストの情報をデータベースに送信します。サーバーは、データベースからのレスポンスもクライアントに送信します。

- **スケーラビリティ（接続のプーリングまたは共有）**：アプリケーション・サーバーは、Oracle Identity Manager クライアントに対して透過的な方法で、単一または複数のアプリケーションの使用をサポートします。接続プーリングは、データベース接続のパフォーマンスを向上させ、リソースの最適化によって接続プールのサイズを動的に変更して、使用のスケーラビリティを実現します。
- **システム・レベルのデータ（メタデータ）のセキュア化**：Oracle Identity Manager では、システム・レベルの情報（システム・メタデータ）を誤って削除または変更する可能性があるユーザーによる不正アクセスを防止します。権限のないユーザーがシステム・レベルの情報の追加、変更または削除を試みると、次のようなメッセージが表示されます。  
「The security level for this data item indicates that it cannot be deleted or updated.」

### 1.3.3 第 3 層：データベース

第 3 層はデータベースです。これは、Oracle Identity Manager の内部でデータ・ストレージを管理しているレイヤーです。

---

## Design Console のメイン画面

この章では、Design Console の起動方法および Design Console のメイン画面について説明します。内容は次のとおりです。

- [Design Console の起動](#)
- [Design Console の概要](#)
- [Design Console のメニュー・バー](#)
- [Design Console のツールバー](#)
- [Design Console のショートカット](#)
- [Design Console エクスプローラ](#)
- [Design Console ワークスペース](#)

## 2.1 Design Console の起動

Design Console を起動するには、次のようにします。

1. デスクトップの **Oracle Identity Manager** クライアント・アイコンをダブルクリックします。

Login ウィンドウが表示されます。

2. ユーザー ID とパスワードを入力します。

セキュリティに配慮して、パスワードはアスタリスク (\*\*\*\*) で表示されます。

ユーザー ID とパスワードに、特殊文字は使用できません。たとえば、パーセント記号 (%)、プラス記号 (+)、等号 (=)、カンマ (,)、円記号 (¥)、二重引用符 (")、小なり記号 (<)、大なり記号 (>) およびスラッシュ (/) は使用できません。

3. 「Login」をクリックします。

Design Console のメイン画面が表示されます。

Design Console にログインすると、システム設定を構成できます。これらの設定は、Oracle Identity Manager のシステム全体に関わる動作を制御します。これらの設定の詳細は、第 7 章の「[System Configuration フォーム](#)」を参照してください。

---

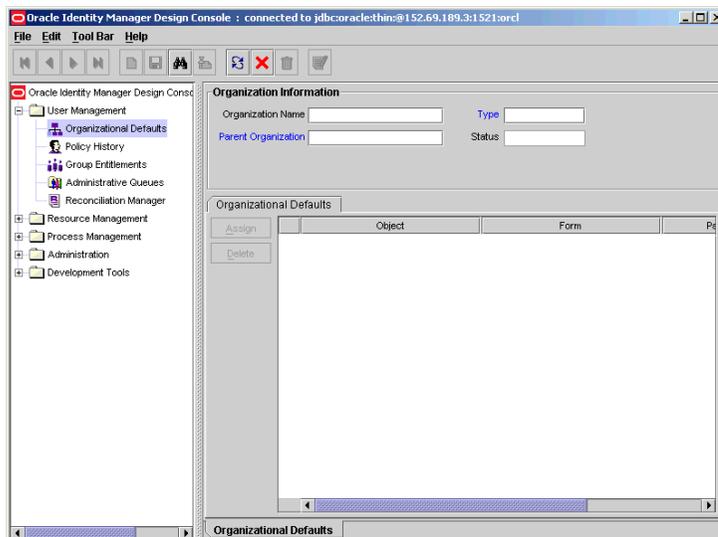
**注意：** Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールを使用すると、Oracle Identity Manager の基本機能にアクセスすることもできます。Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソールの機能の詳細は、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・ガイド』を参照してください。

---

## 2.2 Design Console の概要

図 2-1 に示す Design Console のメイン画面では、ビジネス・プロセスを作成、追跡および分析できます。

図 2-1 Design Console のメイン画面



Design Console のメイン画面には、次の 4 つの領域があります。

- Design Console のメニュー・バー
- Design Console のツールバー
- Design Console エクスプローラ
- Design Console ワークスペース

## 2.3 Design Console のメニュー・バー

メニュー・バーは、メイン画面の上部に表示されます。メニュー・バーのメニューを使用して、Design Console ユーザー・インタフェースのすべての操作を実行できます。

Design Console メニュー・バーには、次の 4 つのメニューがあります。

- 「File」メニュー
- 「Edit」メニュー
- 「Toolbar」メニュー
- 「Help」メニュー

### 2.3.1 「File」メニュー

「File」メニューには次のオプションがあります。

メニュー項目	動作
Print	アクティブなフォームを印刷します。
Login	Design Console からログアウトした後、再ログインします。
Exit	Design Console を終了します。

### 2.3.2 「Edit」メニュー

「Edit」メニューには、次のオプションがあります。

メニュー項目	動作
Cut	編集可能なフィールドから選択されたテキストを削除し、それをシステム・クリップボードにコピーします。
Copy	選択されたテキストをシステム・クリップボードにコピーします。
Paste	システム・クリップボードから選択されたフィールドにテキストを貼り付けます。
Clear	選択されたテキストを消去します。

### 2.3.3 「Toolbar」メニュー

「Toolbar」メニューの動作について、次の表で説明します。

メニュー項目	動作
New	アクティブなフォームの内容を消去します。
Save Changes	アクティブなフォームに加えられた変更を保存します。
Query	アクティブなフォームの問合せを実行します。
Notes	アクティブなフォームにアタッチされているメモを表示します。
Refresh	アクティブ・フォームのレコードをリフレッシュします。
Close	アクティブなフォームを閉じます。
Delete	現在のレコードを削除します。
Next	複数のレコードを問い合わせる場合に、次のレコードを表示します。
Previous	複数のレコードを問い合わせる場合に、前のレコードを表示します。
First	複数のレコードを問い合わせる場合に、最初のレコードを表示します。
Last	複数のレコードを問い合わせる場合に、最後のレコードを表示します。
Close All	開いているフォームをすべて閉じ、Design Console ワークスペースを消去します。

### 2.3.4 「Help」メニュー

「Help」メニューから、次の表に示すような Oracle Identity Manager Design Console のヘルプ・システムおよびコピーライト情報にアクセスできます。

メニュー項目	動作
Administrator Guide	このガイドと同内容のオンライン・ヘルプが表示されます。
About	Oracle Identity Manager Design Console のコピーライト情報が表示されま す。

## 2.4 Design Console のツールバー

ツールバーは、メニュー・バーの下にある一連のボタンで構成されます。これらのボタンをクリックすると、頻繁に使用する機能を、シングルクリックで呼び出すことができます。ツールバーのボタンは、アクティブなフォームに適用されます。

図 2-2 に Design Console のツールバーを示します。

図 2-2 Design Console のツールバー



ツールバーのボタン上にマウスを数秒間置くと、そのボタンの説明がツールチップに表示されます。

次の表に、ツールバーのボタンの説明を示します。

ボタン	動作
First	問合せ結果のレコードが複数ある場合、最初のレコードを表示します。
Previous	問合せ結果のレコードが複数ある場合、前のレコードを表示します。
Next	問合せ結果のレコードが複数ある場合、次のレコードを表示します。
Last	問合せ結果のレコードが複数ある場合、最後のレコードを表示します。
New	アクティブなフォームを消去します。
Save	アクティブなフォームに加えられた変更を保存します。
Query	アクティブなフォームの問合せを実行します。
Notes	アクティブなフォームにアタッチされているメモを表示します。
Refresh	アクティブなフォームをリフレッシュします。
Close	アクティブなフォームを閉じます。
Delete	現在のレコードを削除します。
Prepopulate	指定されたフィールドにデータを移入します。これらはユーザー定義のフィールドであり、事前移入アダプタがアタッチされています。 <b>注意:</b> 事前移入アダプタの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』を参照してください。

## 2.5 Design Console のショートカット

Design Console には次の様々な機能をすばやく実行するキーボード・ショートカットが用意されており、メニュー・コマンドを簡単に呼び出すことができます。

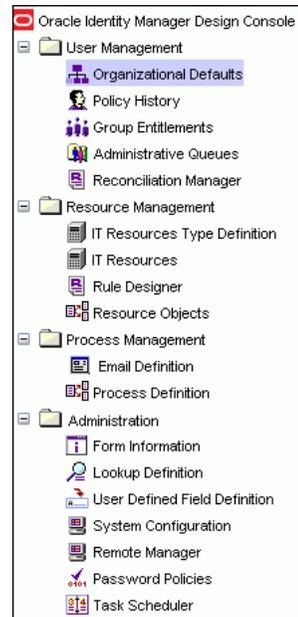
ショートカット名	キーストロークの組合せ	説明
「File」メニュー	[Alt]+[F]	「File」メニューをアクティブにします。
「Edit」メニュー	[Alt]+[E]	「Edit」メニューをアクティブにします。
「Toolbar」メニュー	[Alt]+[T]	「Toolbar」メニューをアクティブにします。
「Help」メニュー	[Alt]+[H]	「Help」メニューをアクティブにします。
Print	[Ctrl]+[P]	アクティブなフォームを印刷します。
Cut	[Ctrl]+[X]	編集可能なフィールドから選択されたテキストを削除し、それをシステム・クリップボードにコピーします。
Copy	[Ctrl]+[C]	選択されたテキストをシステム・クリップボードにコピーします。
Paste	[Ctrl]+[V]	システム・クリップボードから選択されたフィールドにテキストを貼り付けます。
Clear	[Ctrl]+[Del]	選択されたテキストを消去します。
New	[Ctrl]+[N]	アクティブなフォームを消去します。
Save Changes	[Ctrl]+[S]	アクティブなフォームに加えられた変更を保存します。
Query	[Ctrl]+[Q]	アクティブなフォームの問合せを実行します。
Notes	[Ctrl]+[Shift]+[N]	アクティブなフォームにアタッチされているメモを表示します。
Refresh	[Ctrl]+[R]	アクティブなフォームをリフレッシュします。
Close	[Ctrl]+[W]	アクティブなフォームを閉じます。
Delete	[Ctrl]+[D]	現在のレコードを削除します。
Next	Num + [+] (プラス)	問合せ結果のレコードが複数ある場合、次のレコードを表示します。
Previous	Num + [-] (マイナス)	問合せ結果のレコードが複数ある場合、前のレコードを表示します。
First	[Ctrl]+[F]	問合せ結果のレコードが複数ある場合、最初のレコードを表示します。
Last	[Ctrl]+[L]	問合せ結果のレコードが複数ある場合、最後のレコードを表示します。
Prepopulate	[Ctrl]+[U]	カスタマイズされたフォームの指定フィールドにデータを移入します。
Help	[F1]	アクティブなフォームの状況依存のヘルプを開きます。
Explorer	[F3]	Design Console エクスプローラの最上部に表示される Design Console アイコンを選択します。
Lookup	[F4]	選択された参照フィールドに対応する Lookup ウィンドウを表示します。
Menu	[F10]	「File」メニューをアクティブにします。

## 2.6 Design Console エクスプローラ

Design Console エクスプローラには、アクセスする権限があるフォームを表すアイコンのリストが表示されます。

図 2-3 に、Design Console エクスプローラを示します。エクスプローラは、システム管理者がカスタマイズできます。エクスプローラに表示されるアイコンは、割り当てられている権限によって異なります。権限を与えられていないフォーム・アイコンにアクセスする必要がある場合は、システム管理者に問い合せてください。

図 2-3 Design Console エクスプローラ



**ヒント:** システム管理者によって権限が変更された場合は、エクスプローラ・ウィンドウをリフレッシュする必要があります。

フォームを起動するには、次のようにします。

1. 必要なフォームが保存されているフォルダを開きます。
2. 開くフォームをダブルクリックします。

Design Console ワークスペースに、対応するフォームが表示されます。

**ヒント:** 仕切りを左右に移動して、Design Console エクスプローラのサイズを調整できます。

フォームのリストをリフレッシュするには、次のようにします。

1. Oracle Identity Manager エクスプローラ・ウィンドウの最上部にある Oracle Identity Manager ロゴをクリックします。メニューが表示されます。
2. 「Refresh Explorer」をクリックします。

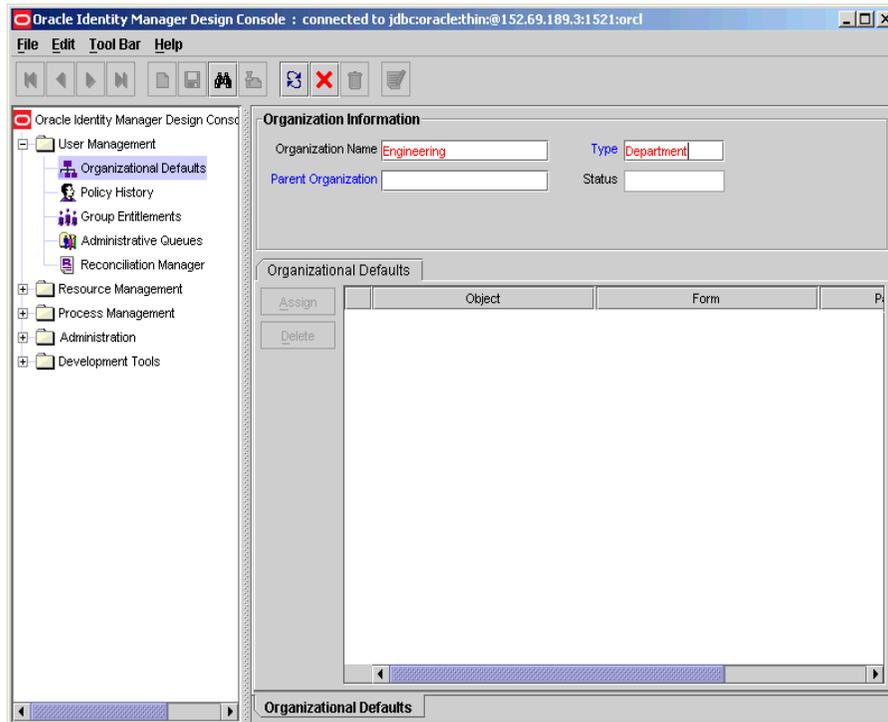
エクスプローラと、アクセスできるすべてのフォームがリフレッシュされます。システム管理者からアクセス権限を最近付与されたフォームもすべて含まれます。

## 2.7 Design Console ワークスペース

Design Console ワークスペースは、エクスプローラを使用してアクセスするフォームが表示されるメイン画面のリージョンです。

図 2-4 にワークスペースを示します。

図 2-4 Design Console ワークスペース



複数のフォームにアクセスすると、Design Console はアクティブなフォームを一番手前に置き、その他のフォームを重ねて、メイン画面の下端にタブとして表示します。フォームを切り替えるには、目的のフォームのタブをクリックします。

Design Console は、フォーム・ビューと表ビューの 2 つのビューでフォームを表示できます。

### フォーム・ビュー

フォーム・ビューでは、1 件のレコードの詳細情報が表示されます。フォーム・ビューは、エクスプローラを使用して最初にフォームにアクセスしたときに表示されます。たとえば、問合せを実行する前に表示されます。

### 表ビュー

表ビューには、フォームの複数のレコードに関する一般的な情報が一覧表示されます。1 つ以上の結果が得られる問合せを送信すると、Design Console には、その問合せの条件に一致するレコードを含む表が表示されます。

たとえば、「Organizations」フォームの問合せでは、複数のレコードが返されます。「Organizations」フォームでは、フォーム・ビューと表ビューのどちらも表示できます。

図 2-5 に Design Console の表ビューを示します。

図 2-5 表ビュー

	Organization Name	Parent Organization	Type	Status
1	Engineering		Department	Active
2	Human Resources		Department	Active
3	Marketing		Department	Active
4	Professional Service		Department	Active
5	Public Relations		Department	Active
6	Requests		System	Active
7	Research Developm		Department	Active
8	Sales		Department	Active
9	Shipping Recieving		Department	Active
10	Statewide - HR		Department	Active
11	Statewide - IT		Department	Active
12	Statewide - Investm		Company	Active
13	Statewide - Medicin		Department	Active

Organizational Defaults    Organizational Defaults Table

次の説明は、すべての表ビューに当てはまります。

- 表ビューでレコードを選択するには、レコードをクリックします。
- レコードに関連付けられたデータが、複数のセルに表示されます。  
セルは、フィールドとも呼ばれます。
- フォームには、列ヘッダーがあります。列ヘッダーは各列の上にある、ラベルが示されたボックスです。  
列ヘッダーには列の名前が表示されます。列に「Lookup」ダイアログ・ボックスがある場合、列ヘッダーは青色で示されます。
- Design Console フォームには行ヘッダーがあります。行ヘッダーは各行の先頭にある、数字が示されたボックスです。  
1 件のレコードの詳細なフォーム・ビューを表示するには、その行の行ヘッダーをダブルクリックします。1 件のレコードをフォーム・ビューで表示するには、表ビューで目的のレコードを選択します。次に、ワークスペースの最下部にある適用可能なフォームのタブをクリックします。
- ワークスペースに表示できる範囲を超えてレコードが返された場合、表ビューの右端に垂直スクロールバーが表示されます。  
垂直スクロールバーの上矢印または下矢印を使用すると、表のレコードをスクロールできます。
- 表ビューに、ワークスペースに表示できる範囲を超える列がある場合、表ビューの下端に水平スクロールバーが表示されます。  
水平スクロールバーで左矢印または右矢印を使用すると、初めはワークスペースに表示されていなかった列が表示されます。
- 表ビューの個別のセル（フィールド）では、レコードの情報を編集できます。  
特定のフィールドで情報を編集するには、フィールドをクリックして変更します。
- 青色で示されたフィールドには、「Lookup」ダイアログ・ボックスがあります。  
そのフィールドをダブルクリックすると、「Lookup」ダイアログ・ボックスが開き、目的の値を選択できます。いずれかのフィールドの値を編集すると、対応するレコードの行ヘッダーが黒色に変わります。これは、そのフィールドのデータが変更されており、保存する必要があることを示しています。
- 連続する複数のレコード行を選択するには、[Shift] キーを押します。
- 連続していない複数のレコード行を選択するには、[Ctrl] キーを使用します。
- 1 件のレコードをエクスポートするには、行ヘッダーを右クリックします。  
複数のレコードを選択するには、[Shift] キーを押して、行ヘッダーをクリックします。  
ダイアログ・ボックスが表示されます。

- **「Copy to Clipboard」** を選択すると、選択したレコードがクリップボードにコピーされます。  
コピーしたレコードは、Microsoft Excel スプレッドシートまたは Microsoft Word 文書に貼り付けることができます。
- レコードをタブ区切りファイル形式で保存するには、**「Copy to File」** を選択します。
- 表ビューのレコードの表示順序は、ソート機能を使用して制御できます。  
表示されたレコードのソート順を変更するには、レコードをソートする列のヘッダーをクリックします。列ヘッダーのテキストの脇に三角形が表示されます。これは、ソートされたレコードが昇順に並んでいるか降順に並んでいるかを示しています。

---

## Design Console の基本機能

この章では、Design Console の基本機能の使用方法について説明します。最初にこの項を確認してから、このガイドの他の章に進むことをお勧めします。

この章の内容は、次のとおりです。

- [特殊フィールドとフォーム・タイプ](#)
- [Assignment ウィンドウ](#)
- [検索の実行](#)
- [検索フィルタの作成](#)
- [検索の結果](#)
- [問合せ結果セット](#)
- [問合せのパフォーマンス最適化](#)
- [結果セットでの制限超過](#)

## 3.1 特殊フィールドとフォーム・タイプ

Design Console の基本機能の操作は、すべてのフォームに対する標準となります。この項では、Design Console の標準的な操作および Design Console のメイン画面のフィールドとウィンドウのタイプについて説明します。

### 3.1.1 データ・フィールド

データ・フィールドは、特定のレコードに関連する情報を表示するフォームにある表示領域です。たとえば、「Users」フォームには「First Name」などのデータ・フィールドがあります。

フィールドのラベルは、黒色または青色で表示されます。

- 黒色のラベルは、そのフィールドが標準フィールドであることを示します。  
標準フィールドでは、情報の問合せ、作成、変更または削除ができます。
- 青色のラベルの場合、そのフィールドのデータは、Lookup または Date & Time ウィンドウを使用して事前定義済みの値のリストから入力します。

このタイプのフィールドをダブルクリックすると、該当する Date & Time または Lookup ウィンドウが表示されます。そこで、日付、時刻または参照値を選択できます。

フィールドの値は、黒色または赤色で表示されます。

- フィールドの値が黒色で表示される場合、そのフィールドのデータはユーザーが入力したものです。

このタイプのフィールドでは、情報の問合せまたは編集を行うことができます。

- フィールドの値が赤色で表示される場合、そのフィールドのデータは、Oracle Identity Manager によって指定されています。

これらの値は読取り専用です。これにより、重要な情報の上書きを防止します。

### 3.1.2 「Lookup」フィールド

参照フィールドを使用すると、値を検索できます。次の手順では、フィールドを参照する方法について説明します。

参照フィールドを使用するには、次の手順を実行します。

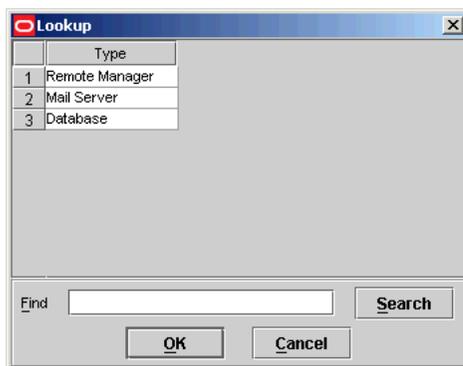
1. 「Lookup」ダイアログ・ボックスに表示されるフィールドが少ない場合は、フィールドをクリックし、「OK」をクリックします。

または、フィールドを選択して [F4] を押します。

選択を破棄して Lookup ウィンドウを閉じるには、「Cancel」をクリックします。

図 3-1 に、「Lookup」ダイアログ・ボックスを示します。

図 3-1 「Lookup」ダイアログ・ボックス



2. 「Lookup」ダイアログ・ボックスに多くの値のリストが表示される場合は、「Find」ボックスに値の最初の数文字を入力し、末尾にアスタリスク (\*) を付けて、「Search」をクリックします。

「Lookup」ダイアログ・ボックスに検索条件に一致する結果が表示されます。

### 3.1.3 「Date」および「Time」フィールド

Date & Time ウィンドウでは、月、年、日付および時刻を選択できます。このウィンドウを開くようにフィールドのオプションが設定されている場合、フィールドをダブルクリックすると、このウィンドウが表示されます。

日付および時刻を選択するには、次の手順を実行します。

1. 日付と時刻を入力するフィールドをダブルクリックします。

フィールドを選択して **[F4]** を押すことでも、Date & Time ウィンドウを表示できます。

Date & Time ウィンドウが表示されます。

2. メニューから、月を選択します。
3. 「Date」スクロール・ボックスから、年を選択します。
4. カレンダー上の日付をクリックします。
5. 「Time」ボックスから、時間を選択します。
6. 「OK」をクリックして変更を保存します。

Date & Time ウィンドウが閉じます。手順 1 でダブルクリックしたばかりのフィールドに、選択した日付と時刻が表示されます。

保存しないで終了するには「Cancel」をクリックします。

### 3.1.4 リスト

リストには、事前定義済の値があります。リストをクリックすると、そのリストの値が表示されます。リストに含まれる値の数が一度に表示できる個数を超えている場合は、リストの右側に垂直スクロールバーが表示されます。

値を選択すると、リストがフィールドに置き換えられ、選択された値が表示されます。

### 3.1.5 Notes ウィンドウ

Notes ウィンドウを使用すると、レコードの補足情報を入力できます。また、アダプタとともに使用する場合は、アダプタをコンパイルしている間、Design Console により生成されたコードがこのウィンドウに表示されます。アダプタの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』を参照してください。

---

**注意：** 次の手順で、「Notes」ボタンが赤色で表示される場合は、現行のレコードにメモが含まれています。メモを表示するには、ボタンをクリックします。このレコードに補足情報を入力できます。各エントリには、日付、時刻およびユーザーを記した一意のスタンプが表示されます。

---

Notes ウィンドウを使用するには、次の手順を実行します。

1. 必要なレコードを選択します。
2. 「Notes」をクリックします。

Notes ウィンドウが表示されます。

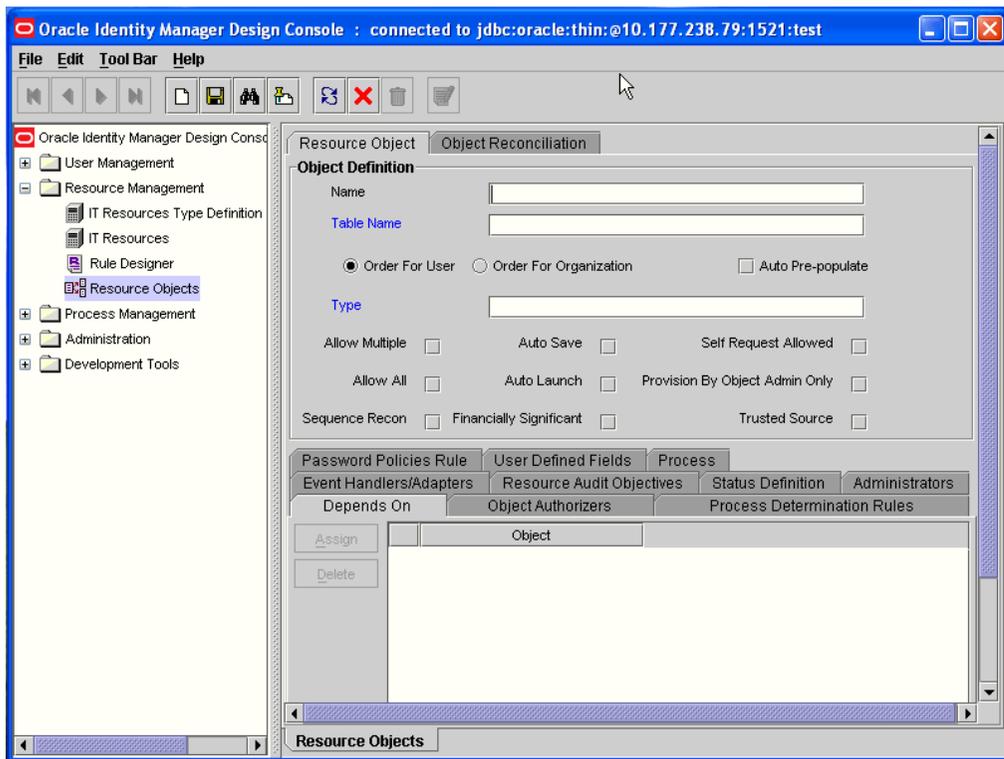
3. Notes ウィンドウのテキスト領域に情報を入力します。

4. Notes ウィンドウの情報を保存するには、人の形のアイコンをクリックします。  
または、保存せずに Notes ウィンドウを閉じるには、「Close」をクリックします。
5. ツールバーから「Save」をクリックします。  
Notes ウィンドウに入力された情報が保存されます。

### 3.1.6 フォーム・タブ

Design Console では、多数のフォームに複数のタブが含まれています。通常、タブはフォームの下部にあります。タブには、ある組織で雇用されているユーザーなど、レコードについての追加情報が表示されます。図 3-2 を参照してください。

図 3-2 Design Console - フォーム・タブ



各タブには、独自の表および機能ボタンがあります。通常、フォームの上部にある情報が保存されるまで、タブ上のボタンはグレー表示されます。表のタブでは、そのタブ項目に関連付けられているレコードの表示および編集が可能です。

タブの表で行の情報を変更するには、編集する情報が含まれるフィールドをダブルクリックするか、または関連付けられている行の見出しをダブルクリックします。

## 3.2 Assignment ウィンドウ

User Form の Assignment ウィンドウを使用すると、エンティティを選択してレコードに割り当てることができます。「Assign」ボタンをクリックすると、Assignment ウィンドウが表示されます。

左ペインに、レコードに割り当てできる項目（組織など）がリストされます。右ペインには、すでにレコードに割り当てられている項目がリストされます。左右のペインで選択できる値は、割り当てられている値、または割り当て解除された値に応じて固有ですが、ボタンおよびこのダイアログ・ボックスの一般的な使用方法は、アプリケーション全体で同じです。

次に、このウィンドウで作業する方法を示します。

- 連続していない項目を複数選択するには、[Ctrl] キーを押したままマウスで項目を選択します。  
たとえば、「Process Definition」オブジェクトを選択せずに、「User Group」、「IT Resource Type Definition」オブジェクト、「Form Information」オブジェクトを選択できます。
- リスト上で連続している複数の項目を選択するには、[Shift] キーを押したまま、最初と最後の項目をマウスで選択します。
- 1つ以上の項目を割り当てるには、項目を選択し、右矢印をクリックします。
- 1つ以上の項目の割り当てを解除するには、項目を選択し、左矢印をクリックします。

完了したら、「OK」をクリックします。「Cancel」をクリックすると、割り当てのすべての変更が破棄されます。

## 3.3 検索の実行

Design Console では、データベース内のレコードの検索（問合せ）を実行できます。Design Console のすべてのフォームに検索機能があります。検索機能は、参照フィールドでも選択可能です。

検索を実行するには、ツールバーの双眼鏡アイコンをクリックします。

## 3.4 検索フィルタの作成

フォームのフィールドで検索条件をフィルタすることができます。フィルタ処理すると、入力した条件と一致するレコードのみが検索結果として返されます。検索を実行する前にすべてのフォーム・フィールドを空欄のままにしておく、と、表のすべてのレコードが返されます。

検索でワイルドカード文字を使用できます。ワイルドカード文字のアスタリスク (\*) は、検索条件の不明な部分を表します。ワイルドカード文字は、フィールドに入力する値の先頭、中間または末尾に使用できます。たとえば、Design Console フォームの「Location」フィールドに「B\*」と入力して検索を実行すると、文字 B から始まる地名のレコード (Burbank、Boston、Bristol など) がすべて返されます。「B\*on」のように、アスタリスクが検索する値の中間にある場合は、B で始まり on で終わるレコード (Brighton、Boston など) がすべて返されます。「\*A」のように、アスタリスクを検索する値の先頭に置いた場合は、A で終わるレコード (Philadelphia、Tampa など) がすべて返されます。

図 3-3 では、「Organizational Defaults」フォームで問合せが実行され、「Organization Name」フィールドを使用して検索条件がフィルタされます。フィルタ Statew\* を使用すると、Statew で始まる名前の組織のみが返されます。

図 3-3 検索問合せの結果表示

The screenshot displays the 'Organizational Defaults' form. At the top, there is a section titled 'Organization Information' with four input fields: 'Organization Name' (containing 'Statew\*'), 'Type', 'Parent Organization', and 'Status'. Below this is a section titled 'Organizational Defaults' which contains a table with columns 'Object' and 'Form'. To the left of the table are 'Assign' and 'Delete' buttons. The table is currently empty, and the 'Organizational Defaults' section is highlighted with a blue background.

## 3.5 検索の結果

検索条件を問合せフィールドに入力した後、双眼鏡の記号をクリックするか、[Ctrl] キーを押しながら [Q] キーを押します。

結果は次のいずれかになります。

- **返されたレコードがない。** データベースのレコードに、このフォームの検索条件に一致するものはありませんでした。検索するレコードがもうデータベースに存在しないか、検索条件を変更する必要があるかのどちらかです。
- **1件のレコードが返された。** データベースの1件のレコードが検索条件に一致しました。そのレコードがフォーム・ビューに表示されます。
- **複数のレコードが返された。** データベースの複数のレコードが検索条件に一致しました。表ビューが表示され、検索条件に適合するすべてのレコードがリストされます。図 3-4 に示すように、最初のレコードがフォーム・ビューに表示されます。

図 3-4 複数のレコードが返された状態

	Organization Name	Parent Organization	Type	Status
1	Statewide - HR		Department	Active
2	Statewide - IT		Department	Active
3	Statewide - Investm		Company	Active
4	Statewide - Marketir		Department	Active

Organizational Defaults    Organizational Defaults Table

## 3.6 問合せ結果セット

データベース内の複数のレコードが検索条件に一致した場合、各レコードの詳細を参照できます。それらのレコードをフォーム・ビューで参照する際には、いくつかのボタンを使用できます。これは VCR ボタンとも呼ばれる方向ボタンで、ツールバーにあります。次の表に、VCR ボタンの説明を示します。

ボタン	説明
	このボタンをクリックすると、結果セットの最初のレコードがフォーム・ビューに表示されます。
	このボタンをクリックすると、表ビューの表示順で1つ前のレコードが表示されます。レコードはフォーム・ビューの結果セットに表示されます。
	このボタンをクリックすると、結果セットの、表ビューの表示順で次のレコードがフォーム・ビューに表示されます。
	このボタンをクリックすると、結果セットの最後のレコードがフォーム・ビューに表示されます。

## 3.7 問合せのパフォーマンス最適化

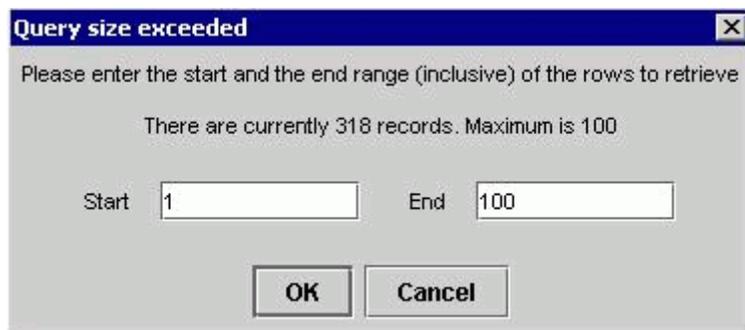
大規模な結果セットを返す問合せの実行には、多くの時間が必要になり、コンピュータのパフォーマンスに影響を与える場合があります。パフォーマンスを最適化するには、次の検索方法を使用します。

- 検索の範囲を、可能なかぎり正確に定義します。  
問合せを作成する際に、最も具体的な情報を入力します。たとえば、問合せ先の名が JOHN、姓が JACKSON である場合は、姓の JACKSON のみを使用して問合せ先を検索するのではなく、姓と名の両方を入力します。
- 可能なかぎり、ワイルドカード文字のアスタリスク (\*) を使用します。  
アスタリスクをアルファベット文字の前に置くと（たとえば、\*A）、フィールドを空白にしておく場合と比較して、返されるレコードが少なくなります。

## 3.8 結果セットでの制限超過

Design Console の「System Configuration」フォームで読取りと書込みの両方のアクセス権を持っている場合（つまり、システム管理者である場合）、検索の結果セットに表示されるレコードの最大数を設定できます。この値を超える数のレコードが返された場合、Design Console に「Query size exceeded」ダイアログ・ボックスが表示されます。図 3-5 を参照してください。

図 3-5 「Query size exceeded」ダイアログ・ボックス



表示する結果セットについて特定の範囲またはサブセットを入力するように求められます。図 3-5 では、結果セットの最大値である 100 を超えています。1 ~ 100 のレコードのみが表示されます。

**関連項目：**「System Configuration」フォームの詳細は、7-16 ページの「「System Configuration」フォーム」を参照してください。

---

---

## ユーザー管理

この章では、Design Console のユーザー管理について説明します。内容は次のとおりです。

- ユーザー管理の概要
- 「Organizational Defaults」 フォーム
- 「Policy History」 フォーム
- グループ権限の割当て
- 「Administrative Queues」 フォーム
- 「Reconciliation Manager」 フォーム

## 4.1 ユーザー管理の概要

「User Management」フォルダには、会社の組織、ユーザー、ユーザー・グループ、リクエスト、フォーム・テンプレート、場所、プロセス・タスクおよびリコンシリエーション・イベントについての情報をシステム管理者が作成、管理するためのツールがあります。

このフォルダには次のフォームがあります。

- **Organizational Defaults:** このフォームは、組織の内部構造を反映するレコードを表示したり、これらのエンティティに関連する情報を指定するために使用します。
- **Policy History:** このフォームは、従業員が必要とするユーザー・レコードを表示するために使用します。
- **Group Entitlements:** このフォームは、共通機能の割当てができるユーザー・グループのレコードを表示するために使用します。
- **Administrative Queues:** このフォームは、他の Design Console フォームのユーザー・グループ用にまとめて割当て権限を作成、管理するために使用します。
- **Reconciliation Manager:** このフォームは、Oracle Identity Manager でリコンシリエーション・イベントを管理するために使用します。

## 4.2 「Organizational Defaults」 フォーム

「Organizational Defaults」フォームは「User Management」フォルダにあります。このフォームは、組織の構成を反映するレコードを表示したり、組織のエンティティに関連する情報を入力および変更するために使用します。組織のレコードには、会社、部門または支店などの組織単位についての情報が含まれます。

サブ組織は、別の組織のメンバーである組織、たとえば、会社の部門などです。サブ組織が属する組織は親組織と呼ばれます。

「Organizational Defaults」タブは、現在の組織に対してプロビジョニングできるリソースの、カスタムのプロセス・フォームのデフォルトのパラメータ値を指定するために使用します。各プロセス・フォームは、その組織に対して許可されているリソース・オブジェクト、または関連する「Resource Objects」フォームの「Allow All」オプションが選択されているリソースに関連付けられています。

「Organizational Defaults」タブに入力した値は、組織のすべてのユーザーのデフォルト値になります。パスワードおよび暗号化されたパラメータにはデフォルト値を指定しないことをお勧めします。

図 4-1 に「Organizational Defaults」フォームを示します。

図 4-1 「Organizational Defaults」 フォーム

Organization Information	
Organization Name	Type
Parent Organization	Status

Organizational Defaults				
Assign				
Delete				
Object	Form	Parameter	Value	

表 4-1 に、「Organizational Defaults」 フォームのフィールドの説明を示します。

表 4-1 「Organizational Defaults」 フォームのフィールド

フィールド名	説明
Organization Name	組織の名前。
Type	組織の分類タイプ（「Company」、「Department」、「Branch」など）。
Status	組織の現在のステータス（Active、Disabled、Deleted のいずれか）。
Parent Organization	この組織が所属する組織。親組織がこのフィールドに表示される場合、この組織は、親組織の「Sub Organizations」タブに表示されます。このフィールドが空の場合、この組織は最上位の組織です。

## 4.3 「Policy History」 フォーム

「Policy History」 フォームは、ユーザーに対して許可または拒否されているリソースについての情報を表示するために使用します。

Oracle Identity Manager では、ユーザーのタイプは 2 つあります。

- **End-user administrators:** このユーザーは、Design Console や、管理およびユーザー・コンソールにアクセスできます。システム管理者は、エンドユーザー管理者が Design Console でフォームのサブセットにアクセスできるように権限を設定します。
- **End-users:** このユーザーは、管理およびユーザー・コンソールのみアクセスでき、一般にはエンドユーザー管理者より少ない権限を持ちます。管理およびユーザー・コンソールを使用してリクエストをプロビジョニングする場合に、ユーザーの組織の「Object Allowed」タブでセルフサービスとして定義されているリソース・オブジェクトのみを使用できます。

図 4-2 に、このフォームを示します。

図 4-2 「Policy History」 フォーム

表 4-2 に、「Policy History」フォームのフィールドの説明を示します。

表 4-2 「Policy History」フォームのフィールド

フィールド名	説明
User ID	ユーザーの Oracle Identity Manager ログイン ID。
First Name	ユーザーの名。
Middle Name	ユーザーのミドル・ネーム。
Last Name	ユーザーの姓。
Email Address	ユーザーの電子メール・アドレス。
Start Date	ユーザーのアカウントがアクティブになる日付。
Status	ユーザーの現在のステータス (Active、Disabled、Deleted のいずれか)。
Organization	ユーザーが所属する組織。
User Type	ユーザーの分類ステータス。有効なオプションは、「End-User」と「End-User Administrator」です。Design Console へのアクセス権があるのは「End-User Administrators」のみです。
Employee Type	親組織でのユーザーの雇用ステータス (たとえば、フルタイム、パート、研修生など)。
Manager ID	ユーザーのマネージャ。
End Date	ユーザーのアカウントが無効になる日付。
Created On	ユーザー・レコードが最初に作成された日付と時刻。

### 4.3.1 「Policy History」 タブ

このタブは、次の基準に基づいてユーザーに対して許可または拒否されているリソース・オブジェクトを表示するために使用します。

- ユーザーが所属するユーザー・グループのアクセス・ポリシー
- ユーザーが所属する組織によって許可されているリソース・オブジェクト

「Policy History」タブには「Display Selection」領域が含まれます。このタブの内容を整理するには、次に示すように、この領域の一番上のボックスのメニューから項目を選択します。

- **Resource Policy Summary:** ユーザーの組織および適用されるアクセス・ポリシーに基づいて許可または拒否されているリソース・オブジェクトを表示します。
- **Not Allowed by Org:** ユーザーの組織に基づいて拒否されているリソース・オブジェクトのみを表示します。
- **Resources by Policy:** ユーザーがメンバーであるユーザー・グループのアクセス・ポリシーが含まれる 2 番目のボックスを表示します。

アクセス・ポリシーに基づいてユーザーに対して許可または拒否されているリソース・オブジェクトを表示するには、このボックスからアクセス・ポリシーを選択します。

トラッキング・システムを使用すると、ユーザーがメンバーである組織と、ユーザーに適用されるアクセス・ポリシーに基づいて、ユーザーが許可または拒否されているリソースを表示できます。

ユーザーに対して許可されているリソース・オブジェクトは、「Resources Allowed」リストに表示されます。このリストは、そのユーザーに対してプロビジョニングできるリソース・オブジェクトを表しています。そのユーザーに対してプロビジョニングされているリソース・オブジェクトを表しているわけではありません。

そのユーザーに対して拒否されているリソース・オブジェクトは、「Resources Not Allowed」リストに表示されます。

トラッキング・システムを表示するには、次の手順を実行します。

1. 「Policy History」タブに移動します。
2. このタブにある「Display Selection」領域を確認します。
3. 「Policy History」をクリックします。

User Policy Profile History ウィンドウから、次に示す手順で選択したユーザーおよび日付と時刻について、許可または拒否されているリソースを表示できます。

- 「History Date」ボックスで日付を選択できます。
- 「Display Type」ボックスから、ユーザーがメンバーである組織と、ユーザーに適用されるアクセス・ポリシーの、いずれかまたは両方に基づいて、ユーザーが許可または拒否されているリソースを表示できます。
- 「Policy」ボックスから、そのユーザーに対してどのリソース・オブジェクトが許可または拒否されるかを決定するアクセス・ポリシーを表示できます。

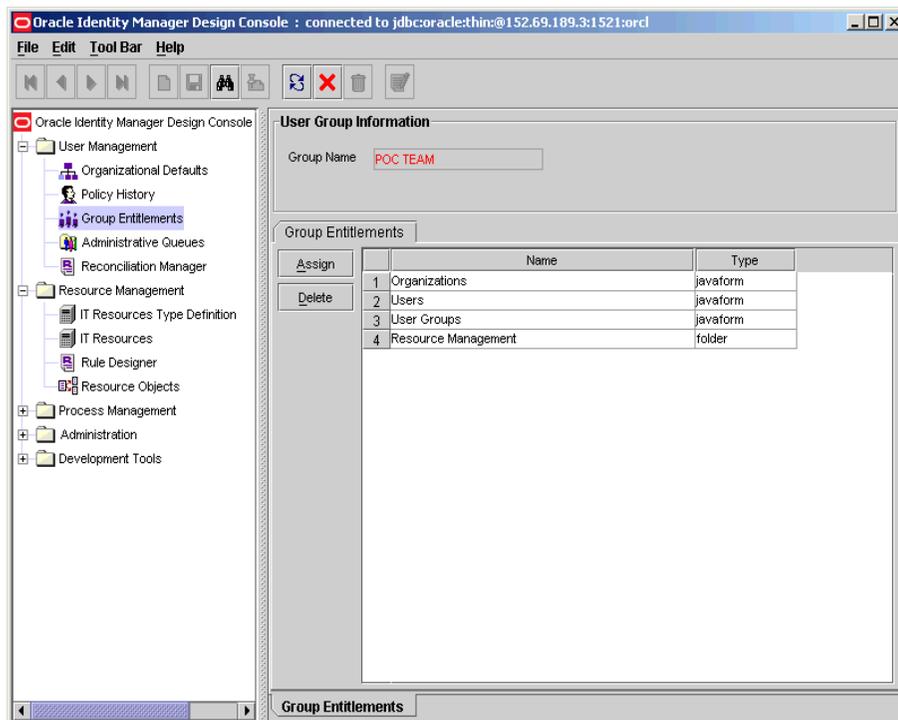
## 4.4 グループ権限の割当て

「Group Entitlements」フォームは「User Management」フォルダに表示されます。これは、フォームの作成と移動、およびユーザー・グループのメンバーがエクスプローラを使用してアクセスできるフォームおよびフォルダの指定を行うために使用します。

「Group Entitlements」フォームを使用して、ユーザー・グループに対するフォームおよびフォルダを指定するには、次のようにします。

1. エクスプローラで、「Group Entitlements」をダブルクリックします。  
「User Group Information」ページが表示されます。
2. 「Group Name」フィールドに、ユーザー・グループの名前を入力します。
3. 「Assign」をクリックします。  
User Form の「Assignment」参照表が表示されます。
4. 参照表から、このユーザー・グループに対するユーザー・フォームを選択します。  
矢印ボタンを使用して、「Assigned Forms」リストに対する追加や削除を行います。
5. 「OK」をクリックします。

次に示すように、「User Group Information」ダイアログ・ボックスが表示されます。



新しく追加したユーザー・フォームは「Group Entitlements」表に一覧表示されます。「Group Entitlements」表には、選択できるすべてのユーザー・グループが表示されます。この表には、ユーザー・フォームの名前とタイプが表示されます。「Group Entitlements」表には、javaform と folder の 2 つのタイプがあります。javaform は、Java ベースのグラフィカル・インタフェースです。folder には、1 つ以上の javaform が含まれています。

#### 4.4.1 用意されているグループ

Oracle Identity Manager には、4 つのデフォルトのユーザー・グループ定義があります。

- System Administrators
- Operators
- All Users
- Self Operators

これらのユーザー・グループに関連付けられた権限は変更できます。他のユーザー・グループを作成することもできます。

##### 4.4.1.1 「System Administrators」ユーザー・グループ

「System Administrators」ユーザー・グループのメンバーは、Oracle Identity Manager でレコード（システム・レコード以外）を作成、編集および削除できる完全な権限を持っています。

##### 4.4.1.2 「Operators」ユーザー・グループ

「Operators」ユーザー・グループのメンバーは、「Organizational Defaults」フォームや「Policy History」フォームを表示したり、制限された機能をこれらのフォームで実行できます。

#### 4.4.1.3 「All Users」 ユーザー・グループ

「All Users」 ユーザー・グループのメンバーは、最小の権限を持ちます。これらの権限には、自身のユーザー・レコードへのアクセスが含まれます（ただし、これらに限定されない）。各ユーザーは、自動的に「All Users」 ユーザー・グループに所属します。

「All Users」 グループからユーザーを削除することはできません。

#### 4.4.1.4 「Self Operators」 グループ

「Self Operators」 ユーザー・グループは、デフォルトで Oracle Identity Manager に追加されません。このユーザー・グループには、XELSELFREG という 1 人のユーザーが含まれます。このユーザーは、Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソールで自動登録操作を行う際、ユーザーが持つ権限の変更を担当します。

---

**注意：**「Self Operators」 ユーザー・グループに関連付けられている権限の変更や、このグループへのユーザーの割当ては行わないでください。

---

## 4.5 「Administrative Queues」 フォーム

プロビジョニング・リクエストを管理するためのユーザーのグループは、キューと呼ばれるエンティティを使用して割り当てます。キューは、グループ定義の集合です。キューは、他のキュー内にネストできます。

管理キューを使用すると、リクエストの効率と管理性が向上します。リクエストに割り当てたキューは、他のリクエストで再利用できます。

リクエストでは、キュー内の各グループに対して異なった管理権限を指定できます。たとえば、3つのユーザー・グループを持つキューをリクエストに割り当てる場合を考えます。3つのグループのメンバーは、リクエストに対して異なった管理権限を持つことができます。1番目のユーザー・グループは、リクエストの読取り、変更および削除を許可されています。2番目のユーザー・グループは、リクエストの読取りおよび変更を許可されます。3番目のユーザー・グループは、リクエストの読取りおよび削除を許可されます。

---

**注意：** Design Console の「Administrative Queues」 フォームは非推奨です。このフォームは Design Console で引き続き表示できますが、管理キュー機能にアクセスするには Oracle Identity Manager API を使用する必要があります。

詳細は、『Oracle Identity Manager API 使用法ガイド』を参照してください。

---

## 4.6 「Reconciliation Manager」 フォーム

このフォームは「User Management」フォルダにあります。このフォームを使用すると、ターゲット・リソースおよび信頼できるソースから受け取ったリコンシリエーション・イベントの情報の表示、分析、修正、リンクおよび管理ができます。指名されたユーザーは、リコンシリエーション・イベントの情報を、手動で分析およびリンクすることができます。分析やリンクを、定義したアクション・ルールに基づいて Oracle Identity Manager が自動実行することもできます。そのルールは、イベントが既存のレコードに関連付けられているかどうか、新規アカウントを表しているかどうか、またはイベントの情報のリンクを手動で開始できるかどうかに基づいています。

ユーザーにより定義されるリコンシリエーション・クラスは、ターゲット・リソースおよび信頼できるソースを定期的にポーリングします。これらのシステムに関する変更はすべて、リコンシリエーション・マネージャに書き込まれたリコンシリエーション・イベントを生成します。Oracle Identity Manager は、関連するプロビジョニング・プロセスで定義されたマッピングに従ってイベント情報を分析します。

図 4-3 に「Reconciliation Manager」 フォームを示します。

図 4-3 「Reconciliation Manager」 フォーム

**注意：** Design Console の「Task Scheduler」フォームを使用すると、スケジュールを定義し、リコンシリエーション・クラスの実行頻度を制御するタイミング・パラメータを設定したり、サード・パーティのスケジューリング・ツールを使用してポーリング頻度を設定できます。

「Reconciliation Manager」 フォームの機能は次のとおりです。

- イベントの情報が既存のユーザーまたは組織のレコードに関連付けられている場合、このフォームを使用して、イベントのデータを手動でレコードにリンクすることができます。ユーザーまたは組織に自動的に関連付けられた情報を確認することもできます。
- イベントが、信頼できるソース上での新規従業員の作成（ユーザー検出）、または既存の従業員に対する新規リソースのプロビジョニング（アカウント検出）である場合、このフォームを使用して、新しいデータで Oracle Identity Manager を手動で更新できます。ユーザーに自動的に関連付けられた情報を確認することもできます。信頼できるソースの場合、イベントのデータは新規ユーザー・アカウントを作成するために使用されます。ターゲット・リソースの場合、イベントのデータは、関連するリソース固有のプロセス・フォームにデータを移入するために使用されます。
- イベントが、信頼できるソース上での新規組織の作成（組織検出）、または既存の組織に対する新規リソースのプロビジョニング（アカウント検出）である場合、このフォームを使用して、新しいデータで Oracle Identity Manager を手動で更新できます。このフォームを使用して、組織に自動的に関連付けられた情報を確認することもできます。
- イベントが、ターゲット・システムまたは信頼できるソース上のアカウントの削除である場合、このフォームを使用して、Oracle Identity Manager に特定のアカウントの削除や、自動的に削除されたアカウントの確認を指示できます。信頼できるソースの場合、ターゲット・システムまたは信頼できるソースのアカウントを削除すると、ユーザーの Oracle Identity Manager アカウントが削除され、ターゲット・リソースでそのユーザーに対するプロビジョニングの際に使用されたすべてのアカウントが失効します。ターゲット・リソースの場合、Oracle Identity Manager は、ユーザー・アカウントの失効について通知を受けます。

表 4-3 に示すように、「Reconciliation Manager」 フォームの上部には次のフィールドがあります。

表 4-3 「Reconciliation Manager」 フォームのフィールド

フィールド名	説明
Event ID	リコンシリエーション・イベントの数値 ID。
Delete Event（「Yes」または「No」フラグ）	<p>対応するレコードがターゲット・リソースまたは信頼されたソースから削除されているかどうかを示します。「Yes」は削除イベントを示します。</p> <p>このイベントがターゲット・リソース上のユーザー・アカウントに関連付けられている場合、アカウントには失効済のマークが付けられます。イベントがユーザー・アカウントに関連付けられると、アカウントは削除されます。</p> <p><b>注意：</b>このフィールドは Oracle Identity Manager により設定されます。</p>
Object Name	このリコンシリエーション・イベントに関連付けられているターゲット・リソースまたは信頼できるソース。信頼できるソースの場合、これはユーザーです。
For User/For Organization	リソース・オブジェクトのイベントがユーザーのレコードに関連付けられているか、組織のレコードに関連付けられているかを示します。

表 4-3 「Reconciliation Manager」 フォームのフィールド（続き）

フィールド名	説明
Status	<p>リコンシリエーション・イベントの現在のステータス。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> <b>Event Received:</b> ターゲット・リソースまたは信頼できるソースから変更を受け取ったこと、たとえば <code>CreateReconciliationEvent</code> メソッドがコールされたことを示します。イベントは、ターゲット・リソースまたは信頼できるソースから実際のデータを受け取っていません。 </li> <li> <b>Data Received:</b> ターゲット・リソースまたは信頼できるソースから情報を受け取ったデータ。 </li> <li> <b>Users Matched:</b> イベントは、リコンシリエーション・ユーザー一致ルールに基づいて、1つ以上のユーザー・レコードに一致します。            ユーザーの信頼できるソースのリコンシリエーションを構成する場合は、OIM ユーザーの「<b>User ID</b>」フィールドがリコンシリエーション一致ルールで使用されていることを確認する必要があります。 </li> <li> <b>Organizations Matched:</b> イベントは、リコンシリエーション組織一致ルールに基づいて、1つ以上の組織レコードに一致します。            組織の信頼できるソースのリコンシリエーションを構成する場合は、OIM ユーザーの「<b>Organization Name</b>」フィールドがリコンシリエーション一致ルールで使用されていることを確認する必要があります。 </li> <li> <b>Processes Matched:</b> イベントは、1つ以上のプロビジョニング・プロセスに一致します。たとえば、イベントにあるキー・フィールドのすべての値が、プロセスのフォームにあるそれらのフィールドの値に一致します。 </li> <li> <b>No Match Found:</b> プロビジョニング・プロセス・フォームのキー・フィールドの値も、いずれのユーザーまたは組織の一致ルールも、イベントに一致しません。ユーザーまたは組織のレコードに関連付けられたイベントがありません。 </li> <li> <b>Rules Reapplied:</b> 「<b>Reapply Matching Rules</b>」 ボタンがクリックされ（前回の一致は削除された可能性があります）、このリソースに関連付けられているすべての最新版の一致ルールのロジックが適用されました。 </li> <li> <b>Event Linked:</b> イベントが、特定のユーザーまたは組織レコードに一致し、リンクされました。 </li> <li> <b>Event Closed:</b> ユーザーが「<b>Close Event</b>」 ボタンをクリックして手動でイベントを閉じました。イベントのデータは <b>Oracle Identity Manager</b> のレコードにリンクされていません。一度閉じたリコンシリエーション・イベントを再び開くことはできません。 </li> <li> <b>Required Data Missing:</b> 1つ以上の必須データ要素がありません。リソース定義上のいずれかの必須フィールドのデータがイベントで使用できない場合に、このメッセージが表示されます。 </li> </ul>
Event Date	このイベントを受け取った日付と時刻。
Assigned to User	このイベントが割り当てられているユーザー。
Assigned to Group	このイベントが割り当てられているユーザー・グループ。
Linked To（領域）	このセクションには、「 <b>User Login</b> 」、「 <b>Organization Name</b> 」、「 <b>Process Instance Key</b> 」および「 <b>Process Descriptive Data</b> 」の各フィールドがあります。
User Login	イベントがリンクされているユーザー・レコードの <b>Oracle Identity Manager ID</b> 。
Organization Name	イベントがリンクされている組織レコードの <b>Oracle Identity Manager ID</b> 。 信頼できるソースを持つ組織検出を実行する場合は、ユーザー検出の前に実行することをお勧めします。 <b>Oracle Identity Manager</b> のすべてのユーザー・レコードは、組織レコードに関連付けられている必要があります。

表 4-3 「Reconciliation Manager」 フォームのフィールド（続き）

フィールド名	説明
Process Instance Key	イベントにリンクされたプロビジョニング・プロセスの数値インスタンス。
Process Descriptive Data	「Process Definition」 フォームの Map Descriptive Field ウィンドウで定義されているプロビジョニング・プロセスの、インスタンス固有の記述データ。
Close Event	リコンシリエーション・イベントを終了します。イベントが終了している場合、それ以上の一致試行やリンクが行われることはありません。
Re-apply Matching Rules	リコンシリエーション一致ルールを再適用します。これには、プロセス・データと、リソース・オブジェクトが関連付けられているユーザー一致ルールまたは組織一致ルールの両方が含まれます。Oracle Identity Manager が十分な一致を生成していない場合、リソースのリコンシリエーション一致ルールを変更して再適用するか、プロビジョニング・プロセスのマッピングを変更できます。これらのルールを変更した後で再適用すると、異なるレコードが「Processes Matched」、「Matched Users」または「Matched Organizations」タブに表示されることがあります。リコンシリエーション・ルールは、プロビジョニング・プロセスの一致が生成されない場合にのみターゲット・リソースのリコンシリエーション・イベントに適用されます。これは、プロセスの一致の方が正確であるためです。
Create Organization (信頼できるソースに関連するイベントでのみ使用可能)	Oracle Identity Manager でリコンシリエーション・イベントの情報に基づいて組織レコードを作成します。このボタンは、リコンシリエーション・イベントが信頼できるソースでの新規組織の作成であることが確実なときのみクリックします。
Create User (信頼できるソースに関連するイベントでのみ使用可能)	Oracle Identity Manager でリコンシリエーション・イベントの情報に基づいてユーザー・レコードを作成します。このボタンは、リコンシリエーション・イベントが信頼できるソースでの新規ユーザーの作成であることが確実なときのみクリックします。

## 4.6.1 リコンシリエーション・イベントの表示と管理

リコンシリエーション・イベントを表示および管理するには、次の手順を実行します。

**注意：** リコンシリエーション・アクション・ルールの定義によって、信頼できるソースでの一致が 1 つのみの場合、または一致がない場合、Oracle Identity Manager はリコンシリエーション・イベントのデータをユーザー・レコードまたは組織レコードに自動的にリンクします。

- 「Reconciliation Manager」 フォームに移動します。
- 問合せ機能を使用して、リコンシリエーション・イベントの位置を確認します。  
**「Object Name」** フィールドに関連付けられているリソースや、**「Status」** フィールドのステータスを基準にして、リコンシリエーション・イベントを問い合わせることもできます。  
 問合せ対象が削除済イベントの場合、つまり、対応するレコードがターゲット・リソースまたは信頼できるソースから削除されている場合、**「Delete Event」** は **「Yes」** に設定されています。それ以外の場合は **「No」** に設定されています。
- 目的のリコンシリエーション・イベントの位置を確認したら、このフォームのタブを使用して、次の操作を行うことができます。
  - 未処理データの修正
  - 一致するプロビジョニング・プロセス・フォーム・インスタンス、またはユーザー・レコードや組織レコードの候補の参照やリンク
  - イベントの監査履歴の表示

各タブの情報については、「Reconciliation Manager」フォームのタブに関する項で説明します。Oracle Identity Manager が生成する一致を評価する際は、次のことができます。

- **特定のプロビジョニング・プロセス、ユーザーまたは組織へのリコンシリエーション・イベントのリンク**：イベントは既存のユーザー・レコードまたは組織レコードに関連付けられていることが前提となっています。  
この操作を実行するには、該当するタブの「**Link**」をクリックします。検出された一致が1つのみの場合に Oracle Identity Manager が自動的にデータをリンクするようにルールを定義している場合もあります。
- **信頼されたソースとのユーザー・ベースのリコンシリエーションの場合**：イベントが、信頼できるソースでの新規ユーザーの作成であれば、Oracle Identity Manager で新規ユーザーを作成します。  
この操作を実行するには、「**Create User**」をクリックします。または、一致が検出されなかった場合に、Oracle Identity Manager が自動的にユーザーを作成するようにアクション・ルールを定義することもできます。
- **信頼されたソースとの組織ベースのリコンシリエーションの場合**：イベントが、信頼できるソースでの新規組織の作成であれば、Oracle Identity Manager で新規組織を作成します。  
この操作を実行するには、「**Create Organization**」をクリックします。または、一致が検出されなかった場合に、Oracle Identity Manager が自動的に組織を作成するようにアクション・ルールを定義することもできます。
- **リコンシリエーション・ルールの精度を上げる**：このリソースに関連付けられたルールです。ルールを再適用して、より正確な一致を生成します。  
この操作を実行するには、適用できるリコンシリエーション・ルールの精度を上げ、保存してから、「**Re-apply Matching Rules**」をクリックします。

---

**注意**：リコンシリエーション・ルールの精度を上げて再適用するか、ユーザー、プロビジョニング・プロセスまたは組織を作成またはリンクすると、これらのアクションは「**Reconciliation Event History**」タブに記録されます。リコンシリエーション・イベントで実行されたアクションのログを表示するには、「**Reconciliation Event History**」タブをクリックします。

---

## 4.6.2 「Reconciliation Manager」 フォームのタブ

調べるリコンシリエーション・イベントが見つかったら、タブを使用して次の操作を実行できます。

- イベントでの処理済または未処理のデータの表示
- 一致するプロビジョニング・プロセス、ユーザーまたは生成された組織の表示
- 適切なレコードへのイベントのリンク、または新規ユーザーの作成

### 4.6.2.1 「Reconciliation Data」 タブ

このタブのデータは、「Processed Data」と「Unprocessed Data」の2つのブランチのいずれかの下に表示されます。

#### 4.6.2.1.1 Processed Data

「Processed Data」ブランチのフィールドは、関連付けられているリソースの「Reconciliation Fields」タブ上で定義されます。リコンシリエーション・イベントで、これらのフィールドは正常に処理されています。たとえば、データ型要件に違反していません。正常に処理された各フィールドには、次の内容が表示されます。

- 「Reconciliation Fields」タブで定義されている、関連付けられたリソースのフィールド名（たとえば、field1）。

- リコンサイルされたフィールドに関連付けられているデータ型（たとえば、string）。可能な値は、Multi-Valued、String、Number、Date、IT resource です。
- リコンシリエーション・イベントで受け取ったフィールドの値（たとえば、Newark）。これはリコンシリエーション・イベントを開始したターゲット・リソースまたは信頼できるソース上で変更されたいくつかの値の1つである可能性があります。

処理済データ・フィールドは、次のようになります。

Location [String] = Newark

---

**注意：** データ型が Multi-Value のフィールドの場合（信頼できるソースでなく、ターゲット・リソースでのみ可能）、値を持ちません。ただし、コンポーネント・フィールド（サブブランチに含まれる）に、それぞれ独自の値を持ちます。

---

#### 4.6.2.1.2 Unprocessed Data

「Unprocessed Data」 ブランチにリストされたフィールドは、処理できなかったリコンシリエーション・イベントです。これらはたとえば、定義されていない項目や、関連付けられているリソースの「Reconciliation Fields」 タブで設定されているデータ型と矛盾する項目などです。各未処理フィールドについて、次の情報が表示されます。

- フィールドの名前、たとえば、`user_securityid`。
- リコンシリエーション・イベントで受け取ったフィールドの値（たとえば、`capital`）。これはリコンシリエーション・イベントを開始したターゲット・リソースまたは信頼できるソース上で変更されたいくつかの値の1つである可能性があります。
- ターゲット・システムから受け取ったデータを自動処理できなかった理由（たとえば、`<Not Numeric>`）。次のコードの1つが、未処理フィールドの横に表示されます。

エラー・コード	発生の理由
NOT MULTI-VALUED ATTRIBUTE	フィールド値が複数值属性です。それ自身が複数值であるフィールドではなく、複数值属性のコンポーネント・フィールドだけが値を受け取れます。
NOT NUMERIC	数値フィールドの値が数値ではありません。
DATE PARSE FAILED	日付フィールドの値を有効な日付として認識できません。
SERVER NOT FOUND	タイプ IT Resource のフィールドの値が、既存の IT リソース・インスタンスの名前として認識されませんでした。
FIELD NOT FOUND	イベントのフィールドの名前がリソースで定義されていません。
PARENT DATA LINK MISSING	親データ・フィールド（データ型は Multi-Value）がリコンシリエーション・フィールドにリンクされていません。そのため、このコンポーネント・フィールドを子リコンシリエーション・フィールドにリンクできませんでした。
FIELD LINKAGE MISSING	対応するリコンシリエーション・フィールドが、関連付けられているリソースの「Reconciliation Fields」 タブで定義されていません。
ATTRIBUTE LINKAGE MISSING	データ型が Multi-Value のフィールドにのみ適用されます。複数值フィールドのコンポーネント（子）フィールドの中に、データがリコンシリエーション・フィールドにリンクされていないものがあります。
TABLE ATTRIBUTE LINKAGE MISSING	データ型が Multi-Value のフィールドにのみ適用されます。データ型が MultiValued Attribute であるコンポーネント（子）フィールドの中に、データ型が MultiValued Attribute であるリコンシリエーション・フィールドにリンクされていないものがあります。

- 未処理フィールドがリソース・フィールドに正常にマップされている場合は、このイベント・フィールドがマップされているリソース・フィールドの名前。

未処理データ・フィールドは、次のようになります。

```
user_securityid = capital <Not Numeric>
```

---

**注意：** Oracle Identity Manager は、関連付けられているリソースの「Reconciliation Fields」タブで必須フィールドと設定されているすべてのフィールドが正常に処理されるまで、ターゲット・リソースのプロセス、または信頼できるソースのユーザーや組織の一致を行いません。

---

#### 4.6.2.1.3 未処理フィールドのマッピングまたは修正

リコンシリエーション・イベントの未処理フィールドを修正したり、該当するリソースで定義されるとおりに、関連フィールドにマップするには、次の手順を使用します。

未処理フィールドをマップまたは修正するには、次の手順を実行します。

1. 未処理フィールドをダブルクリックします。

複数値フィールドの場合、適切な子プロセス・フォームにマップするか、個別のコンポーネント・フィールドを選択する必要があります。

複数値フィールドの場合、コンポーネント・フィールドをダブルクリックして修正します。

「Edit Reconciliation Field Data」ダイアログ・ボックスが表示されます。

---

**注意：** 未処理の複数値コンポーネント・フィールドを、関連付けられているリソースの「Reconciliation Fields」タブで定義されている複数値フィールドのいずれかにマップするには、「Linked to」フィールドをダブルクリックし、目的のフィールドを選択して、「OK」をクリックします。「Save」をクリックして「Edit Reconciliation Field Data」ダイアログ・ボックスを閉じます。

---

2. 未処理フィールドを、関連付けられているリソースの「Reconciliation Fields」タブで定義されているフィールドのいずれかにマップするには、「Linked to」フィールドをダブルクリックし、目的のフィールドを選択して「OK」をクリックします。続いて「Save」をクリックして「Edit Reconciliation Field Data」ダイアログ・ボックスを閉じます。

未処理フィールドの値を変更するには、正しい値を「Corrected Value」フィールドに入力し、「Save」をクリックして、「Edit Reconciliation Field Data」ダイアログ・ボックスを閉じます。

フィールドのデータが正常に処理されると、「Unprocessed Data」ブランチのエントリはリンク先のフィールドを反映して更新されます。そのフィールドの新しいエントリが、「Processed Data」ブランチに追加されます。

リコンシリエーション・イベントの必須データ要素（該当するリソース定義の「Object Reconciliation」タブ）に「Reconciliation Data」タブで処理済のマークが付けられると、Oracle Identity Manager には次のように表示されます。

- 信頼できるソースの場合

該当するユーザーまたは組織に一致する、リソースに関連付けられているリコンシリエーション・ルール・ロジックで指定されているリコンシリエーション・イベントの関連データに一致するすべてのユーザー・レコードまたは組織レコード。これらのレコードは、ソース所有者の可能性のあるユーザーがユーザー一致ルールの適用に基づいて Oracle Identity Manager に検出された（ユーザー更新）、信頼できるソース上のアカウントを表します。一致するユーザーが検出されなかった場合、リコンシリエーション・イベントは、信頼できるソースでの新規ユーザー・アカウントの作成（つまりユーザー作成）を表します。

- ターゲット・リソースの場合

すべてのキー・フィールドの値（該当するプロセス定義の「Reconciliation Field Mappings」タブで設定された値）がリコンシリエーション・イベントのすべてのキー・フィールドの値に一致するような、すべてのプロビジョニング・プロセス・フォーム・インスタンス。これは、一致している可能性があるアカウントが Oracle Identity Manager に検出された（アカウント更新）ターゲット・システム上のアカウントを表します。

これらの値に一致するプロセス・インスタンスがない場合、Oracle Identity Manager は該当するユーザー一致または組織一致のリコンシリエーション・ルールを評価し、リコンシリエーション・イベントのデータと一致するユーザーまたは組織を表示します。これらの一致は、一致するアカウント・レコードが、リコンシリエーション・エンジンにより Oracle Identity Manager に検出されなかったターゲット・システム上のアカウントを表します。Oracle Identity Manager は、ユーザーに対してそのシステムのアカウントがプロビジョニングされていることを認識していないが、そのアカウントの所有者になる可能性のあるユーザーを検出しました（アカウント作成）。複数の一致レコードが検出された場合、管理者はレコードを調査し、どの Oracle Identity Manager アカウントとリンクするかを決定する必要があります。一致が検出されない場合、信頼できるソースとターゲット・アプリケーションのデータが一致していない場合があります。このイベントは、ターゲット・システムのログ・アカウントを示しているか、既存の従業員に対してターゲット・システム上で新規アカウントがプロビジョニングされたことを示している可能性があります。ただし、Oracle Identity Manager はそのアカウントがどのユーザーに関連付けられているか判断できません。

#### 4.6.2.2 プロセス一致ツリー（ターゲット・リソースのみ）

関連付けられているリソースの「Reconciliation Fields」タブで定義されているすべての必須フィールドが処理されると、タブには、すべてのキー・フィールドの値がリコンシリエーション・イベントのすべてのキー・フィールドの値に一致する、すべてのプロビジョニング・プロセス・フォーム・インスタンスが表示されます。

---

**注意：**これが発生するのは、ターゲット・リソースに関連付けられているリコンシリエーション・イベントのみです。信頼できるソースはユーザー・リソースまたは組織およびそのプロビジョニング・プロセスに関連付けられているため、カスタムのプロセス・フォームを持つことはできません。結果として、このタブにデータを移入するために必要な一致を所有することができません。信頼できるソースの場合、すべての必須フィールドが処理された後、Oracle Identity Manager はユーザー一致または組織一致のルールを評価します。

---

一致したプロビジョニング・プロセスには、次の内容が表示されます。

- リコンシリエーション・イベントのキー・フィールドの値に一致しているプロセス・フォーム・インスタンスに関連付けられているプロビジョニング・プロセスの名前（たとえば、windows2000\_prov）。
- 個別のプロセス・インスタンスの数値 ID（たとえば、445）。
- このプロセス・インスタンスに関連付けられているユーザー ID（たとえば、jdoe）または組織名（たとえば、Finance）。これは、プロビジョニング・プロセスのそのインスタンスによってリソースにプロビジョニングされたユーザーです。

一致したプロビジョニング・プロセスは、次のようになります。

Windows2000\_prov [445] for User=jdoe

このタブにリストされるプロビジョニング・プロセスがない場合、リコンシリエーション・イベントのキー・フィールドの値を、そのリソースに関連付けられたプロセス・フォーム・インスタンスのフィールドの値に一致させることができなかったことを意味します。この場合、Oracle Identity Manager は、リソースに対して定義されている、いずれかのユーザー一致または組織一致のルールを適用します。一致が検出されると、「Matched Users」または「Matched Organizations」タブに表示されます。

#### 4.6.2.2.1 プロビジョニング・プロセス・インスタンスのリコンシリエーション・イベントへのリンク

プロビジョニング・プロセス・インスタンスをリコンシリエーション・イベントにリンクするには、次の手順を実行します。

1. リコンシリエーション・イベントにリンクするプロビジョニング・プロセス・インスタンスを決定したら、そのプロセス・インスタンスを選択して、「**Establish Link**」をクリックします。
2. Oracle Identity Manager により、関連するプロビジョニング・プロセスで定義されたマッピングに従ってリコンシリエーション・イベントの情報が含まれている、関連のプロセス・フォーム・インスタンスが更新されます。また、そのプロセスの「**Reconciliation Update Received**」タスクも挿入されます。

#### 4.6.2.3 「Matched Users」タブ

このタブには、リソースのリコンシリエーション・ルールの基準で指定されたとおりに、リコンシリエーション・イベントの関連データに一致するユーザー・レコードが表示されます。

信頼できるソースの場合、Oracle Identity Manager はこれらのルールを評価し、すべての必須フィールド（関連付けられているリソースの「**Reconciliation Fields**」タブで定義）の処理が完了すると、一致しているユーザー・レコードをすべて表示します。

ターゲット・リソースの場合、Oracle Identity Manager はルールを評価し、すべての必須フィールド（関連付けられているリソースの「**Reconciliation Fields**」タブで定義）が処理され、一致が「**Processes Matched Tree**」タブに生成されていない場合にかぎり、一致しているユーザー・レコードをすべて表示します。

Design Console は、一致している各レコードのユーザー ID、名および姓を表示します。

---

**注意：**一致しているレコードが「**Processes Matched Tree**」タブにある場合、「**Matched Users**」タブにはレコードが表示されません。プロセスの一致の方が正確である可能性があります。

---

#### 4.6.2.3.1 ユーザー・レコードのリコンシリエーション・イベントへのリンク

リコンシリエーション・イベントにユーザー・レコードをリンクするには、次の手順を実行します。

---

**注意：**次の手順を実行するには、レコードが存在する必要があります。信頼できるソースでは、リコンシリエーション・イベントが信頼できるソースでの新規ユーザーの作成であると判断した場合に、「**Create User**」をクリックします。これにより、リコンシリエーション・イベントの情報を使用して新規ユーザー・レコードが作成されます。

---

1. リコンシリエーション・イベントにリンクするユーザーを決定し、そのユーザーを選択して「**Link**」をクリックします。
2. 「**Link**」をクリックして、リコンシリエーション・イベントの対象がターゲット・リソースである場合、Oracle Identity Manager は次の操作を実行します。
  - 選択されたユーザーに対応するリソースのプロビジョニング・プロセスのインスタンスを作成し、プロセスのタスクに関連付けられているすべてのアダプタを非表示にし、プロセスを完了し、「**Reconciliation Insert Received**」タスクを挿入します。
  - プロビジョニング・プロセスで定義されたマッピングに従って、リコンシリエーション・イベントのデータを使用して、リソースのプロセス・フォームのインスタンスを作成します。

「**Link**」をクリックして、リコンシリエーション・イベントの対象が信頼できるソースである場合、Oracle Identity Manager は次の操作を実行します。

- ユーザー・プロビジョニング・プロセスで定義されたマッピングに従って、リコンシリエーション・イベントのデータを使用してユーザー・レコードを更新します。
- リコンシリエーション・イベントがリンクされているユーザー・レコードに対するユーザー・プロビジョニング・プロセスのインスタンスに「**Reconciliation Insert Received**」を挿入します。

#### 4.6.2.4 Matched Organizations

このタブには、リソースのリコンシリエーション・ルールで指定されたとおりに、リコンシリエーション・イベントのデータに一致する Oracle Identity Manager 組織レコードが表示されます。

信頼できるソースの場合、Oracle Identity Manager はこれらのルールを評価し、すべての必須フィールド（関連付けられているリソースの「Reconciliation Fields」タブで定義）の処理が完了すると、一致している組織レコードをすべて表示します。

ターゲット・リソースの場合、Oracle Identity Manager はルールを評価し、すべての必須フィールド（関連付けられているリソースの「Reconciliation Fields」タブで定義）が処理され、一致が「Processes Matched Tree」タブに生成されていない場合にかぎり、一致している組織レコードをすべて表示します。

Oracle Identity Manager は、一致している各レコードのユーザー ID、名および姓を表示します。

---

**注意：**一致しているレコードが「Processes Matched Tree」タブにある場合、「Matched Organizations」タブにはレコードが表示されません。これは、プロセス一致の方が正確である可能性が高いためです。

---

##### 4.6.2.4.1 組織レコードのリコンシリエーション・イベントへのリンク

リコンシリエーション・イベントに組織レコードをリンクするには、次の手順を実行します。

---

**注意：**次の手順では、レコードがあらかじめ存在するものと想定しています。信頼できるソースでは、リコンシリエーション・イベントが信頼できるソースでの新規組織の作成であると判断した場合に、「**Create Organization**」をクリックします。これにより、リコンシリエーション・イベントの情報を使用して新規組織レコードが作成されます。

---

1. リコンシリエーション・イベントにリンクする組織を決定したら、イベントを選択して、「**Link**」をクリックします。
2. リコンシリエーション・イベントの対象がターゲット・リソースである場合、Oracle Identity Manager は次の操作を実行します。
  - 選択された組織に対応するリソースのプロビジョニング・プロセスのインスタンスを作成し、プロセスのタスクに関連付けられているすべてのアダプタを非表示にし、プロセスを完了し、「**Reconciliation Insert Received**」タスクを挿入します。
  - プロビジョニング・プロセスで定義されたマッピングに従って、リコンシリエーション・イベントのデータを使用して、リソースのプロセス・フォームのインスタンスを作成します。

リコンシリエーション・イベントの対象が信頼できるソースである場合、Oracle Identity Manager は次の操作を実行します。

- Oracle Identity Manager の組織プロビジョニング・プロセスで定義されたマッピングに従って、リコンシリエーション・イベントのデータを使用して組織レコードを更新します。

- リコンシリエーション・イベントがリンクされている組織レコードに対する Oracle Identity Manager プロビジョニング・プロセスの既存インスタンスに「**Reconciliation Insert Received**」タスクを挿入します。

#### 4.6.2.5 Reconciliation Event History

「Reconciliation Event History」タブには、このリコンシリエーション・イベントで実行されたアクションの履歴が表示されます。各アクションについて、アクションが実行された日付と時刻が表示されます。Oracle Identity Manager により、次のリコンシリエーション・イベントが追跡および記録されます。

- **Event Received:** このアクションは、Oracle Identity Manager がリコンシリエーション・イベントを受け取ったときに記録されます。
- **Data Sorted:** このアクションは、リコンシリエーション・イベントのデータが処理フィールドおよび未処理フィールドにソートされたときに記録されます。
- **Rules Reapplied:** このアクションは、ユーザーが「**Re-apply Matching Rules**」ボタンをクリックしたときに記録されます。
- **Processes Matched:** このアクションは、1 つ以上のプロセスフォーム・インスタンスおよび関連付けられているプロビジョニング・プロセスが、リコンシリエーション・イベントのキー・フィールドの値に一致したときに記録されます。
- **Users Matched:** このアクションは、1 件以上のユーザー・レコードが、ユーザー一致のリコンシリエーション・ルールを使用してリコンシリエーション・イベントのデータと一致したときに記録されます。
- **Organization Matched:** このアクションは、1 件以上の Oracle Identity Manager 組織レコードが、組織一致のリコンシリエーション・ルールを使用してリコンシリエーション・イベントのデータと一致したときに記録されます。
- **Linked to User:** このアクションは、リコンシリエーション・イベントのデータが特定のユーザーにリンクされたときに記録されます。
- **Linked to Organization:** このアクションは、リコンシリエーション・イベントのデータが特定の組織にリンクされたときに記録されます。

# 5

---

---

## リソース管理

この章では、Design Console のリソース管理について説明します。内容は次のとおりです。

- リソース管理の概要
- 「IT Resources Type Definition」 フォーム
- 「IT Resources」 フォーム
- 「Rule Designer」 フォーム
- 「Resource Objects」 フォーム
- サービス・アカウントの管理

## 5.1 リソース管理の概要

「Resource Management」フォルダには、Oracle Identity Manager のリソースを管理するツールがあります。このフォルダには次のフォームがあります。

- **IT Resources Type Definition:** このフォームは、「IT Resources」フォームに参照値として表示されるリソース・タイプを作成するために使用します。
- **IT Resources:** このフォームは、IT リソースの定義と管理のために使用します。
- **Rule Designer:** このフォームは、パスワード・ポリシー選択、自動グループ・メンバーシップ、プロビジョニング・プロセス選択、タスク割当て、およびアダプタへの事前移入に適用できるルールを作成するために使用します。
- **Resource Objects:** このフォームは、リソース・オブジェクトを作成および管理するために使用します。これらのオブジェクトは、ユーザーおよび組織に対して使用できるようにするリソースを表します。

**関連項目:** アダプタおよびアダプタ・タスクの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』を参照してください。

## 5.2 「IT Resources Type Definition」 フォーム

「IT Resources Type Definition」フォームは「Resource Management」フォルダにあります。「IT Resources Type Definition」フォームは、IT リソース・タイプ（たとえば、AD、Microsoft Exchange、Solaris）を分類するために使用します。Oracle Identity Manager は、ユーザーと組織に対してプロビジョニングされるリソース・オブジェクトにリソース・タイプを関連付けます。

このフォームで定義された IT リソース・タイプは、リソースを定義する際に選択できます。タイプは「IT Resources」フォームの「Type」フィールドに表示されます。

IT リソース・タイプは、それを参照する IT リソース定義のテンプレートです。IT リソース定義が IT リソース・タイプを参照する場合、リソースは IT リソース・タイプのパラメータと値をすべて継承します。IT リソース・タイプは、一般的な IT の分類です（たとえば、Solaris）。リソースは、このタイプのインスタンス（たとえば、Solaris for Statewide Investments）となります。

すべての IT リソース定義を IT リソース・タイプに関連付ける必要があります。

図 5-1 に、「IT Resources Type Definition」フォームを示します。

図 5-1 「IT Resources Type Definition」 フォーム

	Field Name	Default Field Value	Encrypted
1	Passwd	xelsysadm	<input checked="" type="checkbox"/>
2	Server Address	102.195.0.255	<input type="checkbox"/>
3	User Name	robert	<input type="checkbox"/>

表 5-1 に、「IT Resources Type Definition」フォームのフィールドの説明を示します。

表 5-1 「IT Resources Type Definition」フォームのフィールド

フィールド名	説明
Server Type	IT リソース・タイプの名前。
Insert Multiple	この IT リソース・タイプを複数の IT リソースによって参照できるかどうかを指定します。

**注意：** IT リソースが外部リソースにアクセスする必要がある場合に、ネットワークを使用してその外部リソースにアクセスできないときには、それをリモート・マネージャに関連付ける必要があります。詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』を参照してください。

## 5.2.1 IT リソースのテンプレート（リソース・タイプ）の定義

IT リソース・タイプを定義するには、次の手順を実行します。

1. IT リソース・タイプの名前を「**Server Type**」フィールドに、たとえば、「Solaris」と入力します。
2. IT リソース・タイプを複数の IT リソースで使用できるようにするには、「**Insert Multiple**」を選択します。
3. 「**Save**」をクリックします。

IT リソース・タイプが定義されました。これは、「IT Resources」フォームで IT リソースを定義するときに、「**Type**」フィールドから選択できます。

## 5.2.2 「IT Resource Type Definition」フォームのタブ

新規 IT リソース・タイプの基本情報を保存すると、問合せで IT リソース・タイプが返されたとき、「IT Resources Type Definition」フォーム下方の領域のタブにあるフィールドが有効になります。

「IT Resources Type Definition」フォームには次のタブがあります。

- 「IT Resource Type Parameter」タブ
- 「IT Resources」タブ

### 5.2.2.1 「IT Resource Type Parameter」タブ

図 5-1 に示すように、「IT Resource Type Parameter」タブは、その IT リソース・タイプのすべての接続パラメータにデフォルト値と暗号化設定を指定するために使用します。パスワードおよび暗号化されたフィールドにはデフォルト値を指定しないことをお勧めします。このタブのパラメータと値は、この IT リソース・タイプを参照するすべての IT リソースによって継承されます。

新規パラメータを定義する場合、パラメータとその値、および暗号化設定が、現在の IT リソース・タイプ、およびこの IT リソース・タイプを参照する新規または既存の IT リソース定義に追加されます。新規パラメータは、該当するリソース定義で、「IT Resources」フォームの「Parameters」タブに表示されます。

**注意：** これらのパラメータの値と暗号化設定は、各 IT リソース内でカスタマイズできます。

### IT リソース・タイプへのパラメータの追加

IT リソース・タイプにパラメータを追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Add」をクリックします。  
新しい行が「IT Resource Type Parameter」タブに表示されます。
2. 「Field Name」フィールドに、パラメータの名前を入力します。
3. 「Default Field Value」フィールドにデフォルト値を入力します。  
この値は、この IT リソース・タイプを参照するすべての IT リソースによって継承されます。
4. 「Encrypted」オプションを選択または選択解除します。  
このチェック・ボックスでは、このパラメータの値をマスクして、フォーム・フィールドにアスタリスク (\*) で表示するかどうかを指定します。  
パラメータの値をマスクするには、このチェック・ボックスを選択します。
5. 「Save」をクリックします。

### IT リソース・タイプからのパラメータの削除

IT リソース・タイプからパラメータを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するパラメータを選択します。
2. 「Delete」をクリックします。  
パラメータおよびそれに関連付けられた値は、IT リソース・タイプや、このタイプを参照する IT リソース定義から削除されます。

#### 5.2.2.2 「IT Resources」タブ

このタブには、選択された IT リソース・タイプを参照する IT リソースが表示されます。このタブのすべての IT リソースは同一のパラメータを共有しますが、値は各 IT リソースで一意であるようにできます。

### 5.2.3 「IT Resource Type Definition」表

「IT Resource Type Definition」表には、次の情報が表示されます。

フィールド名	説明
Server Type	「IT Resource Type Definition」フォームで定義された、リソース・アセット・タイプの名前。
Insert Multiple	この IT リソース定義のインスタンスを複数作成できるかどうかを指定します。

## 5.3 「IT Resources」 フォーム

「IT Resources」フォームは「Resource Management」フォルダにあります。このフォームは、IT リソースを設定するために使用します。通常、IT リソース定義は、1 つ以上のリソースが存在するサーバーやコンピュータなどのハードウェアを表します。各 IT リソース定義が IT リソース・タイプのインスタンスを表します。

プロビジョニング・イベントでは、リソース・オブジェクトが IT リソース定義を参照します。その定義は、リソースがある場所と接続方法を指定しています。リソース・オブジェクトは、IT リソース定義に関連付けられる必要があります。

Oracle Identity Manager アダプタの変数は、IT リソースの任意のパラメータの値にマップできます。パラメータは、たとえば、サーバー・ドメイン名や IT リソースにアクセスするユーザーの ID など、ハードウェアに関する情報を表します。

**関連項目：** アダプタおよびアダプタのマッピングの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』を参照してください。

表 5-2 に、「IT Resources」フォームのフィールドの説明を示します。

表 5-2 「IT Resources」フォームのフィールド

フィールド名	説明
Name	IT リソースの名前。
Type	「IT Resources Type Definition」フォームで定義された、IT リソースの分類タイプ。
Remote Manager	リモート・マネージャを使用して IT リソースにアクセスできる場合は、このフィールドにリモート・マネージャの名前が表示されます。そうでない場合は、このフィールドは空です。

### 5.3.1 IT リソースの定義

IT リソースを定義するには、次の手順を実行します。

1. 「Name」フィールドに IT リソースの名前を入力します。
2. 「Type」参照フィールドをダブルクリックして、「Lookup」ダイアログ・ボックスで IT リソース・タイプを選択し、この IT リソースに関連付けます。

「IT Resource Type definition」フォームを使用して IT リソース・タイプを定義します。

3. 「OK」をクリックします。
4. リモート・マネージャを使用して IT リソースにアクセスするには、「Remote Manager」参照フィールドをダブルクリックし、「Lookup」ダイアログ・ボックスでリモート・マネージャを選択します。

リモート・マネージャを使用して IT リソースにアクセスしない場合は、手順 6 に進みます。

5. 「OK」をクリックします。
6. 「Save」をクリックします。

保存された IT リソースは、関連付けられている IT リソース・タイプ用の「IT Resources Type Definition」フォームの「IT Resource」タブに表示されます。IT リソース分類タイプのパラメータとデフォルト値は「Parameters」タブに表示されます。

7. オプションとして、「Parameters」タブでパラメータに IT リソース固有の値を指定するには、変更するパラメータの「Value」フィールドを選択して新しい値を入力し、「Save」をクリックします。

## 5.3.2 IT リソース・インスタンス・パラメータへのアクセス権限の設定

「Administrators」タブで、管理グループのアクセス権限および IT リソース API のセキュリティ・レベルを指定します。

アクセス権限を設定するには、次の手順を実行します。

1. 「Administrators」タブをクリックします。

デフォルトで、この IT リソース・インスタンスに関連付けられている管理グループが表示されます。

2. 新規管理グループを追加するには「Assign」をクリックします。

たとえば、「ramone」IT リソース・インスタンスの管理グループとして「G2」を割り当てることができます。

3. 次の表に示された権限について、適切なチェック・ボックスを選択します。

権限	説明
Read	選択すると、「Group Name」に指定された管理グループは、現在の IT リソース・インスタンスの読取りが可能になります。
Write	選択すると、該当するグループ名は、現在の IT リソース・インスタンスのパラメータ値の読取りおよび変更が可能になります。
Delete	選択すると、関連付けられた管理グループは、現在の IT リソース・インスタンスを削除できます。

4. 「Save」をクリックします。

## 5.4 「Rule Designer」 フォーム

ルールとは、Oracle Identity Manager で条件を一致させたり、それに基づいて対処することを可能にする基準です。特定のリソース・オブジェクトまたはプロセスにルールを割り当てることも、すべてのリソース・オブジェクトまたはプロセスにルールを適用することもできます。

ルールの使用方法の例を次に示します。

- タイプが Application のリソース・オブジェクトに適用するパスワード・ポリシーを決定します。
- ユーザーをユーザー・グループに自動追加できるようにします。
- リソース・オブジェクトがリクエストに割り当てられた後で、そのリソース・オブジェクトに適用される承認およびプロビジョニング・プロセスを指定します。
- プロセス・タスクがどのようにユーザーに割り当てられるかを決定します。
- 指定されたフォーム・フィールドに対してどちらの事前移入アダプタが実行されるかを指定します。

**関連項目：**事前移入アダプタの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』を参照してください。

図 5-2 に示す「Rule Designer」フォームは「Resource Management」フォルダにあります。このフォームは、リソースとともに使用されるルールを作成および管理するために使用します。

図 5-2 「Rule Designer」 フォーム

The screenshot shows the 'Rule Designer' interface. At the top, the 'Rule Definition' section includes a 'Name' field with 'Rule for Solaris' and an 'Operator' section with 'AND' selected. Below this is the 'Type Information' section, where 'Type' is 'Process Determination', 'Sub-Type' is 'User Provisioning', 'Object' is 'Solaris 8', and 'Process' is 'Solaris 8'. A 'Description' field contains the text: 'This rule will check to see if Solaris can be provisioned to an Xellerate user.' At the bottom, the 'Rule Elements' section shows a tree view with 'Rule for Solaris' containing 'User Login == XELSYSADM' and 'Rule to Prevent Solaris Access', which in turn contains 'Object Name == Solaris'. Buttons for 'Add Element', 'Add Rule', and 'Delete' are visible on the left.

ルールには 4 つのタイプがあります。

**General:** Oracle Identity Manager が自動的にユーザー・グループにユーザーを追加したり、リソース・オブジェクトに割り当てるパスワード・ポリシーを決定したりできるようにします。

**Process Determination:** リクエストの承認プロセスや、リソース・オブジェクトの承認およびプロビジョニング・プロセスを決定します。

**Task Assignment:** ユーザーまたはプロセス・タスクに割り当てられるユーザー・グループを指定します。

**Repopulate:** フォーム・フィールドに対して実行される事前移入アダプタを決定します。

ルールには次の項目が含まれます。

**ルール要素:** 属性、演算子および値で構成されています。図 5-2 では、属性は User Login、演算子は ==、値は XELSYSADM です。

**ネストされたルール:** ロジック上の理由で、1 つのルールを別のルールの内部に配置する必要がある場合、内部ルールはネストされたルールと呼ばれます。図 5-2 では、**Rule to Prevent Solaris Access** が **Rule for Solaris** 内にネストされています。

**演算:** ルールに複数のルール要素またはネストされたルールが含まれる場合、演算がコンポーネント間の関係を示します。図 5-2 では、**AND** 演算を選択した場合、ルールに適合するには、User Login==XELSYSADM ルール要素と、ネストされたルール Rule to Prevent Solaris Access の両方が true になる必要があります。

表 5-3 に、「Rule Designer」 フォームのフィールドの説明を示します。

表 5-3 「Rule Designer」 フォームのフィールド

フィールド名	説明
Name	ルールの名前。
AND/OR	<p>これらのオプションは、ルールの演算を指定します。</p> <p>外部ルール要素およびネストされたルールがすべて <b>true</b> の場合にのみルールに適合すると規定するには、「<b>AND</b>」オプションを選択します。いずれかの外部ルール要素またはネストされたルールが <b>TRUE</b> であれば適合すると規定するには、「<b>OR</b>」オプションを選択します。</p> <p><b>重要:</b> これらのオプションは、ネストされたルールの中に含まれるルール要素の演算を反映しません。図 5-2 では、<b>AND</b> 演算は User Login == XELSYSADM ルール要素と、ネストされたルール Rule to Prevent Solaris Access に適用されます。ただし、この演算は、Rule to Prevent Solaris Access ルール内の Object Name == Solaris ルール要素には影響しません。</p>
Type	<p>ルールの分類ステータス。ルールは 4 つのタイプのいずれかに属することができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>General:</b> Oracle Identity Manager がユーザー・グループにユーザーを自動的に追加できるようにし、リソース・オブジェクトに割り当てられるパスワード・ポリシーを決定します。</li> <li>■ <b>Process Determination:</b> リクエストに関連付けられている標準承認プロセス、およびリソース・オブジェクトに対して選択されている承認およびプロビジョニング・プロセスを決定します。</li> <li>■ <b>Task Assignment:</b> プロセス・タスクに割り当てられるユーザーまたはユーザー・グループを決定します。</li> <li>■ <b>Prepopulate:</b> フォーム・フィールドで使用される事前移入アダプタを決定します。</li> </ul>
Sub-Type	<p>タイプが Process Determination、Task Assignment または Prepopulate のルールは、4 つのサブタイプのいずれかに分類できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>Organization Provisioning:</b> ルールをプロビジョニング・ルールとして分類します。プロセスのプロビジョニング、タスクの割当て、または事前移入アダプタの適用の対象となる組織を決定します。</li> <li>■ <b>User Provisioning:</b> ルールをプロビジョニング・ルールとして分類します。プロセスのプロビジョニング、タスクの割当て、または事前移入アダプタの適用の対象となるユーザーを決定します。</li> <li>■ <b>Approval:</b> ルールを承認ルールとして分類します。ユーザーまたは組織へのリソースのプロビジョニングを承認します。</li> <li>■ <b>Standard Approval:</b> ルールを標準ルールとして分類します。リクエストを承認します。</li> </ul> <p>ルール・タイプが「Task Assignment」または「Prepopulate」の場合、「Approval」と「Standard Approval」項目は「Sub-Type」ボックスに表示されません。ルール・タイプが「General」の場合、「Sub-Type」ボックスはグレー表示されます。</p>
Object	このルールが割り当てられるリソース・オブジェクト。
All Objects	選択すると、ルールをすべてのリソース・オブジェクトに割り当てることができます。
Process	このルールが割り当てられるプロセス。
All Processes	選択すると、ルールをすべてのプロセスに割り当てることができます。
Description	ルールについての説明。

## 5.4.1 ルールの作成

ルールを作成するには、次の手順を実行します。

---

**注意：** 次の手順で、ネストされたルール内部のルール要素にはオプションが適用されないことに注意してください。たとえば、[図 5-2](#) の AND 演算は User Login==XELSYSADM ルール要素と、ネストされたルール Rule to Prevent Solaris Access に適用されます。ただし、この演算は、Rule to Prevent Solaris Access ルール内部の Object Name == Solaris ルール要素には影響しません。

---

1. 「Rule Designer」フォームを開きます。
2. 「Name」フィールドに、ルールの名前を入力します。
3. すべてのルール要素またはネストされたルールが true の場合にのみルールに適合すると規定するには、「AND」オプションを選択します。

いずれかのルール要素またはネストされたルールが true であれば適合すると規定するには、「OR」オプションを選択します。

4. 「Type」ボックスをクリックし、カスタム・メニューで、ルールに関連付ける分類ステータス（「General」、「Process Determination」、「Task Assignment」、または「Prepopulate」）を選択します。

Process Determination の場合は、「Sub-Type」をクリックして、ルールに関連付ける分類ステータス（「Organization Provisioning」、「User Provisioning」、「Approval」または「Standard Approval」）を選択します。

Task Assignment または Prepopulate の場合は、「Sub-Type」をクリックして、ルールに関連付ける分類ステータス（「Organization Provisioning」または「User Provisioning」）を選択します。

「Type」ボックスから「General」を選択した場合は、手順 7 に進みます。

5. ルールを 1 つのリソース・オブジェクトに関連付けるには、「Object」参照フィールドをダブルクリックし、「Lookup」ダイアログ・ボックスでリソース・オブジェクトを選択します。

ルールをすべてのリソース・オブジェクトに使用できるようにする場合は、「All Objects」オプションを選択します。

6. ルールを 1 つのプロセスに割り当てるには、「Process」参照フィールドをダブルクリックし、「Lookup」ダイアログ・ボックスで、ルールに関連付けるプロセスを選択します。

---

**注意：** この Lookup ウィンドウに表示されるプロセスは、手順 5 で選択したリソース・オブジェクトに関連付けられたプロセスのみです。

---

ルールをすべてのプロセスに使用できるようにする場合は、「All Processes」オプションを選択します。

---

**注意：** 「All Processes」オプションを選択して、手順 5 で 1 つのリソース・オブジェクトを選択した場合、このルールは、選択したリソース・オブジェクトに関連付けられたすべてのプロセスに使用できます。

---

7. 「Description」フィールドには、ルールに関する説明情報を入力します。
8. 「Save」をクリックします。

## 5.4.2 「Rule Designer」 フォームのタブ

「Rule Designer」 フォームには、次のタブが含まれます。

- 「Rule Elements」 タブ
- 「Usage」 タブ

それぞれのタブについて、次の各項で説明します。

### 5.4.2.1 「Rule Elements」 タブ

このタブからは、ルールの要素やネストされたルールを作成および管理できます。たとえば、[図 5-3](#) では、Rule for Solaris に User Login==XELSYSADM ルール要素が含まれています。また、Rule to Prevent Solaris Access がネストされています。[図 5-3](#) に、「Rule Designer」 フォームの「Rule Elements」 タブを示します。

**図 5-3 「Rule Designer」 フォームの「Rule Elements」 タブ**

[図 5-3](#) のルールは、Solaris リソース・オブジェクトのプロビジョニング・プロセスに適用できます。このリソース・オブジェクトがリクエストに割り当てられると、ルールがトリガーされます。ターゲット・ユーザーのログインが XELSYSADM で、リソース・オブジェクトの名前が Solaris の場合、Solaris リソース・オブジェクトはユーザーに対してプロビジョニングされています。そうでない場合、ユーザーは Solaris にアクセスできません。

ルール要素またはネストされたルールが有効でなくなったら、ルールから削除します。

その手順を次に示します。

- ルールにルール要素を追加します。
- ルールにネストされたルールを追加します。
- ルールからルール要素またはネストされたルールを削除します。

## ルールへのルール要素の追加

ルールにルール要素を追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Add Element」 をクリックします。

「Edit Rule Element」 ダイアログ・ボックスが表示されます。

「Edit Rule Element」 ダイアログ・ボックス上のボックスにあるカスタム・メニューは、「Rule Designer」 フォームの「Type」 ボックスと「Sub-Type」 ボックスにある項目に対応しています。

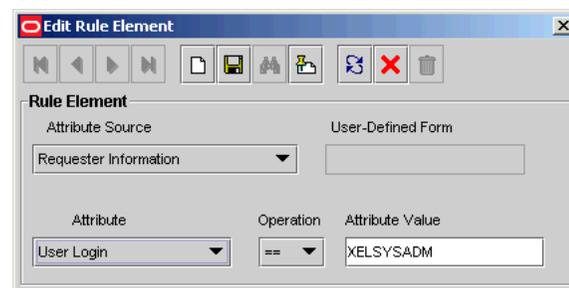
表 5-4 に、「Edit Rule Element」 ダイアログ・ボックスのデータ・フィールドの説明を示します。

表 5-4 「Edit Rule Element」 ダイアログ・ボックスのフィールド

名前	説明
Attribute Source	このボックスから、属性のソースを選択します。たとえば、選択する属性が「Object Name」 の場合、選択する属性ソースは「Object Information」 になります。
User-Defined Form	このフィールドには、隣接したボックスに表示される属性ソースに関連付けられている、ユーザーが作成したフォームが表示されます。 <b>注意：</b> 「Attribute Source」 ボックスに「Object Data」 または「Process Data」 が表示されない場合、「User-Defined Form」 フィールドは空になります。
Attribute	このボックスから、ルールの属性を選択します。
Operation	このボックスから、属性と属性値の関係を選択します (== または !=)。
Attribute Value	このフィールドに、属性の値を入力します。 <b>注意：</b> 属性の値では大 / 小文字が区別されます。

2. 図 5-4 に示すように、作成するルールのパラメータを設定します。

図 5-4 Edit Rule Element ウィンドウ



この例では、ターゲット・ユーザーのログイン ID が XELSYSADM であれば、ルール要素は true になります。それ以外の場合は false です。

**関連項目：**パラメータの詳細は、5-10 ページの「[「Rule Elements」 タブ](#)」を参照してください。

3. 「Edit Rule Element」 ダイアログ・ボックスのツールバーから、「Save」、「Close」の順にクリックします。

ルール要素が「Rule Designer」 フォームの「Rule Elements」 タブに表示されます。

4. メイン画面のツールバーから「Save」をクリックします。  
ルール要素がルールに追加されます。

### ルールへのネストされたルールの追加

ルールの中にルールをネストするには、次のようにします。

---

**注意：** 次の手順では、同一のタイプおよびサブタイプのルールのみが、親ルールとして Select Rule ウィンドウに表示されます。

---

1. 「Add Rule」をクリックします。  
「Select Rule」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. ネストされたルールを選択して、「Save」をクリックします。
3. 「Close」をクリックします。  
ネストされたルールが「Rule Designer」フォームの「Rule Elements」タブに表示されま  
す。
4. メイン画面のツールバーから「Save」をクリックします。  
ネストされたルールがルールに追加されます。

### ルールからのルール要素またはネストされたルールの削除

ルール要素またはネストされたルールを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するルール要素またはネストされたルールを選択します。
2. 「Delete」をクリックします。  
ルール要素またはネストされたルールがルールから削除されます。

#### 5.4.2.2 「Usage」 タブ

このタブは「Rule Designer」フォームに表示されます。「Usage」タブの情報は、ルールの分類タイプを反映しています。たとえば、ルール・タイプが事前移入の場合、このルールが適用される、ユーザーが作成したフィールドが、このタブに表示されます。

図 5-5 に「Usage」タブを示します。

図 5-5 「Rule Designer」フォームの「Usage」タブ

The screenshot shows the 'Rule Definition' window in the 'Usage' tab. The rule name is 'Rule to Approve Solaris' and the operator is 'OR'. The type is 'Process Determination' and the sub-type is 'Approval'. The object is 'is Resource Object' and the process is 'to Approve Solaris'. The description is 'This rule will determine whether the target user can approve the provisioning of the Solaris resource object.' Below this is a table with the following data:

	Object	Process	Type	Priority
1	The Solaris Resource Object	Process to Approve Solaris	A	1

このタブには次の項目が表示されます。

- ルールに関連付けられているパスワード・ポリシー、リソース・オブジェクト、プロセス、プロセス・タスク、自動グループ・メンバーシップ基準、ユーザー・グループ、Oracle Identity Manager フォーム・フィールド、および事前移入アダプタ。
- ルールの分類タイプを表す1文字のコード。A=Approval (承認)、P=Provisioning (プロビジョニング)。  
このコードはプロセス決定ルールでのみ表示されます。
- ルールの優先順位番号。

図 5-5 の Rule to Approve Solaris 定義は、**The Solaris Resource Object** と **Process to Approve Solaris** に割り当てられています。これは承認ルールなので、分類タイプはAです。このルールの優先順位は1で、対応するリソース・オブジェクトがリクエストに割り当てられた後、Oracle Identity Manager によって評価される最初の承認ルールであることを示しています。

### 5.4.3 「Rule Designer」 表

図 5-6 に示す「Rule Designer」表には、「Rule Designer」フォームで定義されている使用可能なすべてのルールが表示されます。

図 5-6 「Rule Designer」 表

Rule Name	Rule Type	Rule Sub-Type	Rule ID	Priority
User Self-Registration	Process Determination	General Approval	AND	001-0004-001-001
User Self-Registration	Process Determination	Standard Approval	AND	001-0004-001-002
Self-Registration	Pre-Populate	User Provisioning	AND	001-0004-001-003
User Self-Registration	Process Determination	User Provisioning	AND	001-0004-001-004
Confirmation Rule	Process Determination	Standard Approval	AND	001-0004-001-005
User Self-Registration	Pre-Populate	User Provisioning	AND	001-0004-001-006
Self-Registration	Pre-Populate	User Provisioning	AND	001-0004-001-007

表 5-5 に、「Rule Designer」表に表示される情報を示します。

表 5-5 「Rule Designer」 表の情報

フィールド名	説明
Rule Name	ルールの名前。
Rule Type	ルールは4つのタイプのいずれかに属することができます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>General:</b> Oracle Identity Manager がユーザー・グループにユーザーを自動的に追加できるようにし、リソース・オブジェクトに割り当てられるパスワード・ポリシーを決定します。</li> <li>■ <b>Process Determination:</b> リクエストに関連付けられている標準承認プロセス、およびリソース・オブジェクトに対して選択されている承認およびプロビジョニング・プロセスを決定します。</li> <li>■ <b>Task Assignment:</b> どのユーザーまたはユーザー・グループ、あるいはその両方をプロセス・タスクに割り当てるかを決定します。</li> <li>■ <b>Pre-Populate:</b> どの事前移入アダプタを指定したフォーム・フィールドに対して実行するかを決定します。</li> </ul>

表 5-5 「Rule Designer」 表の情報（続き）

フィールド名	説明
Rule Sub-Type	<p>タイプが Process Determination、Task Assignment または Prepopulate のルールは、4 つのサブタイプのいずれかに分類できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>Organization Provisioning:</b> ルールをプロビジョニング・ルールとして分類します。 このサブタイプにより、プロセスのプロビジョニング、タスクの割当て、または事前移入アダプタの適用の対象となる組織が決定します。</li> <li>■ <b>User Provisioning:</b> ルールをプロビジョニング・ルールとして分類します。 このサブタイプにより、プロセスのプロビジョニング、タスクの割当て、または事前移入アダプタの適用の対象となるユーザーが決定します。</li> <li>■ <b>Approval:</b> ルールを承認ルールとして分類します。 このサブタイプは、ユーザーまたは組織へのリソースのプロビジョニングを承認するために使用されます。</li> <li>■ <b>Standard Approval:</b> ルールを標準ルールとして分類します。 このサブタイプは、リクエストを承認するために使用されます。</li> </ul>
Rule Operator	属性と属性値の関係を == または != で示します。
Description	ルールについての説明。
Last Updated	ルールが最後に更新された日付。

## 5.5 「Resource Objects」 フォーム

「Resource Objects」 フォームは「Resource Management」フォルダにあります。このフォームは、組織またはユーザーに対してプロビジョニングする Oracle Identity Manager リソースのリソース・オブジェクトを作成および管理するために使用します。リソース・オブジェクトの定義は、リソース・プロビジョニングのテンプレートです。ただし、リソースの承認およびプロビジョニングは、リソース・オブジェクトにリンクする承認およびプロビジョニング・プロセスの設計により異なります。

**関連項目：** リクエストの詳細およびリソース・オブジェクトとリクエストの関係は、4-7 ページの「[「Administrative Queues」 フォーム](#)」を参照してください。

表 5-6 に、「Resource Objects」フォームのデータ・フィールドの説明を示します。

表 5-6 「Resource Objects」 フォームのフィールド

フィールド名	説明
Name	リソース・オブジェクトの名前。
Table Name	このリソースに関連付けられているリソース・オブジェクト・フォームの名前。（これは、実際にフォームを表す表の名前です。）
Order For User/Order For Organization	<p>ユーザーまたは組織のリソース・オブジェクトのリクエストが可能かどうかを指定するオプション。</p> <p>ユーザーのリソース・オブジェクトをリクエストするには、「<b>Order For User</b>」を選択します。組織のリソース・オブジェクトをリクエストするには、「<b>Order For Organization</b>」を選択します。</p>

表 5-6 「Resource Objects」 フォームのフィールド (続き)

フィールド名	説明
Auto Pre-Populate	<p>Oracle Identity Manager またはユーザーによってカスタム・フォームが移入されるかどうかを指定するオプション。これは次の種類のフォームに適用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>リソース・オブジェクトに関連付けられているフォーム</li> <li>事前移入アダプタがアタッチされているフィールドのあるフォーム</li> </ul> <p>「Auto Pre-Populate」チェック・ボックスを選択すると、関連付けられているカスタム・フォームが表示され、事前移入アダプタが設定されているフィールドにデータが移入されます。</p> <p>このチェック・ボックスの選択を解除した場合は、ツールバーの「Pre-Populate」ボタンをクリックしてフィールドにデータを移入する必要があります。</p> <p><b>注意:</b> この設定は、事前移入アダプタのトリガーを制御しません。関連付けられたフィールドにアダプタの実行により得られる内容を表示するのが、Oracle Identity Manager とユーザーのどちらであるかを決定します。</p> <p>事前移入アダプタの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』を参照してください。</p> <p><b>注意:</b> このチェック・ボックスは、リソース・オブジェクトに関連付けられるフォームを作成した場合にのみ関係があります。</p>
Type	<p>リソース・オブジェクトの分類ステータス。リソース・オブジェクトは3つのタイプのいずれかに属することができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>Application:</b> このリソース・オブジェクトをアプリケーションとして分類します。</li> <li><b>Generic:</b> ビジネス関連のプロセスが含まれます。</li> <li><b>System:</b> このタイプのリソース・オブジェクトは、Oracle Identity Manager により内部的に使用されます。</li> </ul> <p>システム・リソース・オブジェクトを変更する場合は、必ず事前にオラクル社にご相談ください。</p>
Allow Multiple	<p>リソースがユーザーまたは組織に複数回プロビジョニングされるかどうかを指定します。選択すると、リソース・オブジェクトをユーザーまたは組織ごとに複数回プロビジョニングできます。</p>
Auto Save	<p>このチェック・ボックスを選択すると、Oracle Identity Manager は、「Form Designer」フォームを使用して作成されたリソース固有のすべてのフォームのデータを、事前にフォームを表示しないで保存します。</p> <p>このチェック・ボックスを選択する場合、システム・データ、ルール・ジェネレータ・アダプタまたはエンティティ・アダプタを指定して、フォームに必須データを移入する必要があります。必要なデータをフォームに移入しないと、ユーザーはフォームにアクセスできなくなります。</p> <p><b>注意:</b> このチェック・ボックスは、リソース・オブジェクトのプロビジョニング用にフォームを作成した場合にのみ関係があります。</p>
Self Request Allowed	<p>このチェック・ボックスを選択すると、ユーザーも、システム管理者と同様、自身でリソース・オブジェクトをリクエストすることができます。</p> <p><b>注意:</b> この機能は Oracle Identity Manager Design Console にのみ適用されます。Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソールには適用されません。</p>
Allow All	<p>このチェック・ボックスを選択すると、すべての Oracle ユーザーのためにリソース・オブジェクトをリクエストできます。この設定は、ユーザーが所属する組織で、ユーザーのためにリソースをリクエストすることが許可されているかどうかより優先されます。</p>

表 5-6 「Resource Objects」 フォームのフィールド (続き)

フィールド名	説明
Auto Launch	<p>このチェック・ボックスは、オブジェクト作成時にデフォルトで選択されています。リソースの承認プロセスのステータスが「Completed」になると、Oracle Identity Manager により自動的にプロビジョニング・プロセスが開始されます。</p> <p>Oracle Identity Manager は、このチェック・ボックスの選択が解除されていても、すべてのリソース・オブジェクトを自動的に「Auto Launch」に設定します。</p>
Provision by Object Admin Only	<p>このチェック・ボックスは、「Auto Launch」チェック・ボックスの選択が解除されている場合に、ダイレクト・プロビジョニングを使用するか、手動で開始されたプロビジョニング・プロセスによって、このリソースをプロビジョニングできるユーザーを指定するために使用されます。</p> <p>このチェック・ボックスを選択すると、「Object Administrators」タブにリストされたグループのメンバーであるユーザーだけが（直接、またはリクエストから手動でプロビジョニング・プロセスを開始することによって）、このリソース・オブジェクトをプロビジョニングできます。</p> <p>このチェック・ボックスの選択を解除した場合、このリソースを直接にプロビジョニングできるユーザーの制限は設定されません。</p>
Sequence Recon	<p>このチェック・ボックスを選択すると、リコンシリエーション・イベントは作成順に処理されます。</p> <p>この機能は、次の例に示すように使用できます。</p> <p>ユーザー John Doe の OIM ユーザーのリソース・オブジェクトにリコンシリエーション・イベントが 2 つあるとします。1 つ目のリコンシリエーション・イベント (E1) のデータは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Login: testuser1</li> <li>■ First Name: John</li> <li>■ Last Name: Doe</li> <li>■ Organization: Xellerate Users</li> <li>■ Type: End-User</li> <li>■ Role: Full-Time</li> </ul> <p>2 つ目のリコンシリエーション・イベント (E2) のデータは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Login: testuser1</li> <li>■ First Name: John1</li> <li>■ Last Name: Doe1</li> <li>■ Organization: Xellerate Users</li> <li>■ Type: End-User</li> <li>■ Role: Full-Time</li> </ul> <p>1 つ目と 2 つ目のイベント間で、ユーザーの First Name と Last Name が変わりました。</p> <p>信頼できるソースのリコンシリエーションのときに、イベントが作成順に処理される場合は、First Name と Last Name におけるこの変更は、Oracle Identity Manager に正しくリコンサイルされます。しかし、2 つ目のイベントが 1 つ目のイベントの前に処理されると、リコンシリエーションの実行の終了時点でターゲット・システムのデータは Oracle Identity Manager のデータと一致しません。この不整合は監査表に反映され、このユーザーに対して別のイベントが信頼できるソースから作成されるまで残ります。</p> <p>「Sequence Recon」オプションを有効にすると、同じエンティティ (同じユーザー、同じプロセス・フォームなど) のイベントは作成順に処理されます。</p>

表 5-6 「Resource Objects」 フォームのフィールド (続き)

フィールド名	説明
Trusted Source	このチェック・ボックスは、信頼できるユーザーのリコンシリエーションにリソース・オブジェクトを使用する場合に選択できます。  デフォルトでは、このチェック・ボックスの選択は解除されています。 Xellerate User リソース・オブジェクトの場合のみ、デフォルトで選択されています。

## 5.5.1 リソース・オブジェクトの作成

リソース・オブジェクトを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「Resource Objects」 フォームを開きます。
2. 「Name」 フィールドに、リソース・オブジェクトの名前を入力します。
3. 必要に応じて、リソース・フォームをリソース・オブジェクトにアタッチできます。この操作を実行するには、「Table Name」 参照フィールドをダブルクリックします。「Lookup」 ダイアログ・ボックスから、リソース・オブジェクトに関連付けられるフォームを表す表を選択します。
4. ユーザーのリソース・オブジェクトをリクエストするには、「Order For User」 を選択します。

組織のリソース・オブジェクトをリクエストするには、「Order For Organization」 を選択します。

---

**注意：** リソース・オブジェクトは、1 人のユーザーまたは 1 つの組織のためにリクエストできます。

---

5. カスタム・フォームがリソース・オブジェクトに関連付けられ、このフォームに含まれるフィールドに事前移入アダプタがアタッチされていて、Oracle Identity Manager がこれらのフィールドにデータを自動的に移入するようにする場合は、「Auto Pre-Populate」 オプションを選択します。

このフォームのフィールドに (ツールバーの「Pre-Populate」 ボタンをクリックして) 手でデータを移入する場合は、「Auto Pre-Populate」 オプションの選択を解除します。

---

**注意：** リソース・オブジェクトに、関連付けられたカスタム・フォームがないか、このフォームのフィールドに事前移入アダプタがアタッチされていない場合は、「Auto Pre-Populate」 チェック・ボックスの選択を解除します。事前移入アダプタの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』を参照してください。

---

6. 「Type」 参照フィールドをダブルクリックします。  
「Lookup」 ダイアログ・ボックスが表示されたら、リソース・オブジェクトに関連付ける分類ステータス («Application»、«Generic» または «System») を選択します。
7. リソース・オブジェクトの複数のインスタンスが、1 人のユーザーまたは 1 つの組織のためにリクエストされるようにする場合は、「Allow Multiple」 オプションを選択します。それ以外の場合は手順 8 に進みます。
8. 「Form Designer」 フォームを使用して作成したリソース固有のフォームのデータが、Oracle Identity Manager によって、事前にフォームを表示しないで保存されるようにする場合は、「Auto Save」 オプションを選択します。

それ以外の場合は手順 9 に進みます。

---

---

**注意：** このチェック・ボックスを選択する場合、システム・データ、ルール・ジェネレータ・アダプタまたはエンティティ・アダプタを指定して、フォームに必須データを移入する必要があります。これは、ユーザーがフォームにアクセスすることができなくなるためです。

このチェック・ボックスは、リソース・オブジェクトをプロビジョニングするためにフォームを作成した場合にのみ選択します。

---

---

9. ユーザーが自分のためにリソース・オブジェクトをリクエストできるようにする場合は、「**Self Request Allowed**」 オプションを選択します。それ以外の場合は手順 10 に進みます。
10. ユーザーが所属する組織にリソース・オブジェクトが割り当てられているかどうかにかかわらず、すべてのユーザーのためにリソース・オブジェクトをプロビジョニングする場合は、「**Allow All**」 チェック・ボックスを選択します。それ以外の場合は手順 11 に進みます。
11. 信頼できるソース・ユーザーのリコンシリエーションにリソース・オブジェクトを使用する場合は、「**Trusted Source**」 オプションを選択する必要があります。それ以外の場合は手順 12 に進みます。

---

---

**注意：** リクエストおよびリソース・プロファイルのプロビジョニングにリソース・オブジェクトを使用できないようにするには、「**Self Request Allowed**」 および 「**Allow All**」 チェック・ボックスの選択を解除する必要があります。

---

---

12. リソース・オブジェクトの承認プロセスのステータスが 「**Completed**」 になったときに、Oracle Identity Manager により自動的にプロビジョニング・プロセスが開始されるようにする場合は、「**Auto Launch**」 オプションを選択します。それ以外の場合は手順 13 に進みます。

---

---

**注意：** Oracle Identity Manager は、このチェック・ボックスの選択が解除されていても、すべてのリソース・オブジェクトをデフォルトで 「**Auto Launch**」 に設定します。

---

---

13. このリソース・オブジェクトをプロビジョニングできるユーザー・グループを、「Resource Objects」 フォームの 「**Object Authorizers**」 タブで表示されるグループに限定するには、「**Provision by Object Admin Only**」 オプションを選択します。これは、直接またはリクエストへの割当てによってプロビジョニングされたリソース・オブジェクトに適用されます。それ以外の場合は手順 14 に進みます。
14. 「**Save**」 をクリックします。  
リソース・オブジェクトが作成されます。

## 5.5.2 「Resource Objects」 フォームのタブ

「Resource Objects」 フォームを起動してリソース・オブジェクトを作成すると、このフォームのタブが使用可能になります。

「Resource Objects」 フォームには、次のタブが含まれます。

- 「Depends On」 タブ
- 「Object Authorizers」 タブ
- 「Process Determination Rules」 タブ
- 「Event Handlers/Adapters」 タブ
- 「Resource Audit Objectives」 タブ
- 「Status Definition」 タブ
- 「Administrators」 タブ
- 「Password Policies Rule」 タブ
- 「User-Defined Fields」 タブ
- 「Process」 タブ
- 「Object Reconciliation」 タブ

### 5.5.2.1 「Depends On」 タブ

このタブから、Oracle Identity Manager が、現在のリソース・オブジェクトをプロビジョニングする前にプロビジョニングする必要があるリソース・オブジェクトを選択できます。

「Depends On」 タブに表示されているリソース・オブジェクトを先にプロビジョニングせずに現在のリソース・オブジェクトをプロビジョニングできる場合、タブからそのリソース・オブジェクトを削除する必要があります。

「Depends On」 タブに関連するトピックには次のものがあります。

- 現在のリソース・オブジェクトが依存しているリソース・オブジェクトの選択
- 依存しているリソース・オブジェクトの削除

#### 依存しているリソース・オブジェクトの選択

依存しているリソース・オブジェクトを選択するには、次の手順を実行します。

1. 「Assign」 をクリックします。  
「Assignment」 ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. リソース・オブジェクトを選択し、リクエストに割り当てます。
3. 「OK」 をクリックします。  
依存しているリソース・オブジェクトが選択されます。

#### 依存しているリソース・オブジェクトの削除

依存しているリソース・オブジェクトを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除対象の、依存しているリソース・オブジェクトを選択します。
2. 「Delete」 をクリックします。  
リソース・オブジェクトが「Depends On」 タブから削除されます。

### 5.5.2.2 「Object Authorizers」 タブ

このタブでは、このリソースのオブジェクト認可ユーザー・グループを指定します。タスク割当てのターゲットとして、「Object Authorizers」グループのメンバーであるユーザーを選択できます。

「Object Authorizers」タブ上の各ユーザー・グループには優先順位番号があります。割当てのターゲットが **Object Authorizer user with highest priority** の場合、Oracle Identity Manager は優先順位番号を使用して、タスクに割り当てるユーザーを決定します。優先順位番号は、グループに割り当てられたタスクが対応されずにエスカレーションの対象になる場合にも、参照されることがあります。このタブでは、どのユーザー・グループの優先順位番号も変更できます。

たとえば、SYSTEM ADMINISTRATORS ユーザー・グループのメンバーを、オブジェクト認可ユーザーに設定する場合を考えます。また、このリソース・オブジェクトに関連付けられているプロセス・タスクにタスク割当てルールがアタッチされており、割当て基準が **Object Authorizer User with Highest Priority** であるとしします。このプロセス・タスクを完了する権限がある最初のユーザーは、優先順位番号が **1** なので、SYSTEM ADMINISTRATORS ユーザー・グループに所属する中で最も優先順位が高いユーザーです。ユーザーによって指定された時間内にユーザーがプロセス・タスクを完了しなかった場合、Oracle Identity Manager は SYSTEM ADMINISTRATORS ユーザー・グループで次に優先順位が高いユーザーにタスクを再割当てします。

**関連項目：** 割当てルールとプロセス・タスクの詳細は、5-6 ページの「[「Rule Designer」 フォーム](#)」および 6-32 ページの「[「Editing Task ウィンドウの「Assignment」タブ](#)」を参照してください。

### リソース・オブジェクトへのユーザー・グループの割当て

ユーザー・グループをリソース・オブジェクトに割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 「Assign」をクリックします。  
「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. ユーザー・グループを選択して、リソース・オブジェクトに割り当てます。
3. 「OK」をクリックします。  
ユーザー・グループが選択されます。

### リソース・オブジェクトからのユーザー・グループの削除

リソース・オブジェクトからユーザー・グループを削除するには、次の手順を実行します。

1. 対象のユーザー・グループを選択します。
2. 「Delete」をクリックします。  
ユーザー・グループが「Object Authorizers」タブから削除されます。

### ユーザー・グループの優先順位番号の変更

ユーザー・グループの優先順位番号を変更するには、次の手順を実行します。

1. 優先順位番号を変更するユーザー・グループを選択します。
2. 選択したユーザー・グループの優先順位番号を1つ上げるには、「Increase」をクリックします。  
選択したユーザー・グループの優先順位番号を1つ下げるには、「Decrease」をクリックします。  
ユーザー・グループの優先順位番号を、より大きく増減するには、該当するボタンを繰り返しクリックします。たとえば、ユーザー・グループの優先順位番号を2つ上げるには、「Increase」ボタンを2度クリックします。
3. 「Save」をクリックします。  
ユーザー・グループの優先順位番号が、選択した値に変更されます。

### 5.5.2.3 「Process Determination Rules」 タブ

リクエストは、ユーザーまたは組織にリソースをプロビジョニングするメカニズムです。ユーザーは、ターゲットのユーザーまたは組織へのリソースのプロビジョニングを承認するリクエストを操作します。各リクエストは、リソース・オブジェクトを割り当てられる必要があります。各リソース・オブジェクトは、1つ以上のプロビジョニング・プロセスと、1つ以上の承認プロセスから構成されます。

リソース・オブジェクトは、ユーザーまたは組織にリソースをプロビジョニングする際のテンプレートです。このテンプレートは、複数の承認プロセスやプロビジョニング・プロセスにリンクできます。リソースがリクエストまたは直接プロビジョニングされると、Oracle Identity Manager はプロセス決定ルールを使用して承認プロセスとプロビジョニング・プロセスを選択します。

プロセス決定ルールには、次の基準があります。

- リソースがリクエストされたときに、どの承認プロセスおよびプロビジョニング・プロセスを選択するか
- リソースが直接プロビジョニングされたときに、どのプロビジョニング・プロセスを選択するか

承認プロセスおよびプロビジョニング・プロセスには、プロセス決定ルールがあります。ルールおよびプロセスの組合せには、それぞれ優先順位番号があり、Oracle Identity Manager が評価する順序を表します。

ルールの条件が `false` の場合、Oracle Identity Manager は次に高い優先順位を持つルールを評価します。ルールが `true` の場合、Oracle Identity Manager はそれに関連付けられているプロセスを実行します。たとえば、リソースがリクエストまたは直接プロビジョニングされると、Oracle Identity Manager は **Rule to See if Solaris is Needed** および **Rule to Check Provisioning of Solaris for IT Dept** を評価します。どちらのルールも、最も高い優先順位を持っています。これらのルールの条件が `true` になると、Oracle Identity Manager はそれらに関連付けられたプロセス（この例では、「**Check if Solaris is Needed**」承認プロセスと、「**Provision Solaris for IT Dept**」プロビジョニング・プロセス）を実行します。

この例の変形として、リソースがリクエストまたは直接プロビジョニングされ、「**Rule to Check Provisioning of Solaris for IT Dept.**」ルールが `false` の場合、Oracle Identity Manager は「**Rule to Check Provisioning of Solaris for Developers**」ルールを評価します。このルールが `true` の場合、Oracle Identity Manager は、そのルールに関連付けられている「**Provision Solaris for Devel.**」プロビジョニング・プロセスを実行します。

### リソース・オブジェクトへのプロセス決定ルールの追加

リソース・オブジェクトにプロセス決定ルールを追加するには、次の手順を実行します。

1. 作成するルールまたはプロセスの組合せに応じて、「**Approval Processes**」または「**Provisioning Processes**」領域で「**Add**」をクリックします。
2. 表示される行から、「**Rules**」参照フィールドをダブルクリックします。
3. 「**Lookup**」ダイアログ・ボックスで、ルールを選択し、リソース・オブジェクトに割り当てます（タイプが **Process Determination** のルールのみ選択可能）。
4. 「**OK**」をクリックします。
5. 隣接する列で、「**Processes**」参照フィールドをダブルクリックします。
6. 「**Lookup**」ダイアログ・ボックスで、プロセスを選択し、ルールに割り当てます。
7. 「**OK**」をクリックします。
8. 「**Priority**」フィールドに数値を入力します。

これにより、Oracle Identity Manager がルールとプロセスの組合せを評価する順序が決定されます。

9. 「**Save**」をクリックします。

ルールとプロセスの組合せがリソース・オブジェクトに追加されます。

## リソース・オブジェクトからのプロセス決定ルールの削除

リソース・オブジェクトからプロセス決定ルールを削除するには、次の手順を実行します。

1. ルールとプロセスの組合せを選択します。
2. 「Delete」をクリックします。  
ルールとプロセスの組合せがリソース・オブジェクトから削除されます。

### 5.5.2.4 「Event Handlers/Adapters」 タブ

リソース・オブジェクトのプロビジョニング・プロセスに、自動的に完了する必要があるタスクが含まれます。この場合、リソース・オブジェクトにイベント・ハンドラまたはアダプタを割り当てる必要があります。イベント・ハンドラは、この特殊な情報を処理するソフトウェア・ルーチンです。アダプタは Java コードを生成する特殊なタイプのイベント・ハンドラであり、アダプタにより、Oracle Identity Manager の通信および外部リソースとの対話が可能になります。

イベント・ハンドラまたはリソース・オブジェクトに割り当てられたアダプタが有効でなくなったら、リソース・オブジェクトから削除する必要があります。

この例では、`adpAUTOMATEPROVISIONINGPROCESS` アダプタが **Solaris** リソース・オブジェクトに割り当てられました。このリソース・オブジェクトがリクエストに割り当てられると、Oracle Identity Manager によりアダプタがトリガーされ、関連付けられたプロビジョニング・プロセスが自動的に実行されます。

## リソース・オブジェクトへのイベント・ハンドラまたはアダプタの割当て

イベント・ハンドラをアダプタまたはリソース・オブジェクトに割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 「Assign」をクリックします。  
「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. イベント・ハンドラを選択して、リソース・オブジェクトに割り当てます。
3. 「OK」をクリックします。  
イベント・ハンドラがリソース・オブジェクトに割り当てられます。

## リソース・オブジェクトからのイベント・ハンドラまたはアダプタの削除

リソース・オブジェクトからイベント・ハンドラまたはアダプタを削除するには、次の手順を実行します。

1. イベント・ハンドラを選択します。
2. 「Delete」をクリックします。  
イベント・ハンドラがリソース・オブジェクトから削除されます。

### 5.5.2.5 「Resource Audit Objectives」 タブ

Design Console の「Resource Objects」フォームが拡張されて、**Resource Audit Objectives** という新しいリソース属性が含まれるようになりました。このリソース属性を使用すると、リソースをリンクして委任を管理することが簡単にできます。

Resource Audit Objectives リソース属性の値のために新しい参照が定義されます。「Resource Audit Objectives」リストに事前に定義されている値は、次のとおりです。

- SOX (Hosts Financially Significant Information)
- HIPAA (Hosts Private Healthcare Information)
- GLB (Hosts Non-Public Information)
- Requires Quarterly Review
- Requires Annual Review

このリストは、Design Console の「Lookup Definition」フォームを使用して Lookups.Resource Audit Objective.Type 参照を編集すると拡張できます。

Design Console の「Resource Profile」フォームにある新しい「Resource Audit Objectives」タブを使用して、この属性の値を選択できます。

### 5.5.2.6 「Status Definition」 タブ

このタブは、リソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスを設定するために使用します。プロビジョニング・ステータスは、リソース・オブジェクトがターゲット・ユーザーまたは組織にプロビジョニングされるまで、リソース・オブジェクトのライフ・サイクルを通じてステータスを示します。「Currently Provisioned」タブの「Status」領域から、リソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスを表示できます。

リソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスはすべて、関連するプロビジョニング・プロセスのタスク・ステータスに関連付けられます。Oracle Identity Manager は、リソース・オブジェクトがリクエストに割り当てられるときに、プロビジョニング・プロセスを選択します。たとえば、Provision for Developers プロセスが選択され、このプロセスのステータスが「Completed」になると、対応するリソース・オブジェクトのステータスが「Provisioned」に設定されます。こうして、リソース・オブジェクトとプロビジョニング・プロセスの関連を、素早く簡単に確認できます。

リソース・オブジェクトには、次の事前定義済みのステータスがあります。

- **Waiting:** このリソース・オブジェクトは、まだプロビジョニングされていない他のリソース・オブジェクトに依存しています。
- **Revoked:** リソース・オブジェクトによって表されるリソースが、リソースの使用から永久的にデプロビジョンされている、ターゲットのユーザーまたは組織に対してプロビジョニングされています。
- **Ready:** このリソース・オブジェクトが他のどのリソース・オブジェクトにも依存していないか、このリソース・オブジェクトが依存しているすべてのリソース・オブジェクトがプロビジョニングされています。

リソースがリクエストに割り当てられ、リソース・オブジェクトのステータスが「Ready」になると、Oracle Access Manager は、プロセス決定ルールを評価して承認プロセスとプロビジョニング・プロセスを決定します。これが実行されると、リソース・オブジェクトのステータスは「Provisioning」に変更されます。

- **Provisioning:** リソース・オブジェクトがリクエストに割り当てられ、承認プロセスおよびプロビジョニング・プロセスが選択されました。
- **Provisioned:** リソース・オブジェクトにより表現されたリソースが、ターゲット・ユーザーまたは組織にプロビジョニングされています。
- **Provide Information:** リソース・オブジェクトによって表現されるリソースがターゲットのユーザーまたは組織にプロビジョニングされるためには、追加の情報が必須です。
- **None:** このステータスはリソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスを表しません。むしろ、Oracle Identity Manager が選択したプロビジョニング・プロセスに所属するタスクが、リソース・オブジェクトのステータスに対して影響しないことを示しています。
- **Enabled:** リソース・オブジェクトによって示されたリソースが、ターゲットのユーザーまたは組織にプロビジョニングされ、これらのユーザーまたは組織はリソースにアクセスできます。
- **Disabled:** リソース・オブジェクトによって表現されるリソースが、ターゲットのユーザーまたは組織にプロビジョニングされていますが、これらのユーザーまたは組織の、リソースへのアクセスは一時的に失われています。

それぞれのプロビジョニング・ステータスには、対応する「Launch Dependent」チェック・ボックスがあります。チェック・ボックスが選択され、リソース・オブジェクトがそのプロビジョニング・ステータスになると、Oracle Identity Manager により、依存するリソース・オブジェクトが独自のプロビジョニング・プロセスを起動できるようになります。

たとえば、「Exchange」リソース・オブジェクトでは、「Provisioned」および「Enabled」プロビジョニング・ステータスに対応する「Launch Dependent」チェック・ボックスが選択されています。このリソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスが「Provisioned」および「Enabled」に変更されると、Oracle Identity Manager は、「Exchange」リソース・オブジェクトがさらに別のリソース・オブジェクトに依存しているかどうかを確認します。他の依存オブジェクトがある場合、Oracle Identity Manager は、それらの承認プロセスとプロビジョニング・プロセスを起動します。続いて、「Exchange」の承認およびプロビジョニング・プロセスを選択します。

プロビジョニング・プロセスの各種のタスク・ステータスを反映するには、追加のプロビジョニング・ステータスをリソース・オブジェクトに追加する方法があります。たとえば、あるプロビジョニング・プロセスに所属するタスクのステータスが「Rejected」のとき、リソース・オブジェクトの対応するプロビジョニング・ステータスを「Revoked」に設定することもできます。

同様に、既存のプロビジョニング・ステータスが有効でなくなった場合は、リソース・オブジェクトからそのステータスを削除する必要があります。

次の項では、リソース・オブジェクトにプロビジョニング・ステータスを追加する方法と、リソース・オブジェクトからプロビジョニング・ステータスを削除する方法を説明します。

### リソース・オブジェクトへのプロビジョニング・ステータスの追加

リソース・オブジェクトにプロビジョニング・ステータスを追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Add」をクリックします。
2. 「Status」フィールドにプロビジョニング・ステータスを追加します。
3. 他の依存しているリソース・オブジェクトが追加したプロビジョニング・ステータスになったときに、そのリソース・オブジェクトで自身の承認プロセスとプロビジョニング・プロセスを起動する場合は、「Launch Dependent」チェック・ボックスを選択します。それ以外の場合は手順 4 に進みます。
4. 「Save」をクリックします。

プロビジョニング・ステータスがリソース・オブジェクトに割り当てられます。

### リソース・オブジェクトからのプロビジョニング・ステータスの削除

次の手順では、リソース・オブジェクトからプロビジョニング・ステータスを削除する方法について説明します。

1. プロビジョニング・ステータスを選択します。
2. 「Delete」をクリックします。

プロビジョニング・ステータスがリソース・オブジェクトから削除されます。

#### 5.5.2.7 「Administrators」 タブ

このタブは、現在のリソース・オブジェクトを表示、変更および削除できるユーザー・グループを選択するために使用されます。

「Write」チェック・ボックスを選択すると、それに対応するユーザー・グループが現在のリソース・オブジェクトを変更できます。「Delete」チェック・ボックスを選択すると、関連付けられているユーザー・グループが現在のリソース・オブジェクトを削除できます。

たとえば、SYSTEM ADMINISTRATORS ユーザー・グループは、Solaris リソース・オブジェクトを表示、変更および削除できます。OPERATORS ユーザー・グループは、このリソース・オブジェクトの表示および変更のみを行えます（「Delete」チェック・ボックスは選択解除されています）。

次の項では、リソース・オブジェクトにユーザー・グループを割り当てる方法と、リソース・オブジェクトからユーザー・グループを削除する方法を説明します。

## リソース・オブジェクトへのユーザー・グループの割当て

ユーザー・グループをリソース・オブジェクトに割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 「Assign」をクリックします。  
「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. ユーザー・グループを選択して、リソース・オブジェクトに割り当てます。
3. 「OK」をクリックします。  
ユーザー・グループが「Administrators」タブに表示されます。このグループのすべてのメンバーは、デフォルトで、アクティブなレコードを表示できます。
4. このユーザー・グループが現在のリソース・オブジェクトを変更できるようにする場合、対応する「Write」チェック・ボックスを選択します。  
それ以外の場合は手順5に進みます。
5. このユーザー・グループが現在のリソース・オブジェクトを削除できるようにする場合、関連付けられている「Delete」チェック・ボックスを選択します。  
それ以外の場合は手順6に進みます。
6. 「Save」をクリックします。  
ユーザー・グループがリソース・オブジェクトに割り当てられます。

## リソース・オブジェクトからのユーザー・グループの削除

リソース・オブジェクトからユーザー・グループを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するユーザー・グループを強調表示します。
2. 「Delete」をクリックします。  
ユーザー・グループがリソース・オブジェクトから削除されます。

### 5.5.2.8 「Password Policies Rule」 タブ

タイプが Application のリソース・オブジェクトをユーザーまたは組織に対してプロビジョニングする場合は、そのユーザーまたは組織がパスワード条件を満たしていることを確認してから、リソース・オブジェクトにアクセスできるようにします。このパスワード条件は、パスワード・ポリシーのフォームで作成および管理されます。このポリシーは「Password Policies」フォームを使用して作成されます。

リソース・オブジェクト定義は、リソースのプロビジョニング方法を管理する単なるテンプレートであるため、Oracle Identity Manager は、実際の条件およびルールに基づいてリソースをどのようにプロビジョニングするかを決定する必要があります。これらの条件は、リソースが実際にリクエストされるまで明らかではありません。このため、リソースに関連付けられている様々なプロセスやパスワード・ポリシーにルールをリンクする必要があります。これにより、Oracle Identity Manager はいかなる状況でも起動対象を決定できるようになります。

Oracle Identity Manager は、特定のユーザーのアカウントを作成または更新する際に、リソースに適用するパスワード・ポリシーを決定します。この決定は、リソースのパスワード・ポリシー・ルールを評価し、適合した最初のルールに関連付けられているポリシーの基準を適用することによって行われます。ルールには優先順位番号があり、Oracle Identity Manager が評価する順序を表します。

この例では、Oracle Identity Manager は「Rule to Prevent Solaris Access」ルールをトリガーします（優先順位が最も高いため）。このルールが TRUE であれば、Oracle Identity Manager は「Restrict Solaris」パスワード・ポリシーの基準を、作成または更新されるアカウントのパスワードに適用します。

このルールが false なら、Oracle Identity Manager は、次に高い優先順位を使用してルールを評価します。このルールが true の場合、Oracle Identity Manager はそのルールに関連付けられているパスワード・ポリシーを、作成または更新されたアカウントのパスワードに適用します。

次の各項では、リソース・オブジェクトに対してパスワード・ポリシー・ルールを追加および削除する方法について説明します。

### リソース・オブジェクトへのパスワード・ポリシー・ルールの追加

パスワード・ポリシー・ルールをリソース・オブジェクトに追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Add」をクリックします。
2. 表示される行から、「Rule」参照フィールドをダブルクリックします。
3. 「Lookup」ダイアログ・ボックスで、ルールを選択し、リソース・オブジェクトに割り当てます。
4. 「OK」をクリックします。
5. 隣接する列で、「Policy」参照フィールドをダブルクリックします。
6. 「Lookup」ダイアログ・ボックスで、関連付けられているパスワード・ポリシーを選択し、リソース・オブジェクトに割り当てます。
7. 「OK」をクリックします。
8. 「Priority」フィールドに数値を追加します。  
このフィールドには、ルールの優先順位番号が含まれます。
9. 「Save」をクリックします。  
パスワード・ポリシー・ルールがリソース・オブジェクトに追加されます。

---

---

#### 注意：

- リソース・タイプが **Order for Organization** の場合は、パスワード・ポリシーをリソース・オブジェクトにアタッチできません。このルールに対する例外は、**Xellerate User** リソース・オブジェクトです。リソース・オブジェクトのタイプが **Order for Organization** の場合でも、パスワード・ポリシーをそのリソース・オブジェクトにアタッチできます。
  - 複数のルールが **True** の場合は、ルールにアタッチされた最も優先順位の高いパスワード・ポリシーが適用されます。
  - **Oracle Identity Manager** には、事前定義済みのデフォルト・ルールがあります。このルールは常に **True** に評価されます。**Rule Designer** でルールが作成されていない場合は、デフォルト・ルールにパスワード・ポリシーをアタッチできます。
- 
- 

### リソース・オブジェクトからのパスワード・ポリシー・ルールの削除

リソース・オブジェクトからパスワード・ポリシーを削除するには、次の手順を実行します。

1. パスワード・ポリシー・ルールを選択します。
2. 「Delete」をクリックします。  
パスワード・ポリシー・ルールがリソース・オブジェクトから削除されます。

### 5.5.2.9 「User-Defined Fields」 タブ

このタブは、「Resource Objects」フォームで作成されたユーザー定義フィールドを表示およびアクセスするために使用します。作成されたユーザー定義フィールドはこのタブに表示され、データを入出力することができます。

**関連項目：**既存の Oracle Identity Manager フォームでユーザー定義フィールドを作成する方法の詳細は、7-9 ページの「[「User Defined Field Definition」 フォーム](#)」を参照してください。

### 5.5.2.10 「Process」 タブ

「Process」タブには、現在のリソース・オブジェクトに関連付けられているすべての承認およびプロビジョニング・プロセスが表示されます。このタブにある「Default」チェック・ボックスは、どの承認プロセスまたはプロビジョニング・プロセスがリソースのデフォルトであるかを示します。

**注意：**承認プロセスおよびプロビジョニング・プロセスを作成して、「Process Definition」フォームを使用してリソースに関連付けます。各プロセスは「Resource Object」フォームの「Process Determination Rules」タブを使用してプロセス決定ルールにリンクすることができます。

たとえば、Solaris リソース・オブジェクトに1つの承認プロセスと1つのプロビジョニング・プロセス（Provision Solaris for Devel.）が関連付けられている場合を考えます。Provision Solaris for Devel. は、このリソース・オブジェクトのデフォルトのプロビジョニング・プロセスに指定されています。

### 5.5.2.11 「Object Reconciliation」 タブ

「Object Reconciliation」タブの「Object Initial Reconciliation Date」フィールドに、リソースに対して最初のリコンシリエーションが実行された日付が表示されます。

**注意：**最初のリコンシリエーションの目的は、ターゲット・システムのすべてのユーザー・アカウントを Oracle Identity Manager に組み込むことです。

「Object Initial Reconciliation Date」フィールドに格納された日付値は、最初のリコンシリエーションと後続のリコンシリエーション・イベントを区別するために使用されます。この日付値は、リリース 9.1.0 で導入された2つの例外レポートで使用されます。これらの例外レポートには、ユーザーが実際にターゲット・システムで保持しているものと比較して、保持する必要がある権限における差異が表示されます。権限における差異は、リコンシリエーション・データとともに他のデータ項目を使用して特定されます。例外レポートは、「Object Initial Reconciliation Date」フィールドに格納された日付より後に作成されたリコンシリエーション・イベントにのみ関連付けられたデータを返します。また、例外データは、「Object Initial Reconciliation Date」フィールドに過去の日付値が表示されている場合にのみ生成されます。必要に応じて、例外レポートが生成されるようにこのフィールドに日付値を入力できます。

「Object Reconciliation」タブには、「Reconciliation Fields」と「Reconciliation Action Rules」の2つのサブタブがあります。

- 「Reconciliation Fields」タブは、Oracle Identity Manager の情報とリコンサイルされる（マッピングなど）ターゲット・リソースまたは信頼できるソース上のフィールドを定義するために使用されます。
- 「Reconciliation Action Rules」タブは、個別の一致基準に適合したときに Oracle Identity Manager が実行するアクションを指定するために使用されます。

## 「Reconciliation Fields」 タブ

このタブは、Oracle Identity Manager の情報とリコンサイルされる（マッピングなど）ターゲット・リソースまたは信頼できるソース上のフィールドを定義するために使用されます。ターゲット・システムまたは信頼できるソースの各フィールドには、次の情報がリストされません。

- Oracle Identity Manager でデータとリコンサイルされるターゲット・リソースまたは信頼できるソースの名前（たとえば、targetfield1）。
- フィールドに関連付けられているデータ型（たとえば、String）。可能な値は、multi-valued、string、number、date、IT resource です。
- リコンシリエーション・イベントでこのフィールドが必須かどうかを示すインジケータ。

---

**注意：**「Reconciliation Manager」フォームの「Reconciliation Data」タブですべてのフィールドが処理されるまで、Oracle Identity Manager はプロビジョニング・プロセス、ユーザーまたは組織とリコンシリエーション・イベントとの照合を開始しません。

---

次にターゲット・システム・フィールド定義の例を示します。

TargetField1 [String], Required

「Reconciliation Fields」タブでは、次の操作を実行できます。

- 「Reconciliation」フィールドの追加

次の手順を実行すると、ターゲット・システムまたは信頼できるソースから、Oracle Identity Manager の情報とリコンサイルされるフィールドのリストに、フィールドが追加されます。信頼できるソースの場合、これはユーザー・リソース定義である必要があります。

---

**注意：**Oracle Identity Manager で外部ターゲット・リソースまたはターゲット・ソースとのリコンシリエーションを正常に実行するためには、リソースのデフォルト・プロビジョニング・プロセスの「Field Mappings」タブを使用して、このタブで定義したフィールドを、適切な Oracle Identity Manager フィールドにマップする必要があります。

---

リコンシリエーション・フィールドを追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Add Field」をクリックします。
 

「Add Reconciliation Field」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. ターゲット・リソースまたは信頼できるソース上のフィールドの名前を「Field Name」フィールドに入力します。
 

これは、Oracle Identity Manager でターゲット・リソースまたは信頼できるソースのフィールドを参照する名前です。
3. 「Field Type」フィールドのメニューから、次の値の1つを選択します。
  - Multi-Valued
 

これは1つ以上のコンポーネント・フィールドを含むフィールドで使用します。
  - String
  - Number
  - Date
  - IT resource

リコンシリエーション・イベントの作成時にこのフィールドが受け取る値は、Oracle Identity Manager に定義された IT リソースの名前と同じである必要があります。

4. 「Required」 チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択した場合は、リコンシリエーション・フィールドが「Reconciliation Manager」フォームの「Reconciliation Data」タブで処理されていないと、Oracle Identity Manager は、プロビジョニング・プロセス、ユーザーまたは組織をリコンシリエーション・イベントに一致させる作業を開始できません。このチェック・ボックスの選択を解除した場合、リコンシリエーション・イベントでこのフィールドを処理できなくても、一致作業は開始されます。

5. 「Save」 をクリックします。

フィールドは、リソースのデフォルトのプロビジョニング・プロセスでのマッピングに使用できます。

■ 「Reconciliation」 フィールドの削除

次の手順を実行すると、ターゲットのシステム・フィールドが、Oracle Identity Manager の情報とリコンサイルされたフィールドのリストから削除されます。信頼できるソースの場合、これはユーザー・リソース定義である必要があります。

リコンシリエーション・フィールドを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するフィールドを選択します。

2. 「Delete Field」 をクリックします。

選択されたフィールドが、Oracle Identity Manager がターゲット・システム上のデータとリコンサイルするフィールドのリストから削除されます（ターゲット・システム自体のデータには影響しません）。

## 「Reconciliation Action Rules」 タブ

このタブを使用すると、リコンシリエーション・イベント・レコード内に複数の一致があるときに、Oracle Identity Manager が実行するアクションを指定できます。このタブの各レコードは次の組合せです。

- 一致条件基準
- 実行するアクション

選択する条件とアクションは事前に定義されています。一致条件によっては適用できないアクションもあります。表 5-7 に、使用できるオプションの詳細なリストを示します。

表 5-7 ルール条件と可能なルール・アクション

ルール条件	可能なルール・アクション
No matches found	None
	Assign to Administrator with Least Load
	Assign to Authorizer with Highest Priority
	Assign to Authorizer with Least Load
	Assign to User
	Assign to Group
	Create User (信頼できるソースでのみ使用可能)

表 5-7 ルール条件と可能なルール・アクション (続き)

ルール条件	可能なルール・アクション
One Process Match Found	None
	Assign to Administrator with Least Load
	Assign to Authorizer with Highest Priority
	Assign to Authorizer with Least Load
	Assign to User
	Assign to Group
	Establish Link
Multiple Process Matches Found	None
	Assign to Administrator with Least Load
	Assign to Authorizer with Highest Priority
	Assign to Authorizer with Least Load
	Assign to User
	Assign to Group
One Entity Match Found	None
	Assign to Administrator with Least Load
	Assign to Authorizer with Highest Priority
	Assign to Authorizer with Least Load
	Assign to User
	Assign to Group
	Establish Link
Multiple Entity Matches Found	None
	Assign to Administrator with Least Load
	Assign to Authorizer with Highest Priority
	Assign to Authorizer with Least Load
	Assign to User
	Assign to Group

**関連項目：** 前述の表に示したユーザーやグループの分類タイプの説明は、6-32 ページの「[Editing Task ウィンドウの「Assignment」タブ](#)」を参照してください。

#### リコンシリエーション・アクション・ルールの追加

リコンシリエーション・アクション・ルールを追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Add Field」をクリックします。  
「Add a new Action Rule」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「Rule Condition」メニューから、設定する値を選択します。  
これは、関連付けられた処理が実行されるようにする一致条件です。各一致条件は、1つのルール・アクションにのみ割り当てることができます。
3. 「Rule Action」メニューから値を選択します。  
これは、一致条件が満たされたときに実行されるアクションです。
4. 「Save」をクリックし、「Add a new Action Rule」ダイアログ・ボックスを閉じます。

### リコンシリエーション・アクション・ルールの削除

リコンシリエーション・アクション・ルールを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除する一致アクションの組合せを選択します。
2. 「Delete」をクリックします。

リコンシリエーション・アクション・ルールが削除され、条件に関連付けられているアクションが自動的に実行されなくなります。

## 5.5.3 複数の信頼できるソースのリコンシリエーション

以前のリリースでは、アイデンティティをリコンサイルするために信頼できるソースとして設定できるのは、Xellerate User リソース・オブジェクトのみでした。現在では、Xellerate User リソース・オブジェクトおよびプロセス定義に対して、リコンシリエーション・フィールド、リコンシリエーション・アクション・ルール、フィールド・マッピングおよび一致ルールを作成することで、これを達成できるようになりました。

アイデンティティをリコンサイルして OIM ユーザーを作成するための元となる信頼できるソースが 2 つある場合は、両方の信頼できるソースに対して単一のリソース・オブジェクト (Xellerate User) を構成することはできません。両方の信頼できるソースに対してリコンシリエーション・フィールドを Xellerate User リソース・オブジェクトに作成したとしても、対応するリコンシリエーション・フィールド・マッピングを Xellerate User プロセス定義に作成することはできません。

リリース 9.1.0 からは、Xellerate User 以外のリソース・オブジェクトを、アイデンティティのリコンシリエーション用の信頼できるソースとして構成できます。この構成を行うには、リソース・オブジェクトを作成する際に「Resource Objects」フォームの「Trusted Source」チェック・ボックスを選択します。

Trusted Source フラグがアタッチされたリソース・オブジェクトには、ターゲット・システム・フィールドを示すリコンシリエーション・フィールドを複数作成できます。また、リコンシリエーション・アクション・ルールを構成して、プロセス一致が検出されない場合に、アイデンティティ作成のためにユーザーを作成したり、管理者または認可者にデータを送信したりすることもできます。プロセス一致が検出された場合は、リンクが確立されます。

信頼できるソースのリソースに対するプロビジョニング・プロセスを定義する場合は、ユーザー定義フォームをアタッチしないでください。このようなプロビジョニング・プロセスでは、リソースに定義されたリコンシリエーション・フィールドと OIM ユーザーの属性の間にリコンシリエーション・フィールド・マッピングを作成できます。

---

**注意：** リソース・オブジェクトがターゲット・リソースのリコンシリエーション用である場合は、マッピングはリコンシリエーション・フィールドとプロセス・データ・フィールドとの間に作成されます。

信頼できるソースとして定義されたリソース・オブジェクトをプロビジョニング・アクティビティに使用しないでください。これらのリソースは、OIM ユーザーのリコンシリエーションでのみ使用します。

---

このリリースにおけるもう 1 つの追加機能は、属性を信頼できるソースです。これは、アイデンティティそのものではなく、アイデンティティの属性に対してのみ信頼できるソースを意味します。属性を信頼できるソースのリコンシリエーションは、適切なリコンシリエーション・アクション・ルールを作成することで構成できます。プロセス一致が検出されない場合は、管理者に割り当てられます。これにより、一致が検出されなくても、ユーザーが誤って作成されません。プロセス一致が検出された場合は、リコンシリエーション・アクション・ルールによってリンクが確立されます。

次の各項では、複数の信頼できるソースのリコンシリエーションを実装できる2つの使用例について説明します。

---



---

**注意：** このマニュアルでは、次のような箇所があります。

- 複数の信頼できるソースのリコンシリエーションを MTS と呼びます。
  - フィールドおよび属性という語が同じ意味で使用されています。
- 
- 

### 5.5.3.1 MTS 互換コネクタを使用した複数の信頼できるソースのリコンシリエーション

---



---

**注意：** 使用するコネクタが MTS 互換であるかどうかを判別するには、コネクタ固有のドキュメントを参照してください。

---



---

次の各項では、MTS 互換コネクタを使用して複数の信頼できるソースのリコンシリエーションを実装できる使用例について説明します。

- ユーザー・タイプによる信頼できるソースのリコンシリエーション用の MTS 互換コネクタの構成
- 特定の OIM ユーザーの属性の信頼できるソースのリコンシリエーション用の MTS 互換コネクタの構成

#### ユーザー・タイプによる信頼できるソースのリコンシリエーション用の MTS 互換コネクタの構成

ここでは、ユーザー・タイプとは、リコンサイルするレコードを所有するユーザーのタイプを指します。ユーザー・タイプには、たとえば Employee や Customer があります。

ユーザー・タイプによって信頼できるソースのリコンシリエーションを実装するには、信頼できるソースとして構成する各ターゲット・システムのコネクタのデプロイ時に、信頼できるソースのリコンシリエーションを実装する手順を実行します。

リコンシリエーション時に、指定されたユーザー・タイプのターゲット・システム・レコードはすべてリコンサイルされます。ターゲット・システムに複数のユーザー・タイプがある場合は、Limited Reconciliation 機能を使用すると、各ターゲット・システムからリコンサイルする必要があるレコードのユーザー・タイプを指定できます。

#### 特定の OIM ユーザーの属性の信頼できるソースのリコンシリエーション用の MTS 互換コネクタの構成

複数のターゲット・システムから特定の OIM ユーザーの属性用に信頼できるソースのリコンシリエーションを構成することもできます。これを実装する手順は、次の使用例を利用して説明します。

あるターゲット・システム（たとえば、TS1）からアイデンティティをリコンサイルし、これらのアイデンティティの特定の属性（たとえば、attr1、attr2 および attr3）を別のターゲット・システム（たとえば、TS2）からリコンサイルします。つまり、TS1 はアイデンティティに対する信頼できるソースであり、TS2 はこれらのアイデンティティそのものではなく、アイデンティティの特定の属性に対する信頼できるソースです。TS1 は、OIM ユーザーを正常に作成するために、OIM ユーザーの必須属性をすべて提供する必要があります。TS2 は、TS2 が信頼できるソースである OIM ユーザーの属性（必須または任意の OIM ユーザーの属性）のみを提供します。OIM ユーザーの必須属性を TS2 からリコンサイルする場合は、この属性の値により、OIM ユーザーが TS1 から作成された後のこの属性に含まれる値は上書きされます。OIM ユーザーの任意属性のみを TS2 からリコンサイルする場合は、OIM ユーザーの作成時に、TS1 からこれらの属性をリコンサイルしなくてもかまいません。

TS1 コネクタの場合：

1. TS1 コネクタをデプロイし、信頼できるソースのリコンシリエーション用に構成するために必要な手順をすべて実行します。

**関連項目：** 信頼できるソースのリコンシリエーションを構成する手順の詳細は、デプロイするコネクタ用のドキュメントを参照してください。

2. 「Object Reconciliation」 ページの「Reconciliation Fields」 タブで、TS2 からリコンサイルする TS1 の属性（この場合は、attr1、attr2 および attr3）をすべて削除します。
3. 「Process Definition」 ページの「Reconciliation Field Mappings」 タブで、残しておくもの以外のマッピングをすべて削除します。

リコンシリエーション・フィールドを削除するかわりに、リコンシリエーション時に作成される OIM ユーザーに値をリコンサイルしないフィールドのリコンシリエーション・フィールド・マッピングを削除することもできます。

4. 「Object Reconciliation」 ページの「Reconciliation Action Rules」 タブで、次のルール条件およびアクション・マッピングが存在することを確認します。

Rule Condition: No Matches Found

Action: Create User

TS2 コネクタの場合：

1. TS2 コネクタをデプロイし、信頼できるソースのリコンシリエーション用に構成するために必要な手順をすべて実行します。

**関連項目：** 信頼できるソースのリコンシリエーションを構成する手順の詳細は、デプロイするコネクタ用のドキュメントを参照してください。

2. 「Object Reconciliation」 ページの「Reconciliation Fields」 タブで、attr1、attr2 および attr3 以外の TS2 の属性をすべて削除します。また、OIM ユーザーを既存の TS2 のアカウントと一致させるために使用する属性を残しておきます。つまり、リコンシリエーション・ルールの評価に使用する属性のみを残しておきます。たとえば、Oracle Identity Manager の username 属性を使用して、TS1 の first name 属性の値と一致させます。

3. 「Process Definition」 ページの「Reconciliation Field Mappings」 タブで、残しておくもの以外のマッピングをすべて削除します。

リコンシリエーション・フィールドを削除するかわりに、リコンシリエーション時に作成される OIM ユーザーに値をリコンサイルしないフィールドのリコンシリエーション・フィールド・マッピングのみを削除することもできます。

4. 「Object Reconciliation」 ページの「Reconciliation Action Rules」 タブで、ルール条件およびアクション・マッピングを作成します。これらのルール条件 / アクション・マッピングの 1 つは、次のとおりである必要があります。

Rule Condition: No Matches Found

Action: Create User 以外のもの

### 5.5.3.2 MTS 互換ではないコネクタを使用した複数の信頼できるソースのリコンシリエーション

---

**注意：** 使用するコネクタが MTS 互換であるかどうかを判別するには、コネクタ固有のドキュメントを参照してください。

---

MTS 互換ではないコネクタの場合、複数の信頼できるソースのリコンシリエーションの設定でコネクタを使用するには、次の前提条件に対処する必要があります。

- i. 信頼できるソース・リソース・オブジェクトのうち、Xellerate User にできるのは1つのみです。使用する動作環境で、Xellerate User リソース・オブジェクトが、すでに信頼できるソースのリコンシリエーション用にコネクタで使用されている場合、構成する信頼できるソース・コネクタに対して、新しいリソース・オブジェクトとプロセス定義を作成する必要があります。
- ii. コネクタのスケジュール済タスクには、信頼できるソース・ユーザーのリコンシリエーションに使用されるリソース・オブジェクトの名前をその値として受け入れる属性が必要です。

次の各項では、非 MTS 互換コネクタを使用して複数の信頼できるソースのリコンシリエーションを実装できる使用例について説明します。

- ユーザー・タイプによる信頼できるソースのリコンシリエーション用の非 MTS 互換コネクタの構成
- 特定の OIM ユーザーの属性の信頼できるソースのリコンシリエーション用の非 MTS コネクタの構成

#### ユーザー・タイプによる信頼できるソースのリコンシリエーション用の非 MTS 互換コネクタの構成

ここでは、ユーザー・タイプとは、リコンサイルするレコードを所有するユーザーのタイプを指します。ユーザー・タイプには、たとえば、Contractor や Employee、Customer があります。

Microsoft Active Directory および Oracle e-Business Suite を信頼できるソースとして動作環境で使用します。Active Directory は、Contractor ユーザー・タイプに属するアイデンティティに関する情報の格納に使用します。Oracle e-Business Suite は、Customer および Employee ユーザー・タイプに属するアイデンティティに関する情報の格納に使用します。Contractor のレコードを Active Directory から、Employee のレコードを Oracle e-Business Suite からリコンサイルします。そのためには、次の手順を実行します。

Active Directory の場合：

1. Active Directory コネクタをデプロイし、信頼できるソースのリコンシリエーション用に構成するために必要な手順をすべて実行します。

**関連項目：** 信頼できるソースのリコンシリエーションを構成する手順の詳細は、デプロイするコネクタ用のドキュメントを参照してください。

信頼できるソースのリコンシリエーション用にコネクタ XML ファイルをインポートすると、Active Directory 固有の情報が Xellerate User リソース・オブジェクトおよびプロセス定義に追加されます。

2. 「Resource Object」 タブで、Active Directory を指定して信頼できるソースのリコンシリエーション用に ActDir リソース・オブジェクトを作成します。

---

**注意：** リソース・オブジェクトには、どのような名前でも割り当てることができます。この手順では、リソース・オブジェクトに割り当てられる名前として ActDir を使用します。

リソース・オブジェクトの作成手順の詳細は、5-14 ページの「[「Resource Objects」 フォーム](#)」を参照してください。

---

リソース・オブジェクトの作成時に、次の操作を実行します。

- a. 「Resource Object」 タブで 「Trusted Source」 チェック・ボックスを選択します。
  - b. 「Object Reconciliation」 → 「Reconciliation Fields」 タブで Xellerate User リソース・オブジェクトを参照し、リコンサイルする Active Directory 固有のフィールドを ActDir に追加します。OIM ユーザーの必須フィールドはすべて、このタブで追加するフィールドで網羅される必要があります。
3. 「Object Reconciliation」 → 「Reconciliation Action Rules」 タブで、ルール条件およびアクション・マッピングを作成します。これらのルール条件 / アクション・マッピングの1つは、次のとおりである必要があります。

Rule Condition: No Matches Found

Action: Create User

4. Active Directory 固有のフィールドおよび対応するルールを Xellerate User リソース・オブジェクトから削除します。
5. 「Process Definition」 フォームで ActDir プロセス定義を作成します。  
プロセス定義の作成手順の詳細は、6-7 ページの 「「Process Definition」 フォーム」 を参照してください。Xellerate User プロセス定義のリコンシリエーション・フィールド・マッピングに基づいて、「Reconciliation Field Mappings」 タブで、ActDir プロセス定義用のリコンシリエーション・フィールド・マッピングを追加します。
6. Xellerate User リソース・オブジェクトで Active Directory 固有のフィールド・マッピングを削除します。
7. 「Reconciliation Rules」 ページの 「Reconciliation Rule Builder」 フォームで、このコネクタのリコンシリエーション・ルールを問い合せて開き、「Object」 フィールドの値を作成したリソース・オブジェクトに変更します。デフォルトでは、このフィールドの値は、Xellerate User リソース・オブジェクトの値にマップされています。

Oracle e-Business Suite に対し、Active Directory に対して実行した手順をすべて繰り返します。Oracle e-Business の Employee Reconciliation コネクタに対しては、その手順の次のステップを別の実行します。

1. 「Resource Object」 タブで、Oracle e-Business Suite を指定して信頼できるソースのリコンシリエーション用に EmpRecon リソース・オブジェクトを作成します。

---

**注意：** リソース・オブジェクトに名前を割り当てることができます。この手順では、リソース・オブジェクトに割り当てられる名前として EmpRecon を使用します。

---

2. 「Object Reconciliation」 → 「Reconciliation Action Rules」 タブで、ルール条件およびアクション・マッピングを作成します。これらのルール条件 / アクション・マッピングの1つは、次のとおりである必要があります。

Rule Condition: No Matches Found

Action: Create User

Limited Reconciliation 機能を使用して、Employee ユーザー・タイプに属するアイデンティティのみをリコンサイルする必要があることを指定します。

3. フィールドおよびリコンシリエーション・ルールを追加したら、Xellerate User リソース・オブジェクトに作成された Oracle e-Business Suite 固有のフィールドおよび対応するルールを削除します。
4. 「Process Definition」 フォームで EmpRecon プロセス定義を作成します。プロセス定義の作成手順の詳細は、6-7 ページの 「「Process Definition」 フォーム」 を参照してください。Xellerate User のリコンシリエーション・フィールド・マッピングに基づいて、「Reconciliation Field Mappings」 タブで、EmpRecon プロセス定義用のフィールド・マッピングを追加します。

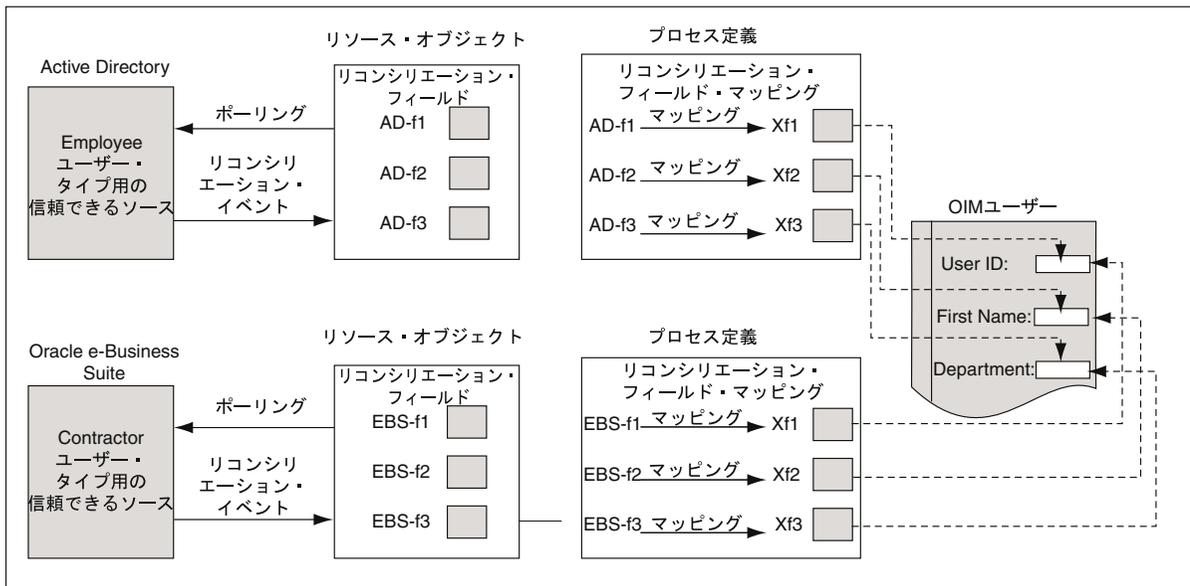
5. Xellerate User リソース・オブジェクトで Oracle e-Business Suite 固有のフィールド・マッピングを削除します。
6. 「Reconciliation Rules」 → 「Reconciliation Rule Builder」 フォームで、このコネクタのリコンシリエーション・ルールを問い合せて開き、「Object」フィールドの値を作成したリソース・オブジェクトに変更します。デフォルトでは、このフィールドの値は、Xellerate User リソース・オブジェクトの値にマップされています。

Active Directory と Oracle e-Business Suite の両方に対して、信頼できるソースのリコンシリエーションの構成に必要な残りの手順を実行します。たとえば、コネクタごとにリコンシリエーションのスケジュール済タスクを構成する際に、信頼できるソース・ユーザーのリコンシリエーション時に使用する必要がある信頼できるソース・リソース・オブジェクトの名前を指定します。

スケジュール済タスク属性の現在の値は Xellerate User であるため、該当するコネクタに対して信頼できるソース・ユーザーのリコンシリエーション用に構成された新しいリソース・オブジェクトの名前で更新する必要があります。

図 5-7 に、ユーザー・タイプに基づいた信頼できるソースのリコンシリエーションの設計時の実装を示します。

図 5-7 ユーザー・タイプによる信頼できるソースのリコンシリエーション



#### 特定の OIM ユーザーの属性の信頼できるソースのリコンシリエーション用の非 MTS コネクタの構成

複数のターゲット・システムから特定の OIM ユーザーの属性用に信頼できるソースのリコンシリエーションを構成することもできます。これを実装する手順は、次の使用例を利用して説明します。

Microsoft Active Directory および IBM Lotus Notes をターゲット・システムとして使用します。Active Directory からアイデンティティをリコンサイルし、(Active Directory から Oracle Identity Manager にリコンサイルされた) 各アイデンティティの e-mail address 属性の値のみを Lotus Notes からリコンサイルします。そのためには、次の手順を実行します。

Active Directory コネクタの場合：

1. Active Directory コネクタをデプロイし、信頼できるソースのリコンシリエーション用に構成するために必要な手順をすべて実行します。

**関連項目：** 信頼できるソースのリコンシリエーションを構成する手順の詳細は、デプロイするコネクタ用のドキュメントを参照してください。

信頼できるソースのリコンシリエーション用にコネクタ XML ファイルをインポートすると、Active Directory 固有の情報が Xellerate User リソース・オブジェクトおよびプロセス定義に追加されます。

2. 「Resource Object」タブで、Active Directory を指定して信頼できるソースのリコンシリエーション用に ActDir リソース・オブジェクトを作成します。

---



---

**注意：**

リソース・オブジェクトには、どのような名前でも割り当てることができます。この手順では、リソース・オブジェクトに割り当てられる名前として ActDir を使用します。

リソース・オブジェクトの作成手順の詳細は、5-14 ページの「[「Resource Objects」 フォーム](#)」を参照してください。

---



---

リソース・オブジェクトの作成時に、次の操作を実行します。

- i. 「Resource Object」タブで「**Trusted Source**」チェック・ボックスを選択します。
  - ii. 「Object Reconciliation」→「Reconciliation Fields」タブで Xellerate User リソース・オブジェクトを参照し、リコンサイルする Active Directory 固有のフィールドを ActDir に追加します。OIM ユーザーの必須フィールドはすべて、このタブで追加するフィールドで網羅される必要があります。
3. 「Object Reconciliation」→「Reconciliation Action Rules」タブで、ルール条件およびアクション・マッピングを作成します。これらのルール条件 / アクション・マッピングの1つは、次のとおりである必要があります。

Rule Condition: No Matches Found

Action: Create User

4. Active Directory 固有のフィールドおよび対応するルールを Xellerate User リソース・オブジェクトから削除します。
5. 「Process Definition」フォームで ActDir プロセス定義を作成します。プロセス定義の作成手順の詳細は、6-7 ページの「[「Process Definition」 フォーム](#)」を参照してください。Xellerate User プロセス定義のリコンシリエーション・フィールド・マッピングに基づいて、「Reconciliation Field Mappings」タブで、ActDir プロセス定義用のフィールド・マッピングを作成します。
6. Xellerate User リソース・オブジェクトで Active Directory 固有のフィールド・マッピングを削除します。
7. 「Reconciliation Rules」→「Reconciliation Rule Builder」フォームで、このコネクタのリコンシリエーション・ルールを問い合せて開き、「Object」フィールドの値を作成したリソース・オブジェクトに変更します。デフォルトでは、このフィールドの値は、Xellerate User リソース・オブジェクトの値にマップされています。

IBM Lotus Notes に対し、Active Directory に対して実行した手順をすべて繰り返します。Lotus Notes コネクタに対しては、その手順の次のステップを別々に実行します。

1. 「Resource Object」タブで、Lotus Notes を指定して信頼できるソースのリコンシリエーション用に LotNotes リソース・オブジェクトを作成します。

---



---

**注意：** リソース・オブジェクトに名前を割り当てることができます。この手順では、リソース・オブジェクトに割り当てられる名前として LotNotes を使用します。

---



---

2. リソース・オブジェクトを作成する際に、e-mail address 属性のみを追加します。

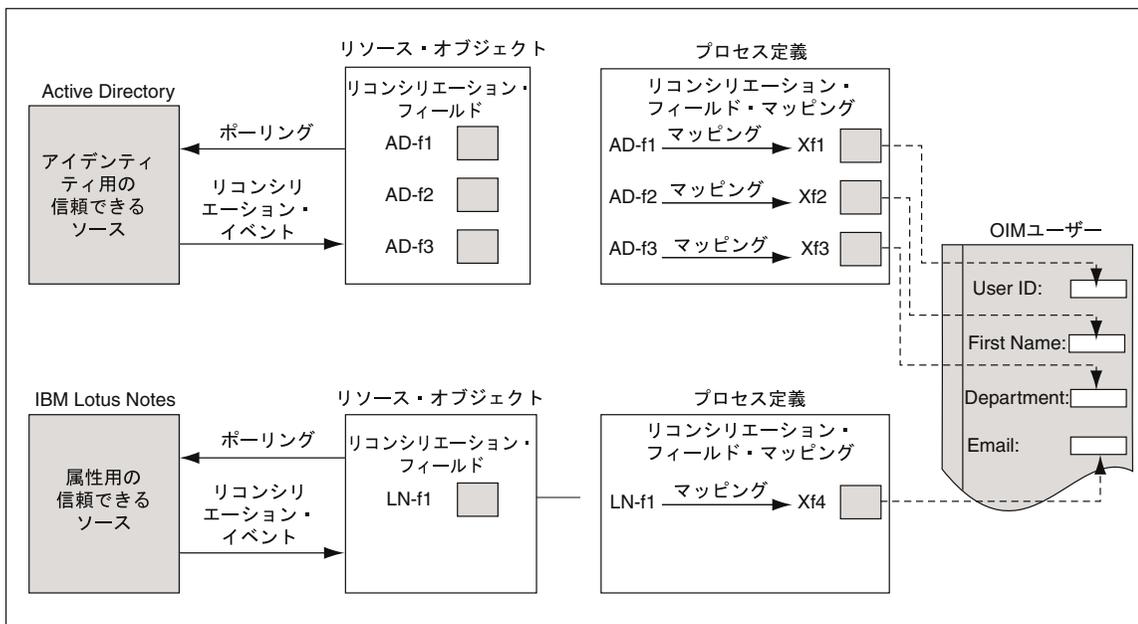
3. 「Object Reconciliation」 → 「Reconciliation Action Rules」 タブで、ルール条件およびアクション・マッピングを作成します。一致が検出されない場合の、ユーザーの作成以外のルール条件を作成します。一致が検出された場合は、リンクが確立されます。
4. フィールドおよびリコンシリエーション・ルールを追加したら、Xellerate User リソース・オブジェクトに作成された Lotus Notes 固有のフィールドおよび対応するルールを削除します。
5. 「Process Definition」 フォームで Lotus Notes プロセス定義を作成します。プロセス定義の作成手順の詳細は、6-7 ページの「「Process Definition」 フォーム」を参照してください。Xellerate User のリコンシリエーション・フィールド・マッピングに基づいて、「Reconciliation Field Mappings」 タブで、Lotus Notes プロセス定義用のフィールド・マッピングを追加します。
6. Xellerate User リソース・オブジェクトで Lotus Notes 固有のフィールド・マッピングを削除します。

Active Directory と Lotus Notes の両方に対して、信頼できるソースのリコンシリエーションの構成に必要な残りの手順を実行します。たとえば、コネクタごとにリコンシリエーションのスケジュール済タスクを構成する際、リコンシリエーション時に使用する必要がある信頼できるソース・リソース・オブジェクトの名前を指定します。

スケジュール済タスク属性の現在の値は Xellerate User であるため、該当するコネクタに対して信頼できるソース・ユーザーのリコンシリエーション用に構成された新しいリソース・オブジェクトの名前で更新する必要があります。

図 5-8 に、特定の OIM ユーザーの属性の信頼できるソースのリコンシリエーションの設計時の実装を示します。

図 5-8 特定の OIM ユーザーの属性に対する信頼できるソースのリコンシリエーション



## 5.6 サービス・アカウントの管理

Oracle Identity Manager では、サービス・アカウントがサポートされています。サービス・アカウントは、メンテナンス目的で使用される汎用の管理者アカウント（たとえば、`admin1`、`admin2`、`admin3` など）で、通常は複数のユーザーにより共有されます。サービス・アカウントの管理とプロビジョニングのモデルは、通常のプロビジョニングと多少異なります。

サービス・アカウントは、通常のアカウントと同様に、リクエスト、プロビジョニングおよび管理できます。また、通常のアカウントと同じリソース・オブジェクト、プロビジョニング・プロセス、およびプロセス・フォームとオブジェクト・フォームを使用します。サービス・アカウントは内部フラグで通常のアカウントと区別されます。

ユーザーに対してサービス・アカウントがプロビジョニングされると、Oracle Identity Manager はそのユーザーの ID からサービス・アカウントへのマッピングを管理します。リソースが失効するかユーザーが削除されても、サービス・アカウントのプロビジョニング・プロセスは取り消されません（取り消されると、取消しタスクが起動されます）。かわりに、プロビジョニング・プロセスにタスクが挿入されます（Oracle Identity Manager での「Disable」および「Enable」アクションの処理と同様です）。このタスクは、ユーザーからサービス・アカウントへのマッピングを削除し、サービス・アカウントを、使用できるアカウントのプールに戻します。

この管理機能は API を通じて使用できます。



# 6

---

---

## プロセス管理

この章では、Design Console を使用したプロセス管理について説明します。次の内容について説明します。

- プロセス管理の概要
- 「Email Definition」 フォーム
- 「Process Definition」 フォーム

## 6.1 プロセス管理の概要

「Process Management」フォルダには、Oracle Identity Manager プロセスおよび電子メール・テンプレートを作成、管理するためのツールがあります。

このフォルダには次のフォームがあります。

- **Email Definition:** このフォームを使用して電子メール通知のテンプレートを作成できます。
- **Process Definition:** このフォームは、承認プロセスとプロビジョニング・プロセスを作成および管理するために使用されます。また、ワークフロー定義をグラフィック表現で表示するワークフロー定義レンダラを起動することも可能になります。

## 6.2 「Email Definition」 フォーム

図 6-1 に示す「Email Definition」フォームは「Process Management」フォルダにあります。このフォームは、電子メール通知のテンプレートを作成するために使用します。これらの通知は、次の場合にユーザーに送信されるように設定できます。

- タスクがユーザーに割り当てられた場合
- タスクが特定のステータスになった場合
- リクエストが承認された場合（標準承認プロセスのステータスは Completed になります。）

図 6-1 「Email Definition」 フォーム

The screenshot shows the 'Email Definition' form with the following details:

- Name:** Self Registration
- Type:** Request Related (selected)
- Variables:** Targets and Variables dropdowns
- Object Name:** (empty)
- Language:** en
- Process Name:** (empty)
- Region:** US
- From:** Requester (dropdown)
- User Login:** XE\_SYSADM
- Subject:** Self-registration request received
- Body:** Thank you for registering yourself with Oracle Corporation. Your request number is <Request Information.Request ID>. Please use this to track your request.

「Process Definition」フォームの「Assignment」タブを使用して、電子メール定義を適用します。

図 6-1 に、電子メール定義が作成されています。Request ID 電子メール変数に示されたリクエストが承認されると、リクエストを作成したユーザーまたはリクエストに、ユーザー SOLO から電子メール通知が送信されます。

## 6.2.1 電子メール・サーバーの指定

「Email Definition」 フォームを使用するためには、Oracle Identity Manager がユーザーに電子メール通知を送るために使用する電子メール・サーバーのアドレスを指定する必要があります。

**関連項目：** 詳細は、7-16 ページの「[System Configuration](#)」フォーム および 5-5 ページの「[IT Resources](#)」フォームを参照してください。

電子メール・サーバーを指定するには、次の手順を実行します。

1. 「System Configuration」 フォームを開きます。
2. **Email Server** プロパティを問い合せて、それが電子メール・サーバーを表すリソース・アセット・インスタンスの名前に設定されていることを確認します。
3. 「IT Resources」 フォームを開き、IT リソースの **Email Server**、またはメール・サーバーに関連付けられているリソース・アセットの別の名前を問い合せます。
4. この IT リソースが表示されたら、電子メール・サーバーの IP アドレスと、このサーバーの使用を検証するユーザーの名前とパスワードを指定します。

## 6.2.2 「Email Definition」 フォーム

表 6-1 に、「Email Definition」 フォームのフィールドの説明を示します。

表 6-1 「Email Definition」 フォームのフィールド

フィールド名	説明
Name	電子メール定義の名前。
Type	この領域には、次の 3 つのオプションがあります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ リクエストまたはプロビジョニング・プロセスに関連した電子メール定義として分類するかどうか。</li> <li>■ 電子メール定義の変数を、リクエストまたはプロビジョニング・プロセスに関連付けるかどうか。</li> <li>■ 電子メール定義の変数を、一般プロセスに関連付けるかどうか。</li> </ul> <p>電子メール定義をプロビジョニング定義に分類する場合、または電子メール変数をプロビジョニング・プロセスに関連付ける場合は、「<b>Provisioning Related</b>」オプションを選択します。</p> <p>電子メール定義をリクエスト定義に分類する場合、または電子メール変数をリクエストに関連付ける場合は、「<b>Request Related</b>」オプションを選択します。</p> <p>電子メール定義を一般通知に分類する場合は、「<b>General</b>」オプションを選択します。</p>
Object Name	この参照フィールドから、電子メール定義が関連するプロビジョニング・プロセスに関連付けられているリソース・オブジェクトを選択します。 <p><b>注意：</b> 電子メール定義を、すべてのリソース・オブジェクトで使用できるようにするには、この参照フィールドを空のままにしておきます。</p>
Process Name	この参照フィールドで、選択したリソース・オブジェクトに割り当てられたプロビジョニング・プロセスを選択します。これは電子メール定義が関連しているプロビジョニング・プロセスです。 <p><b>注意：</b> 「<b>Provisioning Related</b>」オプションが選択されていない場合、「<b>Object Name</b>」および「<b>Process Name</b>」参照フィールドはいずれもグレー表示されます。</p>

表 6-1 「Email Definition」 フォームのフィールド（続き）

フィールド名	説明
Language	この参照フィールドで、電子メール定義に関連付けられている言語を選択します。
Region	この参照フィールドで、電子メール定義の言語に関連付けられているリージョンを選択します。
Targets	電子メール定義の変数のソースを選択します。たとえば、選択する変数が Request Name の場合、選択するソースは Request Information になります。 <b>注意：</b> このボックスに表示される項目は、「Type」領域で選択したオプションを反映しています。
Variables	このボックスから、電子メール定義の変数（たとえば、Request Name）を選択します。このボックスに表示される変数は、「Targets」ボックスで選択した項目を反映しています。 <b>注意：</b> 電子メールの変数およびパラメータの詳細は、『Oracle Identity Manager リファレンス』を参照してください。
From	現在、2つのタイプのユーザーをこのボックスから選択できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>Requester:</b> リクエストを作成したユーザー。</li> <li>■ <b>User:</b> 電子メール・アドレスを持つあらゆる Oracle ユーザー。「Users」フォームの「<b>Contact Information</b>」タブに表示されます。</li> </ul>
User Login	電子メール通知の「From」領域のユーザーの ID。 <b>注意：</b> 「User」項目が「From」ボックスに表示されない場合、「User Login」フィールドはグレー表示されます。
Subject	電子メール定義のタイトル。
Body	電子メール定義の内容。

## 6.2.3 電子メール定義の作成

電子メール定義を作成するには、次の手順を実行します。

1. 「Email Definition」 フォームを開きます。
2. 「Name」フィールドに、電子メール定義の名前を入力します。
3. 電子メール定義をプロビジョニング・プロセスで使用する場合、「**Provisioning Related**」オプションを選択します。電子メール定義をリクエストに関連付ける場合は、「**Request Related**」オプションを選択します。

---

**注意：** 「Request Related」オプションを選択する場合は、電子メール・サーバーの名前が「System Configuration」フォームの **Email Server** プロパティの「Value」フィールドに表示されていることを確認します。

---

4. 「Language」参照フィールドをダブルクリックし、この電子メール定義に関連付ける言語を選択します。
5. 「Region」参照フィールドをダブルクリックし、この電子メール定義の言語に関連付けるリージョンを選択します。

---

**注意：** 電子メール通知は、最初に Oracle Identity Manager をインストールしたときに指定したロケールに基づきます。

---

6. 「Save」 をクリックします。

これで、「Email Definition」 フォームの、他のデータ・フィールドが有効になります。

7. この電子メール定義を特定のリソース・オブジェクトに関連付けるには、「Lookup」ダイアログ・ボックスで「Object Name」参照フィールドをダブルクリックします。次に、この電子メール定義が関連するプロビジョニング・プロセスに関連付けられているリソース・オブジェクトを選択します。

電子メール定義を、すべてのリソース・オブジェクトで使用できるようにするには、この参照フィールドを空のままにしておきます。

8. 「Process Name」参照フィールドをダブルクリックします。

「Lookup」ダイアログ・ボックスで、手順7で選択したリソース・オブジェクトに割り当てられているプロビジョニング・プロセスを選択します。これは電子メール定義が関連しているプロビジョニング・プロセスです。

---

---

**注意：**「Provisioning Related」オプションが選択されていない場合、「Object Name」および「Process Name」参照フィールドはグレー表示されます。

---

---

9. 「From」ボックスをクリックします。

表示されるカスタム・メニューから、電子メール通知の「From」リージョンに表示されるユーザーのタイプ（「Requester」、「User」または「Manager of Provisioned User」）を選択します。

---

---

**注意：**手順3で「Provisioning Related」オプションを選択しなかった場合、「Manager of Provisioned User」項目は「From」ボックスに表示されません。

---

---

10. (オプション) 「From」ボックスで「User」オプションを選択した場合、「User Login」参照フィールドをダブルクリックします。

「Lookup」ダイアログ・ボックスで、電子メール通知の「From」リージョンに表示されるユーザー ID を選択します。

「From」ボックスで「User」項目を選択しなかった場合、「User Login」フィールドはグレー表示されます。

11. 「Subject」フィールドに情報を追加します。

このフィールドには電子メール定義のタイトルが含まれます。

12. 「Body」テキスト領域に情報を追加します。

このテキスト領域には電子メール定義の内容が含まれます。

13. 必要な場合には、「Subject」フィールドと「Body」テキスト領域に電子メール変数を移入します。

次の表に、電子メール定義でカスタマイズできる電子メール変数の説明を示します。

名前	説明
Type	これらのオプションは、電子メール定義の変数をプロビジョニング・プロセスまたはリクエストに関連付けるかどうかを指定します。  電子メール変数をプロビジョニング・プロセスに関連付ける場合、「 <b>Provisioning Related</b> 」オプションを選択します。電子メール変数をリクエストに関連付ける場合、「 <b>Request Related</b> 」オプションを選択します。
Targets	このボックスで、電子メール定義の変数のソースを選択します。たとえば、 <b>Request Name</b> 変数を使用する場合、選択するソースは「 <b>Request Information</b> 」になります。
Variables	このボックスから、電子メール定義の変数（たとえば、 <b>Request Name</b> ）を選択します。

**注意：**「Targets」ボックスのカスタム・メニューで表示される項目は、「**Provisioning Related**」と「**Request Related**」のいずれのラジオ・ボタンを選択しているかにより異なります。同様に、「Variables」ボックスのカスタム・メニューで表示される項目は、「Targets」、「Location Types」および「Contact Types」ボックスに表示される項目に対応して変わります。

14. 「Subject」フィールドまたは「Body」テキスト領域に対応する電子メール変数を作成します。

Subject	<Request Information Request ID> has been approved
Body	Hello, Nikita! <Request Information Request ID> has been approved.

この例では、承認されたリクエストの番号（**Request ID**）が、「Subject」フィールドと「Body」テキスト領域の両方に表示されます。

15. 「Save」をクリックします。

電子メール定義が作成されます。

## 6.3 「Process Definition」 フォーム

プロセスは、Oracle Identity Manager で承認またはプロビジョニングの論理ワークフローを表すメカニズムです。プロセス定義は複数のタスクから構成されています。プロセス・タスクは、プロセスの目的を満たすために完了する必要がある手順を表します。たとえば、承認プロセスでは、タスクは、アクションを実行するために必須である個別の承認を表すことがあります。プロビジョニング・プロセスでは、タスクは、ユーザーまたは組織がターゲット・リソースにアクセスできるようにするために使用されます。

図 6-2 に示す「Process Definition」フォームは「Process Management」フォルダにあります。このフォームは、リソース・オブジェクトに関連付ける承認プロセスやプロビジョニング・プロセスを作成および管理するために使用します。

**注意：** このフォームは、「Request」オブジェクトに関連付けられている標準承認プロセスを管理するためにも使用できます。

図 6-2 「Process Definition」 フォーム

The screenshot shows the Oracle Identity Manager Design Console interface. The left sidebar displays a tree view with 'Process Management' > 'Process Definition' selected. The main window displays the 'Process Definition' form for 'Solaris 8'. The form includes the following fields and options:

- Name: Solaris 8
- Type: Provisioning
- Object Name: Solaris 8
- Form Assignment: Table Name: UD\_SOLARIS
- Buttons: Map Descriptive Field, Render Workflow
- Checkboxes:  Default Process,  Auto Pre-populate,  Auto Save Form

Below the form is a table with the following data:

Tasks	Data Flow	Reconciliation Field Mappings	Administrators
Add	Delete	Task	Default Assig... Event Handler/A... Conditional Required for Co...
		1 Reconciliation Insert Receive	<input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
		2 Reconciliation Update Receive	<input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
		3 Reconciliation Delete Receive	<input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
		4 Service Account Alert	<input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
		5 Service Account Moved	<input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
		6 Service Account Changed	<input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
		7 User Attestation Event Occu	<input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
		8 Resource Attestation Event (	<input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
		9 System Validation	<input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/>

図 6-2 では、Solaris 8 プロビジョニング・プロセスが作成され、Solaris 8 リソース・オブジェクトに割り当てられています。

表 6-2 に、「Process Definition」 フォームのフィールドの説明を示します。

表 6-2 「Process Definition」 フォームのフィールド

フィールド名	説明
Name	プロセスの名前。
Type	プロセス定義の分類タイプ。プロセス定義は、承認プロセスまたはプロビジョニング・プロセスに分類することができます。
Object Name	プロセスの割当て先リソース・オブジェクトの名前。
Map Descriptive Field	このボタンは、インスタンスがリソース・オブジェクトに割り当てられた後、プロセス定義の識別子として使用されるフィールドを選択する場合にクリックします。
Render Workflow	このボタンは、Web ブラウザを起動し、ワークフロー・レンダラ・ツールを使用して現在のワークフロー定義を表示する場合に使用します。
Default Process	<p>このチェック・ボックスは、現在のプロセスを、関連付けられているリソース・オブジェクトのデフォルトの承認プロセスまたはプロビジョニング・プロセスにするかどうかを決定します。</p> <p>プロセスを、割り当てられるリソース・オブジェクトの、デフォルトの承認プロセスまたはプロビジョニング・プロセスに設定するには、このチェック・ボックスを選択します。チェック・ボックスを選択解除した場合は、デフォルトのプロセスになりません。プロセス選択ルールにより選択が発生する場合にのみ呼び出されることとなります。</p>
Auto Save Form	<p>このチェック・ボックスは、このプロビジョニング・プロセスに関連付けられているカスタム・フォームの表示を抑制するか、フォームを表示して、プロセスがインスタンス化されるたびにユーザーがデータを入力できるようにするかを指定します。</p> <p>カスタムのプロセス・フォームで、フォームを表示しないでデータを自動保存するにはこのチェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択する場合、システム定義データを入力するか、確実にアダプタが必須データをフォームに移入するように設定する必要があります。これは、ユーザーがフォームにアクセスすることができなくなるためです。カスタムのプロセス・フォームを表示するには、このチェック・ボックスの選択を解除して、ユーザーがデータをフィールドに入力できるようにします。</p>
Auto Pre-Populate	<p>このチェック・ボックスは、カスタム・フォームのフィールドが、Oracle Identity Manager とユーザーのどちらによって移入されるかを指定します。この設定の対象は、次の 2 タイプのフォームです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ プロセスに関連付けられているフォーム</li> <li>■ 事前移入アダプタがアタッチされているフィールドが含まれるフォーム</li> </ul> <p>「Auto Pre-Populate」チェック・ボックスを選択した場合、関連付けられたカスタム・フォームが表示されると、事前移入アダプタがアタッチされたフィールドにデータが移入されます。</p> <p>このチェック・ボックスの選択を解除した場合、ツールバーの「Pre-Populate」ボタンをクリックするか、手動でデータを入力して、ユーザーがフィールドにデータを移入する必要があります。</p> <p><b>注意：</b>この設定は、事前移入アダプタのトリガーを制御しません。関連付けられたフォーム・フィールドにアダプタの実行により得られる内容を表示するのが、Oracle Identity Manager とユーザーのどちらであるかの決定のみを行います。</p> <p>事前移入アダプタの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』を参照してください。</p> <p><b>注意：</b>このチェック・ボックスは、プロセスに関連付けられるプロセス・フォームを作成した場合にのみ有効で、事前移入アダプタがそのフォームとともに使用されます。</p>
Table Name	プロセス定義に関連付けられているフォームを表す表の名前。

### 6.3.1 プロセス定義の作成

プロセス定義を作成するには、次の手順を実行します。

1. 「Process Definition」 フォームを開きます。
2. 「Name」 フィールドに、プロセス定義の名前を入力します。
3. 「Type」 参照フィールドをダブルクリックします。  
「Lookup」 ダイアログ・ボックスが表示されたら、プロセス定義の分類タイプ（承認またはプロビジョニング）を選択します。
4. 「Object Name」 参照フィールドをダブルクリックします。  
「Lookup」 ダイアログ・ボックスが表示されたら、プロセス定義に関連付けられるリソース・オブジェクトを選択します。
5. (オプション) 割り当てられるリソース・オブジェクトの、デフォルトの承認プロセスまたはプロビジョニング・プロセスに設定するには、「Default Process」 チェック・ボックスを選択します。

現在のプロセス定義をデフォルトにしない場合は、手順 6 に進みます。

6. (オプション) プロビジョニング・プロセスのカスタム・フォームの表示を抑制して、そこにデータを自動保存するには、「Auto Save Form」 チェック・ボックスを選択します。

この設定は、プロビジョニング・プロセスにのみ適用されます。

プロビジョニング・プロセスのカスタム・フォームを表示して、ユーザーに情報の入力を促すには、このチェック・ボックスの選択を解除します。

---

**注意：**「Auto Save Form」 チェック・ボックスを選択する場合は、関連するカスタムのプロセス・フォームのすべてのフィールドに、アダプタが関連付けられていることを確認します。ただし、プロセス・フォームには、プロセス・データ・フロー・マッピングまたは組織デフォルトに対するデフォルトのデータまたはオブジェクトがあることがあります。

アダプタおよびそのカスタム・フォームのフィールドとの関係の詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』を参照してください。

---

7. カスタム・フォームがプロセス定義に関連付けられ、このフォームに含まれるフィールドに事前移入アダプタがアタッチされていて、Oracle Identity Manager がこれらのフィールドにデータを自動的に移入するようにする場合は、「Auto Pre-Populate」 チェック・ボックスを選択します。

(ツールバーの「Pre-Populate」 ボタンをクリックして) このフォームのフィールドに手動でデータを移入する場合、「Auto Pre-Populate」 チェック・ボックスの選択を解除します。

---

**注意：**プロセス定義に、関連付けられたカスタム・フォームがないか、このフォームのフィールドに事前移入アダプタがアタッチされていない場合は、「Auto Pre-Populate」 チェック・ボックスの選択を解除します。事前移入アダプタの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』を参照してください。

---

8. 「Table Name」 参照フィールドをダブルクリックします。

Lookup ウィンドウが表示されたら、プロセス定義に関連付けられているフォームを表す表を選択します。

9. 「Save」 をクリックします。

プロセス定義が作成され、「Map Descriptive Field」 ボタンが有効になります。このボタンをクリックすると「Map Descriptive Field」 ダイアログ・ボックスが表示されます。

このウィンドウから、プロセスのインスタンスがリソース・オブジェクトに割り当てられる際にプロセス定義の識別子として使用されるフィールド（たとえば、「Organization Name」 フィールド）を選択できます。このフィールドとその値が「Reconciliation Manger」 フォームに表示されます。

---

---

**関連項目：** プロセスにカスタムのプロセス・フォームがアタッチされている場合、そのフォーム上のフィールドはこのウィンドウにも表示され、選択できます。

---

---

10. ワークフロー定義をグラフィック表現で表示するには「Render Workflow」 ボタンをクリックします。

ワークフロー・レンダラは、プロセス定義の開発を支援する強力なツールです。

---

---

**注意：** ワークフロー定義レンダラの使用の詳細は、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・ガイド』を参照してください。

---

---

## 6.3.2 「Process Definition」 フォームのタブ

「Process Definition」 フォームを起動してプロセス定義を作成すると、このフォームのタブが使用可能になります。

「Process Definition」 フォームには次のタブが含まれます。

- 「Tasks」 タブ
- 「Data Flow」 タブ
- 「Reconciliation Field Mappings」 タブ
- 「Administrators」 タブ

それぞれのタブについて、次の各項で説明します。

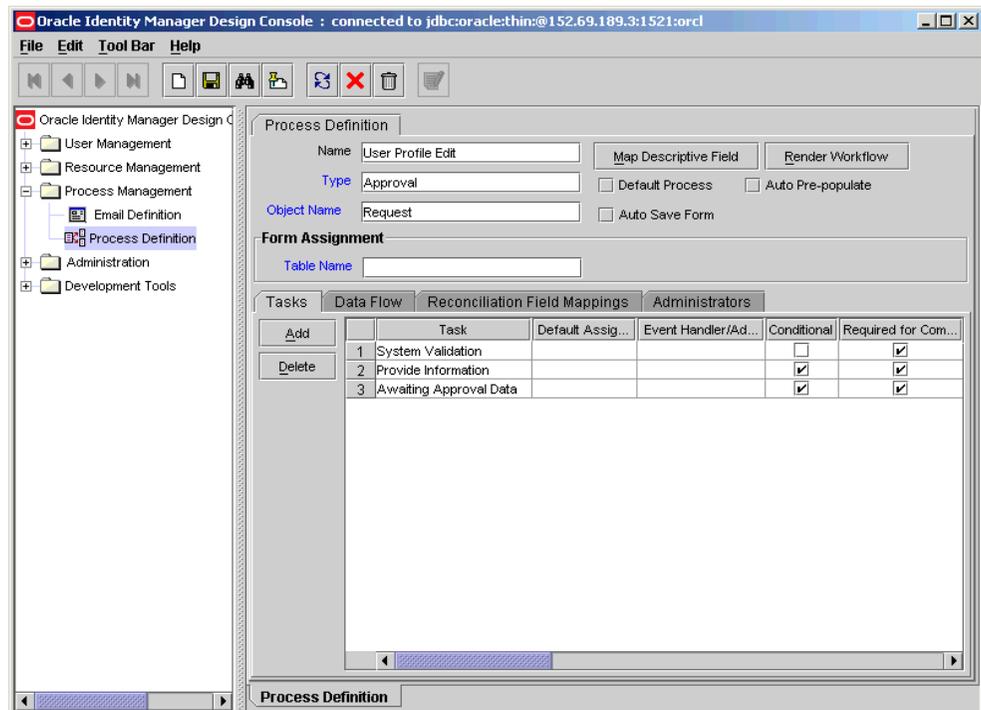
### 6.3.2.1 「Tasks」 タブ

このタブを使用して、次の操作を実行できます。

- 現在のプロセス定義を含むプロセス・タスクの作成と変更
- プロセス定義からのプロセス・タスクの削除（有効でなくなった場合）

図 6-3 に、「Process Definition」 フォームの「Tasks」 タブを示します。

図 6-3 「Process Definition」 フォームの「Tasks」タブ



たとえば、「Solaris 8」プロセス定義には 15 のプロセス・タスクを含むことができます。

---

**関連項目：** プロセス・タスクの編集の詳細は、6-18 ページの「[プロセス・タスクの変更](#)」を参照してください。

---

#### 6.3.2.1.1 プロセス・タスクの追加

プロセス・タスクは、プロセス内で完了する必要がある手順を表します。

プロセス・タスクを追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Add」をクリックします。  
「Creating New Task」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「Task Name」フィールドに、プロセス・タスクの名前を入力します。
3. Creating New Task ウィンドウのツールバーで、「Save」をクリックします。続いて、「Close」をクリックします。

プロセス・タスクがプロセス定義に追加されます。

#### 6.3.2.1.2 プロセス・タスクの編集

プロセス・タスクの編集と設定の手順の詳細は、6-18 ページの「[プロセス・タスクの変更](#)」を参照してください。

#### 6.3.2.1.3 プロセス・タスクの削除

プロセス・タスクを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するプロセス・タスクを選択します。
2. 「Delete」をクリックします。

プロセス・タスクがプロセス定義から削除されます。

### 6.3.2.2 「Data Flow」 タブ

このタブは、次の項目の間のデータ・フローを定義するために使用します。

- リソース・オブジェクト定義にアタッチされている親リソース・フォームのフィールドと、プロビジョニング・プロセス定義にアタッチされている親プロセス・フォームのフィールド
- 親リソース・フォームのフィールドと親プロセス・フォームの子のフィールド
- 子リソース・フォームのフィールドと子プロセス・フォームのフィールド

このタブは、親リソースとプロセス・オブジェクトにカスタムのリソース・フォームがアタッチされている場合にのみ有効です。

図 6-4 に「Process Definition」フォームの「Data Flow」タブを示します。

図 6-4 「Process Definition」フォームの「Data Flow」タブ

	Source Object	Source Field	Sink Process	Sink Field
1	Solaris	Home Directory	Solaris	User's Home Directory
2		Child Form for Solaris Resource Object (Solaris)		Child Form for Solaris Process (Solaris)

親リソース・フォームのフィールドと子プロセス・フォームの間、または子リソース・フォームのフィールドと子プロセス・フォームの間に、データのフローをマッピングするには、カスタムのリソース・フォームに子リソース・フォームを割り当て、カスタム・プロセス・フォームに子プロセス・フォームを割り当てる必要があります。

**関連項目：** プロセス・タスクの編集の詳細は、8-3 ページの「[「Form Designer」フォーム](#)」を参照してください。

親リソース・オブジェクトのリソース・オブジェクト・フォームと、親プロビジョニング・プロセスのプロセス・フォームを定義して、各フォームに子フォームを割り当てると、フォーム・フィールドの間にマッピングを確立できますが、これには2つの制限があります。プロセス・フォームのフィールド値をリソース・フォーム・フィールドに逆マッピングすることはできません。また、子リソース・フォームのフィールド値は親プロセス・フォームのフィールドにマッピングできません。

図 6-4 に、2つのデータ・フローを示します。

- 最初のデータ・フローでは、親リソース・フォーム Solaris の「**Home Directory**」フィールドの値が、親プロセス・フォーム Solaris の「**User's Home Directory**」フィールドにマッピングされます。
- 2番目のデータ・フローでは、子リソース・フォーム Solaris の値が、子プロセス・フォーム Solaris の該当するフィールドにマッピングされます。

次の各項で、マッピング方法について説明します。

- 親プロセス・フォーム・フィールドへの親リソース・フォーム・フィールドのマッピング方法
- 子プロセス・フォーム・フィールドへの親リソース・フォーム・フィールドのマッピング方法

- 子プロセス・フォーム・フィールドへの子リソース・フォーム・フィールドのマッピング方法

また、2つのデータ・フィールドの間のマッピングを解除する方法も説明します。

#### 6.3.2.2.1 プロセス・フォーム・フィールドへの親リソース・フォーム・フィールドのマッピング

親リソース・フォームのデータ・フィールドを、プロセス・フォームのデータ・フィールドにマッピングするには、次の手順を実行します。

1. 「Add Field Map」をクリックします。  
「Define Data Flow」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「Data Source」ボックスから、親リソース・フォームにある、目的のデータ・フィールドを選択します。
3. 「Data Sink」ボックスから、親または子プロセス・フォームのターゲット・データ・フィールドを選択します。
4. ウィンドウのツールバーから「Save」をクリックし、続いて「Close」をクリックします。  
これで、親リソース・フォームの選択されたデータ・フィールドが、手順3での選択に応じて、親または子プロセス・フォームのターゲット・データ・フィールドにマッピングされます。

#### 6.3.2.2.2 子プロセス・フォーム・フィールドへの子リソース・フォーム・フィールドのマッピング

子リソース・フォームから子プロセス・フォームにデータ・フィールドをマッピングするには、次の手順を実行します。

1. 「Add Table Map」をクリックします。  
「Add Data Flow Table Mapping」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「Resource Object Child Table」ボックスから子リソース・フォームの表名を選択します。
3. 「Process Child Table」ボックスから、子プロセス・フォームのターゲット表名を選択します。
4. ウィンドウのツールバーから「Save」をクリックし、「Close」をクリックします。  
これで、子リソース・フォームの選択された表名が、子プロセス・フォームのターゲット表名にマッピングされます。
5. 「Add Field Map」をクリックします。  
「Define Data Flow」ダイアログ・ボックスが表示されます。
6. 「Table Mapping」ボックスから、子リソース・フォームの、目的の表名を選択します。
7. 「Data Source」ボックスから、子プロセス・フォームのデータ・フィールドを選択します。
8. 「Data Sink」ボックスから、子プロセス・フォームのターゲット・データ・フィールドを選択します。

#### 6.3.2.2.3 リソース・オブジェクトのデータ・フィールドとプロセスの間のマッピングの解除

マッピングを解除するには、次の手順を実行します。

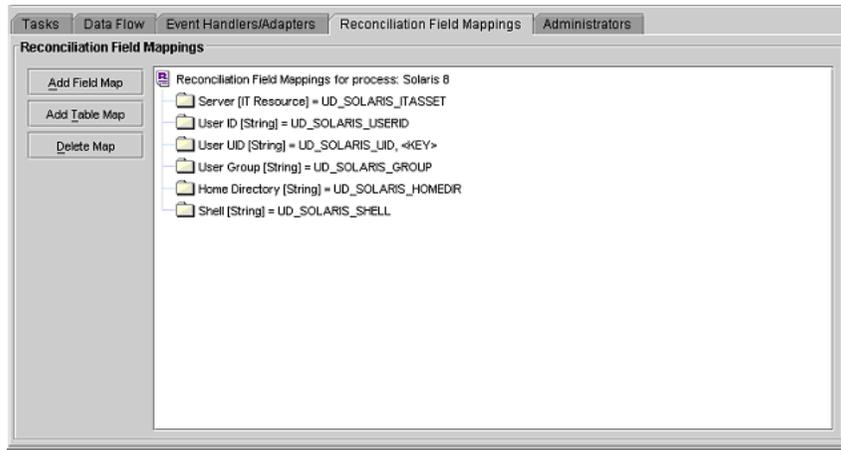
1. 解除するマッピングがあるデータ・フィールドを選択します。
2. 「Delete Map」をクリックします。

これで、リソース・オブジェクト・フォームの選択されたデータ・フィールドと、プロセス・フォームの選択されたデータ・フィールドとのマッピングが解除されました。

### 6.3.2.3 「Reconciliation Field Mappings」 タブ

図 6-5 に示す「Reconciliation Field Mappings」タブは、ターゲット・システムまたは信頼できるソースでのデータ要素と、Oracle Identity Manager のフィールドの間のリレーションシップを定義するために使用します。

図 6-5 「Process Definition」 フォームの「Reconciliation Field Mappings」タブ



マッピングで選択できるのは、関連付けられたリソースの「**Reconciliation Fields**」タブで定義したフィールドのみです。これらのマッピングは、リコンシリエーション・イベントを使用して、ターゲット・システムからの情報を、Oracle Identity Manager のどのフィールドに移入するかを決定します。ターゲット・リソース（信頼できないソース）では、このタブを使用して、どのフィールドがキー・フィールドかを示すことができます。キー・フィールドは、「Reconciliation Manager」フォームの「**Processes Matched Tree**」タブで一致を生成するために、プロセス・フォームとリコンシリエーション・イベントで同じである必要がある値を決定します。

各マッピングについて、次の情報が表示されます。

- Oracle Identity Manager のデータとの間でリコンサイルされるターゲット・システムまたは信頼できるソースの、関連付けられているリソースの「**Reconciliation Fields**」タブで定義されているフィールドの名前。
- 関連付けられているリソースの「**Reconciliation Fields**」タブで定義されている、フィールドに関連付けられているデータ型。

可能な値は、**Multi-Valued**、**String**、**Number**、**Date**、**IT resource** です。

- **信頼できるソースの場合**：ユーザー検出の場合、信頼できるソース・フィールドのデータの、ユーザー・フォーム上のフィールドの名前へのマッピング。組織検出の場合、信頼できるソース・フィールドのデータの、「Oracle Identity Manager Organizations」フォームのフィールドの名前へのマッピング。

信頼できるソースでユーザー検出と組織検出を実行している場合、組織検出を先に実行する必要があります。

---

**関連項目**：複数の信頼できるソースのリコンシリエーション用にフィールドをマップする方法の詳細は、5-31 ページの「**複数の信頼できるソースのリコンシリエーション**」を参照してください。

---

- **ターゲット・リソースの場合**：ターゲット・リソース・フィールドのデータがマッピングされる、リソースのカスタム（プロビジョニング）プロセス・フォーム上のフィールドの名前。

- **ターゲット・リソースの場合**: フィールドが、このターゲット・リソースのリコンシリエーションにおけるキー・フィールドかどうかを示すインジケータ。

リコンシリエーション・イベント・データに一致させるためのプロビジョニング・プロセスの場合は、プロセス・フォームのキー・フィールド値が、リコンシリエーション・イベントのものと同じである必要があります。

### 6.3.2.3.1 ユーザー・アカウント・ステータスのリコンシリエーション

ユーザー・アカウント・ステータスのリコンシリエーションを構成する場合は、次の作業を実行する必要があります。

- **信頼できるソースの場合**: 対応する信頼できるリソース・オブジェクトに、リコンシリエーション・フィールド（「Status」など）を作成する必要があります。このフィールドは、ターゲットでのユーザーのステータスを示します。このフィールドの値は、「Active」または「Disabled」のいずれかである必要があります。このリコンシリエーション・フィールドは、対応するプロセス定義のユーザー属性 `status` にマップする必要があります。
- **ターゲット・リソースの場合**: 対応するリソース・オブジェクトに、リコンシリエーション・フィールド（「Status」など）を作成する必要があります。このフィールドは、ターゲットでのリソースのステータスを示します。このフィールドの値は、「Enabled」または「Disabled」のいずれかである必要があります。このリコンシリエーション・フィールドは、対応するプロセス定義のプロセス属性 `OIM_OBJECT_STATUS` にマップする必要があります。

### 6.3.2.3.2 ターゲット・リソース・フィールドの Oracle Identity Manager へのマッピング

関連付けられているリソース定義の「**Reconciliation Fields**」で定義されている、ターゲット・リソースまたは信頼できるソースのフィールドを、Oracle Identity Manager の該当するフィールドにマッピングすることができます。これらのマッピングにより、リコンシリエーション・イベントで更新の必要がある Oracle Identity Manager のフィールドが決定されます。これらのマッピングが行われるのは、「Reconciliation Manager」フォームで次のいずれかをクリックするときです。

- 「Create User」または「Create Organization」ボタン
- 「Matched Users」または「Matched Organizations」タブの「Link」ボタン
- 「Processes Matched Tree」タブの「Establish Link」ボタン

信頼できるソースのユーザー検出では、**User** リソースから **User** プロビジョニング・プロセスのフィールドにマッピングされるフィールドを定義します。信頼できるソース・フィールドのマッピング先のフィールド（ユーザー属性）は、「Users」フォームから導出されます。

信頼できるソースの組織検出では、「Oracle Identity Manager Organization」リソースから「Oracle Identity Manager Organization」プロビジョニング・プロセスのフィールドにマッピングされるフィールドを定義します。信頼できるソース・フィールドのマッピング先のフィールド（組織属性）は、「Organizations」フォームから導出されます。

関連付けられているリソースのプロビジョニング・プロセス定義にアクセスし、「**Reconciliation Field Mappings**」タブを選択した後、次の各項で説明する 2 つの手順のいずれかを使用します。

#### 単一値フィールドのマッピング

単一値フィールドをマッピングするには、次の手順を実行します。

1. 「Add Field Map」をクリックします。

「Add Reconciliation Field Mappings」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2. 「Field Name」フィールドのメニューから、マッピングするターゲット・システムのフィールドを選択します。

Oracle Identity Manager は、関連付けられている「**Resource Object**」フォームの入力内容に基づいて、このフィールドのフィールド・タイプを自動的に設定します。

3. 信頼できるソースの場合

「**User Attribute**」メニューから値を選択して、「**OK**」をクリックします。手順4に進みます。

ターゲット・リソースの場合

「**Process Data Field**」をダブルクリックします。「**Lookup**」ダイアログ・ボックスから正しいマッピングを選択して、「**OK**」をクリックします。

4. 信頼できるソースのマッピングを定義している場合は、手順5に進みます。

ターゲット・リソースの「**Key Field for Reconciliation Matching**」チェック・ボックスのみを設定します。このチェック・ボックスを選択すると、Oracle Identity Manager は、プロビジョニング・プロセス・フォームのこのフィールドの値が、リコンシリエーション・イベントのフィールドの値に一致しているかどうかを評価します。一致したすべてのプロセスが、「**Reconciliation Manager**」フォームの「**Processes Matched Tree**」タブに表示されます。このチェック・ボックスの選択が解除されている場合、Oracle Identity Manager では、プロセス一致の際に、このフィールドの値がプロセス・フォームおよびリコンシリエーション・イベントと一致する必要はありません。

---

---

**注意：** フィールドをキー・フィールドに設定するには、該当するリソースの「**Object Reconciliation**」タブで必須に設定されている必要があります。

---

---

5. 「**Save**」をクリックします。

選択されたフィールドのマッピングは、ターゲット・リソースまたは信頼できるソースから次にリコンシリエーション・イベントを受け取ったときに適用されます。

**複数値フィールドのマッピング（ターゲット・リソースのみ）**

複数値フィールドをマッピングするには、次の手順を実行します。

1. 「**Add Table Map**」をクリックします。

「**Add Reconciliation Table Mappings**」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2. 「**Field Name**」フィールドのメニューから、マッピングするターゲット・システムの複数値フィールドを選択します。

Oracle Identity Manager は、関連付けられている「**Resource Object**」フォーム上のこのフィールドの入力内容に基づいて、フィールド・タイプを自動的に設定します。

3. 「**Table Name**」メニューから、ターゲット・リソースのプロセス・フォームで定義した子表を選択します。

4. 「**Process Data Field**」をダブルクリックし、「**Lookup**」ダイアログ・ボックスから正しいマッピングを選択して、「**OK**」をクリックします。

5. 保存して、「**Add Reconciliation Table Mappings**」ダイアログ・ボックスを閉じます。

6. マップしたばかりの複数値フィールドを右クリックし、表示されるメニューから「**Define a property field map**」を選択します。

7. マッピングするコンポーネント（子）フィールドを選択します。

Oracle Identity Manager は、関連付けられている「**Resource Object**」フォーム上のこのフィールドの入力内容に基づいて、フィールド・タイプを自動的に設定します。

8. 「**Process Data Field**」をダブルクリックします。

「**Lookup**」ダイアログ・ボックスから正しいマッピングを選択して、「**OK**」をクリックします。

### 9. 「Key Field for Reconciliation Matching」 チェック・ボックスを設定します。

このチェック・ボックスを選択すると、Oracle Identity Manager は、プロビジョニング・プロセスの子フォームのフィールド値と、リコンシリエーション・イベントのフィールド値を比較します。一致したすべてのプロセスが、「Reconciliation Manager」フォームの「Processes Matched Tree」タブに表示されます。このチェック・ボックスの選択を解除すると、プロセス一致の際に、このフィールドの値がプロセス・フォームおよびリコンシリエーション・イベントと一致する必要はありません。各複数値フィールドの少なくとも1つのコンポーネント（子）フィールドがキー・フィールドとして設定されていることを確認してください。これにより「Process Matched Tree」タブで生成される一致の質が向上します。

---

**注意：** キー・フィールドは、該当するリソースの「Object Reconciliation」タブで必須に設定されている必要があります。

---

### 10. 複数値フィールドで定義されている各コンポーネント（子）フィールドについて、手順6～9を繰り返します。

### 11. 「Save」をクリックします。

選択したフィールドのマッピングは、次にターゲット・リソースからリコンシリエーション・イベントを受け取ったときに適用されます。

#### 6.3.2.3 マッピングの削除

この手順は、Oracle Identity Manager のフィールドと、関連付けられているリソース定義の「Reconciliation Fields」タブ上で定義されているターゲット・システムまたは信頼できるソースのフィールドの間に確立されているマッピングを削除する際に使用します。

マッピングを削除するには、次の手順を実行します。

1. 関連付けられているリソースのプロビジョニング・プロセス定義に移動します。
2. 「Reconciliation Field Mappings」タブを選択します。
3. 削除するフィールド・マッピングを選択します。
4. 「Delete Map」をクリックします。

選択されたフィールドのマッピングが削除されます。

#### 6.3.2.4 「Administrators」タブ

このタブは、現在のプロセス定義を表示、変更および削除できるユーザー・グループを選択するために使用します。

このタブの「Write」チェック・ボックスを選択すると、それに対応するユーザー・グループは、現在のプロセス定義の読取りと変更ができます。「Delete」チェック・ボックスを選択すると、関連付けられているユーザー・グループが現在のプロセス定義を削除できます。

たとえば、SYSTEM ADMINISTRATORS ユーザー・グループは、Solaris 8 プロセス定義の表示、変更および削除を行うように設定できます。

##### 6.3.2.4.1 プロセス定義へのユーザー・グループの割当て

ユーザー・グループを割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 「Assign」をクリックします。  
Groups ウィンドウが表示されます。
2. 未割当てのグループを選択して、プロセス定義に割り当てます。
3. 「OK」をクリックします。  
ユーザー・グループが「Administrators」タブに表示されます。

4. このユーザー・グループが現在のプロセス定義に対して、表示または変更、あるいは表示と変更ができるようにする場合、対応する「**Write**」チェック・ボックスをダブルクリックします。それ以外の場合は手順 5 に進みます。
5. このユーザー・グループが現在のプロセス定義を削除できるようにする場合、関連付けられている「**Delete**」チェック・ボックスをダブルクリックします。それ以外の場合は手順 6 に進みます。
6. 「**Save**」をクリックします。  
ユーザー・グループがプロセス定義に割り当てられます。

#### 6.3.2.4.2 プロセス定義からのユーザー・グループの削除

ユーザー・グループを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するユーザー・グループを強調表示します。
2. 「**Delete**」をクリックします。  
ユーザー・グループがプロセス定義から削除されます。

### 6.3.3 プロセス・タスクの変更

プロセス定義のプロセス・タスクを変更するには、その行ヘッダーをダブルクリックします。プロセス・タスクに関するその他の情報が **Editing Task** ウィンドウに表示されます。

**Editing Task** ウィンドウには、次のタブが含まれます。

- [「General」タブ](#)
- [「Integration」タブ](#)
- [「Task Dependency」タブ](#)
- [「Responses」タブ](#)
- [「Undo/Recovery」タブ](#)
- [「Notification」タブ](#)
- [「Task to Object Status Mapping」タブ](#)
- [Editing Task ウィンドウの「Assignment」タブ](#)

### 6.3.3.1 「General」 タブ

このタブは、変更するタスクに関する高度な情報を設定するために使用します。この例では、Solaris 環境でユーザーを作成するために「Create User」タスクが使用されています。

図 6-6 に、「Editing Task」ダイアログ・ボックスの「General」タブを示します。

図 6-6 「Editing Task」ダイアログ・ボックスの「General」タブ

The screenshot shows a dialog box titled "Editing Task: Create User". It has several tabs: Notification, Task to Object Status Mapping, Assignment, General (selected), Integration, Task Dependency, Responses, and Undo/Recovery. The "General" tab contains the following fields and controls:

- Task Name:** A text box containing "Create User".
- Task Description:** A text area containing "This task is used to create a user within Solaris".
- Duration:** Three input boxes for "Days" (1), "Hours" (6), and "Minutes" (30).
- Task Properties:** A section with several checkboxes and input boxes:
  - Conditional:**  (unchecked)
  - Disable Manual Insert:**  (unchecked)
  - Retry Period in Minutes:**
  - Required for Completion:**  (checked)
  - Allow Cancellation while Pending:**  (checked)
  - Retry Count:**
  - Constant Duration:**  (unchecked)
  - Allow Multiple Instances:**  (unchecked)
  - Task Effect:** A dropdown menu showing "Enables Process Or Access To Application".
  - Child Table:** A dropdown menu.
  - Trigger Type:** A dropdown menu.

表 6-3 に、「General」タブのフィールドの説明を示します。

表 6-3 「Editing Task」ダイアログ・ボックスの「General」タブのフィールド

フィールド名	説明
Task Name	プロセス・タスクの名前。
Task Description	プロセス・タスクに関する説明。
Duration	現在のプロセス・タスクの予定完了時刻。単位は日、時、分。
Conditional	このチェック・ボックスは、プロセスに現在のプロセス・タスクを追加するために、ある条件を満たすかどうかを指定します。 条件を満たされないとプロセスにプロセス・タスクが追加されないようにするには、このチェック・ボックスを選択します。 その条件が満たされることを、プロセスにプロセス・タスクが追加されるための必須条件にしない場合は、このチェック・ボックスの選択を解除します。
Required for Completion	このチェック・ボックスは、プロセスが完了するために、現在のプロセス・タスクが完了することが必要かどうかを指定します。 プロセス・タスクのステータスが「Completed」にならないとプロセスを完了できないようにするには、このチェック・ボックスを選択します。 プロセス・タスクのステータスがプロセスの完了ステータスに影響しないようにするには、このチェック・ボックスの選択を解除します。
Constant Duration	適用されません。

表 6-3 「Editing Task」 ダイアログ・ボックスの「General」 タブのフィールド（続き）

フィールド名	説明
Task Effect	<p>このボックスから、タスクに関連付けるプロセス・アクション（たとえば、無効化や有効化）を選択します。プロセスは、リソースへのユーザーのアクセスを有効化または無効化できます。無効化アクションを選択すると、無効化アクションに関連付けられているすべてのタスクが挿入されます。</p> <p><b>注意：</b>プロセス・タスクを個別のプロセス・アクションに関連付けない場合、ボックスから「NONE」を選択します。</p>
Disable Manual Insert	<p>このチェック・ボックスは、現行のプロセス・タスクをユーザーがプロセスに手動で追加できるかどうかを指定します。</p> <p>プロセスにプロセス・タスクを手動で追加できないようにするには、このチェック・ボックスを選択します。</p> <p>ユーザーがプロセスにプロセス・タスクを追加できるようにするには、このチェック・ボックスの選択を解除します。</p>
Allow Cancellation while Pending	<p>このチェック・ボックスは、ステータスが「Pending」のときにプロセス・タスクを取り消せるかどうかを指定します。</p> <p>ステータスが「Pending」のときにプロセス・タスクを取り消せるようにするには、このチェック・ボックスを選択します。</p> <p>ステータスが「Pending」のときにプロセス・タスクを取り消せないようにするには、このチェック・ボックスの選択を解除します。</p>
Allow Multiple Instances	<p>このチェック・ボックスは、現在のプロセスにプロセス・タスクを複数回挿入できるかどうかを指定します。</p> <p>プロセスにプロセス・タスクのインスタンスを複数追加できるようにするには、このチェック・ボックスを選択します。</p> <p>プロセスにプロセス・タスクのインスタンスを1回のみ追加できるようにするには、このチェック・ボックスの選択を解除します。</p>
Retry Period in Minutes	<p>このフィールドは、プロセス・タスクが却下された場合、「Pending」ステータスを持つタスクの新規インスタンスを Oracle Identity Manager が挿入するまでの時間間隔を指定します。</p> <p>図 6-6 では、「Retry Period in Minutes」フィールドに 30 と表示されています。「Create User」プロセス・タスクが却下された場合、Oracle Identity Manager は 30 分後にこのタスクの新規インスタンスを追加して、「Pending」ステータスを割り当てます。</p>
Retry Count	<p>却下されたタスクを Oracle Identity Manager が再試行する回数を指定します。図 6-6 では、「Retry Count」フィールドに 5 と表示されています。「Create User」プロセス・タスクが却下された場合、Oracle Identity Manager はこのタスクの新規インスタンスを追加して、「Pending」ステータスを割り当てます。このプロセス・タスクが 5 回目に却下されると、Oracle Identity Manager はそれ以降、新規インスタンスを挿入しません。</p>

表 6-3 「Editing Task」 ダイアログ・ボックスの「General」タブのフィールド（続き）

フィールド名	説明
Child Table/Trigger Type	<p>これらのボックスは、Oracle Identity Manager が、現在のプロセスに関連付けられているカスタム・フォームの子表（「Process Definition」フォームの「Table Name」フィールドに表示）で実行するアクションを指定します。</p> <p>「Child Table」ボックスから、Oracle Identity Manager がアクションを実行するカスタム・フォームの子表を選択します。</p> <p>「Trigger Type」ボックスから、Oracle Identity Manager が子表で実行するアクションを指定します。次のようなアクションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>Insert</b>. 子表の指定された列に新しい値を追加します。</li> <li>■ <b>Update</b>. 子表の対応する列の既存の値を変更します。</li> <li>■ <b>Delete</b>. 子表の指定された列から値を削除します。</li> </ul> <p><b>注意:</b> カスタムのプロセス・フォームに子表が関連付けられていない場合、「Child Table」ボックスは空になります。また、「Trigger Type」ボックスはグレー表示されます。</p>

### 6.3.3.1.1 プロセス・タスクの一般情報の変更

プロセス・タスクの一般情報を変更するには、次の手順を実行します。

1. 変更するタスクの行ヘッダーをダブルクリックします。  
「Editing Task」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「General」タブをクリックします。
3. 「Description」フィールドに、プロセス・タスクについての説明情報を入力します。
4. (オプション) 「Duration」領域に、プロセス・タスクの予定完了時刻を入力します（単位は日、時、分）。
5. プロセス・タスクが、ある条件を満たさないと「Process Instance」に追加されないようにするには、「Conditional」チェック・ボックスを選択します。それ以外の場合は手順 6 に進みます。

**注意:** 「Conditional」チェック・ボックスを選択した場合は、タスクがプロセスに追加されるために満たす必要のある条件を指定する必要があります。

6. プロセスの完了ステータスがプロセス・タスクの完了ステータスに依存するようにするには、「Required for Completion」チェック・ボックスを選択します。  
それにより、プロセス・タスクのステータスが「Completed」にならないと、プロセスを完了できないようになります。  
プロセス・タスクのステータスがプロセスの完了ステータスに影響しないようにする場合は、手順 7 に進みます。
7. 現在実行中のプロセスのインスタンスに、ユーザーが手動でプロセス・タスクを追加できないようにする場合は、「Disable Manual Insert」チェック・ボックスを選択します。それ以外の場合は手順 8 に進みます。
8. プロセス・タスクのステータスが「Pending」のときにそのプロセス・タスクをユーザーが取り消せるようにする場合は、「Allow Cancellation while Pending」チェック・ボックスを選択します。それ以外の場合は手順 9 に進みます。
9. このタスクを単一のプロセス・インスタンスに複数回挿入できるようにするには、「Allow Multiple Instances」チェック・ボックスを選択します。それ以外の場合は手順 10 に進みます。

10. 「Task Effect」 ボックスをクリックします。

表示されるカスタム・メニューから、次のいずれかを選択します。

- **Enable Process or Access to Application.** 有効化機能を使用してリソースを再アクティブ化した場合、これが設定されているすべてのタスクがプロセスに挿入されます。このオプションを選択する場合、「Allow Multiple Instances」チェック・ボックスも選択する必要があります。
- **Disable Process or Access to Application.** 無効化機能を使用してリソースを非アクティブ化した場合、これが設定されているすべてのタスクがプロセスに挿入されます。このオプションを選択する場合、「Allow Multiple Instances」チェック・ボックスも選択する必要があります。
- **No Effect.** これは、すべてのタスクに関連付けられているデフォルトのプロセス・アクションです。このオプションを選択すると、条件付きでないタスクは、通常プロビジョニングのときにのみ挿入されます。

11. (オプション) プロセス・タスクが「Rejected」の場合、Oracle Identity Manager によって、「Pending」ステータスを持つプロセス・タスクの新規インスタンスを挿入することもできます。

それには、「Retry Period in Minutes」フィールドに値を入力します。これは、このプロセス・タスク・インスタンスが追加されるまでに Oracle Identity Manager が待機する時間を分単位で示します。

「Retry Count」フィールドに、却下されたタスクを Oracle Identity Manager が再試行する回数を入力します。たとえば、「Retry Count」フィールドに「3」と表示されているとします。タスクが却下された場合、Oracle Identity Manager はこのタスクの新規インスタンスを追加して、「Pending」ステータスを割り当てます。このプロセス・タスクが4回目に却下されると、Oracle Identity Manager はそれ以降、プロセス・タスクの新規インスタンスを挿入しません。

---

---

**注意：**「Retry Period」と「Retry Count」のいずれかを選択した場合、これらは相互に関連しているため、もう一方のオプションのパラメータも指定する必要があります。

---

---

12. 「Child Table」ボックスから、Oracle Identity Manager がアクションを実行するカスタム・フォームの子表を選択します。

「Trigger Type」ボックスから、Oracle Identity Manager が子表で実行するアクションを指定します。次のようなアクションがあります。

- **Insert:** 子表の指定された列に新しい値を追加します。
- **Update:** 子表の対応する列にある既存の値を変更します。
- **Delete:** 子表の指定された列から値を削除します。

---

---

**注意：** カスタムのプロセス・フォームに子表が関連付けられていない場合、「Child Table」ボックスは空になります。また、「Trigger Type」ボックスはグレー表示されます。

---

---

13. 「Save」をクリックします。

プロセス・タスクの高度な情報に対する変更には、「General」タブで行った変更が反映されます。

### 6.3.3.2 「Integration」 タブ

「Integration」タブを使用すると、次の操作が可能です。

- イベント・ハンドラまたはタスク・アダプタをアタッチすることでプロセス・タスクを自動化します。
- タスク・アダプタの変数をマッピングします。これにより、アダプタがトリガーされたときに、Oracle Identity Manager が適切な情報を渡すことができます。これは、プロセス・タスクのステータスが「Pending」の場合に発生します。
- アダプタまたはイベント・ハンドラがプロセス・タスクに適用できなくなったとき、アダプタまたはイベント・ハンドラとプロセス・タスクの間のリンクを解除します。

たとえば、adpSOLARISCREATEUSER アダプタが「Create User」プロセス・タスクにアタッチされているとします。このアダプタには9つのアダプタ変数があります。そのすべてが、各変数名の前に付加されている Y が示しているように、適切にマッピングされています。

---

**注意：** イベント・ハンドラの先頭には、tcCheckAppInstalled のように、「tc」(Thor クラス) が付加されます。これらは、オラクル社が提供しているイベント・ハンドラです。顧客作成によるイベント・ハンドラは、名前の先頭に tc を付加することができません。アダプタの先頭には、adpSOLARISCREATEUSER のように、「adp」が付加されます。

---

**関連項目：** アダプタおよびイベント・ハンドラの詳細は、8-2 ページの「[「Adapter Factory」 フォーム](#)」および 9-2 ページの「[「Event Handler Manager」 フォーム](#)」を参照してください。

#### 6.3.3.2.1 プロセス・タスクへのアダプタまたはイベント・ハンドラの割当て

次の手順は、プロセス・タスクにアダプタまたはイベント・ハンドラを割り当てる方法について説明しています。

---

**重要：** プロセス・タスクにアダプタを割り当てる場合、アダプタ変数を正しくマッピングするまで、アダプタは機能しません。詳細は、6-24 ページの「[アダプタ変数のマッピング](#)」を参照してください。

---

プロセス・タスクにアダプタまたはイベント・ハンドラを割り当てるには、次の手順を実行します。

1. イベント・ハンドラまたはアダプタを割り当てるプロセス・タスクの行ヘッダーをダブルクリックします。

Editing Task ウィンドウが表示されます。

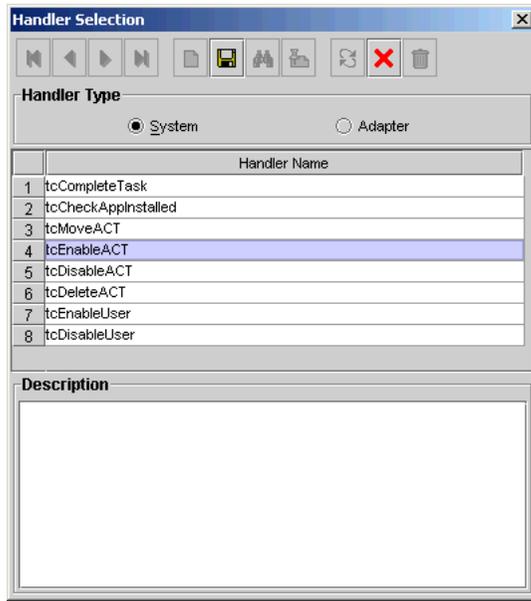
2. 「Integration」タブをクリックします。
3. 「Add」をクリックします。

 図 6-7 に示すような「Handler Selection」ダイアログ・ボックスが表示されます。

4. プロセス・タスクにイベント・ハンドラを割り当てるには、「System」オプションを選択します。

プロセス・タスクにアダプタを追加するには、「Adapter」オプションを選択します。プロセス・タスクに割当てできるイベント・ハンドラまたはアダプタのリストが「Handler Name」領域に表示されます。

図 6-7 「Handler Selection」 ダイアログ・ボックス



5. プロセス・タスクに割り当てるイベント・ハンドラまたはアダプタを選択します。
6. Handler Selection ウィンドウのツールバーから、「Save」をクリックします。  
確認のダイアログ・ボックスが表示されます。
7. 「OK」をクリックします。  
イベント・ハンドラまたはアダプタがプロセス・タスクに割り当てられます。

### 6.3.3.2 アダプタ変数のマッピング

**関連項目：** この手順で選択する項目の詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』を参照してください。

---

**注意：** 親フォーム・フィールドに対する変更が関連付けられているタスクをトリガーする場合、タスクの名前は「fieldUpdated」である必要があります。ここで *field* は親フォーム・フィールドの名前です。タスクの名前がこの表記規則に従っていない場合、フィールドが更新されてもタスクはトリガーされません。

---

アダプタ変数をマッピングするには、次の手順を実行します。

1. マッピングするアダプタ変数を選択します。
2. 「Map」をクリックします。  
Data Mapping for Variable ウィンドウが表示されます。
3. 「Map To」、「Qualifier」、「IT Asset Type」、「IT Asset Property」、「Literal Value」 および「Old Value」の各フィールドを設定します。
4. Data Mapping for Variable ウィンドウのツールバーから「Save」をクリックします。
5. 「Close」をクリックします。

アダプタ変数のマッピング・ステータスが N から Y に変化します。これは、アダプタ変数がマッピングされたことを示します。

### 6.3.3.2.3 プロセス・タスクのアダプタまたはイベント・ハンドラの削除

プロセス・タスクからアダプタまたはイベント・ハンドラを削除するには、次の手順を実行します。

1. 「Remove」をクリックします。  
確認のダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「OK」をクリックします。  
イベント・ハンドラまたはアダプタがプロセス・タスクから削除されます。

### 6.3.3.3 「Task Dependency」 タブ

「Task Dependency」タブは、プロセスでのプロセス・タスクの論理フローを決定するために使用します。このタブでは、次の操作が可能です。

- 先行タスクをプロセス・タスクに割り当てます。  
Oracle Identity Manager またはユーザーが現在のプロセス・タスクをトリガーできるためには、これらのタスクが「Completed」ステータスを持つ必要があります。
- 依存タスクをプロセス・タスクに割り当てます。  
現在のプロセス・タスクのステータスが「Completed」になって初めて、Oracle Identity Manager またはユーザーがこれらのタスクをトリガーできます。
- トリガーされる現在のタスクが先行タスクの完了ステータスの影響を受けないように、先行タスクと現在のタスク間のリンクを解除します。
- 現在のタスクの完了ステータスと依存タスクのトリガーに関係がなくなるように、現在のタスクと依存タスクの間のリンクを解除します。

たとえば、「Create User」プロセス・タスクには、先行タスクはありません。タスクがプロセスに挿入されると（たとえば、関連付けられているリソースがリクエストされた場合）、Oracle Identity Manager は常にこのタスクをトリガーします。Create User プロセス・タスクには、7つの依存タスクがあります。このプロセス・タスクが完了するまで、各依存タスクのステータスは「Waiting」になります。このタスクのステータスが「Completed」になると、これらのプロセス・タスクのそれぞれに「Pending」ステータスが割り当てられ、Oracle Identity Manager がそれをトリガーできるようになります。

#### 6.3.3.3.1 先行タスクのプロセス・タスクへの割当て

プロセス・タスクに先行タスクを割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 先行タスクを割り当てるプロセス・タスクの行ヘッダーをダブルクリックします。  
Editing Task ウィンドウが表示されます。
2. 「Task Dependency」タブをクリックします。
3. 「Preceding Tasks」領域から「Assign」をクリックします。  
「Assignment」ウィンドウが表示されます。
4. このウィンドウから、先行タスクを選択し、プロセス・タスクに割り当てます。
5. 「OK」をクリックします。  
これで、先行タスクがプロセス・タスクに割り当てられます。

#### 6.3.3.3.2 プロセス・タスクからの先行タスクの削除

プロセス・タスクから先行タスクを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除する先行タスクを選択します。
2. 「Preceding Tasks」領域で、「Delete」をクリックします。  
先行タスクがプロセス・タスクから削除されます。

#### 6.3.3.3 プロセス・タスクへの依存タスクの割当て

プロセス・タスクに依存タスクを割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 依存タスクを割り当てるプロセス・タスクの行ヘッダーをダブルクリックします。  
Editing Task ウィンドウが表示されます。
2. 「Task Dependency」 タブをクリックします。
3. 「Dependent Tasks」 領域から 「Assign」 をクリックします。  
「Assignment」 ウィンドウが表示されます。
4. このウィンドウから依存タスクを選択し、プロセス・タスクに割り当てます。
5. 「OK」 をクリックします。  
これで、依存タスクがプロセス・タスクに割り当てられます。

#### 6.3.3.4 プロセス・タスクからの依存タスクの削除

プロセス・タスクから依存タスクを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除する依存タスクを選択します。
2. 「Dependent Tasks」 領域から 「Delete」 をクリックします。  
依存タスクがプロセス・タスクから削除されます。

#### 6.3.3.4 「Responses」 タブ

「Responses」 タブで可能な作業は次のとおりです。

- 個別のプロセス・タスクの実行と組み合わせて受け取れるレスポンス・コードを定義します。レスポンス・コードは、ターゲット・システム上の特定の条件を表現するために使用できます。
- このプロセス・タスクの実行時にレスポンス・コードを受け取った場合に起動される条件付きタスクを定義します。このタスクを生成タスクと呼びます。
- プロセス・タスクからレスポンスを削除します。
- プロセス・タスクから生成タスクを削除します。

たとえば、「Create User」 プロセス・タスクが完了すると、SUCCESS レスポンスがアクティブになります。このレスポンスは、ダイアログ・ボックスを開いてメッセージ 「The user was created successfully」 を表示します。また、Oracle Identity Manager は 「Enable User」 プロセス・タスクをトリガーします。

---

---

**注意：** デフォルトで、却下されたプロセス・タスクには UNKNOWN レスポンスが定義されています。このように、システム管理者がプロセス・タスクにレスポンスを追加しない場合でも、このタスクが却下されると、ユーザーにはダイアログ・ボックスにエラー・メッセージの形式で通知されます。

---

---

#### 6.3.3.4.1 プロセス・タスクへのレスポンスの追加

プロセス・タスクにレスポンスを追加するには、次の手順を実行します。

1. レスポンスを追加するプロセス・タスクの行ヘッダーをダブルクリックします。  
Editing Task ウィンドウが表示されます。
2. 「Responses」 タブをクリックします。
3. 「Responses」 領域で、「Add」 をクリックします。  
「Responses」 領域に空行が表示されます。

4. 「Response」フィールドに情報を入力します。

このフィールドにはレスポンス・コード値が含まれます。このフィールドでは、大 / 小文字が区別されます。

5. 「Description」フィールドに情報を入力します。このフィールドにはレスポンスについての説明情報が含まれます。

プロセス・タスクがレスポンスをトリガーすると、その情報がタスク情報ダイアログ・ボックスに表示されます。

6. 「Status」参照フィールドをダブルクリックします。

Lookup ウィンドウが表示されたら、タスクのステータス・レベルを選択します。レスポンス・コードを受け取ると、それにより、タスクにこのステータスが設定されます。

7. 「Save」をクリックします。

これで、追加したレスポンスに、入力した設定が反映されるようになります。

#### 6.3.3.4.2 プロセス・タスクからのレスポンスの削除

プロセス・タスクからレスポンスを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するレスポンスを選択します。

2. 「Responses」領域から「Remove」をクリックします。

レスポンスがプロセス・タスクから削除されます。

---

**注意：** 既存のレスポンスまたは新規追加のレスポンスの場合でも、プロビジョニング・インスタンスに対して起動されたプロセス・タスクからは、レスポンスを削除できません。しかし、プロセス・タスクがプロビジョニング・インスタンスに対して起動されていないならば、レスポンスを削除できます。

---

#### 6.3.3.4.3 生成タスクのプロセス・タスクへの割当て

プロセス・タスクに生成タスクを割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 生成タスクを割り当てるプロセス・タスクの行ヘッダーをダブルクリックします。

Editing Task ウィンドウが表示されます。

2. 「Responses」タブをクリックします。

3. 生成タスクを割り当てるレスポンス・コードを選択します。

4. 「Tasks to Generate」領域から「Assign」をクリックします。

「Assignment」ウィンドウが表示されます。

5. このウィンドウから、生成タスクを選択し、プロセス・タスクのレスポンスに割り当てます。

6. 「OK」をクリックします。

これで、生成タスクがプロセス・タスクに割り当てられます。

#### 6.3.3.4.4 プロセス・タスクからの生成タスクの削除

プロセス・タスクから生成タスクを削除するには、次の手順を実行します。

1. レスポンス・コードを選択します。

2. 削除する生成タスクを選択します。

3. 「Tasks to Generate」領域で、「Delete」をクリックします。

これで、生成タスクがプロセス・タスクから削除されます。

### 6.3.3.5 「Undo/Recovery」 タブ

「Undo/Recovery」タブで可能な作業は次のとおりです。

- 現在のプロセス・タスクが取り消されたときにトリガーされるプロセス・タスクの定義。このプロセス・タスクは取消しタスクと呼ばれます。
- 有効でなくなった取消しタスクのプロセス・タスクからの削除。
- 現在のプロセス・タスクが却下されたときにトリガーされるプロセス・タスクの定義。このタスクをリカバリ・タスクと呼びます。
- プロセス・タスクからのリカバリ・タスクの削除。

たとえば、「Create User」プロセス・タスクのステータスが Cancelled の場合、「Delete User」取消しタスクがトリガーされます。同様に、「Create User」タスクが Rejected の場合、Oracle Identity Manager は「Enable User」リカバリ・タスクをトリガーします。

---

**注意：**現在のプロセス・タスクが却下されると、Oracle Identity Manager は、プロセス・タスクに割り当てられるリカバリ・タスクをトリガーします。「Complete on Recovery」チェック・ボックスを選択すると、生成されたすべてのリカバリ・タスクが完了したときに、現在のプロセス・タスクのステータスを Rejected から Unsuccessfully Completed に変更します。Oracle Identity Manager は、これによって、他の依存プロセス・タスクをトリガーできます。

---

次の各項では、現在のプロセス・タスクに取消しタスクやリカバリ・タスクを割り当てる方法、および現在のプロセス・タスクから取消しタスクやリカバリ・タスクを削除する方法を説明します。

#### 6.3.3.5.1 取消しタスクのプロセス・タスクへの割当て

プロセス・タスクに取消しタスクを割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 取消しタスクを割り当てるプロセス・タスクの行ヘッダーをダブルクリックします。  
Editing Task ウィンドウが表示されます。
2. 「Undo/Recovery」タブをクリックします。
3. 「Undo Tasks」領域で、「Assign」をクリックします。  
「Assignment」ウィンドウが表示されます。
4. このウィンドウから、取消しタスクを選択し、プロセス・タスクに割り当てます。
5. 「OK」をクリックします。  
これで、取消しタスクがプロセス・タスクに割り当てられます。

#### 6.3.3.5.2 プロセス・タスクからの取消しタスクの削除

プロセス・タスクから取消しタスクを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除する取消しタスクを選択します。
2. 「Undo Tasks」領域から「Delete」をクリックします。  
取消しタスクがプロセス・タスクから削除されます。

#### 6.3.3.5.3 リカバリ・タスクのプロセス・タスクへの割当て

プロセス・タスクにリカバリ・タスクを割り当てるには、次の手順を実行します。

1. リカバリ・タスクを割り当てるプロセス・タスクの行ヘッダーをダブルクリックします。  
Editing Task ウィンドウが表示されます。
2. 「Undo/Recovery」タブをクリックします。

3. 「Recovery Tasks」領域から「Assign」をクリックします。  
「Assignment」ウィンドウが表示されます。
4. このウィンドウから、リカバリ・タスクを選択し、プロセス・タスクに割り当てます。
5. 「OK」をクリックします。  
これで、リカバリ・タスクがプロセス・タスクに割り当てられます。
6. (オプション) 生成されたすべてのリカバリ・タスクが完了したときに、Oracle Identity Manager が、現在のプロセス・タスクのステータスを「Rejected」から「Unsuccessfully Completed」に変更するようにする場合は、「Complete on Recovery」チェック・ボックスを選択します。それ以外の場合は、このチェック・ボックスの選択を解除します。

#### 6.3.3.5.4 プロセス・タスクからのリカバリ・タスクの削除

プロセス・タスクからリカバリ・タスクを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するリカバリ・タスクを選択します。
2. 「Recovery Tasks」領域から「Delete」をクリックします。  
リカバリ・タスクがプロセス・タスクから削除されます。

#### 6.3.3.6 「Notification」タブ

このタブは、現在のプロセス・タスクが特定のステータスになったときに生成される電子メール通知を指定するために使用します。タスクが取り得る各ステータスに対して、別々の電子メール通知を生成できます。電子メール通知が有効でなくなったら、「Notification」タブから削除できます。

たとえば、「Create User」プロセス・タスクのステータスが Completed になると、Oracle Identity Manager は、リソースをプロビジョニングされているユーザーに対して電子メール通知「Process Task Completed」を送信します。「Create User」プロセス・タスクが却下されると、電子メール通知「Process Task Completed」が、ユーザーとその管理者に送信されます。

---

**注意：** Oracle Identity Manager が電子メール通知をユーザーに送信できるのは、「Email Definition」フォームを使用して電子メール・メッセージのテンプレートを先に作成しておいた場合のみです。

詳細は、6-2 ページの「[「Email Definition」フォーム](#)」を参照してください。

---

次の各項では、プロセス・タスクに電子メール通知を割り当てる方法と、プロセス・タスクから電子メール通知を削除する方法を説明します。

##### 6.3.3.6.1 プロセス・タスクへの電子メール通知の割当て

プロセス・タスクに電子メール通知を割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 電子メール通知を割り当てるプロセス・タスクの行ヘッダーをダブルクリックします。  
「Editing Task」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「Notification」タブをクリックします。
3. 「Assign」をクリックします。  
「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. このウィンドウから、使用する電子メール・テンプレート定義を選択し、プロセス・タスクに割り当てます。
5. 「OK」をクリックします。  
電子メール通知の名前が「Notification」タブに表示されます。

6. 「Status」 参照フィールドをダブルクリックします。

Lookup ウィンドウが表示されたら、完了ステータス・レベルを選択します。プロセス・タスクがそのステータス・レベルに達すると、Oracle Identity Manager は、関連付けられている電子メール通知を送信します。

7. 電子メール通知を受信するユーザーを表すチェック・ボックスを選択します。

現在、電子メール通知は、次のユーザーに送信できます。

- **Assignee**。このユーザーは、関連付けられているプロセス・タスクの完了を担当します。
- **Requester**。このユーザーは、対応するプロセス・タスクが含まれるプロセスをリクエストしました。
- **User**。関連付けられているプロセス・タスクが「Completed」になると、このユーザーはリソースにプロビジョニングされます。
- **User's Manager**。このユーザーはユーザーの監督者で、対応するプロセス・タスクが「Completed」になると、リソースにプロビジョニングされます。

8. 「Save」 をクリックします。

電子メール通知がプロセス・タスクに割り当てられます。

#### 6.3.3.6 プロセス・タスクからの電子メール通知の削除

次の手順で、プロセス・タスクから電子メール通知を削除する方法を説明します。

プロセス・タスクから電子メール通知を削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除する電子メール通知を選択します。
2. 「Delete」 をクリックします。

電子メール通知がプロセス・タスクから削除されます。

#### 6.3.3.7 「Task to Object Status Mapping」 タブ

リソース・オブジェクトには、リソースをユーザーやアプリケーションにプロビジョニングするために使用されたデータが含まれます。このデータには、承認プロセスとプロビジョニング・プロセスが含まれます。

また、リソース・オブジェクトには、事前定義済みのプロビジョニング・ステータスがあり、これらのステータスは、ターゲット・ユーザーまたは組織にプロビジョニングされるリソース・オブジェクトのライフ・サイクルを通じて様々なステータスを表します。「Resource Objects」 フォームの「Currently Provisioned」 タブにアクセスして、そのリソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスをいつでも表示できます。これらの値は「Users」 および「Organizations」 フォームの「Object Process Console」 タブにも表示されます。

---

**注意：** プロビジョニング・ステータスは、「Resource Objects」 フォームの「Status Definition」 タブで定義されています。

---

リソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスは、関連付けられている承認プロセスやプロビジョニング・プロセス、およびこれらのプロセスを含むタスクのステータスによって決まります。このため、プロセス・タスクのステータスと、それが割り当てられているリソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスの間にリンクを提供する必要があります。

「Task to Object Status Mapping」 タブは、このリンクを作成するために使用されます。また、この接続が不要になるか、プロセス・タスクのステータスを、リソース・オブジェクトの別のプロビジョニング・ステータスに関連付ける場合は、既存のリンクを解除する必要があります。

この例では、プロセス・タスクのステータスとリソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスの間に5つのマッピングがあります。「Create User」 プロセス・タスクのステータスが Completed になると、関連付けられているリソース・オブジェクトには Provisioned

というプロビジョニング・ステータスが割り当てられます。ただし、このタスクが取り消されると、そのリソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスは **Revoked** になります。**None** は、プロセス・タスクのステータスがリソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスに影響しないことを示します。

次の各項では、プロビジョニング・ステータスにプロセス・タスク・ステータスをマッピングする方法と、プロビジョニング・ステータスからプロセス・タスク・ステータスのマッピングを解除する方法を説明します。

#### 6.3.3.7.1 プロビジョニング・ステータスへのプロセス・タスク・ステータスのマッピング

プロセス・タスク・ステータスをプロビジョニング・ステータスにマッピングするには、次の手順を実行します。

1. リソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスにマッピングするステータスがあるプロセス・タスクの行ヘッダーをダブルクリックします。  
Editing Task ウィンドウが表示されます。
2. 「Task to Object Status Mapping」 タブをクリックします。
3. 目的のプロセス・タスク・ステータスを選択します。
4. 「Object Status」 参照フィールドをダブルクリックします。  
Lookup ウィンドウが表示されたら、プロセス・タスク・ステータスをマップするリソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスを選択します。
5. 「OK」 をクリックします。  
選択したプロビジョニング・ステータスが、「Task to Object Status Mapping」 タブに表示されます。
6. 「Save」 をクリックします。  
プロセス・タスク・ステータスがプロビジョニング・ステータスにマッピングされました。

#### 6.3.3.7.2 プロビジョニング・ステータスからのプロセス・タスク・ステータスのマッピング解除

プロビジョニング・ステータスからプロセス・タスク・ステータスのマッピングを解除するには、次の手順を実行します。

1. 目的のプロセス・タスク・ステータスを選択します。
2. 「Object Status」 参照フィールドをダブルクリックします。  
Lookup ウィンドウが表示されたら、「None」 を選択します。**None** は、プロセス・タスクのステータスがリソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスに影響しないことを示します。
3. 「OK」 をクリックします。  
プロビジョニング・ステータス「None」 が、「Task to Object Status Mapping」 タブに表示されます。
4. 「Save」 をクリックします。  
プロセス・タスク・ステータスの、プロビジョニング・ステータスへのマッピングが解除されました。

### 6.3.3.8 Editing Task ウィンドウの「Assignment」 タブ

このタブは、現在のプロセス・タスクの割当てルールを指定するために使用されます。ルールは、プロセス・タスクの割当て方法を定めます。

---

---

**注意：**多くの場合、タスク割当てルールは承認プロセスのタスクに関連付けられます。これらのタスクは通常、手動で完了されるためです。一方、プロビジョニング・プロセスに属するタスクは通常、自動化されています。結果的に、タスク割当てルールは必要とされません。

---

---

たとえば、プロセスに「Create User」プロセス・タスクが挿入された場合、優先順位の値が 1 である Solaris Process Tasks - User ルールが評価されます。そのルールの基準が満たされると、タスクは RLAVA という名前のユーザーに割り当てられ、600,000 ミリ秒（10 分）後にエスカレーションされるようにマークが付けられます。

Solaris Process Tasks - User ルールの基準が満たされない場合、Oracle Identity Manager は Solaris Process Tasks - Group ルールの基準を評価します。そのルールの基準が満たされると、タスクは SYSTEM ADMINISTRATORS ユーザー・グループに割り当てられ、10 分後にエスカレーションされるようにマークが付けられます。

---

---

**注意：**プロセス・タスクに割り当てることができるのは、分類タイプが「Task Assignment」のルールのみです。ルールの分類タイプ指定の詳細は、5-6 ページの「[「Rule Designer」 フォーム](#)」を参照してください。また、Oracle Identity Manager には、デフォルト・ルールが事前定義されています。このルールは常に True に評価されます。このため、他のルールがすべて失敗しても、少なくとも 1 つの事前定義済みのタスクを割り当てするための安全策として使用できます。

---

---

表 6-4 に、「Assignment」 タブのフィールドの説明を示します。

表 6-4 Editing Task ウィンドウの「Assignment」 タブのフィールド

フィールド名	説明
Rule	評価するタスク割当てルールの名前。
Target Type	<p>現在のプロセス・タスクの完了を担当するユーザーまたはユーザー・グループの分類タイプ。現在、プロセス・タスクの可能な割当て先は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>User</b>。 Oracle Identity Manager のユーザー。</li> <li>■ <b>Group</b>。 ユーザー・グループ。</li> <li>■ <b>Group User with Highest Priority</b>。 最も高い優先順位番号を指定されたユーザー・グループのメンバー。</li> <li>■ <b>Group User with Least Load</b>。 指定されたユーザー・グループで、最も少ないプロセス・タスクが割り当てられているメンバー。</li> <li>■ <b>Request Target User's Manager</b>。 リソースをプロビジョニングされているユーザーの監督者。</li> <li>■ <b>Object Authorizer User with Highest Priority</b>。 最も高い優先順位番号を持つユーザー・グループ（リソースの「Object Authorizer」ユーザー・グループに指名されているグループ）のメンバー。</li> <li>■ <b>Object Authorizer User with Least Load</b>。 割り当てられたプロセス・タスクが最も少ないユーザー・グループ（リソースの「Object Authorizer」ユーザー・グループに指定されたグループ）のメンバー。</li> <li>■ <b>Object Administrator</b>。 関連付けられているリソース・オブジェクトの管理者と定義されているユーザー・グループ。</li> <li>■ <b>Object Administrator User with Least Load</b>。 割り当てられたプロセス・タスクが最も少ないユーザー・グループ（「Object Administrator」ユーザー・グループに指定されたグループ）のメンバー。</li> </ul> <p><b>注意：</b>「Object Authorizer」および「Object Administrator」ユーザー・グループは、それぞれ「Resource Objects」フォームの「<b>Object Authorizers</b>」および「<b>Administrators</b>」タブで定義されています。</p>
Adapter	アダプタの名前。すべての既存のアダプタのための参照フォームを入手するには、このフィールドをダブルクリックします。
Adapter Status	アダプタのステータス。
Group	現在のプロセス・タスクが割り当てられているユーザー・グループ。
User	現在のプロセス・タスクが割り当てられているユーザー。
Email Unmentioned Email	「 <b>Email Name</b> 」参照フィールドから電子メール通知を選択し、「 <b>Send Email</b> 」チェック・ボックスを選択すると、現在のプロセス・タスクが割り当てられたとき、Oracle Identity Manager によりユーザーまたはユーザー・グループに電子メール通知が送信されます。
Escalation Time	Oracle Identity Manager がトリガーするルールに関連付けられている、ユーザーまたはユーザー・グループがプロセス・タスクを完了する必要がある時間の長さ（単位はミリ秒）。このプロセス・タスクが割り当てられた時間内に完了しなかった場合、Oracle Identity Manager により、別のユーザーまたはユーザー・グループに再割当てされます。エスカレーション・ルールは、ターゲット・タイプ・パラメータで定義された順序を厳守します。
Priority	現在のプロセス・タスクに関連付けられているルールの優先順位番号。この番号は、Oracle Identity Manager がルールを評価する順序を示します。

次の各項では、プロセス・タスクへのタスク割当てルールの追加と、プロセス・タスクからそれを削除する方法を説明します。

### 6.3.3.8.1 プロセス・タスクへのルールの追加

プロセス・タスクにルールを追加するには、次の手順を実行します。

1. ルールを追加するタスクの行ヘッダーをダブルクリックします。

Editing Task ウィンドウが表示されます。

2. 「Assignment」 タブをクリックします。

3. 「Add」 をクリックします。

「Assignment」 タブに空行が表示されます。

4. 「Rule」 参照フィールドをダブルクリックします。

Lookup ウィンドウが表示されたら、プロセス・タスクに追加するルールを選択します。「OK」 をクリックします。

5. 「Target Type」 参照フィールドをダブルクリックします。

Lookup ウィンドウが表示されたら、プロセス・タスクの完了を担当するユーザーまたはユーザー・グループの分類タイプ (User、Group、Group User with Highest Priority、Group User with Least Load、Request Target User's Manager、Object Authorizer User with Highest Priority、Object Authorizer User with Least Load、Object Administrator、Object Administrator User with Least Load) を選択します。「OK」 をクリックします。

6. 「Group」 参照フィールドをダブルクリックします。

Lookup ウィンドウが表示されたら、プロセス・タスクの完了を担当するユーザー・グループを選択します。この設定が必要なのは、「Target Type」 フィールドで「Group」、 「Group User with Highest Priority」 または 「Group User with Least Load」 を選択した場合のみです。「OK」 をクリックします。

または

「User」 参照フィールドをダブルクリックします。Lookup ウィンドウが表示されたら、プロセス・タスクの完了を担当するユーザーを選択します。この設定が必要なのは、「Target Type」 フィールドで「User」 を選択した場合のみです。「OK」 をクリックします。

7. 「Email Name」 フィールドをダブルクリックします。

Lookup ウィンドウが表示されたら、タスクが割り当てられたときに、対応するユーザーまたはユーザー・グループに送信される電子メール通知を選択します。「OK」 をクリックします。続いて、「Send Email」 チェック・ボックスを選択します。

タスクが割り当てられたときに Oracle Identity Manager が電子メール通知を送信するように設定しない場合は、手順 8 に進みます。

8. 「Escalation Time」 フィールドに、選択されたユーザーまたはユーザー・グループがプロセス・タスクを完了するための時間を入力します (単位はミリ秒)。

プロセス・タスクに追加するルールに時間制限を関連付けない場合は、「Escalation Time」 フィールドを空欄のままにして、手順 10 に進みます。

9. 「Priority」 フィールドに、プロセス・タスクに追加するルールの優先順位番号を入力します。

10. 「Save」 をクリックします。

ルールがプロセス・タスクに追加されました。

### 6.3.3.8.2 プロセス・タスクからのルールの削除

プロセス・タスクからルールを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するルールを選択します。

2. 「Delete」 をクリックします。

ルールがプロセス・タスクから削除されます。

---

---

# Design Console での Oracle Identity Manager の管理

この章では、Design Console を使用して Oracle Identity Manager を管理する方法を説明します。次の内容について説明します。

- Design Console 管理の概要
- 「Form Information」 フォーム
- 「Lookup Definition」 フォーム
- 「User Defined Field Definition」 フォーム
- 「System Configuration」 フォーム
- 「Remote Manager」 フォーム
- 「Password Policies」 フォーム
- 「Task Scheduler」 フォーム

## 7.1 Design Console 管理の概要

Design Console の「Administration」フォルダには、システム管理者が Oracle Identity Manager 管理機能を管理するためのツールがあります。このフォルダには次のフォームがあります。

- **Form Information:** このフォームは、特定の Oracle Identity Manager フォームと関連付けるクラス名、フォーム・ラベル、フォーム・タイプ、メニュー項目、グラフィック・アイコンおよびオンライン・ヘルプ・トピックを指定するために使用します。  
  
また、このフォームを使用して、Design Console エクスプローラに表示されるフォルダおよびフォルダ項目を変更することもできます。
- **Lookup Definition:** このフォームは、参照定義を作成および管理するために使用します。参照定義は、参照フィールドと、その参照フィールドからアクセスできる値を表します。
- **User Defined Field Definition:** このフォームは、ユーザー定義フィールドを作成および管理するために使用します。ユーザー定義フィールドを使用すると、Design Console フォームの追加情報を格納できます。
- **System Configuration:** このフォームは、クライアントとサーバーの動作を制御するプロパティの値を定義および設定するために使用します。  
  
プロパティ値を適用するユーザーとユーザー・グループを指定することも、値をすべてのユーザーに適用するように指定することもできます。
- **Remote Manager:** このフォームは、Oracle Identity Manager がサード・パーティのプログラムとの通信に使用するサーバーの情報を表示するために使用します。これらのサーバーはリモート・マネージャと呼ばれます。
- **Password Policies:** このフォームは、ユーザーに対してパスワードの制限を設定し、パスワード・ポリシーに関連付けられたルールおよびリソース・オブジェクトを表示するために使用します。
- **Task Scheduler:** このフォームは、スケジュール済タスクの実行時間を指定したスケジュールを設定するために使用します。

## 7.2 「Form Information」 フォーム

図 7-1 に示す「Form Information」フォームは、Design Console の「Administration」フォルダにあります。このフォームは、クラス名、Design Console エクスプローラに表示するラベル、フォーム・タイプ、フォーム・アイコン、および Oracle Identity Manager フォームに関連付けるヘルプを指定するために使用します。また、このフォームを使用して、Design Console エクスプローラに表示されるフォルダおよびフォルダ項目を変更することもできます。

図 7-1 「Form Information」 フォーム

Name	Variant Type	Length	Field Label	Field Type	Default Value	Order	Application Profile	Encrypted
------	--------------	--------	-------------	------------	---------------	-------	---------------------	-----------

表 7-1 に、このフォームのデータ・フィールドの説明を示します。

表 7-1 「Form Information」 フォームのフィールド

フィールド名	説明
Key	フォームまたはフォルダのシステム生成 ID。
Class Name	フォームまたはフォルダに関連付けられたクラス名。Oracle Identity Manager とともに事前インストールされているフォームおよびフォルダの場合、これは Thor クラスになります。
Description	Oracle Identity Manager エクスプローラで表示される、このフォームまたはフォルダのラベル。「childform」タイプのフォームの場合、この値は親フォームの名前を含み、parent_form_name.child_form_name というネーミング規則に準じている必要があります。
Type	フォームまたはフォルダに関連付けられたフォーム・タイプ。フォルダの場合、これは folder である必要があります。選択できる値は、folder、export、processform、childform、javaform、import および menuitem です。
Graphic Filename	Design Console エクスプローラでフォームまたはフォルダの横にアイコンとして表示されるグラフィック・ファイルの名前。
Context Sensitive Help URL	このフォームがアクティブになっているときにユーザーが [F1] を押すと表示される、オンライン・ヘルプ・トピックの URL。

## 7.2.1 Oracle Identity Manager のフォームまたはフォルダの追加

Oracle Identity Manager のフォームまたはフォルダを追加するには、次の手順を実行します。

- 「Form Information」 フォームに移動します。
- 「Class Name」 フィールドに、フォームのレンダリングに使用するクラスの名前を入力します。
- 「Description」 フィールドに、Design Console エクスプローラに表示するフォームまたはフォルダ用のラベルを入力します。

「childform」タイプのフォームの場合、この値は親フォームの名前を含み、parent\_form\_name.child\_form\_name というネーミング規則に準じている必要があります。

- 「Type」 ボックスから項目を選択します。
  - フォルダの場合は、「folder」を選択します。
  - エクスポート手順に関連するフォームの場合は、「export」を選択します。
  - プロセスに関連するフォームの場合は、「processform」を選択します。
  - 他のフォームに表示されるタブ、または他のフォーム内にネストされたフォームの場合は、「childform」を選択します。
  - 汎用フォームの場合は、「javaform」を選択します。
  - インポート手順に関連するフォームの場合は、「import」を選択します。
  - Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソールに関連付けられたメニュー項目の場合は、「menuitem」を選択します。

**関連項目：** Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソールの詳細は、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・ガイド』を参照してください。

- 「Graphic Filename」 フィールドに、Design Console エクスプローラでフォームまたはフォルダ用に使用されるアイコンまたはグラフィック・イメージ・ファイルの名前を入力します。

6. 「Context Sensitive Help URL」フィールドに、フォームのオンライン・ヘルプ・トピックの URL を入力します。

フォームがアクティブになっているときにユーザーが **[F1]** を押すと、このファイルが表示されます。

7. 「Save」をクリックします。

フォームが追加され、「Key」フィールドにフォームまたはフォルダ用のシステム生成 ID が表示されます。

## 7.2.2 Design Console エクスプローラの変更

Design Console エクスプローラと、そのフォルダおよびフォルダ項目のレイアウトは、様々なユーザー・グループ・レベルに基づいて変更できます。

---

**注意：** フォルダを開いてフォルダ項目を表示する場合はプラス記号 (+) をクリックし、フォルダ項目を非表示にする場合はマイナス記号 (-) をクリックします。

---

ユーザーがアクセスできるフォルダおよびフォルダ項目は、そのユーザーがメンバーとなっているユーザー・グループに基づいています。たとえば、**IT DEPARTMENT** というユーザー・グループは「System Configuration」フォームを開くことができ、**HR DEPARTMENT** というユーザー・グループは「Lookup Definition」フォームを起動できるとします。この両方のユーザー・グループに属しているユーザーは、「System Configuration」フォームと「Lookup Definition」フォームにアクセスできます。

## 7.3 「Lookup Definition」 フォーム

参照定義は次のいずれかを表します。

- テキスト・フィールドの名前と説明
- 参照フィールドと、その参照フィールドをダブルクリックすることによってアクセス可能な値
- ボックスと、そのボックスから選択可能なコマンド

これらの項目は参照値と呼ばれ、テキスト・フィールド、参照フィールドまたはボックスに関連する情報を含みます。ユーザーは、次の 2 つのいずれかの場所から参照定義にアクセスできます。

- Oracle Identity Manager とともにパッケージ化されているフォームまたはタブ
- 「Form Designer」フォームを使用して作成されたユーザー作成フォームまたはタブ

図 7-2 に示す「Lookup Definition」フォームは、Design Console の「Administration」フォルダにあります。このフォームは、参照定義を作成および管理するために使用します。

図 7-2 「Lookup Definition」 フォーム

Lookup Definition

Code: Password Policies: Policy Key

Field: PWR\_KEY

Lookup Type  Field Type

Required:

Group: Password Policies

Lookup Code Information

	Code Key	Decode	Language	Country
1	Policy Key	Policy Key	en	US

Buttons: Add, Delete

Lookup Definition

表 7-2 に、「Lookup Definition」 フォームのデータ・フィールドの説明を示します。

表 7-2 「Lookup Definition」 フォームのフィールド

フィールド名	説明
Code	参照定義の名前。
Field	テキスト・フィールド、参照フィールドまたはボックス・フィールドにアクセスできるフォームまたはタブの表の列名。
Lookup Type/Field Type	<p>これらのオプションは、参照定義がテキスト・フィールド、参照フィールドまたはボックスのどれを表すかを指定します。</p> <p>「<b>Field Type</b>」 オプションを選択した場合、参照定義はテキスト・フィールドを表します。</p> <p>「<b>Lookup Type</b>」 オプションを選択した場合、参照定義は参照フィールドまたはボックスのいずれかを表し、さらにその参照フィールドまたはボックスからアクセス可能な値を表します。</p> <p><b>注意:</b> Oracle Identity Manager とともにパッケージ化されているフォームまたはタブの場合、参照定義は参照フィールドまたはボックスのいずれかとしてすでに設定されています。これを変更することはできません。ただし、参照フィールドまたはボックスからアクセスできる値を追加または変更することはできます。</p> <p>ユーザーが定義したフォームまたはタブの場合、ユーザーが「Form Designer」 フォームの「<b>Additional Columns</b>」 タブを使用して、参照定義が参照フィールドまたはボックスのいずれを表すかを指定します。</p> <p>参照定義のデータ型指定の詳細は、8-6 ページの「<b>Additional Columns</b> タブ」を参照してください。</p>
Required	このチェック・ボックスを選択すると、参照定義が必須として指定されます。その結果、その参照定義が表すフィールドまたはボックスにデータが入力されるまで、Oracle Identity Manager では対応するフォームまたはタブの内容の保存が許可されません。
Group	参照定義を表示する Oracle Identity Manager フォームまたはユーザー定義フォームの名前。

次の項では、参照定義を作成する方法について説明します。

## 7.3.1 参照定義の作成

参照定義を作成するには、次の手順を実行します。

1. 「Lookup Definition」 フォームを開きます。
2. 「Code」 フィールドに、参照定義の名前を入力します。
3. 「Field」 フィールドに、テキスト・フィールド、参照フィールドまたはボックス・フィールドにアクセスできる Oracle Identity Manager またはユーザー作成のフォームまたはタブの表の列名を入力します。
4. 参照定義が参照フィールドまたはボックスを表す場合は、「Lookup Type」 オプションを選択します。

参照定義がテキスト・フィールドを表す場合は、「Field Type」 オプションを選択します。

5. (オプション) 参照定義が表すフィールドまたはボックスにデータが入力されたときのみ、このフォームまたはタブの内容を保存するには、「Required」 チェック・ボックスを選択します。それ以外の場合は手順 6 に進みます。
6. 「Group」 フィールドに、参照定義を表示する Oracle Identity Manager フォームまたはユーザー定義フォームの名前を入力します。

「Code」、「Field」 および「Group」 の各フィールドに入力するテキストは、ネーミング規則に準じている必要があります。

**関連項目：** ネーミング規則の詳細は、7-5 ページの「[「Lookup Definition」 フォーム](#)」を参照してください。

7. 「Save」 をクリックします。

参照定義が作成されます。関連付けられたテキスト・フィールド、参照フィールドまたはボックスが、指定した Oracle Identity Manager またはユーザー定義のフォームまたはタブに表示されます。

## 7.3.2 「Lookup Code Information」 タブ

「Lookup Code Information」 タブは、「Lookup Definition」 フォームの下部にあります。このタブは、選択した参照定義の詳細情報を作成および管理するために使用します。この情報には、参照定義に関連する値の名前、説明、言語コードおよび国コードが含まれます。これらの項目は**参照値**と呼ばれます。

次の手順は、参照値を作成、変更および削除する方法について説明しています。

### 7.3.2.1 参照値の作成と変更

参照値を作成または変更するには、次の手順を実行します。

---



---

**注意：** 国際化のために、参照値には言語コードと国コードの両方を指定する必要があります。

新しい参照定義を作成する場合は、参照定義を保存してから参照値を追加してください。

---



---

1. 「Lookup Definition」 フォームを開きます。
2. 参照定義にアクセスします。
3. 参照値を作成する場合は、「Add」 をクリックします。  
「Lookup Code Information」 タブに空行が表示されます。  
参照値を変更する場合は、編集する参照値を選択します。

4. 「Code Key」フィールドで情報を追加または編集します。  
このフィールドには参照値の名前が含まれます。  
また、「Lookup Type」オプションが選択されている場合、このフィールドは、ユーザーが選択を行ったときに参照フィールドまたはボックスに表示される内容も表します。
5. 「Decode」フィールドで情報を追加または編集します。  
このフィールドには参照値の説明が含まれます。  
「Lookup Type」オプションが選択されている場合、このフィールドは次のいずれかも表します。
  - ユーザーが対応する参照フィールドをダブルクリックした後に参照ウィンドウに表示される項目
  - 関連付けられたボックスに表示されるコマンド
6. 「Language」フィールドで情報を追加または編集します。  
このフィールドには、参照値の2文字の言語コードが含まれます。
7. 「Country」フィールドで情報を追加または編集します。  
このフィールドには、参照値の2文字の国コードが含まれます。
8. 「Save」をクリックします。  
これで、作成または変更した参照値に、入力した設定が反映されます。

### 7.3.2.2 参照値の削除

参照値を削除するには、次の手順を実行します。

1. 「Lookup Definition」フォームを開きます。
2. 参照定義を検索します。
3. 削除する参照値を選択します。
4. 「Delete」をクリックします。選択した参照値が削除されます。

## 7.4 「User Defined Field Definition」 フォーム

Oracle Identity Manager によりデフォルトで提供されるフィールドを補足する場合があります。様々な Oracle Identity Manager フォームに対して新しいフィールドを作成したり、追加することができます。これらのフィールドは**ユーザー定義フィールド**と呼ばれます。

ユーザー定義フィールドは、「**Form Name**」データ・フィールドに示されたフォームの「**User Defined Fields**」タブに表示されます。たとえば、[図 7-3](#) では、「Organizations」フォームの「**User Defined Fields**」タブに「**Access Code Number**」ユーザー定義フィールドが追加されています。

[図 7-3](#) に示す「User Defined Field Definition」フォームは、Design Console の「Administration」フォルダにあります。このフォームは、「Organizations」、「Users」、「Requests」、「Resource Objects」、「User Groups」および「Form Designer」フォームのユーザー定義フィールドを作成および管理するために使用します。

図 7-3 「User Defined Field Definition」 フォーム

Label	Variant Type	Length	Column Name	Order	Field Type	Encrypted
1 Access Code Number	String	25	ACT_UDF_ACN	1	TextField	0

[表 7-3](#) に、「User Defined Field Definition」フォームのデータ・フィールドの説明を示します。

表 7-3 「User Defined Field Definition」 フォームのフィールド

フィールド名	説明
Form Name	ユーザー定義フィールドを含むフォームの名前。これらのフィールドは、「 <b>User Defined Columns</b> 」タブに表示されます。 <b>注意：</b> ユーザーのユーザー定義フィールドはユーザーのプロファイル情報に関連しているため、「Users」フォームの「 <b>User Profile</b> 」タブに表示されます。
Description	ユーザー定義フィールドに関する追加情報。
Auto Pre-Population	このチェック・ボックスは、事前移入アダプタがアタッチされたフォームのユーザー定義フィールドが Oracle Identity Manager とユーザーのどちらによって移入されるかを指定します。 これらのフィールドを Oracle Identity Manager によって移入する場合は、「 <b>Auto Pre-Population</b> 」チェック・ボックスを選択します。 これらのフィールドを、ユーザーがツールバーの「 <b>Pre-Populate</b> 」ボタンをクリックするか、手動でデータを入力することによって移入する場合は、このチェック・ボックスを選択解除します。 <b>注意：</b> この設定は、事前移入アダプタのトリガーを制御しません。関連付けられたユーザー定義フィールドにアダプタの実行により得られる内容を表示するのが、Oracle Identity Manager とユーザーのどちらであるかの決定のみを行います。 事前移入アダプタの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』を参照してください。 <b>注意：</b> このチェック・ボックスは、ユーザー定義フィールドを作成し、そのフィールドに事前移入アダプタが関連付けられている場合にのみ該当します。

次の項では、ユーザー定義フィールドのターゲット・フォームを選択する方法について説明します。

## 7.4.1 ユーザー定義フィールドのターゲット・フォームの選択

ユーザー定義フィールドのターゲット・フォームを選択するには、次の手順を実行します。

1. 「User Defined Field Definition」 フォームを開きます。
2. 「Form Name」 参照フィールドをダブルクリックします。  
Lookup ウィンドウが表示されたら、作成するユーザー定義フィールドが表示される Oracle Identity Manager フォーム（「Organizational Defaults」、「Policy History」、「Group Entitlements」、「Resource Objects」または「Form Designer」）を選択します。
3. 「Query」 をクリックします。  
ユーザー定義フィールドの追加先のフォームが選択されます。

## 7.4.2 「User Defined Field Definition」 フォームのタブ

「User Defined Field Definition」 フォームを起動し、ユーザー定義フィールドのターゲット・フォームを選択すると、このフォームのタブが使用可能になります。

「User Defined Field Definition」 フォームには次のタブが含まれます。

- 「User Defined Columns」 タブ
- 「Properties」 タブ
- 「Administrators」 タブ

これらのタブについては、以降の項でそれぞれ詳しく説明します。

### 7.4.2.1 「User Defined Columns」 タブ

このタブは、次のことを行うために使用します。

- ユーザー定義フィールドを作成します。
- ユーザー定義フィールドの変数型、長さおよびフィールド・タイプを設定します。
- ターゲット・フォームの「User Defined Fields」 タブに表示されるユーザー定義フィールドの順序を指定します。  
フィールドの順序番号によって、ユーザー定義フィールドがフォームに表示される順序が決まります。図 7-4 では、Access Code Number ユーザー定義フィールドの順序番号が 1 であるため、Organizations フォームの「User Defined Fields」 タブにはこのフィールドが最初に表示されています。
- ユーザー定義フィールドに関連付けられた情報をクライアントとサーバー間で交換するときに暗号化するかどうかを指定します。
- ユーザー定義フィールドを削除します。

図 7-4 に、「User Defined Field Definition」フォームの「User Defined Columns」タブを示します。

図 7-4 「User Defined Field Definition」フォームの「User Defined Columns」タブ

	Label	Variant Type	Length	Column Name	Order	Field Type	Encrypted
1	Access Code Number	String	25	ACT_UDF_ACN	1	TextField	0

次の項では、Oracle Identity Manager フォームにユーザー定義フィールドを追加する方法と、Oracle Identity Manager フォームからユーザー定義フィールドを削除する方法について説明します。

## Oracle Identity Manager フォームへのユーザー定義フィールドの追加

ユーザー定義フィールドを追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Add」をクリックします。

図 7-5 に示すように、「User Defined Fields」ダイアログ・ボックスが表示されます。

図 7-5 「User Defined Fields」ダイアログ・ボックス

表 7-4 に、「User Defined Fields」ダイアログ・ボックスのフィールドの説明を示します。

表 7-4 「User Defined Fields」ダイアログ・ボックスのフィールド

フィールド名	説明
Label	ユーザー定義フィールドのラベル。このラベルは、ターゲット・フォームの「User Defined Fields」タブのユーザー定義フィールドの隣に表示されます。 ラベルの最大長は 30 文字です。

表 7-4 「User Defined Fields」 ダイアログ・ボックスのフィールド (続き)

フィールド名	説明
Data Type	<p>このボックスで、ユーザー定義フィールドのデータ型を次のうちから1つ選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>String</b>。ユーザーはこのフィールドに英数字の文字列を入力できます。</li> <li>■ <b>Date</b>。ユーザーがこのフィールドをダブルクリックすると、「Date and Time」ダイアログ・ボックスが表示されます。</li> <li>■ <b>Integer</b>。ユーザーは、このユーザー定義フィールドに小数点なしの数字 (たとえば、3 など) を入力できます。</li> <li>■ <b>Boolean</b>。ユーザーは、このフィールドに「True (1)」または「False (0)」の2つの値を入力できます。</li> <li>■ <b>Double</b>。ユーザーは、このフィールドに倍精度浮動小数点数 (double 数値) を入力できます。</li> </ul>
Field Size	<p>「Field Size」テキスト・フィールドは、String データ型の場合のみ有効です。</p> <p>このフィールドには、ユーザーがフィールドに入力できる数字または文字の最大数を入力します。</p>
Field Type	<p>このボックスで、ユーザー定義フィールドのフィールド・タイプを次のうちから1つ選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>Text Field</b>。フィールドは、テキスト・フィールドとしてターゲット・フォームの「User Defined Fields」タブに表示されます。</li> <li>■ <b>Lookup Field</b>。フィールドは、参照フィールドとしてターゲット・フォームの「User Defined Fields」タブに表示されます。</li> <li>■ <b>Combo Box</b>。フィールドは、ボックスとしてターゲット・フォームの「User Defined Fields」タブに表示されます。</li> <li>■ <b>Text Area</b>。フィールドは、テキスト領域としてターゲット・フォームの「User Defined Fields」タブに表示されます。</li> <li>■ <b>Password Field</b>。フィールドは、テキスト・フィールドとしてターゲット・フォームの「User Defined Fields」タブに表示されます。このテキスト・フィールドから、ユーザーは (一連のアスタリスク [*] として表示される) 暗号化されたパスワードを問い合わせるか、フィールドに暗号化されたパスワードを移入するかして、そのパスワードをデータベースに保存できます。</li> <li>■ <b>Check Box</b>。フィールドは、チェック・ボックスとしてターゲット・フォームの「User Defined Fields」タブに表示されます。</li> <li>■ <b>Date Field with Dialog</b>。このフィールドは、参照フィールドとしてターゲット・フォームの「User Defined Fields」タブに表示されます。ユーザーがこの参照フィールドをダブルクリックすると、「Date &amp; Time」ウィンドウが表示されます。すると、ユーザーがこのウィンドウから選択した日付と時刻が、Oracle Identity Manager によってデータ・フィールドに移入されます。</li> </ul> <p><b>注意:</b> このボックスに表示されるフィールド・タイプは、「Data Type」ボックスに表示されているデータ型を反映しています。</p>

表 7-4 「User Defined Fields」 ダイアログ・ボックスのフィールド（続き）

フィールド名	説明
Column Name	データベースによって認識されるユーザー定義フィールドの名前。  <b>注意：</b> この名前は、接頭辞 <code>TABLE_NAME_UDF_</code> と、ユーザー定義フィールドに関連付けられたラベルで構成されます。  たとえば、「Organizations」フォームの「Table Name」フィールドが <code>ACT</code> であり、データ・フィールドの名前が <code>ACN</code> の場合、データベースによって認識されるユーザー定義フィールドの名前は <code>ACT_UDF_ACN</code> になります。  <b>注意：</b> 「Column Name」フィールド内の名前に空白を含めることはできません。
Default Value	この値は、ターゲット・フォームのユーザー定義フィールドに表示されます。パスワードおよび暗号化されたフィールドにはデフォルト値を指定しないことをお勧めします。
Encrypted	このチェック・ボックスは、関連付けられたユーザー定義フィールドに表示される情報をクライアントとサーバーの間で交換するときに暗号化するかどうかを決定します。  ユーザー定義フィールドに表示される情報を暗号化する場合は、このチェック・ボックスを選択します。  ユーザー定義フィールドに表示される情報を暗号化しない場合は、このチェック・ボックスを選択解除します。
Sequence	このフィールドは、フォームにユーザー定義フィールドが表示される順序を表します。たとえば、「Sequence」フィールドに <code>2</code> が表示されている場合、このフィールドは <code>1</code> の順序番号が付いたユーザー定義フィールドの下に表示されます。

2. 図 7-6 に示すように、フォームに追加するユーザー定義フィールドのパラメータを設定します。

図 7-6 値が入力された「User Defined Fields」ダイアログ・ボックス

図 7-6 では、**Access Code Number** ユーザー定義フィールドが、**Organizations** フォームの「User Defined Fields」タブの最初に表示されています。このフィールドのデータ型は `String` であり、ユーザーはこのフィールドに最大 25 桁を入力できます。

3. このウィンドウから「Save」をクリックします。

#### 4. 「Close」をクリックします。

ユーザー定義フィールドが、「User Defined Columns」タブに表示されます。ターゲット・フォームが起動されると、通常、このユーザー定義フィールドがそのフォームの「User Defined Fields」タブに表示されます。ユーザーのユーザー定義フィールドはユーザーのプロファイル情報に関連しているため、「Users」フォームの「User Profile」タブに表示されます。

### Oracle Identity Manager フォームからのユーザー定義フィールドの削除

ユーザー定義フィールドを削除するには、次の手順を実行します。

#### 1. 目的のユーザー定義フィールドを選択します。

#### 2. 「Delete」をクリックします。

ユーザー定義フィールドが削除されます。

### 7.4.2.2 「Properties」タブ

このタブは、様々な Oracle Identity Manager フォームの「User Defined Fields」タブに表示されるデータ・フィールドにプロパティおよびプロパティ値を割り当てるために使用します。

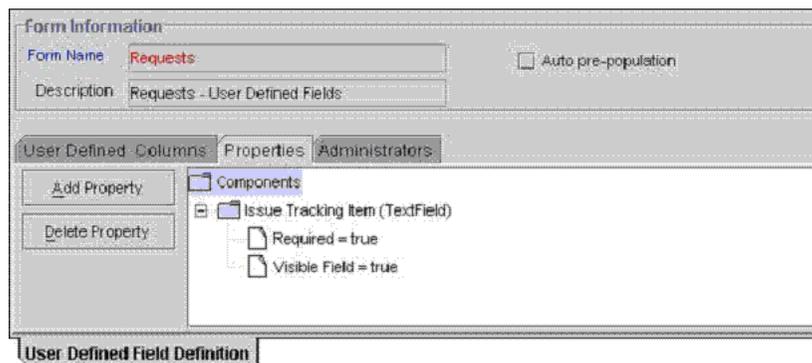
この例では、「Requests form」の「User Defined Fields」タブに、「Issue Tracking Item」という1つのデータ・フィールドが表示されます。このデータ・フィールドには次のプロパティが含まれます。

- **Required:** 「Requests」フォームを保存するためにデータ・フィールドに値を移入する必要があるかどうかを指定します。「Requests」プロパティのデフォルト・プロパティ値は **false** です。
- **Visible Field:** 「Requests」フォームにデータ・フィールドを表示するかどうかを設定します。「Visible Field」プロパティのデフォルト・プロパティ値は **true** です。

このデータ・フィールドでは「Required」プロパティと「Visible Field」プロパティの値は **true** であるため、「Requests」フォームが起動されると、「User Defined Fields」タブに「Issue Tracking Item」データ・フィールドが表示されます。また、このフィールドに値を移入しないと、フォームは保存されません。

図 7-7 に、「User Defined Field Definition」フォームの「Properties」タブを示します。

図 7-7 「User Defined Field Definition」フォームの「Properties」タブ



次の項では、データ・フィールドにプロパティおよびプロパティ値を追加する方法と、データ・フィールドからこれらを削除する方法について説明します。

---

**関連項目:** データ・フィールドにプロパティおよびプロパティ値を追加する方法と、データ・フィールドからこれらを削除する方法は、8-3 ページの「[Form Designer](#)」フォームを参照してください。

---

### 7.4.2.3 「Administrators」 タブ

図 7-8 に、「User Defined Field Definition」 フォームの「Administrators」 タブを示します。

図 7-8 「User Defined Field Definition」 フォームの「Administrators」 タブ

	Group Name	Write	Delete
1	SYSTEM ADMINISTRATORS	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
2	OPERATORS	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

このタブは、「User Defined Field Definition」フォームの現在のレコードに対する管理権限を持つユーザー・グループを指定するために使用します。このフォームの「Write」および「Delete」チェック・ボックスは、これらの管理グループが、現在のユーザー定義フィールド (UDF) 定義に関する情報の変更または削除、あるいはその両方を行えるかどうかを指定します。

次の項では、UDF 定義のユーザー・グループに管理権限を割り当てる方法と、UDF 定義のユーザー・グループから管理権限を削除する方法について説明します。

#### UDF 定義のユーザー・グループへの管理権限の割当て

UDF 定義のユーザー・グループに管理権限を割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 「Assign」をクリックします。  
「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. ユーザー・グループを選択して、UDF 定義に割り当てます。
3. 「OK」をクリックします。  
ユーザー・グループが「Administrators」タブに表示されます。
4. このユーザー・グループが現在の定義に関する情報を表示および変更できるようにする場合、対応する「Write」チェック・ボックスをダブルクリックします。それ以外の場合は手順 5 に進みます。
5. このユーザー・グループが現在の定義の情報を削除できるようにする場合、関連付けられている「Delete」チェック・ボックスをダブルクリックします。それ以外の場合は手順 6 に進みます。
6. 「Save」をクリックします。  
ユーザー・グループが UDF 定義に割り当てられます。

#### UDF 定義のユーザー・グループからの管理権限の削除

管理権限を削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するユーザー・グループを選択します。
2. 「Delete」をクリックします。  
ユーザー・グループが UDF 定義から削除されます。グループのメンバーは、定義に対する管理権限を持たなくなります。

## 7.5 「System Configuration」 フォーム

図 7-9 に示す「System Configuration」フォームは、Design Console の「Administration」フォルダにあります。このフォームは、Oracle Identity Manager のアクションを制御するプロパティの値を定義および設定するために使用します。プロパティ値を適用するユーザーとユーザー・グループを指定することも、プロパティ値をすべてのユーザーに適用するように指定することもできます。

図 7-9 「System Configuration」 フォーム

表 7-5 に、このフォームのデータ・フィールドの説明を示します。

表 7-5 「System Configuration」 フォームのフィールド

フィールド名	説明
Key	プロパティ定義の1つのインスタンスのシステム生成 ID。定義のインスタンスが複数存在する可能性があります。たとえば、システム管理者用のインスタンスが1つと、すべてのユーザー用のインスタンスが1つ存在することがあります。
System	このチェック・ボックスは、プロパティ定義のこのインスタンスを Oracle Identity Manager のすべてのユーザーに適用する（つまり、システム全体に関わるインスタンスにする）か、選択したユーザーとユーザー・グループにのみ適用するかを指定します。  この設定をすべてのユーザーに適用する場合は、このチェック・ボックスを選択します。「Users」タブと「Groups」タブはグレー表示されます。  プロパティのインスタンスを特定のユーザーとグループに適用するように指定する場合は、このチェック・ボックスを選択解除します。  <b>注意：</b> 「Server」オプションが選択されている場合、「System」チェック・ボックスはグレー表示されます。
Client	これらのオプションは、このプロパティ定義のインスタンスをクライアント、サーバー、あるいはその両方に適用するかを指定します。
Client/Server	クライアントのみにプロパティ値を適用する場合は、「Client」オプションを選択します。
Server (ラジオ・ボタン)	クライアントとサーバーの両方にプロパティ値を適用する場合は、「Client/Server」オプションを選択します。  サーバーのみにプロパティ値を適用する場合は、「Server」オプションを選択します。このオプションを選択すると、「System」チェック・ボックスが使用できなくなります。システム全体に関わる設定はサーバーに適用されません。
Name	プロパティの名前。これは、プロパティが制御する内容の直観的な説明にする必要があります。一意である必要はありません。

表 7-5 「System Configuration」 フォームのフィールド（続き）

フィールド名	説明
Keyword	<p>プロパティの一意の ID。</p> <p>これは、このプロパティのインスタンスごとに同じである必要があります。たとえば、「Record Read Limit」プロパティ（ユーザーの間合せて取得されるレコードの最大数）を 2 つの異なるユーザーに対して別々に設定する場合、このプロパティ定義のインスタンスを 2 つ作成する必要があります。</p> <p><b>注意：</b> クライアントおよびサーバーに対して設定できる各種プロパティの詳細は、『Oracle Identity Manager リファレンス』のルール要素、変数、データ型およびシステム・プロパティに関する項を参照してください。</p>
Value	<p>プロパティ定義のこのインスタンスの値。インスタンスがすべてのユーザーに適用されることを示す「<b>System</b>」チェック・ボックスが選択されていない場合、この値は、プロパティのこのインスタンスに割り当てられているユーザーおよびグループに適用されます。</p>

次の項では、プロパティ定義のインスタンスを定義する方法、これらのインスタンスにユーザーまたはグループを割り当てる方法、およびこのインスタンスからユーザーまたはグループを削除する方法について説明します。

## 7.5.1 プロパティ定義のインスタンスの作成と編集

プロパティ定義の新しいインスタンスを作成する、または既存のインスタンスを編集するには、次の手順を実行します。

1. 「System Configuration」 フォームに移動します。
  2. プロパティ定義の新しいインスタンスを作成する場合は、ツールバーの「**New**」をクリックします。
- 「**Name**」および「**Keyword**」フィールドの値が、このプロパティ定義のすべてのインスタンスについて同じであることを確認します（たとえば、「**Record Read Limit**」、**XL.READ\_LIMIT**）。

---

**注意：** エラーを回避するため、これらの値は、このプロパティ定義の他のインスタンスからコピーすることをお勧めします。

---

- プロパティ定義の既存のインスタンスを編集する場合は、プロパティ定義を問い合わせます。
3. 「**Client**」、**Client/Server** または **Server** オプションを選択します。
  4. このプロパティ定義のインスタンスをすべてのユーザーに適用するか、それとも選択したユーザーとユーザー・グループのみに適用するかを、「**System**」チェック・ボックスを選択または選択解除することによって指定します。

---

**注意：** 手順 3 で **Server** オプションを選択した場合、「**System**」チェック・ボックスはグレー表示されます。その場合は手順 5 に進みます。

---

5. 「**Value**」フィールドに目的の値を入力します。
- これが、定義のこのインスタンスのプロパティ値になります。
6. 「**Save**」をクリックします。
- プロパティ定義のインスタンスが作成または変更されます。

## 7.5.2 プロパティ定義のインスタンスへのユーザーまたはグループの割当て

プロパティ定義のインスタンスにユーザーまたはグループを割り当てるには、次の手順を実行します。

---

---

**注意：**これがシステム全体に関わるインスタンスである場合（つまり、「System」チェック・ボックスが選択されている場合）、すべてのユーザーおよびグループに適用されます。このため、インスタンスを特定のユーザーまたはグループに割り当てる必要はありません。

---

---

1. 「System Configuration」 フォームに移動します。
2. ユーザーまたはグループに割り当てるプロパティ定義のインスタンスを問い合わせます。

**関連項目：** データ・フィールドへのプロパティおよびプロパティ値の追加、およびデータ・フィールドからこれらを削除する方法の詳細は、『Oracle Identity Manager リファレンス』のルール要素、変数、データ型およびシステム・プロパティに関する項を参照してください。

3. このプロパティ定義のインスタンスの適用先をクライアントのみ、クライアントとサーバーの両方、サーバーのみのいずれにするかに応じて、「Client」、「Client/Server」または「Server」オプションを選択します。
4. プロパティ・インスタンスを1人以上のユーザーに割り当てるには、「Users」タブをクリックします。あるいは、プロパティ・インスタンスを1つ以上のユーザー・グループに割り当てるには、「Groups」タブをクリックします。
5. 「Assign」をクリックします。  
「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。
6. 目的のユーザーまたはグループを選択して割り当て、「OK」をクリックします。
7. 「Save」をクリックします。

プロパティ定義のインスタンスが、手順6で選択したユーザーまたはグループに割り当てられます。

## 7.5.3 プロパティ定義のインスタンスからのユーザーまたはグループの削除

プロパティ定義のインスタンスからユーザーまたはグループを削除した場合、そのプロパティとユーザーまたはグループとの関連はなくなります。

プロパティ定義のインスタンスからユーザーまたはグループを削除するには、次の手順を実行します。

1. 「System Configuration」 フォームに移動します。
2. ユーザーまたはグループを削除するプロパティ定義のインスタンスを問い合わせます。
3. 目的のユーザーまたはグループを（「Users」タブまたは「Groups」タブから）選択します。
4. 「Delete」をクリックします。

ユーザーまたはグループがプロセス定義のインスタンスから削除されます。

## 7.6 「Remote Manager」 フォーム

Remote Manager は軽量のネットワーク・サーバーであり、これを使用すると、ネットワークで通信できない API を持つターゲット・システムや、ネットワーク対応であってもセキュアではないターゲット・システムと統合できます。Remote Manager はターゲット・システム上でサーバーとして動作し、Oracle Identity Manager サーバーはそのクライアントとして動作します。Oracle Identity Manager サーバーは Remote Manager のリクエストを送信して、ターゲット・システム自体でターゲット・システム API をインスタンス化し、ターゲット・システムにかわってメソッドを起動します。

図 7-10 に示す「Remote Manager」フォームは、Design Console の「Administration」フォルダにあります。このフォームには次の情報が表示されます。

- Oracle Identity Manager と通信するリモート・マネージャの名前および IP アドレス
- リモート・マネージャが稼働しているかどうか
- Oracle Identity Manager で使用できる IT リソースを表しているかどうか

図 7-10 「Remote Manager」 フォーム

	Service	Host	Running	IT Resource
1	Australia Server	215.0.255.192	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
2	UKSERVER	192.168.0.45	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

この例では、Oracle Identity Manager と通信できる 2 つのリモート・マネージャ（Australia Server と UKSERVER）を定義します。

Australia Server というリモート・マネージャの IP アドレスは、215.0.255.192 です。このリモート・マネージャは Oracle Identity Manager とハンドシェイクできますが、「Running」チェック・ボックスが選択解除されているため、リモート・サーバーは使用できません。最後に、「IT Resource」チェック・ボックスが選択されています。これは、このリモート・マネージャが Oracle Identity Manager で使用できる IT リソースを表していることを示します。

UKSERVER というリモート・マネージャの IP アドレスは、192.168.0.45 です。「Running」チェック・ボックスが選択されているため、リモート・サーバーは動作可能です。しかし、「IT Resource」チェック・ボックスが選択解除されているため、このリモート・マネージャは Oracle Identity Manager で使用できる IT リソースではありません。

---

**関連項目：**「Remote Manager」フォームを他の Oracle Identity Manager フォームとともに使用方法は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』を参照してください。

---

## 7.7 「Password Policies」 フォーム

「Password Policies」 フォームは、Design Console の「Administration」 / 「Policies」 フォルダにあります。このフォームを使用して、次の操作を実行できます。

- パスワードの制限の設定（たとえば、パスワードの最小長と最大長の定義など）
- パスワード・ポリシーと関連付けられたルールおよびリソース・オブジェクトの参照

図 7-11 に、「Password Policies」 フォームを示します。

図 7-11 「Password Policies」 フォーム

パスワード・ポリシーを作成するには、先に「Password Policies」フォームの次のフィールドに必須の値を入力する必要があります。

- **Policy Name:** パスワード・ポリシーの名前
- **Policy Description:** パスワード・ポリシーの簡単な説明

次の各項では、「Password Policies」フォームの使用方法について説明します。

- [パスワード・ポリシーの作成](#)
- [「Password Policies」フォームのタブ](#)

## 7.7.1 パスワード・ポリシーの作成

パスワード・ポリシーを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「Password Policies」 フォームを開きます。
2. 「Policy Name」 フィールドに、パスワード・ポリシーの名前を入力します。
3. 「Policy Description」 フィールドに、パスワード・ポリシーの簡単な説明を入力します。
4. 「Save」 をクリックします。

---



---

### 注意：

- パスワード・ポリシーは、信頼できるリコンシリエーションによる OIM ユーザーの作成時には適用されません。
  - パスワード・ポリシーを作成したら、基準を指定してリソースと関連付ける必要があります。パスワード・ポリシーに基準を指定するには、このフォームの「Policy Rules」 タブを使用します。パスワード・ポリシーをリソースと関連付けるには、「Resource Object」 フォームの「Password Policies Rule」 タブを使用して、リソース上でアカウントが作成または更新されたときに評価されるパスワード・ポリシーとルール of の組合せを作成します。パスワード・ポリシーは、そのルールの基準が満たされると適用されます。複数のリソースで、それぞれのパスワード・ポリシーを使用できます。
- 
- 

## 7.7.2 「Password Policies」 フォームのタブ

このフォームのタブは、パスワード・ポリシーを作成すると使用可能になります。次の各項では、これらのタブについて説明します。

- 「Policy Rules」 タブ
- 「Usage」 タブ

### 7.7.2.1 「Policy Rules」 タブ

「Policy Rules」 タブは、パスワード・ポリシーの基準（たとえば、パスワードの最小長と最大長）を指定するために使用します。

パスワードの制限を設定するには、次のいずれか（または両方）の方法を使用できます。

- 適切なフィールドに情報を入力するか、必要なチェック・ボックスを選択します。たとえば、パスワードの最小長を 4 文字にする必要があることを指定する場合は、「Minimum Length」 フィールドに 4 を入力します。
- Password File フィールドに、パスワード・ポリシー・ファイルのディレクトリ・パスと名前（たとえば、c:\¥xellerate¥userlimits.txt）を入力します。このファイルには、パスワードとして使用できない事前定義済みの用語が指定されています。これらの語は、「Password File Delimiter」 フィールド内に指定されたデリミタによって区切られます。

図 7-11 に、「Password Policies」 フォームの「Policy Rules」 タブを示します。

表 7-6 に、「Policy Rules」タブのデータ・フィールドの説明を示します。これらのフィールドにパスワード・ポリシーの基準を指定します。

---



---

**注意：** データ・フィールドが空の場合、パスワードを有効にするためにそのフィールドの基準を満たす必要はありません。たとえば、「**Minimum Numeric Characters**」データ・フィールドが空の場合、Oracle Identity Manager では、文字数に関係なくパスワードが受け入れられます。

---



---

表 7-6 「Password Policies」フォームの「Policy Rules」タブのフィールド

フィールド名	説明
Minimum Length	<p>パスワードを有効にするために必要な最小文字数。</p> <p>たとえば、「<b>Minimum Length</b>」フィールドに <b>4</b> を入力した場合、パスワードは 4 文字以上である必要があります。</p> <p>このフィールドには、0 ～ 999 の値を入力できます。</p>
Expires After (Days)	<p>パスワードを使用できる期間（日数）。</p> <p>たとえば、「<b>Expires After (Days)</b>」フィールドに <b>30</b> を入力した場合、パスワードを作成または最終変更したときから 30 日目までに変更する必要があります。</p> <p><b>注意：</b> 「<b>Expires After (Days)</b>」フィールドに指定した日数を経過すると、パスワードを変更するようにメッセージが表示されます。</p> <p>このフィールドには、0 ～ 999 の値を入力できます。</p>
Disallow Last Passwords	<p>旧パスワードを再利用できる頻度。このポリシーにより、一連の共通するパスワードを使い回すことができなくなります。</p> <p>たとえば、「<b>Disallow Last Passwords</b>」フィールドに <b>10</b> を入力した場合、10 個の一意のパスワードを使用した後にのみパスワードを再利用できます。</p> <p>このオプションを無効にするには、「<b>Disallow Last Passwords</b>」フィールドに <b>0</b> を入力します。</p> <p>このフィールドには、0 ～ 999 の値を入力できます。</p>
Minimum Password Age (Days)	<p>パスワードを変更するまでに使用し続ける必要がある期間（日数）。これにより、新規パスワードを入力した後すぐに前のパスワードに戻すことができなくなります。</p> <p>たとえば、「<b>Minimum Password Age (Days)</b>」フィールドに <b>15</b> を入力した場合、15 日経過するまでパスワードを変更できません。</p> <p>このフィールドには、0 ～ 999 の値を入力できます。</p>
Warn After (Days)	<p>パスワードが指定の日付に期限切れになるという通知をユーザーが受け取るまでの経過日数。</p> <p>たとえば、「<b>Minimum Password Age (Days)</b>」フィールドに <b>30</b> を入力し、「<b>Warn After (Days)</b>」フィールドに <b>20</b> を入力したとします。パスワードが 11 月 1 日に作成された場合、11 月 21 日に、パスワードが 12 月 1 日に期限切れになることがユーザーに通知されます。</p> <p>このフィールドには、0 ～ 999 の値を入力できます。</p>

「Password Policies」フォームの「Policy Rules」タブでは、複雑なパスワードまたはカスタム・パスワード・ポリシーのいずれかを構成できます。「**Complex Password**」オプションを選択すると、「**Custom Policy**」オプション設定は使用できず、パスワードは「Policy Rules」タブで入力した複雑なパスワードの基準に対して評価されます。

次の各項では、「Policy Rules」タブの残りのフィールドについて説明します。

- [Complex Password](#)
- [Custom Policy](#)

### Complex Password

複雑なパスワードの基準は次のとおりです。

- パスワードの長さは6文字以上であること。「Minimum Length」フィールドに入力された値が6未満の場合、「Minimum Length」フィールドの値は上書きされます。たとえば、「Minimum Length」フィールドに2を入力した場合、複雑なパスワードの基準により少なくとも6文字が必要であるため、パスワードには6文字以上が必要です。
- パスワードには、次の5種類のうち3種類以上の文字が含まれること。
  - 英大文字 (A ~ Z)
  - 英小文字 (a ~ z)
  - 10進法の数字 (0 ~ 9)
  - 英数字以外の文字 (!, \$, #, % など)
  - Unicode 文字
- パスワードには、ユーザー名から3文字以上の連続した文字が含まれないこと。

ユーザーの氏名と照合する際、カンマ、ピリオド、ダッシュ/ハイフン、アンダースコア、空白、ポンド記号、タブなどの文字は、名前を個々の文字のセットに区切るデリミタとして扱われます。3文字以上から成る文字のセットがそれぞれパスワード内で検索されます。文字のセットがパスワード内に存在する場合、そのパスワード変更は却下されます。たとえば、John Richard-Doe は、John、Richard および Doe の3つの文字のセットに分割されます。このユーザーは、パスワードのどこかが、John、Richard または Doe のいずれかの連続する3文字で構成されるパスワードを使用できません。しかし、パスワードには部分文字列の d-D を含めることができます。これは、ハイフン (-) が部分文字列の Richard と Doe の間のデリミタとして扱われるためです。また、パスワード内の文字のセットの検索では大/小文字が区別されません。

---

**注意：**ユーザーの氏名の長さが3文字未満の場合、パスワードは氏名と照合されません。パスワードが却下される確率が高すぎるためです。

---

**Custom Policy**

「Custom Policy」 オプションを選択すると、表 7-7 に示すフィールドを使用してカスタム・パスワード・ポリシーを設定できます。

**表 7-7 カスタム・パスワード・ポリシーを設定するための「Policy Rules」タブのフィールド**

フィールド名	説明
Maximum Length	<p>パスワードに含めることができる最大文字数。</p> <p>たとえば、「Maximum Length」フィールドに 8 を入力した場合、9 文字以上のパスワードは使用できません。</p> <p>このフィールドには、1～999 の値を入力できます。</p>
Maximum Repeated Characters	<p>パスワードで文字を繰り返すことができる最大回数。</p> <p>たとえば、「Maximum Repeated Characters」フィールドに 2 を入力した場合、文字が 3 回以上繰り返されているパスワードは使用できません。たとえば、RL112211 は、文字 1 が 3 回繰り返されているため、有効なパスワードではありません。</p> <p><b>注意:</b> この例では、文字 1 は 4 つあり、3 回繰り返されていることになります。</p> <p>このフィールドには、1～999 の値を入力できます。</p>
Minimum Numeric Characters	<p>パスワードに含める必要がある最小数字数。</p> <p>たとえば、「Minimum Numeric Characters」フィールドに 1 を入力した場合、パスワードには少なくとも 1 つの数字が含まれる必要があります。</p> <p>このフィールドには、0～999 の値を入力できます。</p>
Minimum Alphanumeric Characters	<p>パスワードに含める必要がある文字または数字の最小数。</p> <p>たとえば、「Minimum Alphanumeric Characters」フィールドに 6 を入力した場合、パスワードには少なくとも 6 つの文字または数字が含まれる必要があります。</p> <p>このフィールドには、0～999 の値を入力できます。</p>
Minimum Unique Characters	<p>パスワードに含める必要がある非重複文字の最小数。</p> <p>たとえば、「Minimum Unique Characters」フィールドに 1 を入力した場合、1 つ以上の文字が繰り返されていないパスワードは受け入れられません。たとえば、1a23321 では、文字 a が繰り返されていないため、他の文字が繰り返されていても有効なパスワードです。</p> <p>このフィールドには、0～999 の値を入力できます。</p>
Minimum Alphabet Characters	<p>パスワードに含める必要がある最小文字数。</p> <p>たとえば、「Minimum Alphabet Characters」フィールドに 2 を入力した場合、2 文字未満のパスワードは使用できません。</p> <p>このフィールドには、0～999 の値を入力できます。</p>
Special Characters: Minimum	<p>パスワードに含める必要がある英数字以外の文字 (#、%、&amp; など) の最小数。</p> <p>たとえば、「Special Characters: Minimum」フィールドに 1 を入力した場合、パスワードには英数字以外の文字が少なくとも 1 つ含まれる必要があります。</p> <p>このフィールドには、0～999 の値を入力できます。</p>

表 7-7 カスタム・パスワード・ポリシーを設定するための「Policy Rules」タブのフィールド (続き)

フィールド名	説明
Special Characters: Maximum	<p>パスワードに含めることができる英数字以外の文字の最大数。</p> <p>たとえば、「<b>Special Characters: Maximum</b>」フィールドに <b>3</b> を入力した場合、英数字以外の文字が 4 つ以上含まれるパスワードは使用できません。</p> <p>このフィールドには、1 ~ 999 の値を入力できます。</p>
Minimum Uppercase Characters	<p>パスワードに含める必要がある大文字の最小数。</p> <p>たとえば、「<b>Minimum Uppercase Characters</b>」フィールドに <b>8</b> を入力した場合、大文字が 8 文字未満のパスワードは使用できません。</p> <p>このフィールドには、0 ~ 999 の値を入力できます。</p>
Minimum Lowercase Characters	<p>パスワードに含める必要がある小文字の最小数。</p> <p>たとえば、「<b>Minimum Lowercase Characters</b>」フィールドに <b>8</b> を入力した場合、小文字が 8 文字未満のパスワードは使用できません。</p> <p>このフィールドには、0 ~ 999 の値を入力できます。</p>
Unicode Characters: Minimum	<p>パスワードに含める必要がある Unicode 文字の最小数。</p> <p>たとえば、「<b>Unicode Characters: Minimum</b>」フィールドに <b>3</b> を入力した場合、Unicode 文字が 3 文字未満のパスワードは使用できません。</p> <p>このフィールドには、0 ~ 999 の値を入力できます。</p>
Unicode Characters: Maximum	<p>パスワードに含めることができる Unicode 文字の最大数。</p> <p>たとえば、「<b>Unicode Characters: Maximum</b>」フィールドに <b>8</b> を入力した場合、Unicode 文字が 9 文字以上のパスワードは使用できません。</p> <p>このフィールドには、1 ~ 999 の値を入力できます。</p>
Characters Required	<p>パスワードに含める必要がある文字。</p> <p>たとえば、「<b>Characters Required</b>」フィールドに <b>x</b> を入力した場合、文字 <b>x</b> を含むパスワードのみが使用できます。</p> <p><b>「Characters Required」</b> フィールドに指定する文字は、<b>「Characters Allowed」</b> フィールドで指定する必要があります。</p>
Characters Not Allowed	<p>パスワードに含めることが禁止される文字。</p> <p>たとえば、「<b>Characters Not Allowed</b>」フィールドに感嘆符 (!) を入力した場合、感嘆符を含むパスワードは使用できません。</p>
Characters Allowed	<p>パスワードに含めることができる文字。</p> <p>たとえば、「<b>Characters Allowed</b>」フィールドにパーセント記号 (%) を入力した場合、パーセント記号を含むパスワードを使用できます。</p> <p><b>注意:</b> <b>「Characters Allowed」</b> フィールドに指定された文字のみを含むパスワードは有効です。</p> <p><b>「Characters Allowed」</b> フィールドと <b>「Characters Not Allowed」</b> フィールドに同じ文字を指定すると、パスワード・ポリシーの作成時にエラー・メッセージが返されます。</p>
Substrings Not Allowed	<p>パスワードに含めることが禁止される英数字の連続文字列。</p> <p>たとえば、「<b>Substrings Not Allowed</b>」フィールドに <b>IBM</b> を入力した場合、文字 <b>I</b>、<b>B</b> および <b>M</b> の順に連続して含まれるパスワードは使用できません。</p>
Start With Alphabet	<p>パスワードの先頭に使用する必要がある文字。</p> <p>たとえば、「<b>Start With Alphabet</b>」フィールドに文字 <b>a</b> を指定した場合、文字 <b>a</b> で始まるパスワードを使用できます。</p>

表 7-7 カスタム・パスワード・ポリシーを設定するための「Policy Rules」タブのフィールド (続き)

フィールド名	説明
Disallow User ID	<p>このチェック・ボックスは、パスワードの全部または一部としてユーザー ID を使用できるかどうかを指定します。</p> <p>このチェック・ボックスを選択した場合は、「Password」フィールドにユーザー ID が入力されると、パスワードは無効になります。</p> <p>このチェック・ボックスの選択を解除した場合は、ユーザー ID が含まれているパスワードを使用できます。</p>
Disallow First Name	<p>このチェック・ボックスは、パスワードの全部または一部としてユーザーの名を使用できるかどうかを指定します。</p> <p>このチェック・ボックスを選択した場合は、「Password」フィールドにユーザーの名が入力されると、パスワードは無効になります。</p> <p>このチェック・ボックスの選択を解除した場合は、ユーザーの名が含まれているパスワードを使用できます。</p>
Disallow Last Name	<p>このチェック・ボックスは、パスワードの全部または一部としてユーザーの姓を使用できるかどうかを指定します。</p> <p>このチェック・ボックスを選択した場合は、「Password」フィールドにユーザーの姓が入力されると、パスワードは無効になります。</p> <p>このチェック・ボックスの選択を解除した場合は、ユーザーの姓が含まれているパスワードを使用できます。</p>
Password File	<p>パスワードとして許可されない事前定義済みの用語が含まれたファイルのパスと名前。</p> <p><b>注意:</b> 「Policy Rules」タブの設定がパスワード・ファイル内の指定と異なる場合、Oracle Identity Manager では「Policy Rules」タブの設定が使用されます。</p>
Password File Delimiter	<p>パスワード・ファイル内で語を区切るために使用されるデリミタ。</p> <p>たとえば、「Password File Delimiter」フィールドにカンマ (,) を入力した場合、パスワード・ファイルの語はカンマで区切られます。</p>

「System Configuration」フォームで、`XL.ForcePasswordChangeAtFirstLogin` キーワードを含む `Force Password Change At First Login` プロパティの値を `True` に設定して、初回ログイン時にユーザーにパスワードを変更させることができます。

`XL.ForcePasswordChangeAtFirstLogin` キーワードがすでに `True` に設定された状態でユーザーが作成された場合のみ、初回ログイン時にパスワードの変更を強制されることに注意してください。

---



---

**注意:**

- 初回ログイン時にユーザーにパスワードを変更させる方法の詳細は、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・ガイド』の「ユーザーの作成」を参照してください。
  - フォームにパスワード・フィールドが存在する場合、パスワード・ポリシーはそのフォームが関連付けられているリソース・オブジェクトに適用されます。また、フォームが管理およびユーザー・コンソールに表示される場合は、「View Password Policies」リンクが管理およびユーザー・コンソールに表示されます。
- 
-

Force Password Change At First Login プロパティの値を変更するたびに、サーバーを再起動するかキャッシュを消去して変更を有効にする必要があります。キャッシュを消去する場合、キャッシュ・カテゴリは ServerCachedProperties です。

**関連項目：** PurgeCache ユーティリティを使用したキャッシュの消去の詳細は、『Oracle Identity Manager ベスト・プラクティス・ガイド』の「キャッシュの消去」を参照してください。

**注意：** Force Password Change At First Login プロパティのデフォルト値は、True です。このプロパティを無効にするには、値を False に設定します。

いずれかの「Password」フィールドを使用してプロセス・フォームをリソースにアタッチできます。パスワード・ポリシーを同じリソースに適用し、そのリソースに対してアクセス・ポリシーを作成する場合は、プロセス・フォームにユーザーが入力したパスワードは、パスワード・ポリシー・ルールと照合されません。これは、リソースがユーザーにプロビジョニングされる時、リソースに適用されるパスワード・ポリシー・ルールと照合されるパスワードをユーザーが指定する必要があるためです。

## パスワード・ポリシーの基準の設定

パスワード・ポリシーの基準を設定するには、次の手順を実行します。

1. 必要なパスワード・ポリシー定義を開きます。
2. 「Policy Rules」タブをクリックします。
3. 該当するフィールドに情報を入力するか、必要なチェック・ボックスを選択します。
4. 「Save」をクリックします。

### 7.7.2.2 「Usage」タブ

このタブは、現在のパスワード・ポリシーに関連付けられているルールおよびリソース・オブジェクトを表示するために使用します。

たとえば、[図 7-12](#) は、「Solaris」というパスワード・ポリシーを示しています。「Password Validation Rule」が「The Solaris Resource Object」に割り当てられています。

[図 7-12](#) に、「Password Policies」フォームの「Usage」タブを示します。

図 7-12 「Password Policies」フォームの「Usage」タブ

Rule	Object
1 Password Validation Rule	The Solaris Resource Object

**関連項目：** パスワード・ポリシーとリソース・オブジェクト間の関係の詳細は、5-25 ページの「[Password Policies Rule](#)」タブを参照してください。

## 7.8 「Task Scheduler」 フォーム

図 7-13 に示す「Task Scheduler」フォームは、「Administration」 / 「Job Scheduling Tools」フォルダにあります。このタブは、次のことを定義するために使用します。

- タスクが実行される時間
- これらのスケジュール済タスクの属性

図 7-13 「Task Scheduler」 フォーム

Attribute Name	Attribute Value
----------------	-----------------

**注意：** 前述のように、「Task Scheduler」フォームは、タスクが実行される時間を指定するために使用します。ただし、このタスクの実行をトリガーする Oracle Identity Manager プログラムは**スケジューラ・デーモン**と呼ばれます。

スケジューラ・デーモンが稼働していない場合は、指定された機能を実行できないため、スケジューラ・デーモンがアクティブになっていることを確認する必要があります。

システム・プロパティの値の変更の詳細は、7-16 ページの「[System Configuration](#)」フォームを参照してください。

表 7-8 に、「Task Scheduler」 フォームのフィールドの説明を示します。

表 7-8 「Task Scheduler」 フォームのフィールド

フィールド名	説明
Scheduled Task	実行が予定されているタスクの名前。
Class Name	スケジューラ・デーモンによってスケジューラ済タスクを実行する Java クラスの名前。 <b>注意:</b> スケジューラ・デーモンによってスケジューラ済タスクの実行がトリガーされます。実際にタスクを実行するのは Java クラスです。
Status	タスクのステータス。現在、スケジューラ済タスクには次の 4 つのステータス・レベルがあります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>INACTIVE:</b> スケジューラ済タスクは正常に実行され、「Next Start」フィールドに指定された日時に再実行されるように設定されます。</li> <li>■ <b>RUNNING:</b> スケジューラ済タスクは実行中です。</li> <li>■ <b>COMPLETED:</b> スケジューラ済タスクは正常に実行されましたが、再実行されません（頻度が「Once」に設定されています）。</li> <li>■ <b>ERROR:</b> エラーが発生したため、タスクを開始できませんでした。</li> <li>■ <b>FAILED:</b> スケジューラ済タスクの実行中に障害が発生しました。</li> </ul>
Max Retries	タスクが完了していない場合、Oracle Identity Manager がタスクの完了を試行する回数。この回数を超えると、タスクに「ERROR」ステータスが割り当てられます。
Disabled	このチェック・ボックスを使用して、スケジューラ・デーモンがスケジューラ済タスクをトリガーするかどうかを指定します。  このチェック・ボックスを選択した場合、「Start Time」または「Next Start Time」フィールドに表示された日時が現在の日時と一致していても、スケジューラ・デーモンはタスクをトリガーしません。  このチェック・ボックスの選択が解除されている場合、「Start Time」または「Next Start Time」フィールドに示された日時が現在の日時と一致すると、スケジューラ・デーモンはタスクをトリガーします。
Stop Execution	このチェック・ボックスを使用して、スケジューラ・デーモンが「RUNNING」ステータスのスケジューラ済タスクを停止できるかどうかを指定します。  このチェック・ボックスを選択した場合、タスクのステータスが「RUNNING」であると、スケジューラ・デーモンはタスクの実行を停止します。また、タスクのステータスは「INACTIVE」に変わります。  このチェック・ボックスの選択を解除した場合、スケジューラ・デーモンは、ステータスが「RUNNING」のタスクの実行を停止しません。
Start Time	タスクが最初に実行される予定の日時。 <b>注意:</b> タスクを 2 回以上実行するように設定した場合、スケジューラ・デーモンは、「Next Start Time」フィールドに表示された日時を参照します。
Last Start Time	タスクの実行が開始された最後の日時。
Last Stop Time	タスクの実行が停止された最後の日時。
Next Start Time	タスクが次に実行される予定の日時。 <b>注意:</b> タスクを 1 回のみ実行するように設定した場合、スケジューラ・デーモンは、「Start Time」フィールドに示された日時を参照します。

表 7-8 「Task Scheduler」 フォームのフィールド (続き)

フィールド名	説明
Daily, Weekly, Monthly, Yearly	<p>これらのオプションを使用して、タスクを毎日、毎週、毎月または毎年実行するように指定します。</p> <p>これらのラジオ・ボタンのいずれかを選択した場合、スケジューラ・デーモンは、「<b>Start Time</b>」フィールドに指定された日時に、関連付けられたタスクを毎日、毎週、毎月または年に1回トリガーします。</p> <p>これらのラジオ・ボタンをすべて選択解除した場合、スケジューラ・デーモンが、関連付けられたタスクを毎日、毎週、毎月または毎年トリガーすることはありません。</p>
Recurring Intervals	<p>このオプションは、固定の繰返しペースでタスクを実行するように指定します。</p> <p>このオプションを選択した場合、スケジューラ・デーモンは関連付けられたタスクを繰返しペースでトリガーします。</p> <p>このオプションを選択解除した場合、スケジューラ・デーモンが関連付けられたタスクを繰返しペースでトリガーすることはありません。</p> <p><b>注意:</b> 「<b>Recurring Intervals</b>」オプションを選択した場合、オプションの下のテキスト・フィールドに値を入力し、隣のボックスから測定単位を選択して、間隔を設定する必要があります。</p>
Once	<p>このオプションは、タスクを1回のみ実行するように指定します。</p> <p>このオプションを選択した場合、スケジューラ・デーモンは、「<b>Start Time</b>」フィールドに指定された日時に、関連付けられたタスクを1回トリガーします。</p> <p>このオプションを選択解除した場合、スケジューラ・デーモンは関連付けられたタスクを2回以上トリガーします。</p>

次の各項では、スケジュール済タスクについて詳しく説明します。

- [事前定義済のスケジュール済タスク](#)
- [スケジュール済タスクの作成](#)
- [カスタム・スケジュール済タスクの削除](#)

## 7.8.1 事前定義済のスケジュール済タスク

表 7-9 に、このリリースの Oracle Identity Manager で使用可能な事前定義済のスケジュール済タスクを示します。

表 7-9 事前定義済のスケジュール済タスク

スケジュール済タスク	説明	ユーザー構成可能な属性
Password Expiration Task	このスケジュール済タスクは、タスクの実行時にパスワードの有効期限を経過しているユーザーに電子メールを送信し、ユーザー・プロファイルの USR_PWD_EXPIRED フラグを更新します。	なし
Password Warning Task	このスケジュール済タスクは、タスクの実行時にパスワードの警告日を経過しているユーザーに電子メールを送信し、ユーザー・プロファイルの USR_PWD_WARNED フラグを更新します。	なし
User Operations	このスケジュール済タスクは、UserLogin 属性によって指定されたユーザー・アカウントに対して、UserOperation 属性によって指定された操作を実行します。	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ UserLogin: ユーザー・アカウントのユーザー ID。</li> <li>■ UserOperation: ユーザー・アカウントに対して実行する操作。この属性の値は、ENABLE、DISABLE、DELETE のいずれかです。</li> </ul>
Attestation Grace Period Expiry Checker	このスケジュール済タスクは、猶予期間の満了後にアテステーション・プロセスを委任します。	なし
Task Escalation	このスケジュール済タスクは、スケジュール済タスクの実行時にエスカレーション時間が経過した保留タスクをエスカレーションします。	なし
Task Timed Retry	このスケジュール済タスクは、再試行時間が経過し、再試行回数が 1 以上の却下されたタスクに対して再試行タスクを作成します。	なし
Set User Deprovisioned Date	デプロビジョニング日は、ユーザー・アカウントの作成時に定義されます。このスケジュール・タスクの実行時点でデプロビジョニング日がすでに経過しているユーザーについて、現在の日付をデプロビジョニングされた日付として設定します。	なし
Disable User After End Date	終了日は、ユーザー・アカウントの作成時に定義されます。このスケジュール済タスクは、タスクの実行時点で、ユーザー・アカウントの終了日が現在の日付よりも過去の日付である場合、ユーザー・アカウントを無効にします。	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Day Max: タスクによって 1 日に無効にできるユーザー・アカウントの最大数。その日のタスクの実行回数には関係ありません。</li> <li>■ Task Max: タスクの 1 回の実行で無効にできるユーザー・アカウントの最大数。</li> </ul>
Set User Provisioned Date	このスケジュール済タスクは、次の条件にすべて該当するユーザーについて、プロビジョンされた日を現在の日付に設定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ プロビジョニング日が過去の日付である。</li> <li>■ デプロビジョンされた日が設定されていない。</li> <li>■ デプロビジョニング日に達していないか、NULL である。</li> </ul> <p>プロビジョンされた日を現在の日付に設定すると、アクセス・ポリシーの更新による影響を受けたユーザーについてポリシーが評価されます。ユーザーの評価が完了すると、usr_policy_update フラグは NULL に設定されます。</p>	なし

表 7-9 事前定義済みのスケジュール済タスク (続き)

スケジュール済タスク	説明	ユーザー構成可能な属性
Enable User After Start Date	開始日は、ユーザー・アカウントの作成時に設定されます。このスケジュール済タスクは、開始日を過ぎており、ユーザー・ステータスが Disabled Until Start Date であるユーザー・アカウントを有効にします。	なし
Trigger User Provisioning	このスケジュール済タスクは、タスクの実行時にプロビジョニング日を過ぎていたすべてのユーザーについて、ステータスが Approved, Waiting To Provision のリソースを承認します。	なし
Scheduled Provisioning Task	このスケジュール済タスクを実行すると、スケジュール済リクエスト・プロビジョニング・プロセスがトリガーされます。	なし
Remove Open Tasks	このスケジュール済タスクは、(指定された日数が経過した) オープン・タスクおよび保留中の承認に関する情報を、管理およびユーザー・コンソールに表示されるリストのソースとして機能する表から削除します。	Day Limit オープン・タスクまたは保留中の承認に関する情報を削除するまで表に保持しておく必要がある日数。 デフォルト値は 60 日です。
Remove Group Priority Gaps Task	優先順位は、Oracle Identity Manager で作成されるすべてのグループに割り当てられます。グループを削除しても、優先順位のリストで次のグループに割り当てられた優先順位は自動的に繰り上がりません。このスケジュール済タスクを実行すると、指定された優先順位の番号までグループの優先順位を再配置します。このスケジュール済タスクは、優先順位の最も高いグループにタスクが常に割り当てられるようにする場合にのみ必要です。	Max Priority Gap スケジュール済タスクでグループの優先順位レベルを順序変更する必要がある最大優先順位レベル。 たとえば、この属性の値として 10 を指定したとします。優先順位 3 および 7 のグループを削除した後に、タスクを実行します。タスクを実行すると、優先順位レベル 4 ~ 10 のグループの優先順位レベルが順序変更され、新しい優先順位レベルの範囲は 3 ~ 8 となります。 デフォルト値は 10 です。
ReSubmit Request Tasks	このスケジュール済タスクは、REQUEST INITIALIZED 状態のリクエストを再送信し、指定された電子メール・テンプレートを使用して電子メール通知を送信します。	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Resubmit requests older than (hours) リクエストの再送信まで経過する必要がある時間。</li> <li>■ Email Notification User (userid) 電子メールの送信者として表示されるユーザー・アカウント。</li> <li>■ Email Template (Template Name) 送信される電子メールのテンプレート。</li> </ul>

表 7-9 事前定義済みのスケジュール済タスク (続き)

スケジュール済タスク	説明	ユーザー構成可能な属性
Resubmit Reconciliation Event	このスケジュール済タスクは、window 属性を使用して指定した期間に、ステータスが Event Received のままのリコンシリエーション・イベントを再送信します。	window  タスクのステータスが Event Received のままの状態にある時間。
Issue Audit Messages Task	このスケジュール済タスクは、監査メッセージの詳細を aud_jms 表からフェッチし、aud_jms 表の特定の識別子および監査者のエントリについて JMS メッセージを 1 つ送信します。MDB で対応する監査メッセージが処理されません。	Max records: この属性を使用し、指定されたスケジュール済タスクの実行について処理される監査メッセージの最大数を指定します。この属性のデフォルト値は、400 です。
Initiate Attestation Processes	このスケジュール済タスクは、アテステーション・エンジンに対するコールを起動し、経過した時間に実行をスケジュールされているアテステーション・プロセスを実行します。	なし

## 7.8.2 スケジュール済タスクの作成

スケジュール済タスクの作成に加えて、タスクに属性が必要な場合は、属性を設定する必要があります。そうしない場合、スケジュール済タスクは機能しません。

既存のタスク属性が不要になった場合は、スケジュール済タスクからその属性を削除する必要があります。

次の手順は、スケジュール済タスクを作成する方法について説明しています。後述の手順では、スケジュール済タスクに属性を追加する方法と、スケジュール済タスクからタスク属性を削除する方法を示しています。

スケジュール済タスクを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「Task Scheduler」 フォームに移動します。
2. 「Scheduled Task」 フィールドに、スケジュール済タスクの名前を入力します。
3. 「Class Name」 フィールドに、スケジュール済タスクを実行する Java クラスの名前を入力します。
4. 「Max Retries」 フィールドに数字を入力します。この数字は、Oracle Identity Manager が ERROR ステータスをタスクに割り当てるまでにタスクの完了を試行する回数を表します。
5. 「Disabled」 および 「Stop Execution」 チェック・ボックスが選択解除されていることを確認します。
6. 「Start Time」 フィールドをダブルクリックします。

Date & Time ウィンドウが表示されたら、タスクを実行する日時を設定します。

(「Recurring Intervals」 オプションを選択して) 繰り返しベースでタスクを実行するように指定した場合、関連付けられたタスクの次回の実行日時を決定する際に、このフィールドに表示された日時が参照されます。

7. (「Interval」 リージョンで) スケジューリング・パラメータを設定します。
  - 繰り返しベースでタスクを実行するように設定するには、「Daily」、「Weekly」、「Monthly」または「Yearly」オプションを選択します。
  - タスクを 1 回のみ実行するように設定するには、「Once」オプションを選択します。
  - 固定の繰り返しベースでタスクを実行するように設定するには、「Recurring Intervals」を選択し、このオプションの下テキスト・フィールドに値を入力して間隔を設定し、隣のボックスから測定単位を選択します。

8. 「Save」 をクリックします。

スケジュール済タスクが作成されます。さらに、タスクは現在実行中ではないため、「Status」 フィールドに「INACTIVE」が表示されます。ただし、手順 6 で設定した日時が現在の日時に一致した時点で、スケジューラ・デーモンはスケジュール済タスクをトリガーします。

### 7.8.2.1 タスク属性の追加

タスク属性を追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Add」 をクリックします。
2. 「Attribute Name」 フィールドにタスク属性の名前を入力します。
3. 「Attribute Value」 フィールドに属性の値を入力します。
4. ツールバーから「Save」 をクリックします。  
タスク属性がスケジュール済タスクに追加されます。

### 7.8.2.2 タスク属性の削除

タスク属性を削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するタスク属性を選択します。
2. 「Delete」 をクリックします。  
属性がスケジュール済タスクから削除されます。

## 7.8.3 カスタム・スケジュール済タスクの削除

スケジュール済タスクを削除するには、次の手順を実行します。

---

---

**注意：** パスワード期限切れタスクなど、Oracle Identity Manager とともにインストールされている内部のスケジュール済タスクは削除できません。

---

---

1. 「Task Scheduler」 フォームに移動します。
2. 「Scheduled Task」 フィールドにスケジュール済タスクの名前を入力し、双眼鏡ボタンをクリックするか、[Ctrl] キーを押しながら [Q] キーを押します。「Task Definition」 フォーム内にスケジュール済タスクが開きます。
3. 「Task Definition」 フォームで、7-34 ページの「タスク属性の削除」の手順に従って既存のタスク属性を削除します。
4. ツールバーの「Delete」 をクリックするか、[Ctrl] キーを押しながら [D] キーを押します。現在のレコードが削除されることを通知する警告メッセージが表示されます。
5. 「OK」 をクリックして、スケジュール済タスクを削除します。

---

## 開発ツール

この章では、Design Console のすべての開発ツールについて説明します。次の内容について説明します。

- 開発ツールの概要
- 「Adapter Factory」フォーム
- 「Adapter Manager」フォーム
- 「Form Designer」フォーム
- 「Error Message Definition」フォーム

## 8.1 開発ツールの概要

Design Console には一連の開発ツールが含まれており、システム管理者や開発者は、これらのツールを使用して Oracle Identity Manager をカスタマイズできます。このフォルダには次のフォームがあります。

- **Adapter Factory:** このフォームでは、Oracle Identity Manager が IT リソースの API に接続し、そのリソースと通信できるようにするためのコードの作成と管理を行います。このコードはアダプタと呼ばれます。
- **Adapter Manager:** このフォームでは、複数のアダプタを同時にコンパイルできます。
- **Form Designer:** このフォームでは、Oracle Identity Manager に同梱されていないプロセス・フォームおよびリソース・オブジェクト・フォームを作成できます。
- **Error Message Definition:** このフォームでは、Oracle Identity Manager の使用中に特定の問題が発生した場合にダイアログ・ボックスに表示されるエラー・メッセージを作成できます。

また、システム管理者や開発者は、このフォームを使用することで、ユーザーが「Adapter Factory」フォームを使用してエラー・ハンドラ・タスクを作成するときにアクセスできる、エラー・メッセージを定義できます。

- **「Development Tools」 / 「Business Rule Definition」 フォルダ:** このフォルダには、Oracle Identity Manager のイベント・ハンドラおよびデータ・オブジェクトをシステム管理者および開発者が管理するためのツールがあります。

このフォルダには次のフォームがあります。

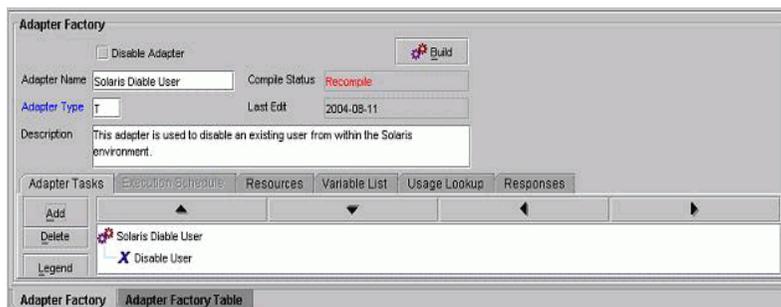
- **Event Handler Manager:** このフォームでは、Oracle Identity Manager で使用されるイベント・ハンドラの作成と管理を行います。
- **Data Object Manager:** このフォームでは、データ・オブジェクトの定義、定義したデータ・オブジェクトへのイベント・ハンドラとアダプタの割当て、および関連付けられているアダプタ変数のマップを行います。
- **Reconciliation Rules:** このフォームでは、Oracle Identity Manager のリコンシリエーション・ルールの作成および管理を行います。

## 8.2 「Adapter Factory」 フォーム

アダプタは、Oracle Identity Manager の内部ロジックおよび機能を拡張します。また、IT リソースの API に接続して、そのリソースと通信します。

Adapter Factory は、Oracle Identity Manager に含まれるコード生成ツールです。これを使用することで、ユーザーはアダプタと呼ばれる Java クラスを作成できます。図 8-1 に、「Adapter Factory」フォームを示します。

図 8-1 「Adapter Factory」 フォーム

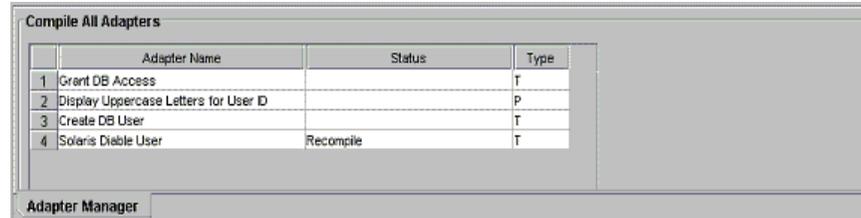


**関連項目:** アダプタまたは Adapter Factory の詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』を参照してください。

## 8.3 「Adapter Manager」 フォーム

「Adapter Manager」 フォームは、「Development Tools」 フォルダにあります。このフォームは、[図 8-2](#) に示すように、複数のアダプタを同時にコンパイルするために使用します。

図 8-2 「Adapter Manager」 フォーム



**関連項目：** アダプタのコンパイル方法の詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』を参照してください。

## 8.4 「Form Designer」 フォーム

ターゲットのユーザーまたは組織にリソースをプロビジョニングする際に必要な情報が、既存の Oracle Identity Manager フォームから取得できない場合もあります。「Development Tools」フォルダにある「Form Designer」フォームを使用すると、関連情報を含むフィールドが組み込まれたフォームを作成できます。フォームを作成したら、ユーザーまたは組織にプロビジョニングするリソースに関連付けられている、プロセスまたはリソース・オブジェクトに割り当てます。[図 8-3](#) に、「Form Designer」フォームを示します。

次に、ユーザーが「Form Designer」フォームを使用して作成するリソース・オブジェクト・フォームまたはプロセス・フォームが、Oracle Identity Manager によって表示される理由を、重要度の高い順に示します。

1. リソース・オブジェクト・フォームがリクエストされたリソース・オブジェクトにアタッチされており、「Requests」フォームの「Process Console」タブからそのリソース・オブジェクトを右クリックして、「Launch Object Form」メニュー・コマンドが選択されている。
2. リソース・オブジェクト・フォームが、直接プロビジョニングされたリソース・オブジェクトにアタッチされている。
3. プロセス・フォームが標準の承認プロセスにアタッチされており、「Requests」フォームの「Process Console」タブから右クリックして「Launch Form」メニュー・コマンドが選択されている。
4. プロセス・フォームが適切なプロビジョニング・プロセスにアタッチされており、「Organizations」フォームまたは「Users」フォームの「Object Process Console」タブから右クリックして「Launch Form」メニュー・コマンドが選択されている。

たとえば、Oracle Identity Manager またはそのいずれかのユーザーがリソース・オブジェクトまたはプロセスを完了しようとする、割り当てられたフォームがトリガーされます。このとき、Oracle Identity Manager またはユーザーによって、このフォームのフィールドに値が移入されます。データが保存されると、対応するプロセスまたはリソース・オブジェクトのステータスが「Completed」になり、Oracle Identity Manager は、ターゲットの組織またはユーザーに対して適切なリソースをプロビジョニングできるようになります。

図 8-3 「Form Designer」 フォーム

たとえば、**Solaris** フォーム（「Table Name」フィールドでは **UD\_SOLARIS** という名前で示されている）は、すでに作成済で、Solaris のリソース・オブジェクトおよびプロビジョニング・プロセスの両方に割り当てられています。

---

**注意：** 表名は、フォーム名の前に接頭辞 **UD\_** を付けて表します。この例では、フォーム名が **SOLARIS** であるため、表名は **UD\_SOLARIS** になります。

---

表 8-1 に、「Form Designer」フォームのデータ・フィールドの説明を示します。

表 8-1 「Form Designer」フォームのフィールド

フィールド名	説明
Table Name	このフォームに関連付けられているデータベース表の名前です。 <b>注意：</b> 表名は、フォーム名の前に接頭辞 <b>UD_</b> を付けて表します。フォーム名が <b>SOLARIS</b> の場合、表名は <b>UD_SOLARIS</b> になります。
Description	フォームに関する説明的な情報です。 <b>重要：</b> 「Description」フィールドに表示されるテキストは、フォームの名前です。
Preview Form	このボタンをクリックすると、フォームが表示されます。これにより、フォームをアクティブ化する前に、フォームの外観と機能を確認できます。

表 8-1 「Form Designer」 フォームのフィールド (続き)

フィールド名	説明
Form Type	これらのオプションを使用して、プロセスまたはリソース・オブジェクトへのフォームの割当てを指定します。  「Process」オプションを選択すると、フォームは承認プロセスまたはプロビジョニング・プロセスに関連付けられます。「Object」オプションを選択すると、フォームはリソース・オブジェクトに割り当てられます。
Object Name	プロビジョニングできるリソースの名前（データベース、サーバー、ソフトウェア・アプリケーション、ファイル、ディレクトリ・アクセスなど）です。リソース・オブジェクト名とも呼ばれます。  このフィールドをダブルクリックすると、使用可能なリソース・オブジェクト名が表示されます。
Latest Version	フォームの最新バージョンです。
Active Version	指定されたプロセスまたはリソース・オブジェクトで使用されるフォームのバージョンです。  <b>注意：</b> 各バージョンのフォームは、「Active Version」フィールドに表示されると変更できなくなります。
Current Version	これは、現在表示中の、情報を格納しているフォームのバージョンで、「Form Designer」フォームの様々なタブで表示されます。
Create New Version	このボタンをクリックすると、フォームの既存のバージョンに追加の名前を割り当てることができます。こうすることで、フォームの元のバージョンに影響を与えずに、このバージョンを変更できます。  <b>注意：</b> フォームの新しいバージョンを作成して「Refresh」をクリックすると、このバージョンに対して指定した名前が「Current Version」ボックスに表示されます。
Make Version Active	このボタンをクリックすると、フォームの現在のバージョンがプロセスまたはリソース・オブジェクトに割り当てられるように指定できます。つまり、このバージョンがアクティブになります。  <b>注意：</b> 各バージョンのフォームは、アクティブ化すると変更できなくなります。かわりに、「Create New Version」ボタンをクリックして）フォームの追加のバージョンを作成する必要があります。

次の項では、フォームの作成方法について説明します。

## 8.4.1 フォームの作成

フォームを作成するには、次のようにします。

1. 「Form Designer」フォームを開きます。
2. 「Table Name」フィールドに、フォームに関連付けられているデータベース表の名前を入力します。

---

**注意：**表名は、フォーム名の前に接頭辞 **UD\_** を付けて表します。フォーム名が **SOLARIS** の場合、表名は **UD\_SOLARIS** になります。

---

3. 「Description」フィールドに、フォームに関する説明的な情報を入力します。
4. フォームを承認プロセスまたはプロビジョニング・プロセスに割り当てる場合は、「Process」オプションを選択します。  
  
フォームをリソース・オブジェクトに割り当てる場合は、「Object」オプションを選択します。

## 5. 「Save」をクリックします。

フォームが作成されます。「Latest Version」フィールドに「Initial Version」と表示されます。これは、「Form Designer」フォームのタブに情報を移入することで、割り当てられたプロセスまたはリソースを使用してフォームを機能させることができることを意味します。

## 8.4.2 「Form Designer」 フォームのタブ

「Form Designer」フォームを開いて、フォームを作成すると、このフォームのタブが使用可能になります。「Form Designer」フォームには、次のタブが含まれます。

- 「Additional Columns」タブ
- 「Child Table(s)」タブ
- 「Object Permissions」タブ
- 「Properties」タブ
- 「Administrators」タブ
- 「Usage」タブ
- 「Pre-Populate」タブ
- 「Default Columns」タブ
- 「User Defined Fields」タブ

## 8.4.2.1 「Additional Columns」タブ

「Additional Columns」タブは、データ・フィールドの作成および管理に使用します。これらのデータ・フィールドは、「Form Designer」フォームを使用して作成された、関連付けられているフォームに表示されます。

図 8-4 に、「Form Designer」フォームの「Additional Columns」タブを示します。

図 8-4 「Form Designer」フォームの「Additional Columns」タブ

The screenshot shows the 'Form Designer' interface with the 'Additional Columns' tab selected. The 'Table Information' section displays 'Table Name: UD\_SOLARIS', 'Description: Access to Solaris for Engineering', and 'Object Name: Solaris'. The 'Version Information' section shows 'Latest Version: Initial Version' and 'Active Version: Initial Version'. The 'Operations' section includes a 'Current Version' dropdown set to 'Initial Version' and buttons for 'Create New Version' and 'Make Version Active'. Below this is a tabbed interface with 'Additional Columns', 'Child Table(s)', and 'Object Permissions' tabs. The 'Additional Columns' tab contains a table with the following data:

Add	Delete	Name	Variant Type	Length	Field Label	Field Type	Default Value	Order	Application Profile	Encrypted
		UD_SOLARIS_UID	String	20	UUID	TextField		1	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		UD_SOLARIS_USER	String	20	UserID	TextField		2	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		UD_SOLARIS_PASS	String	20	Password	PasswordField		3	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
		UD_SOLARIS_SHEL	String	20	Shell	TextField	/usr/bin/ssh	4	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		UD_SOLARIS_HOME	String	20	Home Directory	TextField	/export/home	5	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		UD_SOLARIS_GROL	String	20	User Group	TextField	other	6	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		UD_SOLARIS_ITAS	long		IT Asset	LookupField		7	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

表 8-2 に、「Additional Columns」タブのデータ・フィールドの説明を示します。

表 8-2 「Additional Columns」タブのフィールド

名前	説明
Name	<p>データベースに表示され、Oracle Identity Manager によって認識されるデータ・フィールドの名前です。</p> <p><b>注意:</b> この名前は、データ・フィールド名の前に接頭辞 &lt;TABLENAME_&gt; を付けて表します。</p> <p>たとえば、「Form Designer」フォームの「Table Name」フィールドの名前が <b>UD_PASSWORD</b> で、データ・フィールドの名前が <b>USERNAME</b> の場合、データベースに表示され Oracle Identity Manager で認識されるデータ・フィールド名は、<b>UD_PASSWORD_USERNAME</b> になります。</p>
Variant Type	<p>この参照フィールドから、データ・フィールドの変数型を選択します。変数型は、フィールドで受け入れられるデータ型を示します。</p> <p>このデータ・フィールドは、<b>Byte</b>、<b>Double</b>、<b>Date</b>、<b>Byte Array</b>、<b>Boolean</b>、<b>Long</b>、<b>String</b>、<b>Short</b>、<b>Integer</b> の 9 つの変数型のいずれかにする必要があります。</p>
Length	<p>データ・フィールドの長さ（文字数）です。</p> <p><b>注意:</b> 次のことは、Oracle Identity Manager を Microsoft SQL Server にインストールした場合にのみ該当します。</p> <p>ユーザー定義フィールド (UDF) をシステム・フォーム、プロセス・フォームまたはオブジェクト・フォームに追加できます。ただし、フォームにフィールドを追加した場合、フォーム上のすべてのフィールドの長さの合計が 8060 バイトを超えると、次のエラー・メッセージが表示されます。</p> <p>Maximum allowable length for a Table ROW is exceeding SQL Server ROW limit of 8060.</p> <p>このエラーを回避するには、フィールドの長さの合計が 8060 バイトを超えないようにする必要があります。このエラー・メッセージが表示された場合は、フィールドの長さを短くして Microsoft SQL Server の行の制限 8060 を下回るようにします。</p>
Field Label	<p>データ・フィールドに関連付けられるラベルです。このラベルは、Oracle Identity Manager によって生成されたフォームのデータ・フィールドの横に表示されます。</p>

表 8-2 「Additional Columns」 タブのフィールド (続き)

名前	説明
Field Type	<p>この参照フィールドから、データ・フィールドのデータ型を選択します。データ型は、フィールドでのデータの表示方法を表します。</p> <p>次のデータ型のいずれかを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="334 373 1365 426">■ <b>TextField:</b> このデータ・フィールドは、生成されたフォームにテキスト・フィールドとして表示されます。</li> <li data-bbox="383 436 1352 510"> <p>テキスト・フィールドが表示専用 (フィールド内のテキストが赤色フォントで表示される) の場合、ユーザーは問合せの実行のみにこのフィールドを使用できます。表示専用でない場合は、フィールドに情報を移入し、データベースに保存することもできます。</p> </li> <li data-bbox="334 531 1360 583">■ <b>LookupField:</b> このデータ・フィールドは、生成されたフォームに参照フィールドとして表示されます。</li> <li data-bbox="383 594 1352 667"> <p>この参照フィールドが表示専用の場合、ユーザーは問合せの実行のみにこのフィールドを使用できます。表示専用でない場合は、関連付けられている参照ウィンドウの値をこのフィールドに移入し、データベースに値を保存することもできます。</p> </li> <li data-bbox="334 688 1352 804">■ <b>TextArea:</b> このデータ・フィールドは、生成されたフォームにテキスト領域として表示されます。</li> <li data-bbox="383 814 1352 888"> <p>このテキスト領域が表示専用の場合、ユーザーはその領域に表示される情報の読取りのみを行うことができます。表示専用でない場合は、テキスト領域にデータを移入し、その情報をデータベースに保存することもできます。</p> </li> <li data-bbox="334 909 1365 961">■ <b>ITResourceLookupField:</b> このデータ・フィールドは、生成されたフォームに参照フィールドとして表示されます。ユーザーは、この参照フィールドから IT リソースを表す参照値を選択し、その値をデータベースに保存できます。</li> <li data-bbox="383 972 1360 1035"> <p><b>注意:</b> このデータ・フィールドを選択した場合は、「Property Value」フィールドで IT リソースのサーバー・タイプを指定する必要があります。</p> <p>データ・フィールドへのプロパティ値の追加方法は、8-15 ページの「<a href="#">データ・フィールドへのプロパティおよびプロパティ値の追加</a>」を参照してください。</p> </li> <li data-bbox="334 1056 1360 1108">■ <b>DateFieldWithDialog:</b> このデータ・フィールドは、生成されたフォームにテキスト・フィールドとして表示されます。</li> <li data-bbox="383 1119 1352 1182"> <p>このテキスト・フィールドが表示専用の場合、ユーザーは問合せの実行のみにこのフィールドを使用できます。</p> <p>表示専用でない場合は、(このフィールドをダブルクリックし、Date &amp; Time ウィンドウから日付と時間を選択して) このフィールドに日付と時間を移入することもできます。また、移入した日付と時間をデータベースに保存できます。</p> </li> <li data-bbox="334 1203 1352 1255">■ <b>CheckBox:</b> このデータ・フィールドは、生成されたフォームにチェック・ボックスとして表示されます。</li> <li data-bbox="383 1266 1352 1329"> <p>このチェック・ボックスが表示専用の場合、ユーザーはチェック・ボックスが選択されているかどうかの確認のみを行うことができます。表示専用でない場合は、チェック・ボックスを選択または選択解除して、その設定をデータベースに保存することもできます。</p> </li> <li data-bbox="334 1350 1365 1402">■ <b>PasswordField:</b> このフィールドに入力されたテキストは、一連のアスタリスク文字 (*) として表示されます。</li> <li data-bbox="383 1413 1365 1476"> <p>フィールド・タイプが PasswordField である列の名前が PASSWORD で、パスワード・ポリシーが関連付けられているリソース・オブジェクトにアタッチされている場合、このフィールドに入力されたパスワードはパスワード・ポリシーと照合されます。</p> </li> <li data-bbox="334 1497 1352 1549">■ <b>RadioButton:</b> このデータ・フィールドは、生成されたフォームにオプションとして表示されま</li> <li data-bbox="383 1560 1352 1623"> <p>す。</p> <p>ユーザーは、ラジオ・ボタンを選択または選択解除して、その設定をデータベースに保存できます。</p> </li> <li data-bbox="334 1644 1352 1696">■ <b>DataCombobox:</b> このデータ・フィールドは、生成されたフォームにリストとして表示されます。</li> <li data-bbox="383 1707 1352 1738"> <p>ユーザーは、リストから項目を選択し、その選択をデータベースに保存できます。</p> </li> <li data-bbox="334 1759 1352 1812">■ <b>DisplayOnlyField:</b> このデータ・フィールドには、ユーザーは値を入力できません。このタイプのフィールドは、他のフィールドの値に基づいてデータを表示することのみ可能です。</li> </ul>

表 8-2 「Additional Columns」 タブのフィールド (続き)

名前	説明
Default Value	<p>この値は、フォームが生成され、次のシナリオから他のデフォルト値が指定されていない場合に、関連付けられているデータ・フィールドに表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ フォーム・フィールドにアタッチされている事前移入アダプタが実行されている。</li> <li>■ リソース・オブジェクトに割り当てられたカスタム・フォームのフィールドと、プロセスに割り当てられたカスタム・フォームのフィールドとの間に、データ・フローが存在する。</li> <li>■ 1つのプロセスに割り当てられたカスタム・フォームのフィールドと、別のプロセスに割り当てられたカスタム・フォームのフィールドとの間に、データ・フローが存在する。</li> <li>■ 組織に関してリクエストされたリソース・オブジェクトに、カスタム・フォームがアタッチされている。その上で、このカスタム・フィールドの1つにデフォルト値が関連付けられている。パスワードおよび暗号化されたフィールドにはデフォルト値を指定しないことを強くお勧めします。</li> </ul>
Order	<p>生成されたフォームでのデータ・フィールドの位置を表す順序番号です。</p> <p>たとえば、順序番号2のデータ・フィールドは、順序番号1のデータ・フィールドの下に表示されません。</p>
Application Profile	<p>このチェック・ボックスは、「Users」フォームに関連付けられているリソースがユーザーにプロビジョニングされ、ステータスが「Enabled」になった後に、このフォームの「Object Profile」タブにこのフィールドの最新の値が表示されるかどうかを指定します。</p> <p>このチェック・ボックスが選択されている場合、このフィールドのラベルおよび値が、そのリソースがプロビジョニングされたユーザーの「Users」フォームの「Object Profile」タブに表示されます。</p>
Encrypted	<p>このチェック・ボックスは、関連付けられているデータ・フィールドに表示される情報がサーバーとクライアントの間で転送される際に暗号化されるかどうかを決定します。</p> <p>このチェック・ボックスが選択されている場合、データ・フィールドに表示される情報は、サーバーとクライアントの間で転送される際に暗号化されます。</p>

#### 8.4.2.1.1 データ・フィールドへのフォームの追加

データ・フィールドをフォームに追加するには、次のようにします。

**注意:** 「Encrypted」 オプションを選択してテキスト (フィールド・タイプ) のデータ・フィールドを作成すると、管理およびユーザー・コンソールでは値がクリアテキストとして表示され、データベースではデータが暗号化されます。

「Encrypted」 オプションを選択してパスワード (フィールド・タイプ) のデータ・フィールドを作成すると、管理およびユーザー・コンソールでは値がアスタリスク (\*) として表示され、データベースではデータが暗号化されます。

1. 「Additional Columns」 タブで、「Add」 をクリックします。  
「Additional Columns」 タブに空行が表示されます。
2. データベースに表示され、Oracle Identity Manager によって認識されるデータ・フィールドの名前を「Name」 フィールドに入力します。

**注意:** この名前は、データ・フィールド名の前に接頭辞 <TABLENAME\_> を付けて表します。

たとえば、「Table Name」 フィールドに表示される名前が UD\_PASSWORD で、データ・フィールドの名前が USERNAME の場合、データベースに表示され Oracle Identity Manager で認識されるデータ・フィールド名は、UD\_PASSWORD\_USERNAME になります。

3. 「Variant Type」参照フィールドをダブルクリックします。  
Lookup ウィンドウが表示されたら、データ・フィールドの変数型を選択します。  
現行では、データ・フィールドには9つの変数型 (Byte、Double、Date、Byte Array、Boolean、Long、String、Short、Integer) のいずれかを指定できます。
4. 「Length」フィールドに、データ・フィールドの長さ (文字数) を入力します。
5. 「Field Label」フィールドに、データ・フィールドに関連付けられるラベルを入力します。  
このラベルは、Oracle Identity Manager によって生成されたフォームのデータ・フィールドの横に表示されます。
6. 「Field Type」参照フィールドをダブルクリックします。  
「Lookup」ダイアログ・ボックスが表示されたら、データ・フィールドのデータ型を選択します。現時点では、データ・フィールドに、Text Field、Lookup Field、Text Area、IT Resource Lookup Field、Date Field、Check Box、Password Field、Radio Button および Combo box の9つのデータ型のいずれかを指定できます。  
  
**関連項目：** データ型の詳細は、表 8-2 を参照してください。
7. 「Default Value」フィールドに、関連付けられているデータ・フィールドに表示される値を入力します。この値は、フォームが生成された後、他のデフォルト値が指定されていない場合に表示されます。  
  
**関連項目：** デフォルト値を設定できる使用例の詳細は、表 8-2 を参照してください。
8. 「Order」フィールドに順序番号を入力します。この番号は、生成されたフォームでのデータ・フィールドの位置を表します。  
  
たとえば、順序番号 2 のデータ・フィールドは、順序番号 1 のデータ・フィールドの下に表示されます。
9. 特定の組織またはユーザーの値を「Default Value」フィールドに表示される値より優先させるには、「Application Profile」チェック・ボックスを選択します。それ以外の場合は手順 10 に進みます。
10. データ・フィールドに表示される情報が、クライアントとサーバーの間で転送される際に暗号化されるようにするには、「Encrypted」チェック・ボックスを選択します。それ以外の場合は手順 11 に進みます。
11. 「Save」をクリックします。

#### 8.4.2.1.2 フォームからのデータ・フィールドの削除

データ・フィールドをフォームから削除するには、次のようにします。

---



---

**注意：** 新しいフィールドを追加する際に、削除したフィールドと同じ名前を割り当てると、新しいフィールドの変数型 (データ型) は削除したフィールドの変数型と同じままです。たとえば、String 変数型が適用された「Addr1」フィールドを削除したとします。次に、同じ名前のフィールドを作成し、Boolean 変数型を適用します。この場合、新しい「Addr1」フィールドが追加されたフォームを表示または使用すると、フィールドの変数型は Boolean ではなく String となります。

---



---

1. 8-18 ページの「データ・フィールドからのプロパティおよびプロパティ値の削除」の手順に従って、削除するデータ・フィールドに関連付けられているすべてのプロパティを削除します。
2. 削除するデータ・フィールドを選択します。

### 3. 「Delete」をクリックします。

データ・フィールドがフォームから削除されます。

新しいフィールドを追加する際に、削除したフィールドと同じ名前を割り当てると、新しいフィールドの変数型（データ型）は削除したフィールドの変数型と同じままです。たとえば、String 変数型が適用された「Addr1」フィールドを削除したとします。次に、同じ名前のフィールドを作成し、Boolean 変数型を適用します。この場合、新しい「Addr1」フィールドが追加されたフォームを表示または使用すると、フィールドの変数型は Boolean ではなく String となります。

## 8.4.2.2 「Child Table(s)」 タブ

「Form Designer」フォームを使用して作成された複数のフォームに、同じデータ・フィールドを追加することが必要になる場合もあります。これを行う方法は、次の2通りです。

- それぞれのフォームの「Additional Columns」タブを使用して、データ・フィールドをフォームごとに手動で追加する。
- データ・フィールドを1つのグループにして1つのフォーム名で保存する。その後、これらのデータ・フィールドが要求される各フォームに、このフォームを割り当てる。

別のフォームに必要なデータ・フィールドが含まれるフォームは、子表と呼ばれます。

子表をフォームに割り当てると、ユーザーの作業効率が向上します。子表を使用しない場合は、データ・フィールドが要求されるすべてのフォームについて、フィールドごとのパラメータを設定する必要があります。たとえば、5つのフォームで同一のデータ・フィールドが要求される場合、このフィールドのパラメータを5回（フォームごとに1回ずつ）設定する必要があります。

1つのフォームの子表を使用している場合は、Design Console を介して後で別のフォームにこの子表を適用できます。最初のフォームから子表を削除し、ターゲットのフォームに割り当てます。この方法で、1つのフォームに割り当てた子表を、「Form Designer」フォームで作成されたすべてのフォームに再利用できます。

Oracle Identity Manager を構成して、子表の列で次のいずれかのアクションを実行できます。

- **Insert:** 子表の指定された列に新しい値を追加します。
- **Update:** 子表の対応する列にある既存の値を変更します。
- **Delete:** 子表の指定された列から値を削除します。

図 8-5 に、「Form Designer」フォームの「Child Table(s)」タブを示します。

図 8-5 「Form Designer」フォームの「Child Table(s)」タブ

Parent Table	Parent Version	Child Table	Child Version
1 UD_SOLARIS	Initial Version	UD_DBACCESS	Initial Version

---

---

**関連項目：** 子表の列での値の挿入、編集または削除に関する Oracle Identity Manager の設定は、6-7 ページの「[「Process Definition」 フォーム](#)」を参照してください。

---

---

たとえば、子表 **UD\_SOUTH** が **Results of 1Q 2004 Sales** フォーム（表名は **UD\_SALES2**）に割り当てられているとします。このフォームが起動されると、子表 **UD\_SOUTH** に含まれるデータ・フィールドがフォームに表示されます。

次の各項では、フォームに子表を割り当てる方法、およびフォームから削除する方法について説明します。

---

---

**注意：** 子表で表されるフォームは、アクティブ化されていないと親フォームに割り当てられません。

---

---

#### 8.4.2.2.1 フォームへの子表の割当て

フォームに子表を割り当てるには、次のようにします。

---

---

**注意：** 子表で表されるフォームがアクティブな場合、そのフォームは **Assignment** ウィンドウに表示されず、親フォームへの割当てができません。

---

---

1. 「**Assign**」をクリックします。  
「**Assignment**」ウィンドウが表示されます。
2. このウィンドウから子表を選択し、フォームに割り当てます。
3. 「**OK**」をクリックします。  
選択した子表がフォームに割り当てられます。

#### 8.4.2.2.2 フォームからの子表の削除

フォームから子表を削除するには、次のようにします。

1. 削除する子表を選択します。
2. 「**Delete**」をクリックします。  
フォームから子表が削除されます。

#### 8.4.2.3 「Object Permissions」 タブ

このタブを使用して、カスタム・フォームがインスタンス化される際にこのフォームの情報を追加、変更および削除できるユーザー・グループを選択します。

「**Allow Insert**」チェック・ボックスが選択されている場合、対応するユーザー・グループは、ユーザーが作成したフォームのフィールドに情報を追加できます。このチェック・ボックスが選択されていない場合、ユーザー・グループはこのフォームのフィールドに値を移入できません。

「**Allow Update**」チェック・ボックスが選択されている場合、関連付けられているユーザー・グループは、ユーザーが作成したフォームのフィールドにある既存の情報を変更できます。このチェック・ボックスが選択されていない場合、ユーザー・グループはこのフォームのフィールドを編集できません。

「**Allow Delete**」チェック・ボックスが選択されている場合、対応するユーザー・グループは、ユーザーが作成したフォームのインスタンス化されたデータを削除できます。このチェック・ボックスが選択されていない場合、ユーザー・グループはこのフォームのフィールドから（データがインスタンス化されたときに）データを削除できません。

図 8-6 に、「Form Designer」フォームの「Object Permissions」タブを示します。

図 8-6 「Form Designer」フォームの「Object Permissions」タブ

Assign	Group Name	Allow Insert	Allow Update	Allow Delete
	1 SYSTEM ADMINISTRATORS	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
	2 Web Client Group	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
	3 Sales Engineer Group	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
	4 Project L7 Admin Group	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
	5 ALL USERS	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>

たとえば、ユーザー・グループ SYSTEM ADMINISTRATORS が Results of 1Q 2004 Sales フォーム（「Table Name」フィールドでは UD\_SALES2 という名前）に表示される情報を作成、変更および削除できるとします。ユーザー・グループ IT DEPARTMENT は、このフォームのレコードを削除することのみ可能です（「Allow Insert」および「Allow Update」の各チェック・ボックスは選択されていません）。ユーザー・グループ HR DEPARTMENT は、Results of 1Q 2004 Sales フォーム内での情報の作成と変更を行えます。ただし、「Allow Delete」チェック・ボックスが選択されていないため、このユーザー・グループは情報を削除できません。

次の項では、ユーザーが作成したフォームにユーザー・グループを割り当てる方法、およびユーザーが作成したフォームからユーザー・グループを削除する方法を説明します。

#### 8.4.2.3.1 ユーザーが作成したフォームへのユーザー・グループの割当て

ユーザーが作成したフォームにユーザー・グループを割り当てるには、次のようにします。

1. 「Assign」をクリックします。

「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2. ユーザー・グループを選択し、ユーザーが作成したフォームに割り当てます。
3. 「OK」をクリックします。

ユーザー・グループが「Object Permissions」タブに表示されます。

4. このユーザー・グループに、ユーザー作成フォームのレコードに情報を追加させない場合は、対応する「Allow Insert」チェック・ボックスをダブルクリックします。それ以外の場合は手順 5 に進みます。
5. このユーザー・グループに、ユーザー作成フォームのレコードの情報を変更させない場合は、関連付けられている「Allow Update」チェック・ボックスをダブルクリックします。それ以外の場合は手順 6 に進みます。
6. このユーザー・グループに、ユーザー作成フォームのレコードを削除させない場合は、対応する「Allow Delete」チェック・ボックスをダブルクリックします。それ以外の場合は手順 7 に進みます。
7. 「Save」をクリックします。

ユーザーが作成したフォームにユーザー・グループが割り当てられます。

### 8.4.2.3.2 ユーザーが作成したフォームからのユーザー・グループの削除

ユーザーが作成したフォームからユーザー・グループを削除するには、次のようにします。

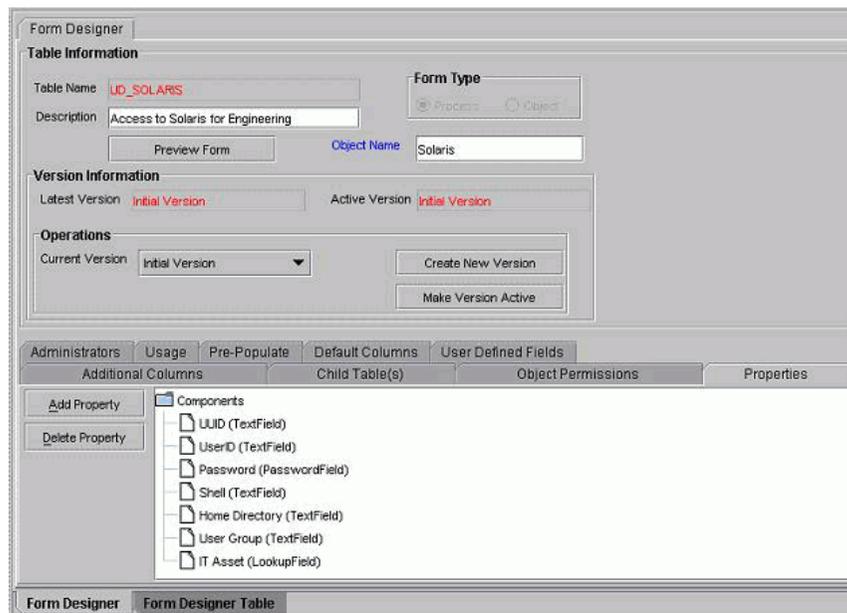
1. 削除するユーザー・グループを選択します。
2. 「Delete」をクリックします。

ユーザーが作成したフォームからユーザー・グループが削除されます。

### 8.4.2.4 「Properties」 タブ

図 8-7 に、「Form Designer」 フォームの「Properties」 タブを示します。このタブを使用して、「Form Designer」 フォームで作成されたフォームに表示されるデータ・フィールドに、プロパティおよびプロパティ値を割り当てます。

図 8-7 「Form Designer」 フォームの「Properties」 タブ



たとえば、Results of 1Q 2004 Sales フォームに「User Name」および「Password」の2つのデータ・フィールドがあるとします。また、各データ・フィールドには次のプロパティが含まれます。

- **Required.** 生成されたフォームを保存するには、そのデータ・フィールドに値を移入する必要があるかどうかを指定します。「Required」プロパティのデフォルト値は false です。
- **Visible Field.** Oracle Identity Manager によってフォームが生成された後、そのデータ・フィールドがフォームに表示されるかどうかを決定します。「Visible Field」プロパティのデフォルト値は true です。

ここでは、両方のデータ・フィールドの「Required」プロパティおよび「Visible Field」プロパティが true に設定されているため、Results of 1Q 2004 Sales フォームが生成されると、これらのデータ・フィールドが両方とも表示されます。また、両方のフィールドに値を移入しないと、フォームは保存されません。

次の各項では、プロパティおよびプロパティ値をデータ・フィールドに追加する方法、およびデータ・フィールドから削除する方法を説明します。

**注意：**「Properties」タブは、「Additional Columns」タブを使用してフォームのデータ・フィールドを作成するまではグレー表示されます。

選択できるプロパティおよびプロパティ値の詳細は、『Oracle Identity Manager リファレンス』のルール要素、変数、データ型およびシステム・プロパティに関する項を参照してください。

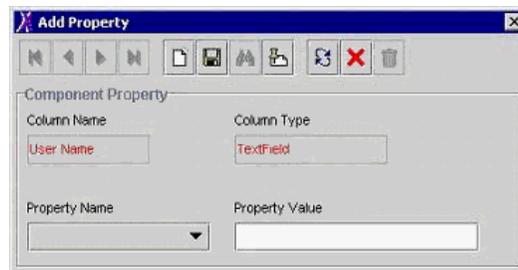
#### 8.4.2.4.1 データ・フィールドへのプロパティおよびプロパティ値の追加

データ・フィールドにプロパティおよびプロパティ値を追加するには、次のようにします。

1. プロパティおよびプロパティ値を追加するデータ・フィールドを選択します。
2. 「Add Property」をクリックします。

図 8-8 のように、「Add Property」ダイアログ・ボックスが表示されます。

図 8-8 「Add Property」ダイアログ・ボックス



**注意：**「Column Name」および「Column Type」の各フィールドに表示されるテキストは、選択したデータ・フィールドの名前と型です。

この例では、「User Name」データ・フィールドが選択されています（「Column Name」フィールドに「User Name」と表示されています）。また、このフィールドのデータ型はテキスト・フィールドです。

表 8-3 に、「Add Property」ダイアログ・ボックスのフィールドを示します。

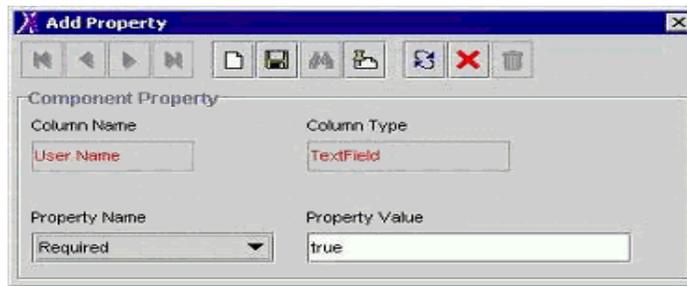
表 8-3 「Add Property」ダイアログ・ボックスのフィールド

名前	説明
Column Name	データ・フィールドの名前です。
Column Type	データ・フィールドのデータ型です。
Property Name	このボックスから、データ・フィールドのプロパティを選択します。
Property Value	このフィールドにプロパティ値を入力します。この値は、「Property Name」ボックスに表示されるプロパティに関連付けられます。

**注意：**「Property Name」ボックスに表示されるメニュー項目は、選択されているデータ・フィールドのデータ型を示します。

3. データ・フィールドに追加するプロパティおよびプロパティ値のパラメータを設定します。  
図 8-9 に、値が入力された「Add Property」ダイアログ・ボックスを示します。

図 8-9 値が入力された「Add Property」ダイアログ・ボックス



この例では、「User Name」データ・フィールドの「Required」プロパティの値が true に設定されているため、関連付けられているフォームが生成されたら、このフィールドに値を移入する必要があります。移入しなければフォームを保存できません。

---

**関連項目：** 選択するパラメータおよびプロパティ値の詳細は、『Oracle Identity Manager リファレンス』のルール要素、変数、データ型およびシステム・プロパティに関する項を参照してください。

---

4. Add Property ウィンドウのツールバーから「Save」をクリックします。
  5. 「Close」をクリックします。
- プロパティおよびプロパティ値がデータ・フィールドに追加されます。

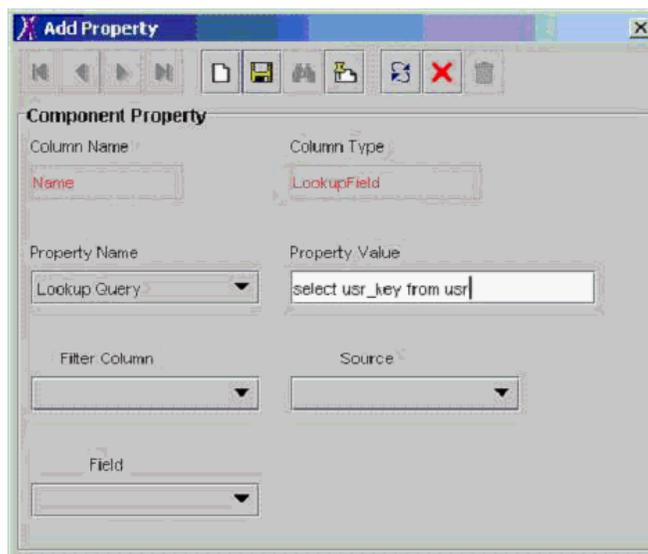
#### 8.4.2.4.2 カスタマイズされた参照問合せのプロパティおよびプロパティ値の追加

カスタマイズされた参照問合せのプロパティおよびプロパティ値を追加するには、次のようにします。

1. プロパティおよびプロパティ値を追加するデータ・フィールドを選択します。
2. 「Add Property」をクリックします。

☒ 8-10 のように、「Add Property」ダイアログ・ボックスが表示されます。

図 8-10 「Add Property」ダイアログ・ボックス



**注意：**「Column Name」および「Column Type」の各フィールドに表示されているテキストは、「Form Designer」の「Properties」タブで) 選択したデータ・フィールドの名前と型を示しています。

この例では、「Name」データ・フィールドが選択されています（「Column Name」フィールドに「Name」と表示されています）。また、このフィールドのデータ型は参照フィールドです。

「Add Property」ダイアログ・ボックスの各ボックスは、カスタム参照問合せの WHERE 句の作成に使用できます。（メニューから）各ボックスの値を選択すると、カスタム参照問合せに WHERE 句が追加されます。

表 8-4 に、「Add Property」ダイアログ・ボックスの領域の説明を示します。最初は、すべてのフィールドがグレー表示されています。Lookup Query を定義して「Save」をクリックした後、フィールドがアクティブになります。

**表 8-4 「Add Property」ダイアログ・ボックスのフィールド**

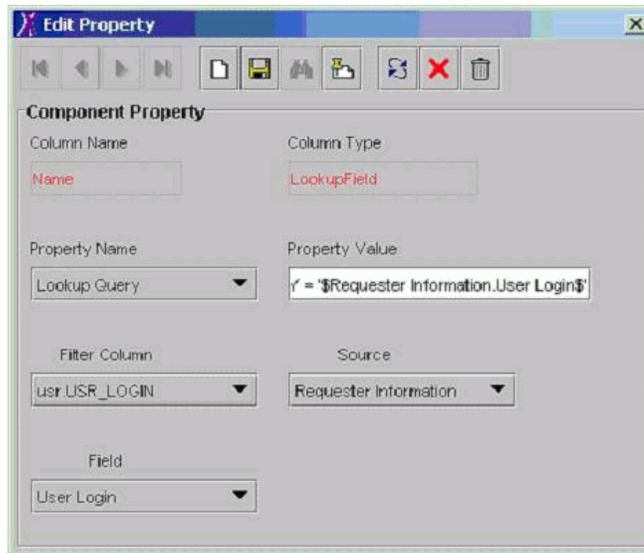
名前	説明
Column Name	データ・フィールドの名前です。
Column Type	データ・フィールドのデータ型です。
Property Name	このリストから、データ・フィールドのプロパティを選択します。
Property Value	このフィールドにプロパティ値を入力します。この値は、「Property Name」ボックスに表示されるプロパティに関連付けられます。  参照問合せの場合は、問合せで参照され、データベースによって認識される Oracle Identity Manager のフォームとフィールドの両方を指定する必要があります。  たとえば、Oracle Identity Manager がユーザーのログインを参照する場合は、「Property Value」フィールドに <code>select usr_key fromusr</code> のように入力します。「Save」をクリックすると、すべての表の列が移入されて「Filter Column」がアクティブになります。
Filter Column	これは、参照問合せの際に参照され、データベースによって認識される、Oracle Identity Manager フォームのフィールドです。このフィールドには、「Property Value」フィールドで指定された表のすべての列が移入されます。問合せに複数の表が使用される場合は、すべての表が表示されます。  たとえば、 <code>usr.USR_LOGIN</code> は、Oracle Identity Manager が参照問合せで「Users」フォームの「User Login」フィールドを参照することを意味します。
Source	「Filter Column」変数が選択されると、その値のソースの可能性があらゆるすべてのソースが「Source」フィールドに移入されます。このフィールドの値のリストは、参照フィールドがどのフォーム・タイプに対して定義されているかによって異なります。たとえば、参照問合せがオブジェクト・フォームやプロセス・フォーム用の場合には、表示されるリストは異なります。「Source」フィールドでは、ユーザーにわかりやすい名前を使用して、「Filter Column」ボックスに表示される値を示します。  たとえば、「Requester Information」は、「Filter Column」値の <code>usr.USR</code> の部分を指しています。
Field	このフィールドは、「Source」フィールドで選択された値に基づいて移入されます。このフィールドを使用して、列名に必要な SELECT 文を作成します。  たとえば、「User Login」は「Filter Column」値の <code>_LOGIN</code> の部分に対応します。

**注意：「Property Name」** ボックスに表示されるメニュー項目は、選択されているデータ・フィールドのデータ型を示します。

「Add Property」ダイアログ・ボックスの「Source」ボックスおよび「Field」ボックスは、「Lookup Query」が「Property Name」に表示されている場合にのみ適用されます。

- データ・フィールドに追加するプロパティおよびプロパティ値のパラメータを設定します。  
図 8-11 に、「Edit Property」ダイアログ・ボックスを示します。

図 8-11 「Edit Property」ダイアログ・ボックス



#### 8.4.2.4.3 データ・フィールドからのプロパティおよびプロパティ値の削除

データ・フィールドからプロパティおよびプロパティ値を削除するには、次のようにします。

- 削除するプロパティおよびプロパティ値を選択します。
- 「Delete Property」をクリックします。

データ・フィールドから、プロパティおよび関連付けられている値が削除されます。

#### 8.4.2.5 「Administrators」タブ

このタブは、「Form Designer」フォームを使用してユーザーが作成したフォームの現在のレコードを表示、変更および削除することができるユーザー・グループの選択に使用します。

「Write」チェック・ボックスが選択されている場合は、対応するユーザー・グループが、フォームの現在のレコードに関する情報を表示および変更できます。このチェック・ボックスが選択されていない場合、そのユーザー・グループはこのレコードの情報を表示および編集できません。

「Delete」チェック・ボックスが選択されている場合は、関連付けられているユーザー・グループが、フォームの現在のレコードの情報を削除できます。このチェック・ボックスが選択されていない場合、そのユーザー・グループはこのレコードの情報を削除できません。

図 8-12 に、「Form Designer」フォームの「Administrators」タブを示します。

図 8-12 「Form Designer」 フォームの「Administrators」 タブ

The screenshot shows the 'Form Designer' application window. The 'Table Information' section includes fields for 'Table Name' (UD\_SOLARIS), 'Description' (Access to Solaris for Engineering), and 'Form Type' (Process). The 'Version Information' section shows 'Latest Version' and 'Active Version' both set to 'Initial Version'. The 'Operations' section has a 'Current Version' dropdown set to 'Initial Version' and buttons for 'Create New Version' and 'Make Version Active'. Below these sections is a tabbed interface with 'Administrators' selected. The 'Administrators' tab contains a table with the following data:

Assign	Group Name	Allow insert	Allow Update	Allow Delete
<input type="checkbox"/>	1 SYSTEM ADMINISTRATORS	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	2 Web Client Group	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	3 Sales Engineer Group	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	4 Project L7 Admin Group	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	5 ALL USERS	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>

次の各項では、ユーザーが作成したフォームのレコードの管理権限をユーザー・グループに割り当てる方法、およびユーザー・グループから削除する方法について説明します。

#### 8.4.2.5.1 ユーザー作成フォームのレコードに関する管理権限のユーザー・グループへの割当て

ユーザーが作成したフォームのレコードの管理権限をユーザー・グループに割り当てるには、次のようにします。

1. 「Assign」をクリックします。  
「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. ユーザー・グループを選択し、ユーザーが作成したフォームのレコードに割り当てます。
3. 「OK」をクリックします。  
ユーザー・グループが「Administrators」タブに表示されます。
4. ユーザー・グループが、ユーザーにより作成されたフォームの現行レコードの情報を作成および変更できるようにする場合は、対応する「Write」チェック・ボックスをダブルクリックします。それ以外の場合は手順5に進みます。
5. ユーザー・グループが、ユーザーにより作成されたフォームの現行レコードから情報を削除できるようにする場合は、対応する「Delete」チェック・ボックスをダブルクリックします。それ以外の場合は手順6に進みます。
6. 「Save」をクリックします。  
ユーザーが作成したフォームの当該レコードの管理権限が、そのユーザー・グループに付与されます。

#### 8.4.2.5.2 ユーザー作成フォームのレコードに関するユーザー・グループ権限の削除

ユーザーが作成したフォームのレコードの管理権限をユーザー・グループから削除するには、次のようにします。

1. 削除するユーザー・グループを選択します。
2. 「Delete」をクリックします。  
そのユーザー・グループが持っていた、ユーザー作成フォームの当該レコードの管理権限が失われます。

### 8.4.2.6 「Usage」 タブ

このタブでは、現在のフォームが割り当てられているリソース・オブジェクトおよびプロセスを確認できます。

図 8-13 に、「Form Designer」 フォームの「Usage」 タブを示します。

図 8-13 「Form Designer」 フォームの「Usage」 タブ

たとえば、**Solaris** フォーム（「Table Name」 フィールドでは **UD\_SOLARIS** という名前で示されている）は、すでに作成済で、**Solaris** のリソース・オブジェクトおよびプロビジョニング・プロセスの両方に割り当てられています。

---

**注意：** 表名は、フォーム名の前に接頭辞 **UD\_** を付けて表します。この例では、フォーム名が **Solaris** のため、表名は **UD\_SOLARIS** になります。

「**Make Version Active**」 ボタンをクリックして、フォームをリソース・オブジェクトまたはプロビジョニング・プロセスにアタッチするまでは、このタブに情報が移入されません。

---

### 8.4.2.7 「Pre-Populate」 タブ

このタブは、次の目的に使用できます。

- 事前移入アダプタをユーザーが作成したフォームのデータ・フィールドにアタッチする。
- 指定されたデータ・フィールドに情報を移入するために、そのアダプタが起動されるかどうかを決定するルールを選択する。
- 選択されたルールに優先順位番号を設定する。
- 事前移入アダプタのアダプタ変数を適切な場所にマップする。

---

**関連項目：** 事前移入アダプタ、ユーザーが作成したフォームのフィールドへの事前移入アダプタのアタッチ、または事前移入アダプタの変数のマッピングの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』を参照してください。

---

### 8.4.2.8 「Default Columns」 タブ

「Form Designer」 フォームを使用して作成されたフォームは、次の 2 種類のデータ・フィールドで構成されます。

- 「**Additional Columns**」 タブを使用して) ユーザーが作成したデータ・フィールド
- Oracle Identity Manager によって作成され、フォームの作成後にフォームに追加されたデータ・フィールド

「**Default Columns**」 タブでは、ユーザーが作成したフォームにデフォルトで追加されるデータ・フィールドの名前、変数型および長さを確認できます。これらのデータ・フィールドを参照することで、SQL\*Plus や同様のデータベース・アプリケーションを起動せずに、その型のフォームのデータ・フィールドをすべて確認できます。

### 8.4.2.9 「User Defined Fields」 タブ

このタブでは、「Form Designer」 フォームに対して作成されたユーザー定義フィールドを表示し、それらのフィールドにアクセスできます。作成されたユーザー定義フィールドはこのタブに表示され、データを入出力することができます。

---

**関連項目：** ユーザーが作成したフォームのフィールドを作成する方法の詳細は、7-9 ページの「[「User Defined Field Definition」 フォーム](#)」を参照してください。

---

## 8.4.3 フォームの追加バージョンの作成

フォームを作成し、そのフォームが割り当てられているプロセスやリソース・オブジェクトを使用して動作するように「Form Designer」 フォームに情報を移入する際に、異なるバージョンのフォームを作成する場合があります。こうすることで、フォームの元のバージョンを変更せずに、このバージョンを変更できます。

フォームの追加のバージョンを作成するには、次のようにします。

1. 「Form Designer」 フォームを開きます。
2. 異なるバージョンを作成する特定のフォームを検索します。
3. 「**Current Version**」 ボックスをクリックします。  
ドロップダウン・メニューが表示されたら、追加のバージョンを作成するフォームのバージョンを選択します。
4. 「**Create New Version**」 ボタンをクリックします。  
Create a New Version ウィンドウが表示されます。
5. 「**Label**」 フィールドに、フォームの追加バージョンの名前を入力します。
6. Create a New Version ウィンドウのツールバーから「**Save**」 をクリックします。
7. このツールバーから「**Close**」 をクリックします。

フォームの追加のバージョンが作成されます。「**Current Version**」 ボックスをクリックすると、手順 5 で「**Label**」 フィールドに入力したバージョン名が表示されます。このバージョンを選択すると、フォームの元のバージョンを変更せずに、「Form Designer」 フォームのタブに情報を移入できます。

## 8.5 「Error Message Definition」 フォーム

図 8-14 に示す「Error Message Definition」フォームは、「Development Tools」フォルダにあります。このフォームは次の目的に使用できます。

- 特定の問題が発生したときにダイアログ・ボックスに表示されるエラー・メッセージを作成する。
- 「Adapter Factory」フォームを使用してエラー・ハンドラ・タスクを作成する際にユーザーがアクセスできるエラー・メッセージを定義する。

作成したエラー・メッセージは、障害の状態に基づいてエラー・ハンドラのロジック・タスクを使用して新しいアダプタを作成する際にアダプタ定義に追加すると、管理およびユーザー・コンソールに表示されます。

**注意：** エンティティ・アダプタがフィールド値の検証用のプロセス・フォームまたはオブジェクト・フォームにアタッチされている場合は、ダイレクト・プロビジョニングまたはリクエスト・プロビジョニングの完了後にこれらのフォームでデータを編集すると、アダプタが実行されます。

エラー・ハンドラ・タスクの作成の詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』を参照してください。

図 8-14 「Error Message Definition」 フォーム

表 8-5 に、「Error Message Definition」フォームのデータ・フィールドの説明を示します。

表 8-5 「Error Message Definition」フォームのフィールド

フィールド名	説明
Key	システムで生成された、エラー・メッセージの一意の ID 番号です。
Code	エラー・メッセージ定義を表すコードです。
Reset Count	このボタンをクリックすると、Oracle Identity Manager によってカウンタが 0 にリセットされます。このカウンタは、エラー・メッセージの表示回数を示します。
Description	エラー・メッセージの説明です。
Remedy	エラー・メッセージが表示される原因となる状態の修正方法です。
Help URL	そのエラー・メッセージのオンライン・ヘルプ・トピックが含まれる URL へのリンクです。

表 8-5 「Error Message Definition」 フォームのフィールド（続き）

フィールド名	説明
Action	エラー・メッセージが表示される原因となる状態の重大度を示す、1文字のコードです。 エラー・メッセージの重大度のレベルには、Error (E)、Rejection (R)、Fatal Rejection (F) の3つがあります。
Severity	エラー・メッセージが表示される原因となる状態の重大度は、さらに詳しく分類できます。 エラー・メッセージの重大度には、None (N)、Low (L)、Medium (M)、High (H) および Crash (C) の5つのサブレベルがあります。
Note	エラー・メッセージに関する説明的な情報です。

## 8.5.1 エラー・メッセージの作成

エラー・メッセージを作成する際には、Oracle Identity Manager によって、「**Key**」フィールドに一意の ID 番号が移入されます。エラー・メッセージが表示される原因となる状態が発生した場合は、ダイアログ・ボックスに「**Description**」フィールドのテキストが表示されます。

**注意：** エラー・メッセージ定義を作成した後、エラー・メッセージの表示回数のカウントをリセットするには、「**Reset Count**」ボタンをクリックします。クリックすると、カウントが 0 にリセットされます。

エラー・メッセージを作成するには、次のようにします。

- 「Error Message Definition」フォームを開きます。
- 「**Code**」フィールドに、エラー・メッセージ定義を表すコードを入力します。
- 「**Description**」フィールドに、エラー・メッセージの説明を入力します。
- 「**Remedy**」フィールドに、エラー・メッセージが表示される原因となる状態の修正方法を入力します。
- 「**Help URL**」フィールドに、そのエラー・メッセージのオンライン・ヘルプ・トピックが含まれる URL へのリンクを入力します。
- (オプション) 「**Action**」参照フィールドをダブルクリックします。  
「**Lookup**」ダイアログ・ボックスが表示されたら、エラー・メッセージが表示される原因となる状態の重大度を表すコードを選択します。次に、これらのコードを（重大度の低いものから順に）示します。
  - Error (E)。Oracle Identity Manager によってエラー・メッセージが格納され、関連するすべての操作のトリガーが停止されます。その上で、前の操作にロールバックされます。
  - Rejection (R)。Oracle Identity Manager によって拒否メッセージが格納されますが、後続の操作は実行可能です。
  - Fatal Rejection (F)。Oracle Identity Manager によって拒否メッセージが格納され、後続の操作のトリガーはすべて停止されます。ただし、致命的な拒否が発生するまでに実行されたすべての操作は格納されます。
- (オプション) 「**Severity**」参照フィールドをダブルクリックします。「**Lookup**」ダイアログ・ボックスが表示されたら、コード (None (N)、Low (L)、Medium (M)、High (H) または Crash (C)) を選択します。このコードは、「**Action**」参照フィールドに表示されるコードの詳細な分類を表します。
- 「**Note**」フィールドに、エラー・メッセージに関する説明的な情報を入力します。

9. 「Save」 をクリックします。

エラー・メッセージが作成されます。

「Error Message Definition」 フォームを使用してエラー・メッセージを作成したら、新しいエラー・コードおよびアドバイス・メッセージを Oracle Identity Manager の `customResources.properties` リソース・バンドル・ファイルに追加する必要があります。これらのローカライズされたエラー・コードおよびアドバイス・メッセージは、管理およびユーザー・コンソールに表示されます。

**関連項目：** エラー・メッセージのローカライズの詳細は、『Oracle Identity Manager グローバリゼーション・ガイド』の「エラー・コード定義用のネーミング規則」を参照してください。

---

---

## ビジネス・ルール定義

この章では、Design Console のビジネス・ルール定義について説明します。次の内容について説明します。

- [ビジネス・ルール定義の概要](#)
- [「Event Handler Manager」フォーム](#)
- [「Data Object Manager」フォーム](#)
- [「Reconciliation Rules」フォーム](#)

## 9.1 ビジネス・ルール定義の概要

「Development Tools」 / 「Business Rule Definition」フォルダには、Oracle Identity Manager のイベント・ハンドラおよびデータ・オブジェクトをシステム管理者および開発者が管理するためのツールがあります。

このフォルダには次のフォームがあります。

- **Event Handler Manager:** このフォームでは、Oracle Identity Manager で使用されるイベント・ハンドラの作成および管理ができます。
- **Data Object Manager:** このフォームでは、データ・オブジェクトの定義、定義したデータ・オブジェクトへのイベント・ハンドラとアダプタの割当て、および関連付けられているアダプタ変数のマッピングができます。

## 9.2 「Event Handler Manager」 フォーム

このフォームは、「Development Tools」 / 「Business Rule Definition」フォルダに表示されます。このフォームでは、ユーザー定義のアクションまたは自動生成されたアクション（またはイベント）を処理する Java クラスを管理できます。これらのクラスはイベント・ハンドラと呼ばれます。新しいイベント・ハンドラを Oracle Identity Manager に追加する際には、Oracle Identity Manager が認識できるように、最初にこのフォームで登録する必要があります。

イベント・ハンドラには次の 2 種類があります。

- 「Adapter Factory」フォームを介して作成されるイベント・ハンドラ。adp で始まります。これらはアダプタと呼ばれます。
- 最初に Oracle Identity Manager で作成されたイベント・ハンドラ。tc で始まります。これらは、システム・イベント・ハンドラと呼ばれます。

「Event Handler Manager」フォームを使用して、Oracle Identity Manager でいつイベント・ハンドラをトリガーするかを指定できます。イベント・ハンドラの実行は、次のようにスケジュールできます。

- **Pre-Insert:** データベースに情報が追加される前
- **Pre-Update:** データベースで情報が変更される前
- **Pre-Delete:** データベースから情報が削除される前
- **Post-Insert:** データベースに情報が追加された後
- **Post-Update:** データベースで情報が変更された後
- **Post-Delete:** データベースから情報が削除された後

図 9-1 は、「Event Handler Manager」 フォームを示しています。

図 9-1 「Event Handler Manager」 フォーム

表 9-1 に、「Event Handler Manager」 フォームのフィールドの説明を示します。

表 9-1 「Event Handler Manager」 フォームのフィールド

フィールド名	説明
Event Handler Name	イベント・ハンドラの名前です。
Package	イベント・ハンドラが所属する Java パッケージです。
Pre-Insert	このチェック・ボックスを選択すると、データベースに情報が追加される前に、Oracle Identity Manager によってイベント・ハンドラがトリガーされます。
Pre-Update	このチェック・ボックスを選択すると、データベースで情報が変更される前に、Oracle Identity Manager によってイベント・ハンドラがトリガーされます。
Pre-Delete	このチェック・ボックスを選択すると、データベースから情報が削除される前に、Oracle Identity Manager によってイベント・ハンドラがトリガーされます。
Post-Insert	このチェック・ボックスを選択すると、データベースに情報が追加された後に、Oracle Identity Manager によってイベント・ハンドラがトリガーされます。
Post-Update	このチェック・ボックスを選択すると、データベースで情報が変更された後に、Oracle Identity Manager によってイベント・ハンドラがトリガーされます。
Post-Delete	このチェック・ボックスを選択すると、データベースから情報が削除された後に、Oracle Identity Manager によってイベント・ハンドラがトリガーされます。
Notes	イベント・ハンドラに関する追加情報です。

次の各項では、イベント・ハンドラの作成および変更の方法について説明します。

---

---

**注意：** イベント・ハンドラを使用するには、「Data Object Manager」フォームを使用して、イベント・ハンドラをデータ・オブジェクトにアタッチする必要があります。イベント・ハンドラのデータ・オブジェクトへの割当ての詳細は、9-5 ページの「[「Data Object Manager」 フォーム](#)」を参照してください。

---

---

---

---

**注意：** adp で始まるイベント・ハンドラは、すべてアダプタに関連付けられているため、変更できません。ただし、システム・イベント・ハンドラは変更可能です。これらのイベント・ハンドラは tc で始まります。

---

---

### イベント・ハンドラの追加または変更

イベント・ハンドラを追加または変更するには、次のようにします。

1. 「Event Handler Manager」フォームを開きます。
2. Oracle Identity Manager にイベント・ハンドラを追加するには、「**Event Handler Name lookup**」フィールドにイベント・ハンドラの名前を入力します。  
  
イベント・ハンドラを変更するには、「**Event Handler Name lookup**」フィールドをダブルクリックします。  
  
「Lookup」ダイアログ・ボックスが表示されたら、編集するイベント・ハンドラを選択します。
3. 「**Package**」フィールドを使用して、イベント・ハンドラが所属する Java パッケージの名前を追加または編集します。
4. どの時点で Oracle Identity Manager がイベント・ハンドラをトリガーするかに応じて、該当するチェック・ボックスを選択します。  
  
イベント・ハンドラは、挿入前、更新前、削除前、挿入後、更新後および削除後に実行されるようにスケジュールできます。

---

---

**注意：** チェック・ボックスを選択しても、イベント・ハンドラがその時点で（たとえば挿入前に）トリガーされるわけではありません。これは、その時点でのイベント・ハンドラの実行が可能であることを意味しています。

---

---

5. 「**Notes**」領域を使用して、イベント・ハンドラに関する説明的な情報を追加するか、情報を編集します。
6. 「**Save**」をクリックします。  
  
イベント・ハンドラが追加または変更されます。

## 9.3 「Data Object Manager」 フォーム

「Data Object Manager」 フォームは、「Development Tools」 / 「Business Rule Definition」 フォルダに表示されます。このフォームを使用して、次の操作を実行できます。

- データベースのデータを追加、変更または削除できるオブジェクトに、ルール・ジェネレータ・アダプタ、エンティティ・アダプタまたはイベント・ハンドラを割り当てる。このタイプのオブジェクトはデータ・オブジェクトと呼ばれます。
- スケジュール（挿入前、更新前、削除前、挿入後、更新後または削除後）に従って実行されるように、アダプタまたはイベント・ハンドラのスケジュールを設定します。
- 同じ実行スケジュールに属するアダプタまたはイベント・ハンドラがどの順番で Oracle Identity Manager によってトリガーされるかを構成します。
- 現在のデータ・オブジェクトを追加、変更および削除できるユーザー・グループを表示します。
- アダプタの変数を適切なソースの場所およびターゲットの場所にマップします。

**関連項目：** アダプタ変数、ルール・ジェネレータ・アダプタおよびエンティティ・アダプタの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』を参照してください。

図 9-2 は、「Data Object Manager」 フォームを示しています。

図 9-2 「Data Object Manager」 フォーム

表 9-2 に、「Data Object Manager」 フォームのフィールドの説明を示します。

表 9-2 「Data Object Manager」 フォームのフィールド

フィールド	説明
Form Description	このデータ・オブジェクトに関連付けられているフォームの名前。
Data Object	イベント・ハンドラ、ルール・ジェネレータ・アダプタまたはエンティティ・アダプタを割り当てるデータ・オブジェクトの名前。

次の項では、ルール・ジェネレータ・アダプタ、エンティティ・アダプタまたはイベント・ハンドラが割り当てられるターゲット・データ・オブジェクトの選択方法を説明します。

### ターゲット・データ・オブジェクトの選択

ターゲット・データ・オブジェクトを選択するには、次のようにします。

1. 「Data Object Manager」 フォームを開きます。
2. 「Form Description」 フィールドをダブルクリックします。  
「Lookup」 ダイアログ・ボックスが表示されたら、イベント・ハンドラ、ルール・ジェネレータ・アダプタまたはエンティティ・アダプタを割り当てるデータ・オブジェクトに関連付けられているフォームの名前を選択します。  
フォームを選択すると、対応するデータ・オブジェクトの名前が「Data Object」 フィールドに表示されます。
3. 「Save」 をクリックします。  
ターゲット・データ・オブジェクトが選択されます。これで、ルール・ジェネレータ・アダプタ、エンティティ・アダプタおよびイベント・ハンドラにルールを割り当てるための準備が完了しました。

## 9.3.1 「Data Object Manager」 フォームのタブ

「Data Object Manager」 フォームを起動してターゲット・データ・オブジェクトを選択すると、このフォームのタブが使用可能になります。

「Data Object Manager」 フォームには、次のタブが含まれます。

- Attach Handlers
- Map Adapters

それぞれのタブについて、次の各項で説明します。

### 9.3.1.1 「Attach Handlers」 タブ

このタブを使用して、データ・オブジェクトに割り当てる、もしくはデータ・オブジェクトから削除するルール・ジェネレータ・アダプタ、エンティティ・アダプタまたはイベント・ハンドラを選択します。その際には、次の手順も行います。

- 割り当てられたイベント・ハンドラまたはアダプタが、Oracle Identity Manager によって（挿入前、更新前、削除前、挿入後、更新後または削除後の）いつトリガーされるかを指定します。
- 同じ実行スケジュールに属するアダプタまたはイベント・ハンドラがどの順番で Oracle Identity Manager によってトリガーされるかを設定します。

イベント・ハンドラ、ルール・ジェネレータ・アダプタまたはエンティティ・アダプタを Oracle Identity Manager によってトリガーする必要がなくなった場合は、データ・オブジェクトからそれを削除する必要があります。

たとえば、adpCONVERTTOLOWERCASE、adpSOLARISHMDSTRINGGEN、adpSETSOLARISASSET および adpSETPASSWORDFROMMAIN の各アダプタが、挿入前に Oracle Identity Manager によってトリガーされるとします。これらのアダプタの順序番号に基づいて、Oracle Identity Manager は、最初に adpCONVERTTOLOWERCASE アダプタ、続いて adpSOLARISHMDSTRINGGEN、adpSETSOLARISASSET および adpSETPASSWORDFROMMAIN の各アダプタをそれぞれトリガーします。

---

**注意：**現在のデータ・オブジェクトの追加、変更および削除を行えるユーザー・グループを表示するには、「Insert Permissions」、「Update Permissions」または「Delete Permissions」の各タブをそれぞれクリックします。

---

次の各項では、これらの手順について説明します。

- データ・オブジェクトへのイベント・ハンドラ、ルール・ジェネレータ・アダプタまたはエンティティ・アダプタの割当て
- イベント・ハンドラまたはアダプタの実行スケジュールの構成
- データ・オブジェクトからのイベント・ハンドラ、ルール・ジェネレータ・アダプタまたはエンティティ・アダプタの削除

#### 9.3.1.1.1 データ・オブジェクトへのイベント・ハンドラまたはアダプタの割当て

イベント・ハンドラまたはアダプタを割り当てるには、次のようにします。

1. アダプタまたはイベント・ハンドラをいつトリガーするかに応じて、「Data Object Manager」フォームのタブを選択します。  
たとえば、挿入前にアダプタをアクティブ化する場合は、「Pre-Insert」タブを選択します。
2. 選択したタブから「Assign」をクリックします。  
「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. イベント・ハンドラまたはアダプタを選択し、データ・オブジェクトに割り当てます。
4. 「OK」をクリックします。  
イベント・ハンドラまたはアダプタがデータ・オブジェクトに割り当てられます。

#### 9.3.1.1.2 イベント・ハンドラまたはアダプタの実行スケジュールの構成

実行スケジュールを構成するには、次のようにします。

1. 実行スケジュールを変更するイベント・ハンドラまたはアダプタを選択します。
2. 「Assign」をクリックします。  
「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. イベント・ハンドラまたはアダプタを選択します。
4. 「Up」をクリックすると、選択したイベント・ハンドラまたはアダプタの位置と順序番号が、その前のイベント・ハンドラまたはアダプタと入れ替わります。  
「Down」をクリックすると、選択したイベント・ハンドラまたはアダプタの位置と順序番号が、その次のイベント・ハンドラまたはアダプタと入れ替わります。
5. すべてのイベント・ハンドラとアダプタの順序番号が適切に設定されるまで、手順3と4を繰り返します。
6. 「OK」をクリックします。  
イベント・ハンドラおよびアダプタは、実行スケジュールまたは独自に構成したスケジュールで正しい順序でトリガーされます。

#### 9.3.1.1.3 データ・オブジェクトからのイベント・ハンドラまたはアダプタの削除

イベント・ハンドラまたはアダプタを削除するには、次のようにします。

1. イベント・ハンドラまたはアダプタを選択します。
2. 「Delete」をクリックします。  
イベント・ハンドラまたはアダプタが削除されます。

### 9.3.1.2 「Map Adapters」 タブ

「Map Adapters」タブは、ルール・ジェネレータ・アダプタまたはエンティティ・アダプタをデータ・オブジェクトに割り当てた後のみ機能します。

このタブを使用して、ルール・ジェネレータ・アダプタまたはエンティティ・アダプタの変数を、それぞれに適したソースおよびターゲットの場所にマップできます。たとえば、adpSOLARISUSERIDGENERATOR アダプタに `firstname`、Adapter return value および `lastname` の3つの変数があるとします。各アダプタ変数の「Mapped」列に Y が表示されている場合は、3つの変数がすべて正しい場所にマップされており、アダプタのステータスが「Ready」に変わります。

---

**注意：** アダプタのステータスは、次の2つのいずれかになります。

- **Ready:** このアダプタは正常にコンパイルされており、すべての変数が正しくマップされています。
  - **Mapping Incomplete:** このアダプタは正常にコンパイルされていますが、正しくマップされていない変数が少なくとも1つあります。
- 

アダプタのコンパイルおよびアダプタ変数のマッピングの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス』を参照してください。

---

**注意：** データ・オブジェクトにアダプタが割り当てられていない場合は、「Map Adapters」タブがグレー表示されます。

---

## 9.4 「Reconciliation Rules」 フォーム

このフォームは「Development Tools」フォルダにあります。このフォームを使用して、次のような場合に起動するルールを定義します。

- 信頼するソースへの変更に関連付けられているユーザーまたは組織のレコードを Oracle Identity Manager が判別する場合。これらのルールは、「Reconciliation Manager」フォームの「Reconciliation Data」タブで、リコンシリエーション・イベントのすべての必須フィールドが処理されると同時に評価されます。
- (たとえば、システムで変更が検出されたことを受けて) どのユーザー・レコードまたは組織レコードがターゲット・ソースで検出されたアカウントの所有者かを Oracle Identity Manager が判別する場合。これらのルールは、「Reconciliation Manager」フォームの「Reconciliation Data」タブで、リコンシリエーション・イベントのすべての必須フィールドが処理され、同フォームの「Processes Matched Tree」タブのイベントと一致するプロセスがなかった場合のみ評価されます。

前述のように、このフォームを使用して定義されたルールは、信頼されるソースまたはターゲットのリソースでの変更に関連付けられているユーザーまたは組織のどちらかとの一致に使用されます。これらのタイプのルールは、それぞれユーザー一致ルールまたは組織一致ルールと呼ばれます。これらのルールは、「Rule Designer」フォームを使用して定義できるルールと似ていますが、「Reconciliation Rules」フォームを使用して作成されたルールは、(単一のターゲット・リソースに関連するため) リソース・オブジェクト固有で、リコンシリエーション関連の機能のみに影響します。

## 9.4.1 リコンシリエーション・ルールの定義

次の手順は、リコンシリエーション・ルールの定義方法について説明しています。

---

**注意：** 次の手順の中で、必ず「**Active**」チェック・ボックスが選択されていることを確認してください。このチェック・ボックスが選択されていない場合、リソースに関連するリコンシリエーション・イベントの処理時に、Oracle Identity Manager のリコンシリエーション・エンジンによってルールが評価されません。ただし、このチェック・ボックスを選択できるのは、Oracle Identity Manager によって「**Valid**」システム・チェック・ボックスが選択されている場合のみです。「**Valid**」チェック・ボックスは、少なくとも1つのルール要素が作成され、そのルール要素のロジックが有効であると Oracle Identity Manager によって判断された後でなければ選択されません。

---

ユーザーの一致または組織の一致用にリコンシリエーション・ルールを定義するには、次のようにします。

1. 「Reconciliation Rules」 フォームに移動します。
2. 「Name」 フィールドにルールの名前を入力します。
3. 「Object」 フィールドで、このルールを関連付けるターゲット・リソースを選択します。
4. 「Description」 フィールドにルールの説明を入力します。

ルールに使用する **And** 演算子または **Or** 演算子を選択します。「**And**」を選択した場合は、ルールのすべての要素（およびルールがネストされている場合はそれらのルール）が一致しなければ、ルールが **true** と評価されません。「**Or**」を選択した場合は、ルールのいずれかの要素（またはルールがネストされている場合はそのいずれか）が一致すれば、**true** と評価されます。

5. 「Save」 をクリックします。

ルール定義が保存されます。次に、このルールのルール要素を作成する必要があります。

## 9.4.2 ルール要素の追加

リコンシリエーション・ルールの個々の要素を定義するには、次のようにします。

1. 要素を追加するルール定義に移動します。
2. 「Rule Elements」 タブの「Add Rule Element」 をクリックします。  
「Add Rule Element」 ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 「Rule Element」 タブをクリックします。
4. 「User Data」 メニューからユーザー関連のデータ項目を選択します。

ここで選択した項目が、ルール要素の評価時に Oracle Identity Manager によって調査されるユーザー・データ要素になります。このメニューには、「Oracle Users」 フォームのすべてのフィールド（作成済のユーザー定義フィールドを含む）が表示されます。

---

**注意：** 組織の一致のためのルールを定義する場合、使用可能なデータおよびメニュー名は、ユーザーではなく組織に関連付けられます。

---

5. 「Operator」 メニューから演算子を選択します。

これは、ルール要素の評価時に、選択したデータ項目の属性に Oracle Identity Manager によって適用される条件です。有効な演算子は次のとおりです。

- **Equals:** このオプションを選択した場合、ユーザーまたは組織のレコードのデータ要素は、選択された属性と完全に一致する必要があります。

**注意：**

- ユーザーの信頼できるソースのリコンシリエーションを構成する場合は、Oracle Identity Manager ユーザー・アカウントの「User ID」フィールドがリコンシリエーション一致ルールで使用されていることを確認する必要があります。
- 組織の信頼できるソースのリコンシリエーションを構成する場合は、Oracle Identity Manager ユーザー・アカウントの「Organization Name」フィールドがリコンシリエーション一致ルールで使用されていることを確認する必要があります。

- **Contains:** このオプションを選択した場合、ユーザーまたは組織のレコードのデータ要素は、選択された属性を含むのみで、完全には一致しない必要があります。
  - **Start with:** このオプションを選択した場合、ユーザーまたは組織のレコードのデータ要素は、選択された属性で始まる必要があります。
  - **End with:** このオプションを選択した場合、ユーザーまたは組織のレコードのデータ要素は、選択された属性で終わる必要があります。
6. 「Attribute」メニューから値を選択します。このメニューに含まれる値は、ルールに関連付けられているリソースに対して、「Reconciliation Fields」タブで定義されたフィールドです。そのリソースのリコンシリエーション・フィールドが指定されていない場合は、使用できる値が表示されません。

**注意：**（信頼できるソースとは対照的に）ターゲット・リソースのルール要素を定義する際には、リソースのカスタム・プロセス・フォームの親表に関連付けられているフィールドのみが、「Attribute」フィールドで選択可能になります。

7. 「Attribute」フィールド内のデータに対して（演算子を適用する前に）特定の変換処理が実行されるようにするには、「Transform」メニューから目的の変換処理を選択します。

**注意：** このメニューで「None」以外の値を選択した場合は、Oracle Identity Manager によって変換処理が正しく実行されるように、「Save」をクリックした後でタブを選択し、適切なプロパティを設定する必要があります。

表 9-3 に、実行できる変換処理を示します。

**表 9-3 変換プロパティ**

変換	「Rule Element Properties」タブで設定するプロパティ
Substring	Start Point、End Point
Endstring	Start Point
Tokenize	Delimiters、Token Number、Space Delimiter

8. 「Case-Sensitive」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択した場合、ルール要素が条件と一致するには、「Attribute」フィールドで選択された値と、リコンシリエーション・イベント・レコードで評価される値の大 / 小文字が一致している必要があります。このチェック・ボックスの選択を解除した場合、「Attribute」フィールドで選択された値と、リコンシリエーション・イベント・レコードで評価される値の大 / 小文字が一致する必要はありません。

9. 「Save」をクリックします。

10. 「Transform」メニューで（「None」以外の）値が選択されていても、変換処理のプロパティが設定されていない場合は、「Properties Set」チェック・ボックスは選択されません。

その場合は、「Rule Element Properties」タブを選択し、適切なプロパティを設定して、再度「Save」をクリックする必要があります。

ルール要素がルールに追加されます。

11. ルールに追加する各ルール要素について、この手順全体を繰り返します。

---

---

**注意：**「Active」チェック・ボックスが選択されていることを確認してください。

---

---

### 9.4.3 ルールへのルールのネスト

ルールの中に既存のルールをネストできます。Oracle Identity Manager では、ネストされたルールの条件は、他のルールの要素と同様に評価されます。

---

---

**注意：**ダイアログ・ボックスで選択できるのは、同じリソース・オブジェクトに関連付けられているリコンシリエーション関連のルールのみです。

---

---

ルールの中にルールをネストするには、次のようにします。

1. 別のルールが追加されるルールに移動します。
2. 「Rule Elements」タブの「Add Rule」をクリックします。
3. 「Rule Choice」参照ダイアログ・ボックスが表示されます。  
目的のルールの場所を特定し、選択します。
4. 「OK」をクリックします。  
選択したリコンシリエーション・ルールがルールに追加されます。
5. ルールにネストするルールごとに、手順2～4を繰り返します。

### 9.4.4 ルール要素またはルールの削除

ルール要素またはルールを削除するには、次のようにします。

1. 要素を削除するルールに移動します。
2. 「Rule Elements」タブで、削除するルール要素またはルールを選択します。
3. 「Delete」をクリックします。



---

## Oracle Identity Manager のロギング機能

この章では、Oracle Identity Manager のロギング機能について説明します。次の内容について説明します。

- [Oracle Identity Manager のロギング機能の概要](#)
- [ログ・レベルの設定](#)

## 10.1 Oracle Identity Manager のロギング機能の概要

Oracle Identity Manager には、アプリケーションで実行されるアクティビティに関連するログ・ファイルの作成機能があらかじめ組み込まれています。これらのログ・ファイルに記録される情報のレベル、ログ・ファイルの場所、および情報のアーカイブ頻度は、構成ファイルを使用してカスタマイズできます。また、Oracle Identity Manager では、標準のエラーおよび標準の出力メッセージを含むファイルも提供しています。

Oracle Identity Manager で作成されるログ・ファイルを使用して、アプリケーションの様々なモジュール (Adapter Factory や Task Scheduler など) で実行されるアクティビティを追跡したり、エラー・メッセージやデータベースに対して実行される問合せを監視できます。このような追跡と監視のアクティビティは、発生のある可能性のある問題のトラブルシューティングや、予測されるアプリケーション・レスポンスのテストに役立ちます。

制御可能な項目は次のとおりです。

- 情報のレベル。このレベルによって、ログに書き込まれる詳細情報の量が決まります。
- ログを定期的にアーカイブするかどうか。アーカイブする場合は、ユーザー指定の時間範囲または最大ファイル・サイズに基づいてアーカイブします。
- ログ・ファイルを置く場所。

ログ・ファイルの場所とそのプロパティは、`OIM_DC_HOME/xlclient/config/` ディレクトリにある `log.properties` ファイルで管理されます。

## 10.2 ログ・レベルの設定

Oracle Identity Manager では、ロギングに `log4j` が使用されます。Design Console のロギング・レベルは、`OIM_DC_HOME/xlclient/config/log.properties` ログ・プロパティ・ファイルで構成されます。デフォルトでは、すべての Oracle Identity Manager コンポーネントは警告レベルで出力が生成されるように構成されています。ログ・レベルの変更は、すべてのコンポーネントに対して行うことも、個別のコンポーネント (Design Console など) に対しても行うこともできます。

Oracle Identity Manager コンポーネントは、`OIM_DC_HOME/xlclient/config/log.properties` ファイルの `XELLERATE` セクションにリストされています。次に例を示します。

```
log4j.logger.XELLERATE=WARN
log4j.logger.XELLERATE.DDM=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.ACCOUNTMANAGEMENT=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.SERVER=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.RESOURCEMANAGEMENT=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.REQUESTS=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.WORKFLOW=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.WEBAPP=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.SCHEDULER=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.SCHEDULER.Task=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.ADAPTERS=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.JAVACLIENT=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.POLICIES=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.RULES=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.DATABASE=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.APIS=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.OBJECTMANAGEMENT=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.JMS=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.REMOTEMANAGER=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.CACHEMANAGEMENT=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.ATTESTATION=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.AUDITOR=DEBUG
```

Design のログ・レベルを設定するには、  
`OIM_DC_HOME/xlclient/config/log.properties` ログ・プロパティ・ファイルを次のように編集します。

1. `OIM_DC_HOME/xlclient/config/log.properties` ファイルをテキスト・エディタで開きます。このファイルには、Oracle Identity Manager の共通設定と、Oracle Identity Manager を構成するコンポーネントやモジュールごとの設定が含まれています。

次に示すように、デフォルトでは Oracle Identity Manager は警告レベルで出力が生成されるように構成されています。

```
log4j.logger.XELLERATE=WARN
```

これは Oracle Identity Manager の共通の値です。個別のコンポーネントやモジュールは、プロパティ・ファイル内のこの共通値の後にリストされています。コンポーネントやモジュールごとに異なるログ・レベルを設定することもできます。特定のコンポーネントに設定したログ・レベルは共通設定よりも優先されます。

2. 共通値を目的のログ・レベルに設定します。サポートされているログ・レベルは次のとおりです。記録される情報量が多い順に示します（最も多いのが DEBUG、最も少ないのが FATAL）。
  - DEBUG
  - INFO
  - WARN
  - ERROR
  - FATAL

3. コンポーネントやモジュールにはそれぞれ異なるログ・レベルを設定できます。たとえば、Design Console のログ・レベルを DEBUG にするには、次の値を設定します。

```
log4j.logger.XELLERATE=WARN
log4j.logger.XELLERATE.ACCOUNTMANAGEMENT=INFO
log4j.logger.XELLERATE.JAVACLIENT=DEBUG
```

4. 変更を保存します。
5. Design Console を再起動して変更を反映させます。



---

---

## リファレンス

以前のリリースでは、この付録の内容は次のとおりでした。

- ルールのルール要素の追加または変更時に選択できるパラメータ
- 電子メール定義の作成または編集時に設定するパラメータおよび変数
- Oracle Identity Manager フォームの作成に使用できるデータ型
- Oracle Identity Manager に対して設定できるシステム・プロパティ

現在のリリースからは、これらの情報については『Oracle Identity Manager リファレンス』のルール要素、変数、データ型およびシステム・プロパティに関する項を参照してください。



---

---

## サービス・アカウントの管理

サービス・アカウントは、メンテナンス目的で使用される汎用の管理者アカウントです。通常、これらのアカウントは複数のユーザーにより共有されます。サービス・アカウントは、通常のアカウントと同様に、リクエスト、プロビジョニングおよび管理できます。サービス・アカウントは内部フラグで通常のアカウントと区別されます。

以前のリリースでは、この付録でサービス・アカウントの管理について説明しました。現在のリリースからは、この情報については『Oracle Identity Manager リファレンス』のサービス・アカウントに関する項を参照してください。



---

---

## フォーム・バージョン制御ユーティリティ

この付録では、フォーム・バージョン制御（FVC）ユーティリティの有効範囲、コンテンツおよび説明を示します。次の内容について説明します。

- [FVC ユーティリティの有効範囲](#)
- [FVC ユーティリティのコンテンツ](#)
- [FVC ユーティリティの説明](#)
- [FVC ユーティリティの機能](#)

## C.1 FVC ユーティリティの有効範囲

次の表に、このユーティリティで実装される機能の有効範囲を示します。

機能	実装 (○/×)	コメント
プロセス・フォーム・バージョンのアップグレード	○	ターゲット・フォーム・バージョンが存在し、かつアクティブなフォーム・バージョンであることを確認してください。
子フォーム・バージョンのアップグレード	○	子フォーム・バージョンは、アクティブな親フォームに属する子フォームに、自動的にアップグレードされます。
親フォームの値のアップグレード	○	ターゲット・フォーム・バージョンが存在し、かつアップグレード対象の値を持つフィールドが含まれていることを確認してください。
子フォームの値のアップグレード	○	ターゲット子フォームが存在し、かつユーザーに対してその子フォームがプロビジョニングされていることを確認してください。
子フォームの値の挿入	○	アクティブな親フォームに属する子フォーム・バージョンに、挿入対象のフィールドが存在することを確認してください。

## C.2 FVC ユーティリティのコンテンツ

次の表に、FVC ユーティリティを構成するファイルの名前とパス、および説明を示します。

ファイル名 (パス付き)	説明
<code>OIM_DC_HOME\client\lib\FvcUtil.jar</code>	この JAR ファイルには、フォーム・バージョン制御ユーティリティを実行するのに必要な、このユーティリティのクラスが含まれます。
<code>OIM_DC_HOME\client\FvcUtil.ear</code>	この EAR ファイルには、フォーム・バージョン制御ユーティリティを実行するのに必要な、このユーティリティのクラスが含まれます。この EAR ファイルは、IBM WebSphere Application Server launchClient ユーティリティとともに実行するために同梱されています。
<code>OIM_DC_HOME\client\fvfvc.properties</code>	このファイルには、ソースおよびターゲットのフォーム・バージョン、それらのフィールドと値、および子フォームの情報に関するすべての構成プロパティが含まれます。
<code>OIM_DC_HOME\client\fvfvcutil.cmd</code> <code>OIM_DC_HOME\client\fvfvcutil_websphere.cmd</code>	これらのスクリプトは、Microsoft Windows システムでフォーム・バージョン制御ユーティリティを実行するために使用されます。このスクリプトを実行する場合、次のコマンドに示すように、Oracle Identity Manager 管理者のユーザー名およびパスワードを指定する必要があります。  <pre>OIM_DC_HOME\client\fvfvcutil.cmd xelsysadm password</pre> <pre>OIM_DC_HOME\client\fvfvcutil_websphere.cmd xelsysadm password</pre>

## C.3 FVC ユーティリティの説明

フォーム・バージョン制御ユーティリティは、カスタム・プロセス・フォームのバージョン番号フィールドおよび追加のプロセス・フォーム・フィールドのデータを更新するように設計されています。このユーティリティは、コマンド・コンソールから起動され、ログイン用のコマンドライン・パラメータおよびプロパティ・ファイルを使用して動作します。このパラメータのプロパティおよびユーザーのログインとパスワードの妥当性が検証され、エラーが発生した場合には、それを通知する適切なエラー・メッセージが作成されます。

## C.4 FVC ユーティリティの機能

FVC ユーティリティの概要は次のとおりです。

- システム要件に従い、ユーティリティは、ステータスが `Revoked` でないオブジェクトのプロセス・フォームのみを更新します。
- このユーティリティには、フォーム・バージョンを変更せずにフォーム・フィールドの値を更新する必要がある場合に備えて特別な機能が用意されています。この場合、`version to` パラメータと `version from` パラメータは同じである必要があります。ユーティリティでは、バージョン値自体の変更なしに指定したバージョンのフィールド値が更新され、エラーは作成されません。
- このユーティリティには、子レコードを挿入する機能がありません。1つの子表レコードは、単一の子表フィールドとみなされます。そのため、`fvc.properties` ファイルに次のエントリが存在する場合、このユーティリティは、指定した3つのフィールド値を持つ単一の子レコードを作成および挿入するかわりに、子表に3つの異なる行を作成します。

```
Child;UD_CF3_FIELD7;tiger;Insert
```

```
Child;UD_CF3_FIELD8;mad;Insert
```

```
Child;UD_CF3_FIELD9;me2;Insert
```

- `fvc.properties` ファイルの `ToVersion` プロパティに `Active Version` の値が割り当てられている場合、このユーティリティはカスタム・プロセス・フォームの更新のみに使用できます。
- 新しいフィールドのデフォルト値は、プロパティ・ファイルで定義する必要があります。



---

---

# 索引

## A

---

「Action」フィールド, 8-23  
「Adapter Factory」フォーム, 8-2  
「Adapter Manager」フォーム, 8-2, 8-3  
「Administrative Queues」フォーム, 4-7  
Assignment ウィンドウ, 3-5

## C

---

Close, 2-4  
Code, 8-22

## D

---

Data Object Manager, 8-2, 9-2  
Date, 3-3  
Default Value, 7-13  
「Delete」チェック・ボックス, 5-6  
「Description」フィールド, 8-22  
Design Console エクスプローラ, 7-5

## E

---

「Edit」メニュー, 2-3  
「Email Definition」フォーム, 6-2  
「Encrypted」フィールド, 7-13  
Error Message Definition, 8-2  
「Error Message Definition」フォーム, 8-2  
「Event Handler Manager」フォーム, 8-2, 9-2

## F

---

「Field Size」フィールド, 7-12  
「Field Type」フィールド, 7-12  
「File」メニュー, 2-3  
First, 2-4  
「Form Designer」フォーム, 8-2, 8-3  
「Form Information」フォーム, 7-2  
FVC ユーティリティのコンテンツ, C-2  
FVC ユーティリティの説明, C-2  
FVC ユーティリティの有効範囲, C-2

## G

---

「General」タブ, 6-19  
「Group Entitlements」フォーム, 4-5

## H

---

Help URL, 8-22  
「Help」メニュー, 2-4

## I

---

Integration, 6-23  
「IT Resources Type Definition」フォーム, 5-2  
「IT Resources」フォーム, 5-2  
IT リソースの定義, 5-3

## K

---

「Key」フィールド, 8-22

## L

---

「Label」フィールド, 7-11  
Last, 2-4  
「Lookup Definition」フォーム, 7-2  
Lookup ショートカット, 2-6

## N

---

Notes ウィンドウ, 3-3  
「Note」フィールド, 8-23  
「Notification」タブ, 6-29

## O

---

Oracle Identity Manager エクスプローラ, 2-7  
Oracle Identity Manager のショートカット, 2-6  
Oracle Identity Manager メニュー・バー, 2-3  
Oracle Identity Manager ワークスペース, 2-8  
「Organizational Defaults」フォーム, 4-2

## P

---

「Password Policies」フォーム, 7-20  
「Policy History」タブ, 4-4  
「Policy History」フォーム, 4-3  
「Process Definition」フォーム, 6-7

## R

---

「Reconciliation Manager」フォーム, 4-8  
「Remedy」フィールド, 8-22

「Remote Manager」 フォーム, 7-2  
「Reset Count」 フィールド, 8-22  
「Resource Objects」 フォーム, 5-2  
「Rule Designer」 フォーム, 5-2

## S

「Sequence」 フィールド, 7-13  
「Severity」 フィールド, 8-23  
「System Configuration」 フォーム, 7-2

## T

「Task Dependency」 タブ, 6-25  
「Task Scheduler」 フォーム, 7-2  
Time, 3-3  
「Toolbar」 メニュー, 2-4

## U

UDDI, 1-2  
「User Defined Columns」 タブ, 7-10  
User Defined Field Definition, 7-2  
「User Defined Field Definition」 フォーム, 7-9

## W

Web ベースのユーザー・セルフサービス, 1-2

## あ

アプリケーション・サーバー, 1-3

## い

イベント・ハンドラ, 5-22  
イベント・ハンドラまたはアダプタの割当て, 5-22

## え

エンドユーザー, 4-3  
エンドユーザー管理者, 4-3

## か

カスタム・ポリシー, 7-24  
監査証跡アカウンティングの詳細レポート機能, 1-2

## き

行ヘッダー, 2-9

## く

クライアント, 1-3

## け

結果セット制限超過, 3-8  
検索問合せの作成, 3-6  
検索の実行, 3-7

## こ

コンボ・ボックス, 3-3

## さ

作成, 6-9  
    プロセス定義, 6-9  
参照フィールド, 3-2

## し

状況依存ヘルプ, 7-4

## す

スケーラブルなアーキテクチャ, 1-2  
スケジュール済タスク  
    削除, 7-34  
    作成, 7-33  
    事前定義済, 7-31

## せ

接続プーリング, 1-4

## て

データ型, 7-12  
データ・フィールド, 3-2  
データベース, 1-4  
電子メール通知, 6-29  
    割当て, 6-29  
電子メール通知の削除, 6-30

## と

問合せ機能, 3-5  
問合せ結果セット, 3-7  
問合せのパフォーマンス最適化, 3-8

## は

パスワード・ポリシー, 7-20  
幅広いユーザー管理, 1-2

## ひ

表ビュー, 2-8

## ふ

フォーム・ビュー, 2-8  
複雑なパスワード, 7-22  
複数の信頼できるソースのリコンシリエーション, 5-31  
プロセス・エンジン, 1-2  
プロセス・タスクの変更, 6-18

## め

メタデータ, 1-4

## れ

---

列ヘッダー, 2-9  
列名, 7-13

## わ

---

ワークフロー定義レンダラ, 6-10  
ワイルドカード, 3-6

